

上信越自動車道
埋蔵文化財発掘調査報告書 4

—長野市内 その2—

松原遺跡

縄文時代

1998

日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会
(財)長野県埋蔵文化財センター

上信越自動車道
埋蔵文化財発掘調査報告書 4

—長野市内 その2—

松原遺跡
縄文時代

1998

日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会
(財)長野県埋蔵文化財センター



中期初頭の石製装飾品

序

本書は上信越自動車道建設に伴って実施された松原遺跡の発掘調査報告書であります。松原遺跡は平成元年度から3年間発掘調査されましたが、本書はそのうち平成2年度及び3年度に調査した縄文時代についての調査結果を収録致しました。

高速道路が長野盆地を横断するに至り、沖積低地の遺跡が本格的に調査されるようになり何面にもわたって重層する生活面と掘削深度の増加から発掘調査が難航するようになりました。とりわけここに報告する松原遺跡は当センターにとって最大規模で最も苦勞した集落遺跡と行うことができました。

長野インターチェンジのすぐ東隣に位置する松原遺跡は、千曲川の沖積低地に立地する弥生時代～古代・中世の大規模遺跡として当初より注目されておりましたが、平成2年度に地下数mから縄文時代の遺構・遺物が発見されるに至って、その重要性がますます高まりました。もとより高速道路建設に先立つ調査でありますので、工事計画との整合を図らねばならず、掘削深度の増加に伴ってさまざまな問題も派生し、調査は難航を極めました。しかし、この困難を乗り越えるべく調査体制の強化が図られ、調査技術も向上し、当センターにとって大きな転機となった遺跡となりました。

千曲川流域に限らず、これまでは沖積低地中央からは縄文時代の遺跡が発見されたことがほとんどありませんでした。今回の調査で本格的な集落が営まれていたことが判明し、縄文時代の遺跡立地について再検討を迫られることになりました。また柵列や建物など沖積地でなければ残りにくい生活痕跡も把握することができました。多出した良好な資料は目を見張るばかりで、早々の公表が待ち望まれておりましたが、今回、新たな知見を得る分析ができ、今後の研究に大いに役立つ結果を提示できたと自負しております。

最後になりましたが、発掘調査から整理作業・本書の刊行に至るまで深いご理解とご協力をいただきました、日本道路公団名古屋建設局、同長野工事事務所、長野県高速道局、同長野高速道事務所、長野市教育委員会など関係機関、対策委員会をはじめとする地元の方々、発掘調査や整理作業にご尽力いただいたの方々、直接ご指導を賜った長野県教育委員会に心から感謝申し上げる次第であります。

平成10年3月27日

財団法人長野県埋蔵文化財センター

理事長 戸田 正明

例言

- 1 本書は長野県長野市松代町東寺尾字北堀ほかに所在する松原遺跡（BMA）の発掘調査報告書のうち縄文時代についての調査結果を収録したものである。
- 2 この調査は、上信越自動車道建設工事に伴う事前の記録保存のための調査として、長野県教育委員会の委託を受け、県教育委員会の指導のもとに、財団法人長野県埋蔵文化財センターが実施したものである。
- 3 発掘調査は平成元年度から平成3年度の3年次にわたり実施され、そのうち縄文時代に関わる調査は平成2年度及び3年度に実施された。
- 4 本遺跡の概要については、すでに当センター発行の『長野県埋蔵文化財センター年報』6～13で報告している。それらと本書での記述に若干の相違があるが、縄文時代に関するものは、本書をもって最終的な報告とする。
- 5 本書で使用した地図は、日本道路公団作成の上信越自動車道平面図（1:1,000）をもとに作成したほか、以下の地図を使用した。
 - ・建設省国土地理院発行の地形図（1:25,000）：長野・須坂・信濃松代・菅平・信濃中条・稲荷山（平成5年発行）
 - ・建設省国土地理院発行の地形図（1:200,000）：高田（昭和63年発行）
富山・高山（平成元年発行）
長野（平成2年発行）
 - ・長野市発行の長野市都市計画図（1:2,500）：長野E-13（Ⅷ-HD 83-4）
長野F-13（Ⅷ-HD 83-3）
- 6 写真版掲載の空中写真は、国土地理院撮影の空中写真（CB-65-6X C10-11）を使用した。
- 7 本書の執筆及び刊行に関する分担については、第1章第2節3に掲載した。
- 8 引用・参考文献は一部を除いて巻末に一括掲載した。
- 9 縄文時代に関わる発掘調査ならびに報告書作成にあたり、以下の各氏・各機関にご指導・ご教示をいただいた。お名前のみを記してお礼としたい。（五十音順・敬称略）

赤塩 仁	赤羽 貞幸	荒川 隆史	飯島 哲也	井口 直司	石井 寛
岡村 道雄	小口 徹	加藤三千雄	小林 達雄	茂原 信生	品田 高志
澁谷 昌彦	島田 修一	関根 慎二	谷藤 保彦	千野 浩	寺崎 裕介
寺島 孝典	戸沢 充則	戸田 哲也	中野 純	野村 一寿	平林 彰
三上 徹也	宮本長二郎	山口 明	山下 歳信	山本 典之	綿田 弘実
和根崎 剛	武石村教育委員会	豊野町教育委員会	長野市埋蔵文化財センター		
- 10 調査は2年度にわたる分割調査となったため、他遺跡の発掘調査との平行による調査研究員の異動・重複が加わり、各調査区の担当者との検討が不十分で、記述の方針・方法に一貫しない部分が生じた。今後の反省としたい。
- 11 本書で報告した遺跡の記録及び出土遺物は、（財）長野県埋蔵文化財センターが保管しているが、今後は長野県立歴史館に移管される。

凡例

1 本書に掲載した実測図等の縮尺は、特に断りのある場合を除いて下記のように統一してある。

(1) 遺構実測図

竪穴住居址 1:60 焼土址・遺物集中・土坑 1:40 遺構図 1:60
遺構図断面図 1:40

(2) 遺物実測図等

土器実測図 1:4 土器拓影図 1:3
原石・石核・剥片・石鏃・石匙・小形刃器・磨製石斧(中期末葉～後期前葉)・石錘・裝飾品 1:1
石核(中期末葉～後期前葉)・石鏃・打製石斧・台石・石皿(中期末葉～後期前葉)・大形刃器・小形刃器(前期後葉)・磨製石斧・石槍・砥石 1:2
打製石斧(前期末葉～中期初頭)・裝飾品(前期末葉～中期初頭) 2:3
磨石・凹石・敲石・礫器・台石・石皿(前期末葉～中期初頭) 1:3
台石・石皿(前期中葉) 1:6

(3) 遺構写真

縮尺不統一

(4) 遺物写真

遺構出土土器(立面単体) 1:4 遺構出土土器(俯瞰) 1:3
遺構外出土土器 1:4 ※PL.65はすべて1:3
原石・石核・剥片・石鏃・石錘・石匙・小形刃器(前期末葉～中期初頭)・磨製石斧(中期末葉～後期前葉)・石錘・石槍・裝飾品 1:1
石錘(前期末葉～中期初頭)・打製石斧・磨石・凹石・敲石・台石・石皿(中期末葉～後期前葉)・大形刃器・小形刃器・磨製石斧・砥石 1:2
台石・石皿(前期末葉～中期初頭) 1:3
台石・石皿(前期中葉) 1:6

2 遺物実測図の番号は、大別された時期ごとに下記のように付してある。なお、収納・保管に当たっては、それぞれ「JZ」「JC」「JK」の時期略称を遺物番号に冠している。

(1) 土器 大別時期ごとに1から通し番号

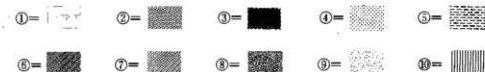
(2) 石器 大別時期ごとに1から通し番号

3 実測図中のスクリーントーン等は以下の事項を表している。

(1) 遺構

ア スクリーントーン

- ①=黄褐色の被熱痕跡 ②=赤褐色の被熱痕跡 ③=暗赤褐色の被熱痕跡
④=色不明の被熱痕跡 ⑤=焼土ブロックの分布範囲 ⑥=焼土粒子の分布範囲
⑦=焼土・炭化物の分布範囲 ⑧=炭化物の分布範囲 ⑨=焼骨片の集中範囲
⑩=攪乱、トレンチ、後世の遺構などに破壊されている部分



イ 記号

○：土器	■：原石・石核	●：剥片・砕片等	★：石器	▲：軽石
△：鏝	△：安山岩破砕礫	□：骨	*：炭化物	☆：顔料

(2) 遺物

土器

- ①=陽刻技法による削り出し部分
- ②=赤色顔料を混ぜた化粧土で覆われている部分（ミガキ痕が顕著に観察される）
- ③=焼成後に赤色塗彩された部分
- ④=器面が剥落している部分
- ⑤=胎土に繊維を含む土器の断面
- ⑥=赤みを帯びた色調の焼き上がりを企図し、胎土に褐鉄鉱系の混和材を含む土器の断面
- ⑦=黒みを帯びた色調の焼き上がりを企図し、胎土に何等かの混和材を含む土器の断面



本文目次

巻頭写真（中期初頭の石製裝飾品）

序
例言
凡例

第1章 調査の経過と方法	1
第1節 調査の経過	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査の体制と経過	2
第2節 調査の方法	7
1 発掘調査の方法	7
2 整理作業の方法	9
3 報告書作成の分担	11
第2章 位置と環境	12
第1節 遺跡の位置	12
第2節 自然環境	12
第3節 歴史環境	16
第3章 基本土層	21
第4章 遺構	26
第1節 縄文時代早期末葉～前期後葉	26
1 竪穴住居址	27
2 焼土址	30
3 遺物集中	33
4 土坑	33
第2節 縄文時代前期末葉～中期初頭	47
1 竪穴住居址	49
2 焼土址	75
3 遺物集中	82
4 土坑	86
第3節 縄文時代中期末葉～後期前葉	112
1 竪穴住居址	112
2 焼土址	120
3 遺物集中	127
4 土坑	133
5 掘立柱建物址	140
6 杭列状遺構	143
第5章 遺物	145
第1節 縄文時代早期末葉～前期後葉	145
1 土器	145
2 石器・石製品	182
第2節 縄文時代前期末葉～中期初頭	220
1 土器	220
2 石器・石製品	315
3 松原遺跡出土の獣骨	413
第3節 縄文時代中期末葉～後期前葉	425
1 土器	425

第6章 成果と課題.....465

- 第1節 前期中葉土器群について.....465
 第2節 前期末葉～中期初頭の土器群について.....476
 第3節 前期末葉～中期初頭の石器群について.....487
 第4節 石製品について.....504

第7章 結語.....515

引用・参考文献一覧.....517

報告書 抄録.....520

写真図版 (P.L)

挿 図 目 次

第1図 松原遺跡東地区調査区設定図.....	1	第32図 前期末葉～中期初頭遺構分布図1.....	47
第2図 ③-1区トレンチ及び調査範囲.....	2	第33図 前期末葉～中期初頭遺構分布図2.....	48
第3図 ③-2区中期末葉～後期前葉面調査状況.....	3	第34図 前期末葉～中期初頭整穴住居址(1).....	50
第4図 ⑤区グリッド等設定図.....	4	第35図 前期末葉～中期初頭整穴住居址(2).....	51
第5図 ⑤-1, 2区前期末葉～中期初頭面 グリッド設定図.....	4	第36図 前期末葉～中期初頭整穴住居址(3).....	52
第6図 クラムシェルによる試掘.....	5	第37図 前期末葉～中期初頭整穴住居址(4).....	54
第7図 ⑤-3区調査状況.....	5	第38図 前期末葉～中期初頭整穴住居址(5).....	55
第8図 大々地区の設定と割付.....	9	第39図 前期末葉～中期初頭整穴住居址(6).....	57
第9図 遺跡の位置.....	12	第40図 前期末葉～中期初頭整穴住居址(7).....	58
第10図 長野盆地の地形.....	12	第41図 前期末葉～中期初頭整穴住居址(8).....	60
第11図 遺跡周辺地形図.....	14	第42図 前期末葉～中期初頭整穴住居址(9).....	61
第12図 遺跡周辺の地形区分図.....	15	第43図 前期末葉～中期初頭整穴住居址(10).....	63
第13図 長野盆地を中心とした縄文時代 遺跡分布図.....	17	第44図 前期末葉～中期初頭整穴住居址(11).....	65
第14図 基本層序.....	21	第45図 前期末葉～中期初頭整穴住居址(12).....	66
第15図 柱状断面図.....	22-23	第46図 前期末葉～中期初頭整穴住居址(13).....	68
第16図 柱状断面図.....	24-25	第47図 前期末葉～中期初頭整穴住居址(14).....	69
第17図 早期末葉～前期後葉遺構分布図.....	26	第48図 前期末葉～中期初頭遺物集(1).....	71
第18図 前期中・後葉整穴住居址.....	28	第49図 前期末葉～中期初頭整穴住居址(16).....	73
第19図 前期中・後葉遺物集(1).....	32	第50図 前期末葉～中期初頭焼土址(1).....	76
第20図 前期中・後葉遺構図割付.....	35	第51図 前期末葉～中期初頭焼土址(2).....	77
第21図 前期中・後葉遺構図1.....	36	第52図 前期末葉～中期初頭遺物集(1).....	83
第22図 前期中・後葉遺構図1断面図.....	37	第53図 前期末葉～中期初頭遺物集(2).....	84
第23図 前期中・後葉遺構図2.....	38	第54図 前期末葉～中期初頭遺構図割付.....	89
第24図 前期中・後葉遺構図2断面図.....	39	第55図 前期末葉～中期初頭遺構図1.....	90
第25図 前期中・後葉遺構図3.....	40	第56図 前期末葉～中期初頭遺構図1断面図.....	91
第26図 前期中・後葉遺構図3断面図.....	41	第57図 前期末葉～中期初頭遺構図2.....	92
第27図 前期中・後葉遺構図4.....	42	第58図 前期末葉～中期初頭遺構図2断面図.....	93
第28図 前期中・後葉遺構図4断面図.....	43	第59図 前期末葉～中期初頭遺構図3.....	94
第29図 前期中・後葉遺構図5.....	44	第60図 前期末葉～中期初頭遺構図3断面図.....	95
第30図 前期中・後葉遺構図6.....	45	第61図 前期末葉～中期初頭遺構図4.....	96
第31図 前期中・後葉遺構図5・6断面図.....	46	第62図 前期末葉～中期初頭遺構図5.....	97
		第63図 前期末葉～中期初頭遺構図4・5断面図.....	98
		第64図 前期末葉～中期初頭遺構図6.....	99

第65図	前期末葉—中期初頭遺構図7	100	第118図	前期中葉土器12(Ⅱ・Ⅲ群)	175
第66図	前期末葉—中期初頭遺構図6・7断面図	101	第119図	前期中葉土器13(Ⅱ・Ⅲ群)	176
第67図	前期末葉—中期初頭遺構図8	102	第120図	前期中葉土器14(Ⅱ・Ⅲ群)	177
第68図	前期末葉—中期初頭遺構図8断面図	103	第121図	前期中葉土器15(Ⅱ・Ⅲ群)	178
第69図	前期末葉—中期初頭焼土址・土坑遺構図1	104	第122図	前期中葉土器16(Ⅱ・Ⅲ群)	179
第70図	前期末葉—中期初頭焼土址・土坑遺構図2	105	第123図	前期中葉土器17(Ⅱ・Ⅲ群)	180
第71図	前期末葉—中期初頭焼土址・土坑遺構図3	106	第124図	前期中・後葉土器(Ⅲ・Ⅳ群)	181
第72図	前期末葉—中期初頭焼土址・土坑断面図1	107	第125図	原石・石核法量相関	184
第73図	前期末葉—中期初頭焼土址・土坑断面図2	108	第126図	原石・石核計測法	184
第74図	前期末葉—中期初頭焼土址・土坑断面図3	109	第127図	原石・石核・剝片A類出土分布(遺構内)	185
第75図	前期末葉—中期初頭焼土址・土坑断面図4	110	第128図	原石・石核・剝片A類出土分布(遺構外)	185
第76図	前期末葉—中期初頭焼土址・土坑断面図5	111	第129図	剝片計測法	186
第77図	中期末葉—後期前葉遺構分布図	112	第130図	剝片類出土分布(遺構内)	187
第78図	中期末葉—後期前葉竪穴住居址(1)	113	第131図	剝片類出土分布(遺構外)	187
第79図	中期末葉—後期前葉竪穴住居址(2)	114	第132図	砕片出土分布(遺構内)	187
第80図	中期末葉—後期前葉竪穴住居址(3)	115	第133図	砕片出土分布(遺構外)	187
第81図	中期末葉—後期前葉竪穴住居址(4)	116	第134図	大形剝片(剝片)出土分布(遺構内)	188
第82図	中期末葉—後期前葉竪穴住居址(5)	117	第135図	大形剝片(剝片)出土分布(遺構外)	188
第83図	中期末葉—後期前葉竪穴住居址(6)	118	第136図	大形剝片(砕片)出土分布(遺構内)	188
第84図	中期末葉—後期前葉竪穴住居址(7)	119	第137図	大形剝片(砕片)出土分布(遺構外)	188
第85図	中期末葉—後期前葉焼土址(1)	122	第138図	石鏃法量相関	189
第86図	中期末葉—後期前葉焼土址(2)	123	第139図	石鏃計測法	190
第87図	中期末葉—後期前葉焼土址(3)	124	第140図	石鏃出土分布(黒曜石)	190
第88図	中期末葉—後期前葉焼土址(4)	125	第141図	石鏃出土分布(安山岩ほか)	190
第89図	中期末葉—後期前葉遺物集中(1)	129	第142図	打製石斧計測法	191
第90図	中期末葉—後期前葉遺物集中(2)	130	第143図	磨石類計測法	191
第91図	中期末葉—後期前葉遺物集中(3)	131	第144図	磨石法量相関	192
第92図	中期末葉—後期前葉遺物集中(4)	132	第145図	凹石法量相関	192
第93図	中期末葉—後期前葉土坑(1)	135	第146図	敲石法量相関	192
第94図	中期末葉—後期前葉土坑(2)	136	第147図	磨石出土分布	193
第95図	中期末葉—後期前葉土坑(3)	137	第148図	凹石・敲石出土分布	193
第96図	中期末葉—後期前葉掘立柱建物址	142	第149図	白石・石皿計測法	194
第97図	中期末葉—後期前葉杭列状遺構	144	第150図	打製石斧・白石・石皿出土分布	194
第98図	早期末葉土器(I群)	146	第151図	刃器法量相関1(大形)	195
第99図	多遺構間接合土器接合関係図	151	第152図	刃器出土分布1(大形)	195
第100図	遺構出土土器1(I-Ⅲ群)	157	第153図	刃器計測法	197
第101図	遺構出土土器2(I-Ⅲ群)	158	第154図	刃器法量相関2(小形1類)	197
第102図	遺構出土土器3(I-Ⅲ群)	159	第155図	刃器法量相関3(小形2類)	197
第103図	遺構出土土器4(I-Ⅲ群)	160	第156図	刃器法量相関4(石匙)	197
第104図	遺構出土土器5(I-Ⅲ群)	161	第157図	刃器出土分布2(小形1類)	198
第105図	遺構出土土器6(I-Ⅲ群)	162	第158図	刃器出土分布3(小形2類)	199
第106図	遺構出土土器7(I-Ⅲ群)	163	第159図	刃器出土分布4(小形2類)	199
第107図	前期中葉土器1(Ⅱ・Ⅲ群)	164	第160図	刃器出土分布5(石匙)	199
第108図	前期中葉土器2(Ⅱ・Ⅲ群)	165	第161図	石鏃計測法	199
第109図	前期中葉土器3(Ⅱ・Ⅲ群)	166	第162図	石鏃出土分布	200
第110図	前期中葉土器4(Ⅱ・Ⅲ群)	167	第163図	磨製石斧計測法	200
第111図	前期中葉土器5(Ⅱ・Ⅲ群)	168	第164図	磨製石斧出土分布	201
第112図	前期中葉土器6(Ⅱ・Ⅲ群)	169	第165図	裝飾品出土分布	202
第113図	前期中葉土器7(Ⅱ・Ⅲ群)	170	第166図	縄文時代前期の石器組成	203
第114図	前期中葉土器8(Ⅱ・Ⅲ群)	171	第167図	原石・石核1	208
第115図	前期中葉土器9(Ⅱ・Ⅲ群)	172	第168図	石核2・剝片A類	209
第116図	前期中葉土器10(Ⅱ・Ⅲ群)	173	第169図	石鏃・石鏝	210
第117図	前期中葉土器11(Ⅱ・Ⅲ群)	174	第170図	磨石・凹石・敲石1	211

第171回	磨石・凹石・敲石2	212	第224回	前期中葉～中期初頭土器25(V群土器)	299
第172回	白石・石皿	213	第225回	前期中葉～中期初頭土器26(V群土器)	300
第173回	大形刃器・打製石斧	214	第226回	前期中葉～中期初頭土器27(V群土器)	301
第174回	小形刃器・石鏝	215	第227回	前期中葉～中期初頭土器28(V群土器)	302
第175回	石匙1	216	第228回	前期中葉～中期初頭土器29(V群土器)	303
第176回	石匙2	217	第229回	前期中葉～中期初頭土器30(V群土器)	304
第177回	石匙3	218	第230回	前期中葉～中期初頭土器31(V群土器)	305
第178回	磨製石斧・裝飾品	219	第231回	前期中葉～中期初頭土器32(V群土器)	306
第179回	遺構出土土器1(V～VI群土器)	235	第232回	前期中葉～中期初頭土器33(VI群土器)	307
第180回	遺構出土土器2(V～VI群土器)	236	第233回	前期中葉～中期初頭土器34(VI群土器)	308
第181回	遺構出土土器3(V～VI群土器)	237	第234回	前期中葉～中期初頭土器35(VI群土器)	309
第182回	遺構出土土器4(V～VI群土器)	238	第235回	前期中葉～中期初頭土器36(VI群土器)	310
第183回	遺構出土土器5(V～VI群土器)	239	第236回	前期中葉～中期初頭土器37(VI群土器)	311
第184回	遺構出土土器6(V～VI群土器)	240	第237回	前期中葉～中期初頭土器38(VI群土器)	312
第185回	遺構出土土器7(V～VI群土器)	241	第238回	前期中葉～中期初頭土器39(VI群土器)	313
第186回	遺構出土土器8(V～VI群土器)	242	第239回	前期中葉～中期初頭土器40(VI・VII群土器)	314
第187回	遺構出土土器9(V～VI群土器)	243	第240回	原石法量相関(小形)	316
第188回	遺構出土土器10(V～VI群土器)	244	第241回	石核法量相関	316
第189回	遺構出土土器11(V～VI群土器)	245	第242回	原石・石核・剥片A類出土分布(遺構内)	
第190回	遺構出土土器12(V～VI群土器)	246		黒曜石	318
第191回	遺構出土土器13(V～VI群土器)	247	第243回	原石・石核・剥片A類出土分布(遺構内)	
第192回	遺構出土土器14(V～VI群土器)	248		チャート・頁岩	319
第193回	遺構出土土器15(V～VI群土器)	249	第244回	原石・石核・剥片A類出土分布(遺構外)	
第194回	遺構出土土器16(V～VI群土器)	250		黒曜石	320
第195回	遺構出土土器17(V～VI群土器)	251	第245回	原石・石核・剥片A類出土分布(遺構外)	
第196回	遺構出土土器18(V～VI群土器)	252		チャート・頁岩	321
第197回	遺構出土土器19(V～VI群土器)	253	第246回	剥片1種出土分布(遺構内)黒曜石	322
第198回	遺構出土土器16(V～VI群土器)	254	第247回	剥片1種出土分布(遺構内)チャート・頁岩	323
第199回	多遺構間接合土器出土分布図(V群)	256	第248回	剥片1種出土分布(遺構外)黒曜石	324
第200回	前期中葉～中期初頭土器1(V群土器)	257	第249回	剥片1種出土分布(遺構外)チャート・頁岩	325
第201回	前期中葉～中期初頭土器2(V群土器)	276	第250回	剥片2種出土分布(遺構内)黒曜石	326
第202回	前期中葉～中期初頭土器3(V群土器)	277	第251回	剥片2種出土分布(遺構内)チャート・頁岩	327
第203回	前期中葉～中期初頭土器4(V群土器)	278	第252回	剥片2種出土分布(遺構外)黒曜石	328
第204回	前期中葉～中期初頭土器5(V群土器)	279	第253回	剥片2種出土分布(遺構外)チャート・頁岩	329
第205回	前期中葉～中期初頭土器6(V群土器)	280	第254回	剥片B類出土分布(遺構内)黒曜石	330
第206回	前期中葉～中期初頭土器7(V群土器)	281	第255回	剥片B類出土分布(遺構内)チャート・頁岩	331
第207回	前期中葉～中期初頭土器8(V群土器)	282	第256回	剥片B類出土分布(遺構外)黒曜石	332
第208回	前期中葉～中期初頭土器9(V群土器)	283	第257回	剥片B類出土分布(遺構外)チャート・頁岩	333
第209回	前期中葉～中期初頭土器10(V群土器)	284	第258回	碎片出土分布(遺構内)黒曜石	334
第210回	前期中葉～中期初頭土器11(V群土器)	285	第259回	碎片出土分布(遺構内)チャート	335
第211回	前期中葉～中期初頭土器12(V群土器)	286	第260回	碎片出土分布(遺構内)頁岩	336
第212回	前期中葉～中期初頭土器13(V群土器)	287	第261回	碎片出土分布(遺構外)黒曜石	337
第213回	前期中葉～中期初頭土器14(V群土器)	288	第262回	碎片出土分布(遺構外)チャート	338
第214回	前期中葉～中期初頭土器15(V群土器)	289	第263回	碎片出土分布(遺構外)頁岩	339
第215回	前期中葉～中期初頭土器16(V群土器)	290	第264回	大形剥片出土分布(遺構内)粘板岩・頁岩	340
第216回	前期中葉～中期初頭土器17(V群土器)	291	第265回	大形剥片出土分布(遺構内)	
第217回	前期中葉～中期初頭土器18(V群土器)	292		安山岩・砂岩・凝灰岩	341
第218回	前期中葉～中期初頭土器19(V群土器)	293	第266回	大形剥片出土分布(遺構外)粘板岩・頁岩	342
第219回	前期中葉～中期初頭土器20(V群土器)	294	第267回	大形剥片出土分布(遺構外)	
第220回	前期中葉～中期初頭土器21(V群土器)	295		安山岩・砂岩・片岩	343
第221回	前期中葉～中期初頭土器22(V群土器)	296	第268回	剥片A類法量相関	344
第222回	前期中葉～中期初頭土器23(V群土器)	297	第269回	石鏝法量相関	345
第223回	前期中葉～中期初頭土器24(V群土器)	298	第270回	石鏝出土分布(遺構内)黒曜石	346

第271図	石鏃出土分布(遺構外)黒曜石	347
第272図	石鏃出土分布(遺構内・外)頁岩	348
第273図	石鏃出土分布(遺構内・外)チャート	349
第274図	石鏃出土分布(遺構内・外) 安山岩・粘板岩・珪岩	350
第275図	打製石斧法量相関	352
第276図	打製石斧出土分布	352
第277図	磨石・凹石・敲石法量相関	354
第278図	磨石出土分布	355
第279図	凹石・敲石・礮器出土分布	355
第280図	台石・石皿出土分布	356
第281図	刃器法量相関1(大形)	357
第282図	刃器出土分布1(大形)	358
第283図	刃器法量相関2(小形2期)	359
第284図	刃器出土分布2・黒曜石(小形2期)	360
第285図	刃器出土分布3・頁岩ほか(小形2期)	360
第286図	刃器法量相関3(小形1期)	361
第287図	刃器法量相関4(石匙)	361
第288図	刃器出土分布4・黒曜石(小形1期)	363
第289図	刃器出土分布5・頁岩ほか(小形1期)	363
第290図	刃器出土分布6・黒曜石(石匙)	364
第291図	刃器出土分布7・頁岩ほか(石匙)	364
第292図	石鏃法量相関	365
第293図	石鏃出土分布(黒曜石)	366
第294図	石鏃出土分布(頁岩ほか)	366
第295図	磨製石斧法量相関	367
第296図	磨製石斧出土分布	367
第297図	砥石・軽石製品・石鏃出土分布	368
第298図	軽石製品法量相関	369
第299図	加工痕を留める石屑出土分布(遺構内)	369
第300図	加工痕を留める石屑出土分布(遺構外)	370
第301図	装飾品出土分布	371
第302図	原石・石核1	379
第303図	原石・石核2	380
第304図	剥片A類・剥片B類1(黒曜石)	381
第305図	剥片A類・剥片B類2(頁岩)	382
第306図	剥片A類・剥片B類3(チャート)	383
第307図	剥片A類・剥片B類4(チャート)	384
第308図	石鏃1	385
第309図	石鏃2	386
第310図	石鏃3	387
第311図	打製石斧1	388
第312図	打製石斧2	389
第313図	打製石斧3	390
第314図	磨石	391
第315図	凹石	392
第316図	敲石・礮器	393
第317図	石皿	394
第318図	台石・砥石・石鏃	395
第319図	大形刃器1	396
第320図	大形刃器2	397
第321図	大形刃器3	398
第322図	大形刃器4	399

第323図	大形刃器5	400
第324図	大形刃器6	401
第325図	小形刃器1	402
第326図	小形刃器2	403
第327図	小形刃器3	404
第328図	石匙1	405
第329図	石匙2	406
第330図	石鏃1	407
第331図	石鏃2・石鏃	408
第332図	磨製石斧	409
第333図	装飾品1	410
第334図	装飾品2	411
第335図	装飾品3	412
第336図	中期末葉～後期末葉土器1(遺構出土土器)	426
第337図	中期末葉～後期末葉土器2(遺構出土土器)	427
第338図	中期末葉～後期末葉土器3(遺構出土土器)	429
第339図	中期末葉～後期末葉土器4(遺構出土土器)	430
第340図	中期末葉～後期末葉土器5(遺構出土土器)	433
第341図	中期末葉～後期末葉土器6(遺構出土土器)	434
第342図	中期末葉～後期末葉土器7(遺構出土土器)	435
第343図	中期末葉～後期末葉土器8(遺構出土土器)	436
第344図	中期末葉～後期末葉土器9(遺構出土土器)	437
第345図	中期末葉～後期末葉土器10(遺構外出土土器)	438
第346図	中期末葉～後期末葉土器11(遺構外出土土器)	439
第347図	中期末葉～後期末葉土器12(遺構外出土土器)	440
第348図	中期末葉～後期末葉土器13(遺構外出土土器)	441
第349図	原石・石核法量相関	442
第350図	原石・石核・剥片類出土分布	444
第351図	石鏃法量相関	445
第352図	石鏃出土分布	445
第353図	打製石斧法量相関	446
第354図	打製石斧出土分布	447
第355図	磨石・凹石・敲石法量相関	448
第356図	磨石・凹石・敲石出土分布	449
第357図	台石・石皿出土分布	450
第358図	刃器法量相関	451
第359図	刃器出土分布	452
第360図	磨製石斧・石鏃・軽石製品出土分布	453
第361図	縄文時代後期の石器組成	454
第362図	原石・石核・剥片	457
第363図	石鏃・石鏃・磨製石斧	458
第364図	打製石斧1	459
第365図	打製石斧2	460
第366図	磨石・凹石・敲石	461
第367図	台石	462
第368図	刃器1	463
第369図	刃器2	464
第370図	長野県出土の有尾式土器(1)	466
第371図	長野県出土の有尾式土器(2)	468
第372図	上縁部上端に縦位刺突を行う土器	469
第373図	群馬県瀬戸ヶ原遺跡J1号住居址出土資料	470
第374図	前期中葉土器群の変遷	473
第375図	遺構外出土土器分布図(V群A類1・2編)	478

第376図	遺構外出土土器分布図 (V群A類3種・V群B類・V群E類1種) ……479
第377図	遺構外出土土器分布図(VI群・VII群) ……482
第378図	V群土器出土分布図 ……483
第379図	岩ノ口遺跡第120号ピット埋設土器 ……485
第380図	縄文時代中期初頭の石器組成 ……495
第381図	前期社会における石器群の構成 ……501
第382図	E P M A分析チャート ……506
第383図	松原遺跡前期中葉の石製装身具 ……510

第384図	松原遺跡前期末～中期初頭の石製装身具 ……510
第385図	長野県カゴ田遺跡 ……510
第386図	埼玉県北宿西遺跡 ……510
第387図	富山県柳楽寺遺跡 ……510
第388図	長野県お供平遺跡 (1～4 22号住、5・6 24号住) ……510
第389図	長野県阿久遺跡 (1～3 阿久Ⅱ期、4・5 Ⅳ期) ……510
第390図	東京都八丈島倉輪遺跡 ……510

挿 表 目 次

第1表	縄文時代遺跡地名表 ……18
第2表	前期中・後葉堅穴住居址(S B)一覧表 ……29
第3表	前期中葉焼土址(S F)一覧表(1) ……30
第4表	前期中葉焼土址(S F)一覧表(2) ……31
第5表	前期中・後葉遺物集中(S Q)一覧表 ……31
第6表	前期中葉土坑(S K)一覧表(1) ……33
第7表	前期中葉土坑(S K)一覧表(2) ……34
第8表	前期末葉～中期初頭堅穴住居址一覧表(1) ……74
第9表	前期末葉～中期初頭堅穴住居址一覧表(2) ……75
第10表	前期末葉～中期初頭焼土址(S F)一覧表(1) ……79
第11表	前期末葉～中期初頭焼土址(S F)一覧表(2) ……80
第12表	前期末葉～中期初頭焼土址(S F)一覧表(3) ……81
第13表	前期末葉～中期初頭焼土址(S F)一覧表(4) ……82
第14表	前期末葉～中期初頭遺物集中(S Q)一覧表(1) ……85
第15表	前期末葉～中期初頭遺物集中(S Q)一覧表(2) ……86
第16表	前期末葉～中期初頭土坑(S K)一覧表(1) ……87
第17表	前期末葉～中期初頭土坑(S K)一覧表(2) ……88
第18表	前期末葉～中期初頭土坑(S K)一覧表(3) ……89
第19表	中期末葉～後期前葉焼土址(S F)一覧表(1) ……126
第20表	中期末葉～後期前葉焼土址(S F)一覧表(2) ……127
第21表	中期末葉～後期前葉土坑(S K)一覧表(1) ……138
第22表	中期末葉～後期前葉土坑(S K)一覧表(2) ……139
第23表	中期末葉～後期前葉土坑(S K)一覧表(3) ……140
第24表	掘立柱建物址柱穴一覧表 ……141
第25表	石器の組成(前期中葉) ……182
第26表	原石・剥片類遺構別出土数量 ……185
第27表	小形剥片遺構別出土数量(石材別) ……186
第28表	大形剥片遺構別出土数量(石材別) ……186
第29表	石鍬属性 ……190
第30表	磨石類属性 ……193
第31表	台石・石皿属性 ……194
第32表	刀器属性1(大形) ……195
第33表	刀器属性2(小形1類) ……198
第34表	刀器属性3(小形2類) ……198
第35表	刀器属性4(石匙) ……198
第36表	石錐属性 ……200
第37表	磨製石斧属性 ……201
第38表	縄文前期前半石器組成の変遷 ……202
第39表	原石・石核観察表 ……204
第40表	剥片A類観察表 ……204

第41表	石鍬観察表 ……204
第42表	打製石斧観察表 ……204
第43表	磨石類(磨石・凹石・敲石)観察表(1) ……204
第44表	磨石類(磨石・凹石・敲石)観察表(2) ……205
第45表	台石・石皿観察表 ……205-206
第46表	刀器(大形)観察表 ……206
第47表	刀器(小形)観察表 ……206
第48表	石匙観察表 ……206
第49表	石錐観察表 ……207
第50表	磨製石斧観察表 ……207
第51表	石鍬観察表 ……207
第52表	裝飾品観察表 ……207
第53表	石器の組成(中期初頭) ……315
第54表	原石・剥片類遺構別出土数量 ……317
第55表	小形剥片遺構別出土数量(石材別) ……317
第56表	大形剥片遺構別出土数量(石材別) ……317
第57表	石鍬属性 ……345
第58表	打製石斧属性 ……352
第59表	磨石類属性 ……353
第60表	台石・石皿属性 ……356
第61表	刀器属性1(大形) ……358
第62表	刀器属性2(小形2類) ……359
第63表	刀器属性3(小形1類) ……362
第64表	刀器属性4(石匙) ……362
第65表	石錐属性 ……365
第66表	磨製石斧属性 ……367
第67表	原石・石核観察表 ……372
第68表	剥片A類観察表 ……372
第69表	剥片類観察表 ……372-373
第70表	石鍬観察表 ……373-374
第71表	打製石斧観察表 ……374
第72表	磨石類(磨石・凹石・敲石)観察表 ……374-375
第73表	磨石類(磨石・凹石・敲石・雜器)観察表 ……375
第74表	台石・石皿観察表 ……376
第75表	刀器(大形)観察表 ……376
第76表	刀器(小形)観察表 ……376-377
第77表	石匙観察表 ……377
第78表	石錐観察表 ……377
第79表	石核観察表 ……377
第80表	磨製石斧観察表 ……378

第81表	砥石觀察表	378	第97表	人形割片遺構別出土數量(石材別)	444
第82表	石錘觀察表	378	第98表	石鏃屬性	445
第83表	裝飾品觀察表	378	第99表	打製石斧屬性	447
第84表	松原遺跡出土縄文時代獸骨一覽表(1)	415	第100表	磨石類屬性	449
第85表	松原遺跡出土縄文時代獸骨一覽表(2)	416	第101表	刃器屬性1(大形)	452
第86表	松原遺跡出土縄文時代獸骨一覽表(3)	417	第102表	刃器屬性2(小形)	452
第87表	松原遺跡出土縄文時代獸骨一覽表(4)	418	第103表	原石・石核觀察表	455
第88表	松原遺跡出土縄文時代獸骨一覽表(5)	419	第104表	割片B類觀察表	455
第89表	松原遺跡出土縄文時代獸骨一覽表(6)	420	第105表	石鏃觀察表	455
第90表	松原遺跡出土縄文時代獸骨一覽表(7)	421	第106表	石鏃觀察表	455
第91表	松原遺跡出土縄文時代獸骨一覽表(8)	422	第107表	磨製石斧觀察表	455
第92表	松原遺跡出土縄文時代獸骨一覽表(9)	423	第108表	打製石斧觀察表	455
第93表	松原遺跡出土縄文時代獸骨一覽表(10)	424	第109表	磨石類(磨石・凹石・敲石)觀察表	456
第94表	石器之組成(後期前葉)	442	第110表	白石・石鏃觀察表	456
第95表	原石・割片類遺構別出土數量	443	第111表	刃器觀察表	456
第96表	小形割片遺構別出土數量(石材別)	443	第112表	縄文中期初頭石器組成の変遷	499

写真図版目次

巻頭図版 中期初頭の石製裝飾品

PL1	遺跡上空空中写真	PL27	早期末葉～前期後葉遺構外出土土器10
PL2	遺跡遠景・基本層序	PL28	早期末葉～前期後葉遺構外出土土器11
PL3	前期中・後葉竪穴住居址	PL29	早期末葉～前期後葉遺構外出土土器12
PL4	前期中葉焼土	PL30	前期末葉～中期初頭遺構出土土器1
PL5	前期中・後葉焼土址・遺物集中・土坑	PL31	前期末葉～中期初頭遺構出土土器2
PL6	前期末葉～中期初頭調査区全景・竪穴住居址	PL32	前期末葉～中期初頭遺構出土土器3
PL7	前期末葉～中期初頭竪穴住居址	PL33	前期末葉～中前期初頭遺構出土土器4
PL8	前期末葉～中期初頭焼土址	PL34	前期末葉～中期初頭遺構出土土器5
PL9	前期末葉～中期初頭遺物集中	PL35	前期末葉～中期初頭遺構出土土器6
PL10	前期末葉～中期初頭遺物集中・遺物出土状況	PL36	前期末葉～中期初頭遺構出土土器7
PL11	前期末葉～中期初頭土坑	PL37	前期末葉～中期初頭遺構出土土器8
PL12	中期末葉～後期前葉竪穴住居址・掘立柱建物址	PL38	前期末葉～中期初頭遺構出土土器9
PL13	中期末葉～後期前葉焼土址・遺物集中・土坑	PL39	前期末葉～中期初頭遺構出土土器10
PL14	中期末葉～後期前葉竪穴住居址	PL40	前期末葉～中期初頭遺構出土土器11
PL15	前期中・後葉遺構出土土器1	PL41	前期末葉～中期初頭遺構出土土器12
PL16	前期中・後葉遺構出土土器2	PL42	前期末葉～中期初頭遺構出土土器13
PL17	前期中・後葉遺構出土土器3	PL43	前期末葉～中期初頭遺構出土土器14
PL18	前期中・後葉遺構出土土器4	PL44	前期末葉～中期初頭遺構出土土器15
	早期末葉～前期後葉遺構外出土土器1	PL45	前期末葉～中期初頭遺構出土土器16
PL19	早期末葉～前期後葉遺構外出土土器2	PL46	前期末葉～中期初頭遺構出土土器17
PL20	早期末葉～前期後葉遺構外出土土器3	PL47	前期末葉～中期初頭遺構外出土土器1
PL21	早期末葉～前期後葉遺構外出土土器4	PL48	前期末葉～中期初頭遺構外出土土器2
PL22	早期末葉～前期後葉遺構外出土土器5	PL49	前期末葉～中期初頭遺構外出土土器3
PL23	早期末葉～前期後葉遺構外出土土器6	PL50	前期末葉～中期初頭遺構外出土土器4
PL24	早期末葉～前期後葉遺構外出土土器7	PL51	前期末葉～中期初頭遺構外出土土器5
PL25	早期末葉～前期後葉遺構外出土土器8	PL52	前期末葉～中期初頭遺構外出土土器6
PL26	早期末葉～前期後葉遺構外出土土器9	PL53	前期末葉～中期初頭遺構外出土土器7

PL54 前期末葉～中期初頭遺構外出土土器 8
PL55 前期末葉～中期初頭遺構外出土土器 9
PL56 前期末葉～中期初頭遺構外出土土器10
PL57 前期末葉～中期初頭遺構外出土土器11
PL58 前期末葉～中期初頭遺構外出土土器12
PL59 前期末葉～中期初頭遺構外出土土器13
PL60 前期末葉～中期初頭遺構外出土土器14
PL61 前期末葉～中期初頭遺構外出土土器15
PL62 前期末葉～中期初頭遺構外出土土器16
PL63 前期末葉～中期初頭遺構外出土土器17
PL64 前期末葉～中期初頭遺構外出土土器18
PL65 前期末葉～中期初頭遺構外出土土器19
PL66 中期末葉～後期前葉遺構出土土器 1
PL67 中期末葉～後期前葉遺構出土土器 2
PL68 中期末葉～後期前葉遺構出土土器 3
PL69 中期末葉～後期前葉遺構出土土器 4
PL70 中期末葉～後期前葉遺構出土土器 5
PL71 中期末葉～後期前葉遺構出土土器 6
PL72 中期末葉～後期前葉遺構出土土器 7
PL73 中期末葉～後期前葉遺構出土土器 8
PL74 中期末葉～後期前葉遺構外出土土器 1
PL75 中期末葉～後期前葉遺構外出土土器 2
PL76 中期末葉～後期前葉遺構外出土土器 3
PL77 中期末葉～後期前葉遺構外出土土器 4
PL78 縄文前期石器 1
PL79 縄文前期石器 2
PL80 縄文前期石器 3
PL81 縄文前期石器 4
PL82 縄文前期石器 5
PL83 縄文前期石器 6
PL84 縄文前期石器 7
PL85 縄文前期石器 8
PL86 縄文前期石器 9
PL87 縄文前期石器10
PL88 縄文前期石器11
PL89 縄文前期石器12
PL90 縄文前期石器13
PL91 縄文前期石器14
PL92 縄文前期石器15
PL93 縄文前期石器16
PL94 縄文中期石器 1
PL95 縄文中期石器 2
PL96 縄文中期石器 3
PL97 縄文中期石器 4

PL98 縄文中期石器 5
PL99 縄文中期石器 6
PL100 縄文中期石器 7
PL101 縄文中期石器 8
PL102 縄文中期石器 9
PL103 縄文中期石器10
PL104 縄文中期石器11
PL105 縄文中期石器12
PL106 縄文中期石器13
PL107 縄文中期石器14
PL108 縄文中期石器15
PL109 縄文中期石器16
PL110 縄文中期石器17
PL111 縄文中期石器18
PL112 縄文中期石器19
PL113 縄文中期石器20
PL114 縄文中期石器21
PL115 縄文中期石器22
PL116 縄文中期石器23
PL117 縄文中期石器24
PL118 縄文中期石器25
PL119 縄文中期石器26
PL120 縄文中期石器27
PL121 縄文中期石器28
PL122 縄文中期石器29
PL123 縄文中期石器30
PL124 縄文中期石器31
PL125 縄文中期石器32
PL126 縄文中期石器33
PL127 縄文中期石器34
PL128 縄文中期石器35
PL129 縄文中期石器36
PL130 縄文中期石器37
PL131 縄文中期石器38
PL132 縄文後期石器 1
PL133 縄文後期石器 2
PL134 縄文後期石器 3
PL135 縄文後期石器 4
PL136 縄文後期石器 5
PL137 縄文後期石器 6
PL138 縄文後期石器 7
PL139 縄文後期石器 8
PL140 縄文後期石器 9
PL141 縄文後期石器10

第1章 調査の経過と方法

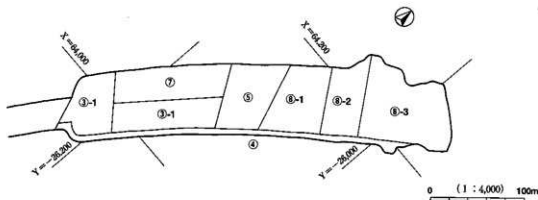
第1節 調査の経過

1. 調査に至る経緯

当財団法人長野県埋蔵文化財センター（以下「県埋文センター」という。）は、その設立主旨から国及び県の機関（文化財保護法施行令（昭和50年令第267号）第1条に定める法人を含む。）により実施される公共開発事業において、事業の実施に先駆け調査を済ませる義務をおう者（以下「事業者」）の委託を受けて、埋蔵文化財の調査を行うほか、埋蔵文化財の保護のための必要な事業及び研究を行う。この時、県埋文センターが委託を受けて行う調査（以下「受託調査」という。）は、それに先立ち長野県教育委員会（以下「県教委」という。）が、行政上の調整を済ませた上で県埋文センターにおいて受託して行うことが適当であると認めたものについて実施される。

松原遺跡は、弥生時代中期後半、古墳時代後期、平安時代の遺跡と周知されていた遺跡である。平成元年度に調査が開始されると、それらが一面ではなく、それぞれ間層をともなう文化層として確認されるに至った。このことは、当初予想されなかったことで、調査計画は変更を余儀なくされ、異例ともいえる1月から2月にかけての厳冬期間の発掘調査を行うこととなった。なお、この時点でも確認された文化層は弥生時代中期後半、同後期、古代・中世の3枚で、縄文時代の文化層を確認するには至っていない。これは、一つに工事工程の関係から分割調査が実施され（第1図）、縄文時代の文化層が無い長野電鉄以西の地区（以下「西地区」という。）の調査が先行していたことによる。

翌平成2年4月、㊸-1地区（第1図）で弥生時代中期後半の調査が終了し、中世の井戸址の断面図を作成して調査完了という段階まで調査が進行した。ところが、井戸址を重機（バックホー）で半削し、断面観察をしたところ、所謂地山の部分に、炭化物を多量に含んだ黒味を帯びた土層が、地表下約5mのところ確認された。土壌化した土層であることには間違いないが、その広がりや遺物の有無などの確認のためトレンチを入れたところ、加曽利E式と思われる土器片と打製石斧がその層位から検出され、その土層自体も水平堆積していることが確認された。ここに、松原遺跡での縄文時代文化層の発見があり、このこと



第1図 松原遺跡東地区調査区設定図

は、善光寺平における縄文時代の遺跡の捉え方に対し、重要な問題を投げかける発端となることになる。

以下、年度を追って調査経過を概観する。なお、松原遺跡は上記したごとく、時代ごとに間層をもち、それぞれ独立した形で捉えられることから、報告書も時代ごとに分冊で刊行していくという編集方針である。したがって、本書は松原遺跡の報告書の中で、縄文時代編であるので、縄文時代の調査と直接関わりが無い部分については割愛する。

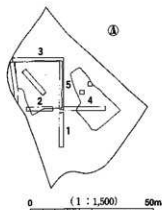
2. 調査の体制と経過

(1) 発掘調査（平成2年度～3年度）

【平成2年度調査体制】	長野調査事務所長	峯村忠司
	同 庶務部長	塚田次夫
	同 庶務部長補佐	松本忠巳
	同 調査部長	小林秀夫
	同 調査課長	宮下健司

調査研究員 原 明芳 上田典男 伊藤克己 夏目大助 山崎光顕 三上徹也
 白沢勝彦 田中 正 宮脇正美 町田勝則 出河裕典 松岡忠一郎
 甲田圭吾 青木一男 岡沢康夫 小林清人 中沢道彦 西 香子
 廣瀬昭弘 藤沢翼一

【調査経過】前記したように、③-1区で弥生中期後半面調査終了後、4月17日に中世の井戸址を断ち割り、断面観察に臨んだところ、地山とされる部分に水平に堆積する炭化物を多量に含んだ黒味を帯びた土層が観察された。その部分を拡張すると、同層から中期末葉と思われる磨消縄文が施された土器片と打製石斧の出土をみた。同層の広がりを把握すべくトレンチ調査を実施したところ、すべての断面で同層が把握され、安定した広がりを持つことが確認された。各トレンチ内で下部の状況を確認したところ、同層から約30cmのところから黒曜石製の剥片等が出土し、遺物包含層がさらに下位に存在することが明らかとなった。下位の遺物包含層の時期を確認するため、4月21日にトレンチを拡張し、面的調査を実施。中期初頭と思われる土器片と焼土址を中心におよびたい焼骨片が出土した。5月2日には、東側を拡張し、トレンチ内で遺物の出土をみた面（南半部＝前期末葉）と先の拡張区で遺構が検出された面（北半部＝中期初頭）の2面に調査を分け、同時に面的調査を進めた。南半部では、2×2mグリッド内を市松に掘り下げていく方法を取り、遺物取り上げについては1×1m、深さ10cm幅を単位に一括することとした。遺物の出土量は豊富で、粗密はあるものの調査範囲全面に分布することが確認された。出土遺物は前期末葉の土器片と石器類が中心である。同時に、焼土址が数基確認された。一方北半部では、住居址と想定される落ち



第2図 ③-1区トレンチ及び調査範囲

込みが検出され、調査を進めた。その結果、4軒の竪穴住居址が重複して検出され、その内1軒の住居址のビット内からは、中期初頭に位置付けられる完形土器が出土した。5月21日をもって③-1区の調査を終了するが、ここでの調査を試掘調査と位置付け、今後の調査計画・方法の指針とした。また、前年度引き渡しが終了した工事用道路部分についても、トレンチ調査実施の了解が得られ、重機による掘り下げと断面観察が実施された。その結果、同層及び下位の遺物包含層が山際まで連続と続くことが明らかとなり、東地区の調査範囲全面にわたる調査の必要性が生じた。

この間、県文化課・道路公団・本線工事業者・当センターで協議が

進められ、工事エリア・工程及び調査期間等の変更が承認され、本遺跡の東地区について縄文面の全面調査に踏み切ることとなった。

以下、分割調査のため記述が煩雑になるので調査区ごとに記載する。

③-2区



第3図 ③-2区 中期末葉～後期前葉面 調査状況

弥生中期後半面調査終了後、7月10日より縄文時代の調査を開始する。③-1区のトレンチ調査で後期と思われる土器が1点出土した層位上面まで、重機による掘削を行う。その後、手作業にて遺構検出等を実施するが、遺構・遺物とも検出されず、この面・層位については調査の必要なしと判断する。次に、同じく先の調査で、土層上限に褐色土のブロックが検出された層位上面まで、重機による掘削を行う。手作業による遺構検出等を繰り返

し実施したところ、遺物出土はみられないものの、複数の地点で落ち込みが数か所検出された。半割し断面観察をしたところ、いずれも断面形が不定形であり、炭化物の混入はあるものの周囲の混入状況と変化が見られず、遺物及び焼土粒子等、他の混入物も確認されないため、自然営力によるものと判断した。したがって、この面・層位についても調査の必要なしと判断し、以後、他の調査区についても、この方針で調査にあたることを確認する。7月17日より、縄文土器と打製石斧が出土した層位上面まで、重機による掘削を行う。手作業による遺構検出等を実施すると、土器片の出土が相次ぎ、集中する部分や散漫に出土する部分が捉えられた。後期前葉と思われる土器が中心で、明確に堀之内式土器と判断されるものも検出された。よって、この層位については面的調査を実施することとし、中期末葉～後期前葉遺物包含層と捉えた。7月23日に基準杭を設定し、それを基に2×2mグリッドを設定。10cm掘り下げごとに遺物を一括して取り上げる方法をとる。8月1日より、遺物の集中するグリッドを拡張し、面的調査に移行する。8月31日には竪穴住居址2軒、焼土址2基、土坑8基という遺構が検出され、本格的な遺構調査に着手する。数々の遺構調査を終え、9月28日に空中写真撮影を実施する。以後、住居址の床面・柱穴の断ち割り等を実施するとともに、弥生中期面の調査が残っていた北東部について、中期末葉～後期前葉遺物包含層上面までの重機による掘削を開始する。なお、これまで調査した部分を③-2a 北東部を③-2b と便宜的に称した。③-2a 区については、10月5日をもって調査を終了し、中期初頭面の調査に向けて重機による掘削を開始する。途中、中期末葉～後期前葉遺物包含層下限付近にて小ピットが検出され（柱状遺構の一部）、その調査にあたる。中期初頭面の調査に入ったのは10月15日からで、早速、石製装飾品の出土を見るなど、豊富な遺物量に圧倒される。遺構調査とともに、遺構からはずれる部分については、1×1m、深さ10cm幅という単位で遺物取り上げを実施しながら掘り下げを進めた。なお、③-2b 区については、12月12日をもって中期末葉～後期前葉面の調査を終了し、調査区内での段階差が解消された。12月21日に空中写真撮影を実施。その後も遺構調査等が続くが、12月27日をもって調査を一時中断する。1月7日より調査を再開するが、凍結防止対策や降雪→除雪作業の繰り返しで調査は難航。2月15日、SB3015の調査終了をもって、本地区の調査を終了する。

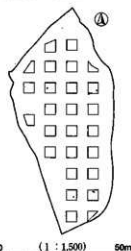
⑤区

8月2日より、弥生中期面の調査と並行させながら、北半部について縄文時代の調査を開始する。後期前葉面までの重機による掘削終了後、手作業による遺構検出作業を実施し、8月20日には任意にトレンチを設定し、掘り下げを進める。遺物の出土した地点を拡張し、面的調査を実施したが、検出される遺構・

中期末葉～後期前葉



前期末葉～中期初葉

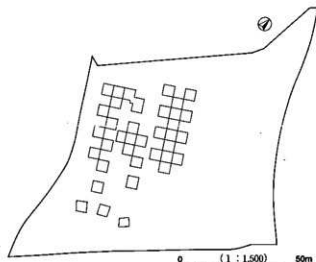


第4図 ⑥区 グリッド等設定図

後期前葉の遺物包含層の掘り下げを開始する。遺物は散漫に出土するが、遺構は検出されない。11月18日に至り、小ピットが検出され始め、11月19日、それらが列状に分布することが確認された。杭列状遺構の検出である。ピットの分布は⑦区のほぼ全域にわたり、直線的、あるいは弧状の配列、1列単位・2列単位の配列等が確認された。12月13日には小林達雄國學院大学教授、同20日には宮本長二郎奈良国立文化財研究所遺物室長を招聘し、現地でご指導をいただく。この間、調査はピット群の検出・空中撮影・断面観察を中心に、焼土・土坑などの遺構調査、遺物の取り上げ等を実施した。また、杭列状遺構については、新聞各紙にも報道された。1月10日より、調査を終了した東側から、前期末葉～中期初葉の遺物包含層上面までの掘削を開始。遺構は検出されず、遺物も少量の出土をみるにとどまる。厳冬期を迎え、2月12日から3月4日まで発掘作業を一時中断し、室内での整理作業を実施する。3月5日に再開された調査では、前期末葉～中期初葉の遺構が検出されはじめ、遺物取り上げ・遺構調査を並行しながら掘り下げを進めた。3月26日をもって今年度の調査を終了する。

⑧-1,2区

弥生中期後半調査終了後、9月4日より縄文時代の調査を開始する。中期末葉～後期前葉の遺物包含層については、任意に4×4mのグリッドを設定し、遺構検出を並行させながら掘り下げを進める。一部で炭化物が集中する部分を拡張した場面もあったが、全体的に遺物の出土は極めて少なく、遺構も検出されなかったことから、グリッド調査のみにて調査を終了する。10月1日より前期末葉～中期初葉の調査に入る。先の調査と同様にグリッドを設定し、調査を進めたが、遺構も検出されず、遺物の出土も得られなかった。途中、悪天候により調査区全城が水没というアクシデントに見まわれたが、10月25日をもって調査を終了する。なお、調査区北東部で河川址の調査を並行して実施していたところ、河川址の断面にて前期末葉～中期初葉の遺物包含層より下位にあたる層順から竪穴住居址が検出された(SB3016)。出土土器から、前期末葉の住居址と推定され、本遺跡としては最古の遺構及



第5図 ⑧-1,2区 前期末葉～中期初葉面 グリッド設定図

遺物とも稀薄であり、9月7日をもって調査を終了し、南半部の調査へ移行する。南半部については任意にグリッドを設定し、調査を進めた。北半部と同様に、検出される遺構・遺物は稀薄であり、10月5日をもって調査を終了する。中期初葉面の調査については、4×4mのグリッド調査を実施した。10月16日より調査を開始したが、後期前葉面と同様に、検出される遺構・遺物は稀薄であり、グリッドを拡張することなく、11月7日をもって調査を終了する。

⑦区
10月26日、弥生中期後半面の調査を終了した西側から縄文時代の調査を開始する。11月7日より、重機での掘削と並行して手作業による縄文中期末葉～

び遺物包含層の発見となる。他の調査区については、これに類する層位は検出されておらず、崖錐地形に接するがゆえの所産と推測され、隣接する⑧-3区の調査が期待された。

【平成3年度調査体制】 長野調査事務所長 峯村忠司
 同 庶務部長 塚田次夫
 同 庶務部長補佐 山崎今朝寛
 同 調査部長 小林秀夫
 同 調査課長 百瀬長秀 原 明芳（整理課長代理）
 調査研究員 原 明芳 上田典男 百瀬忠幸 伊藤克己 大和能一 田中貴美子
 夏目大助 出河裕典 西 香子 岡沢康夫 小林清人

【調査経過】 ⑦区の前期末葉～中期初頭面と⑧-3区の調査を実施。発掘調査の最終年度となる。なお、後者については、古代面・弥生面及び河川址の調査終了後に着手となる。

⑦区（前期末葉～中期初頭面）

前年度3月から調査を始めており、作業は継続。調査方法についても前年度と同様。遺構調査、遺物取り上げが主体。地表面から縄文時代前期末葉の遺物包含層までの土層断面を転写し、保存処理室へ搬入。5月17日をもって調査を終了する。

⑧-3区

弥生中期面調査終了後、6月3日より縄文時代の調査を開始。重機によるトレンチで4枚の遺物包含層（中期末葉・前期末葉・同中葉・同前葉）を確認。最上面の中期末葉包含層上面まで、重機による掘削を開始。中期末葉面の調査に並行して、重機による掘削範囲を拡大するが、巨岩や大量の排土が伴い一進一退の状況が続く。一方、調査所見からは、中期末葉の遺物包含層が調査区外北方へ広がることが推定された。中期末葉面調査終了後、重機により掘削を開始したが、出水が著しく、鋼矢板を打設し配水所を設ける。6月13日には、その配水所でクラムシェルを使用して、前期末葉面以下の遺物包含層の有無を再確認した。その結果、前期末葉面以下は礫層となることが判明した。

調査方法は他地区の縄文時代調査方法に準拠するが、遺物取り上げに際しては全点3次元ドットを基本とし、遺構Noは8000番台を使用した。また、標準土層を設定し、遺構・遺物にそれぞれ土層を明示する方法をとった。天候が不安定だったこともあり、調査日程はずれこむ傾向にあったが、10月11日をもって縄文時代の調査を終了するとともに、本遺跡のすべての発掘調査が終了となる。



第6図 クラムシェルによる試掘



第7図 ⑧-3区 調査状況

(2) 整理作業（平成4年度～9年度）

前半の平成4～6年度は、松原遺跡全体の基礎整理作業として位置付けられる。調査期間等の関係で、冬期整理作業の実施が十分でなかったこと、年度を越えた分割調査と大量の調査研究員の動員、さらには

想像を絶する膨大な遺構数・遺物量を抱えていたために、基礎的な整理に3年間を要した。後半の3年弱については、遺物が保持する時代の特殊性ゆえ、整理計画の破綻が幾つかの場面で生じ、計画変更等が余儀なくされた。以下、順を追って概略を記す。

[平成4年度整理体制] 長野調査事務所長 岡田正彦
同 庶務課長 山崎今朝寛
同 整理課長 原 明芳
調査研究員 上田典男

本格的な松原遺跡の整理作業に着手した年度であるが、本年度は弥生時代中期～中世の図面整理と人骨・獣骨、金属製品、植物遺存体、昆虫等の分析・鑑定・保存処理を要する遺物の整理に終始し、縄文時代の整理作業にまでは及ばなかった。

[平成5年度整理体制] 長野調査事務所長 岡田正彦
同 庶務課長 羽生田博行
同 整理課長 原 明芳
調査研究員 上田典男 山極 充

前年度からの作業を継続しつつ、本遺跡出土のすべての土器・石器等の遺物洗浄・遺物台帳作成・注記作業を中心とした整理作業を実施。一部、縄文時代の図面整理・土器接合作業に着手する。

[平成6年度整理体制] 長野調査事務所長 岡田正彦
同 庶務課長 羽生田博行
同 整理課長 原 明芳
調査研究員 上田典男 増村香子 調査員 山極 充 西嶋洋子

前年度同様の作業内容を継続するが、縄文土器の接合作業を本格的に開始し、器形復元・接合関係図等に着手する。

[平成7年度整理体制] 長野調査事務所長 小林秀夫
同 庶務課長 外谷 功
同 調査課長 百瀬長秀
調査研究員 上田典男 青木一男 市川桂子 増村香子
調査員 西嶋洋子

時代別に担当者を置いたことにより、本格的に縄文時代の整理作業に取り組むこととなる。作業は、土器の接合関係図作成・拓本・実測と石器類及び礫の基礎整理、水洗選別資料の整理、遺構図並びに遺構所見の検討が中心となる。

[平成8年度整理体制] 長野調査事務所長 小林秀夫
同 庶務課長 外谷 功
同 調査1課長 百瀬長秀
調査研究員 上田典男 青木一男 市川桂子 藤森俊彦 増村香子
調査員 西嶋洋子

土器の実測・拓本・分類と石器の器種分類・観察・実測を中心に、実測図版・写真図版のレイアウトを作成する。原稿執筆開始。なお、古代の遺構分析・住居址出土土器の接合作業を並行して実施した。

[平成9年度整理体制] 長野調査事務所長 小林秀夫
 同 庶務課長 外谷 功
 同 調査1課長 百瀬長秀
 調査研究員 上田典男 青木一男 市川桂子 町田勝則
 調査員 西嶋洋子

実測図版・写真図版のレイアウトと土器・石器の実測・トレース・写真撮影などを経て、トレース・製版・原稿執筆にあたり、3月27日に本報告書を刊行した。なお、古代の土器接合・実測等を並行して実施した。

第2節 調査の方法

1 発掘調査の方法

はじめに遺跡の名称・記号について触れておく。遺跡の名称は、長野県教育委員会作成の遺跡台帳に掲載された「松原遺跡」とした。なお、文化庁に登録されている長野県埋蔵文化財包蔵地番号「6177松原遺跡」に相当する。遺跡を表す記号は、当センターではアルファベット3文字で表記することを原則としている。本遺跡の場合、頭文字に長野県を9地区に分割した長野市に該当する「B」を用い、次の2文字は「MATUBARA」の「MA」を付加して「BMA」とした。この遺跡記号使用の目的は、発掘調査段階での便宜を図ることはもとより、今後の情報処理システムにおけるデータベース化に対応するためのものでもある。したがって、少なくとも当センターが用いる遺跡記号については、3文字の構成に重複はない。なお、遺物への注記、遺構・遺物の実測図についても「BMA」の略号を用いて表記してある。

(1) 試掘調査

中世井戸址の半割調査の際に、縄文時代の文化層の存在が確認されたという経緯があるため、計画的にトレンチ調査を実施するまでには至らなかったものの、道路公団・本線工事業者の好意と協力を得て、短期間の内に最大限の調査をすることができた。文化層の広がりとその時期判別を目的に、トレンチ調査を基本に、遺物の集中した地点については、一部分的な調査を実施した(第2図)。加えて、平成元年度にすでに調査が終了した側道部分についても、適宜トレンチ調査を実施し、文化層の広がりを確認した。掘り下げには重機(バックホー)を用い、各地点とも中世井戸址半割の際と同様な深さ(弥生時代中期後半面以下3-4m)をめどに掘削し、その後断面観察を実施した。

(2) 面的調査

試掘調査の成果をもとに、原則的に東地区調査区の全面を調査することとした。ただし、調査面が深いため、安全確保や湧水除去を目的に、法面・犬走りや排水溝などを設定したため、実際の調査面積は狭まっている。加えて、工事工程の関係から、分割調査を余儀なくされており、その都度調査範囲の確保、安全確保に努めた。しかし、各調査区との連携、調整が不十分な場合もあり、調査区を越えて分布する遺構については、十分な調査ができなかった場面もあった。反省点として、今後に生かしていきたい。

調査は、試掘調査の段階で文化層と捉えた層序の上面まで、重機（バックホー）により掘削した。次に手作業による遺構検出等を行い、その後遺構等の精査を実施した。

(3) 主な遺構の調査方法

掘り込みを伴う遺構（竪穴住居址、土坑等）については、先行トレンチを入れて土層の状況を確認した後、層位を追って面的に掘り下げるという一般的な方法をとった。ただし、遺構と遺構外との土質の違いが明確でないため、平面からのプラン確認とサブトレンチによる断面での確認とを併用している。また、微細な剥片・破片が多量に出土した場合など、随時、遺構に対して任意に3次元を設定して土ごと取り上げ、後に水洗選別を実施した。

掘り込みは明確でないものの、遺物の分布が視覚的にまとまりとして捉えられたものについては、遺物集中と称し、遺構として取り扱い、同様の調査を行った。

なお、遺構についても遺跡記号と同様の観点から、その性格により分類化した記号を用いた。ただし、遺構記号は、遺構検出時に付しているため、調査を進めていく段階で、あるいは整理作業を進めていく中で、記号が表す遺構の性格と実際の遺構の性格とが合致しなくなる場合もあり得る。本遺跡で使用した記号は以下のとおりである。

SB・・・竪穴住居址	SD・・・溝状遺構	SF・・・焼土址
SK・・・土坑	SQ・・・遺物集中箇所	ST・・・掘立柱建物址

また、遺構記号の後に付加した番号は、他の時代の調査との重複を避けるため、試掘調査と捉えた③-1地区を除き、基本的に3000番台を用い、地点が離れた③-3地区についてはのみは8000番台を用いた。

(4) 測量の方法

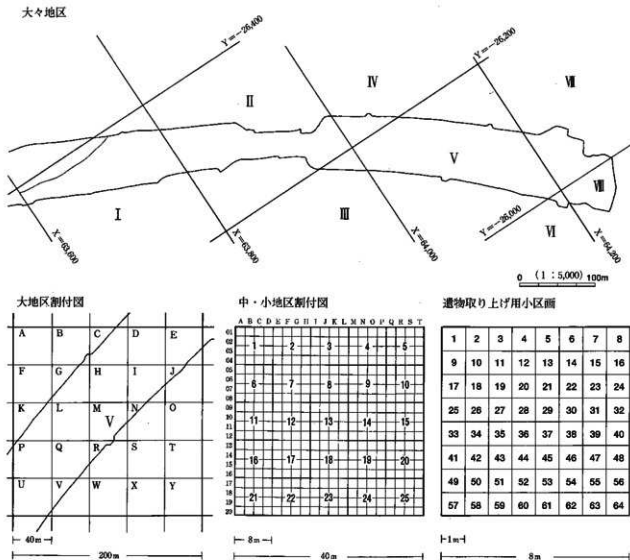
グリッドの設定は、国土座標のメッシュに従うことを原則とした。測量基準点は国土地理院の平面直角座標系の原点（ $X=0.0000$ $Y=0.0000$ 長野県第Ⅲ系）を基点に200倍の数値を選んで調査範囲内のX軸・Y軸を測量基準線とした。これをもとに200×200mのグリッド（大々地区）を設定し、さらにこれを40×40mの区画（大地区）に分割した。大々地区は南西から北東方向へⅠ～Ⅷと記号を与え、大々地区の中に25区画入る大地区については、北西から南東方向へ順次A～Yの記号を与えた。大地区をさらに、8×8mごと（中地区）、2×2mごと（小地区）に分割した（第8図）。このうち中地区は、割付平面図（縮尺1:20）を作成する基準となり、調査を進めていく上でも一つの単位とした。こうして設定したグリッドを基準に、簡易遣り方測量で遺構の実測等に当たった。なお、調査面が深くかつ複数に渡るため、実際の基準杭の設定並びに絶対高の算出は測量業者に委託した。

(5) 遺物の取り上げ方

遺構内から出土した遺物については、部分的に、一括して層位ごとに取り上げた場合もあるが、原則的に、遺物の種類に囚われることなく全点番号を付し、3次元ドットで測量した。遺構外出土の遺物については、8×8mの中地区を1×1mの小地区に64分割し、それぞれ機械的に10cm単位の層厚で一括して取り上げた。なお、③-3地区については、斜面上に立地することから、遺構外出土遺物についても3次元ドットで測量し、取り上げを実施した。

(6) 写真撮影

遺跡・遺構・出土遺物等の写真撮影には、マミヤRB6×7とニコンFM2（35mm）を併用し、とも



第8図 大々地区の設定と割付

にモノクロプリント（フジネopan）とカラーリバーサル（フジクローム）で撮影した。ただし、6×7カメラは、遺構の状況や性格による必要に応じての使用を原則とした。

写真撮影は調査研究員が行い、現像及び焼き付けについては業者に委託した。また、航空写真についても業者に委託した。なお、報告書掲載写真の焼き付けは、当センターの写真セッションが実施した。

2 整理作業の方法

(1) 発掘記録の整理

ア 図面類

検索の利便性を図るために、割付平面図・断面図・微細図の3種に分類し、それぞれ通し番号をふり、図面内容を明記した一覧表を作成した。

イ 台帳類

発掘調査中に作成した各種の台帳については、「現場台帳」と位置付け、それらを基に項目の変更や補完等を行い、新たに各種台帳を作成した。

ウ 写真類

写真の整理については、発掘調査と並行して実施していたため、年度別調査区ごとにアルバム・台帳が作成された。整理作業に至り、検索の利便性を図るために、モノクロ写真のネガアルバムについては年度順に通し番号をふり、リバーサルフィルムについては遺構ごと・撮影項目ごとに並べ換えて新たにスライドファイルを作成した。そして、モノクロ・リバーサルとも管理台帳・遺構別写真台帳を作成した。

(2) 遺物の整理

ア 土器

出土したすべての土器を、前期中葉、前期末葉～中期初頭、中期末葉～後期前葉の3種に大別し、遺物台帳作成→注記→接合という流れで整理作業を実施した。接合作業については、SB〇〇出土や〇〇区出土といった枠組みを取り払い、全体が見渡せるように努めた。接合作業が終了した個体については、類型ごとに通し番号をふり、接合関係・同一個体出土分布図(平面・垂直)及び一覧表を作成した。ここで作成された図を基に、分布の主体を検討し、個体の所属を判断した。ここで言う「所属」とは、あくまでも分布の主体となる位置を指しており、遺構に伴う・伴わないといった従来の概念とは異なる。また、同時に個体の文様要素・施文部位・施文順序・器形・出土レベル(絶対高)等の属性を一覧表化した。この時点で、実測・拓本の別や写真撮影の方法等、報告書にむけての資料化の方法を決定した。

実測については、器形復元された個体を中心に、業者委託の写真実測撮影を積極的に採用した(御写真測図研究所、御シン技術コンサル)。納品された等倍の写真にトレンジングペーパーを掛け、実物を観察しながら写真をトレースしていく方法をとった。拓本については、文様の凹凸が著しい資料が多く困難を極めたが、市販の食品用ラップフィルムを用いることでそれを克服し、忠実かつ鮮明に文様を写し取ることが可能となった。なお、報告書の掲載資料については、文様構成が認識される資料を基準に、できるだけ多くの資料を掲載することに努めた。

イ 石器

遺物洗浄後、遺物台帳を作成。注記については、器種によって方法を変えて実施した。大形の礫石器については土器と同様に注記を施し、剥片石器については遺物に直接注記をせず、ビニール袋に注記Noを記載するにとどめた。その後、時期別に器種分類をし、器種ごとに観察・計測・分析を進めた。実測については、土器と同様に業者委託の写真実測を大幅に導入した(御シン技術コンサル)。なお、土器で試みたような接合作業ができなかったことを明記しておく。

ウ その他の遺物、資料

遺跡内から出土した礫については、上記遺物と同様に一連の作業を実施した後、石質・重量・完形率の度合い・被熱痕跡の有無などの観察項目を設定し、一覧表を作成した。合わせて遺構ごと・グリッドごとの集計表を作成した。

獸骨に関しては、一覧表作成後、縄文時代のみならず一貫して、茂原信生京都大学教授に鑑定・分析を依頼した。

種子・土壌試料・年代測定試料に関しては、下記に示した通り、業者に委託した。なお、これらの成果については、平成11年度刊行予定の「松原遺跡—総論編」で報告したい。

種子同定：(株)パレオ・ラボ

プラント・オパール分析：(株)バリノ・サーヴェイ

花粉・珪藻分析：(株)バリノ・サーヴェイ

C14年代測定：(株)バリノ・サーヴェイ

3. 報告書作成の分担

(1) 執筆分担

本書は調査第1課長石瀬長秀の指導と助言のもとに、調査研究員上田典男が編集・校正を行った。各文章の執筆分担は下記のとおりである。

第1章、第2章第3節、第4章第1・2節・第3節6、第5章第2節1、第6章第2節……	上田典男
第2章第1・2節、第3章……	市川桂子
第5章第1節2、第2節2、第3節2、第6章第3節……	町田勝則
第4章第3節1～5、第5章第3節1……	西嶋洋子
第5章第1節1、第6章第1節……	賛田 明
第6章第4節……	川崎 保
第7章……	原 明芳

また、本書には、茂原信生氏（京都大学霊長類研究所教授）、櫻井秀雄氏（獨協医科大学第1解剖学教室）より手稿を賜わり、第5章第2節3として掲載した。記して謝意を表する。

(2) 作業分担

基礎 作業：上田典男・山極 充・西嶋洋子

青木明美・鎌田美和子・北沢節子・北村久美子・近藤朋子・立岩洋子・田中由美・塚田祐子・西村はるみ・半田訓子・半田純子・待井明美・朝倉妙子・飯田和子・市川佳代子・今井美枝子・岩田あさ江・梅原 祝・大沢映子・大沢 豊・太田豊子・大塚利枝・大西啓子・大山久子・岡野みさ子・奥 幸子・奥田真弓・尾嶋平一・笠井純子・片桐はまよ・片桐ゆかり・金子実子・熊木澄江・雲井博子・倉島恵子・小坂井定子・小須田優子・小林尚子・小山千恵子・西東千佳子・佐々木勲美・佐藤弘子・椎塚フサ江・清水まゆみ・菅沼かよ子・鈴木洋子・摺田伸子・竹内幸子・田島富子・土屋京子・土屋由美子・戸谷栄子・中村紀子・西沢英子・西村ウメノ・橋詰定子・原内美和子・広瀬礼子・藤木正枝・前野よしえ・増沢ふさえ・松井礼子・丸山すみ子・丸山裕子・丸山公子・三井美津子・三石恵子・峯村恵子・宮川千栄子・宮川美津枝・宮崎鶴井・宮島珠子・宮原豊子・母袋欽哉・母袋満喜子・柳沢尚美・山崎恭一・山村容子・吉池浜子

土器・遺構：上田典男・西嶋洋子・賛田 明

赤羽啓子・石井ゆみ子・風間春芳・鎌田美和子・北澤二枝子・倉島由美子・倉島洋子・黒岩美枝・近藤朋子・高山徳子・竹内富美子・竹鼻多佳子・立岩洋子・寺沢恵子・西村はるみ・半田訓子・半田純子・村松良子・山下千幸・米山敏子

石 器：町田勝則

大田節子・児玉昌之・小林喜美子・鳥田恵子・清水栄子・高橋美徳・多羅澤美恵子・名取さつき・西澤すみ江・西村美登子・村田雅子・山崎明子・米山広美

土器 復元：徳永哲秀

安東武子・内山美砂・北沢節子・小林タイ・島崎信江・中沢さか枝・西川恵美子・西沢米子・長谷川征子・松林節子・宮入さち・山岸隆男・米田ちえ子

写 真：西嶋 力

北島康子・小出紀彦

第2章 位置と環境

第1節 遺跡の位置

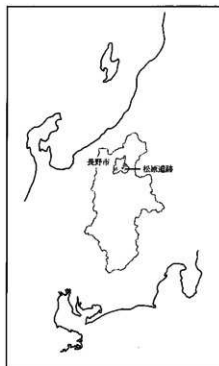
松原遺跡は長野盆地南東部の長野市松代町東寺尾に位置する。北側を金井山、南側を愛宕山で囲まれた千曲川右岸の松原自然堤防上（寺尾自然堤防とも呼ばれていた）に立地し、西側は蛇川によって削られている。調査地は自然堤防上の最も幅広い部分に位置し、鳥打峠の南西の山麓から蛇川に向かって北東—南西方向に約800m延びている。途中を道路等で分断されているが、便宜的に長野電鉄河東線より北東側を松原東、南西側を松原西と呼んだ（第9図）。

第2節 自然環境

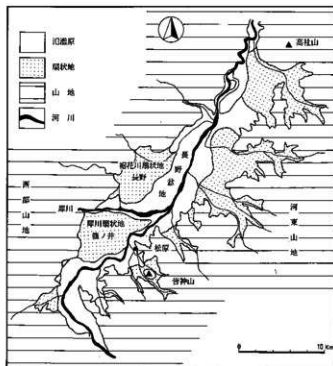
長野盆地の地形

長野盆地は南北長さ40km、東西幅8～10km、標高330～400mの紡錘形をした盆地である。西側は西部山地、東側は河東山地に明瞭に区別される。盆地の周辺は流入する中小河川の扇状地で埋められている。長野市街地の中心部は裾花扇状地上に発達し、盆地南部は犀川扇状地からなる。盆地の中央部を南西—北東に流れる千曲川は、それらの扇状地の発達に影響され自由蛇行している（第10図）。

千曲川氾濫原上には、自然堤防や旧河道の砂堆・中州などの微高地と旧河道・後背湿地などの微低地があり、微地形を形成している。千曲川は更埴市稲荷山・八幡付近で河床勾配を1:1000mと緩め、北西か



第9図 遺跡の位置



第10図 長野盆地の地形（「中部地方Ⅰ」赤羽花岡 1988に加筆）

ら北東方向へ流れの向きを変え、蛇行を始める。千曲川の左岸側には八幡、稲荷山、塩崎、平久保、旧篠ノ井（東篠ノ井、横田）、東福寺にかけて大規模な自然堤防が発達し、その西側には後背湿地が発達する。右岸側も雨宮・清野・松代・牧島の自然堤防とその東側に後背湿地となる湾入低地が形成されている。

遺跡周辺の地形

長野盆地東側の河東山地は壮年期の侵食地形を示す。河東山地から延びる主な尾根は北西—南東方向に延び、さらに枝状に小さな尾根が広がる。山麓線は入り組んでおり、千曲川氾濫原と山地との境界線はリアス式海岸線のようなものである。松代付近の河東山地山麓部にはかなり急傾斜の扇状地が発達する。これらには崖錐性の堆積物の供給が多く扇状地堆積物とともに崖錐扇状地を形成する。松代城下町は、地蔵峠より流れ出る蛭川（開田川）・神田川によって形成された扇状地の末端部に発達した。清野や東条、西条付近の山地において崖錐性の堆積物が押し出し地形を作る。松代町南東に位置する皆神山は標高659m、比高250mの、更新世中期の溶岩円頂丘である。

千曲川右岸は氾濫原であり清野、松代、牧島には道島・猫島・柳島・牧島など島のつく地名が多い。この氾濫原はやや高い自然堤防Ⅰ群とやや低い自然堤防Ⅱ群、後背湿地、旧河道に区分される（第12図）。

清野付近は妻女山と籬山の間に位置し、山脚は半円状の円弧を描く。ここには山沿いに後背湿地、その北側に大規模な自然堤防が見られる。後背湿地はかつて排水不良の湿田で蓮田であった。自然堤防は明瞭な旧河道を境にⅠ群とⅡ群に区分できる。Ⅱ群は千曲川に近い地域に発達する。Ⅰ群とⅡ群の比高差は最大約1.5mである。自然堤防の中の旧河道部分も砂質の土壌からなり、畑として利用されている。松代町岩野は薬師山の北側の山かげに洪水を避けて立地する中州集落である。

松代付近の低地は、ほぼ長野電鉄河東線より千曲川寄りに位置する。松代と東寺尾を結ぶ線より東に旧河道はなく、千曲川の東側への湾入はこの辺りまでであった。海津城はかつて千曲川に臨んでおり、江戸時代に大がかりな人力による流路変更が行われた。旧河道は百間堀と呼ばれ、現在まで残る。また、神田川沿いの水田地も旧河道である。神田川は平成6年に蛭川を経ず直接千曲川へ流れ込むような直線的河川に改修された。

松原遺跡の立地する金井山や愛宕山の西側低地は、蛭川の東側の自然堤防Ⅰ群と西側の自然堤防Ⅱ群に区分される。Ⅰ群とⅡ群の比高差は最大約1.5mである。現地表面での帯状の凹凸や等高線の様子は縄文時代以来の地形形成を反映していることが分かってきた。例えば現在山沿いに用水が流れて帯状に低くなっている部分は古代までここに流路があった場所である。蛭川と直交する帯状の凹地の一部は地表面下1mに礫が分布し少なくとも古代に河道であったことが確認された（長野市教育委員会 1993）。また弥生中期の蛇行河川の跡は等高線と一致しているように見える。現地地形が出来上がったのは中世頃である。自然堤防上は桑畑、長芋栽培が行われており、近年果樹園も増加している。西寺尾集落は自然堤防Ⅱ群の中州上標高351m前後の場所に立地する。蛭川は東寺尾で藤沢川を合流し、その下流で自然堤防を大きく侵食しながら千曲川に流れ込む。合流地点より上流では天井川が発達し、周囲に低湿地を形成する。

更埴橋と岡崎橋南方の牧島付近の低地は、小島田・牧島・大室の集落を取り巻くように湾曲している。この低地は少なくとも2本の旧河道が明瞭に認められる。旧河道は水田として利用されていたが、近年になって畑へ転換されることが多くなってきている。金井池も旧河道の跡で千曲川の水位が上がれば水が噴き出すといわれている。旧岡東枝街道（旧前橋街道）は湾曲した自然堤防上を通らず、松代—鳥打峠—大室の直線的なルートであったが、大正5年に山麓を通じる道につけかえられた。明治以前には千曲川の流路を反映するように東寺尾・柴は埴科郡、牧島・小島田は更級郡、大室は高井郡に属していた。

松代町柴は千曲川に向かって突き出した金井山の突端にある標高349m前後の場所に立地する紡錘形を

した中洲集落である。水田が無く、大部分が蔬菜地で、金井池の水を灌漑に利用していた。微高地ではあるが、対岸の小島田花立集落よりは2m程度低いので、堤防が出来る以前は洪水の際には集落背後の旧河道の微凹地に湛水した。集落の立地としては、川が直接ぶつかりそうな場所は避ける場合が多いが、榮集落を取り囲むように千曲川は曲がりながら流れている。松代藩祖真田信之の隠居所が榮にあった。

松代町小島田・牧島は、更埴橋下流の千曲川の水衝部に面した中洲上標高348mの場所に立地する集落で、集落域の長軸が千曲川の流れと一致する楕円形である。南には半円を描いて旧河道の低地があり、水田が開かれている。集落中央部の神社の辺りが、最も標高が高い。集落の耕地の大半は畑である。旧河道の低地では陸稲を作っていたが、昭和30年代になって井戸をいくつも掘って水田化するようになった。

松代町大室は小規模な自然堤防Ⅰ群上に立地する。標高は346.5mで自然堤防Ⅱ群との比高差は最大約1.5mである。洪水に備え家屋は80cm程度の石積みをしたり、味噌蔵は1.8m程の間知を築いてあり、水辺の集落景観を残している。

第3節 縄文時代の遺跡分布

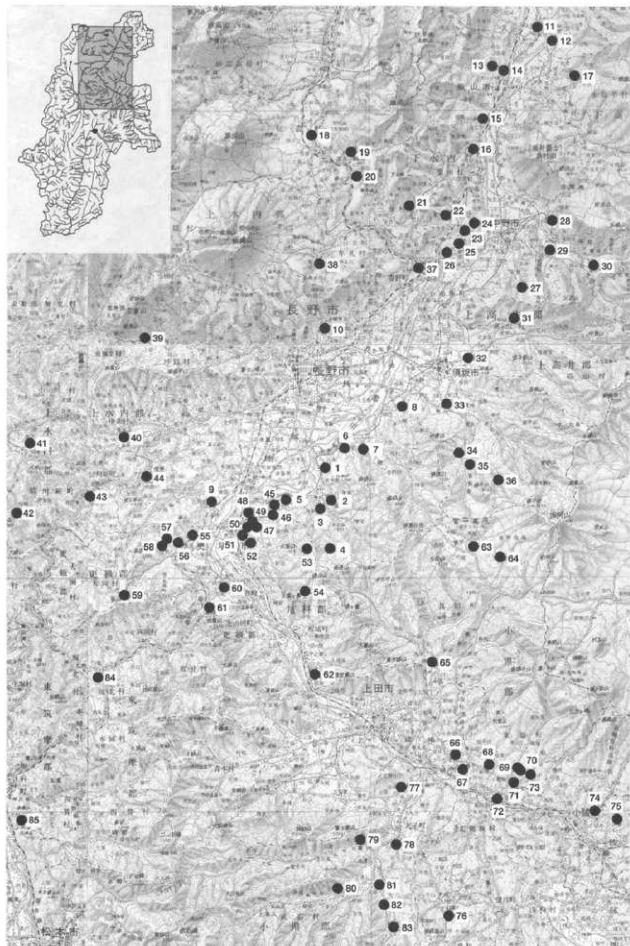
ここでは、長野盆地南東部及びその周囲の山間地に地域を限定して、縄文時代の遺跡について、時期を追って概略を記す。なお、長野盆地南西部の状況については、当センターですでに報告しているので参照されたい(綿田他 1994, 市川他 1997)。

草創期：山間地では須坂市の石小屋洞穴(36)などが知られるところであるが、長野盆地を取り囲む地域では、唯一、爪形土器が長野市村東山手遺跡(6)で検出されている。ただし、村東山手遺跡では、該期の遺構や他の遺物は検出されておらず、現状においては遺物散布地に相当するに過ぎない。とはいえ、縄文時代の最も古い時期の足跡が、長野盆地南東部に印されていた点だけは抑えておきたい。

早期：押型土器を出土する遺跡は幾つか点在するが、いずれも山間地に位置している。本遺跡から程近い長野市稲葉遺跡(4)や更埴市百瀬遺跡(53)・森将軍塚古墳などが挙げられる。しかし、草創期同様、遺構等が検出されておらず、遺物散布地にとどまる。条痕文土器群は、本遺跡の他に、村東山手遺跡で土坑に伴って検出されている。出土した土器は壺ヶ島台式に相当し、この段階に至って生活の痕跡が、当地域に明確な形で残されることとなった。しかも、遺跡が盆地部と山間部の境界線上(崖線末端部)に立地している点注目される。

前期：盆地内の自然堤防上に確実な形で生活の拠点が進出するのは、前期初頭の段階になってである。対象地域から若干はずれるが、長野市石川条里遺跡(9)において地表下2.5mの地点から、前期初頭段階の竪穴住居址を中心とした遺構群=集落が多彩な遺物とともに検出されている(市川他 1997)。こうした集落が検出された遺跡は、本遺跡を含めても、現状では2遺跡に過ぎず、盆地平坦部における居住域あるいは土地利用の継続性等は見出し難い。ただし、2遺跡とも地表下2m以上の検出ということもあって、広大な手つかずの地域にさらに多くの情報が埋没していることは想像に難くない。長野盆地周辺の扇状地及び丘陵地帯で、前期後葉段階の集落遺跡や祭祀遺跡と考えられる遺跡が調査されていることも、それを首肯する一つの拠り所となろう。なお、前者には中野市立ヶ花遺跡(26)・長野市松ノ木田遺跡(10)などがあり、後者には豊野町上浅野遺跡(37)がある。一方山間地では、前代と同様に、遺物散布地という形で少数ながらも検出されている。前述の稲葉遺跡や百瀬遺跡がそれである。

中期：盆地内の自然堤防上に位置する更埴市屋代遺跡群(49)では、多少の断絶はあるものの、中期初頭の段階から末葉に至るまで継続的に集落が形成されている。この遺跡も地表下5m以上の検出となるが、一般に見られる台地上の遺跡と何等変わるところはない。他に、詳細は不明ながら、須坂市三入道遺跡



第13図 長野盆地を中心とした縄文時代遺跡分布図 (30万分の1)

No	遺跡名	所在地	軍制	早	前	中	後	晩	文献	No	遺跡名	所在地	軍制	早	前	中	後	晩	文献	
1	松原遺跡	長野市松代町 真中尾		○	◎	◎	◎		11・12	41	横遺跡	小川村 小嶽山横		○	◎	○			3	
2	池地遺跡	長野市松代町 真桑屋地					○		56	42	宮平遺跡	信州新町 信越宮平		○	○	○			26・29	
3	中村遺跡	長野市松代町 西条				○			23・49	43	お供平遺跡	信州新町 下市場		◎					28・29	
4	稲葉遺跡	長野市松代町 西条稲葉		○	○	○			55	44	菅宮遺跡	信州新町水内		○	○	○	○		27・29	
5	四ツ屋遺跡	長野市松代町 清野						○	50	45	土口遺跡	更埴市土口							9	
6	村東山手遺跡	長野市松代町 大倉		○	◎	◎	◎		11	46	日ノ尾遺跡	更埴市土口							9	
7	宮崎遺跡	長野市若穂 保科上和田				◎	◎	◎	26・51	47	生仁遺跡	更埴市南宮 生仁							7・9	
8	榎田遺跡	長野市若穂 納内					○		未報告	48	城ノ内遺跡	更埴市屋代 城の内							9	
9	石川桑里遺跡	長野市穂ノ井 出崎				◎			21	49	歴代遺跡群	更埴市南宮			◎	◎	◎		13・14・15	
10	松ノ木田遺跡	長野市浅川 東条				◎			未報告	50	更埴桑里遺跡	更埴市屋代			◎	◎	◎		12・13・14	
11	大倉崎遺跡	飯山市常盤 大倉崎				◎			2・35	51	歴代清水遺跡	更埴市屋代					◎	◎	8・9	
12	宮中遺跡	飯山市瑞穂 宮中				○	◎	◎	2・26	52	大穴遺跡	更埴市桑原			○	○	○		22	
13	須多ヶ峰遺跡	飯山市飯山 須多ヶ峰						○	2	53	百瀬遺跡	更埴市金科			○				9	
14	有尾遺跡	飯山市飯山 有尾				◎			2・5・26	54	沢山遺跡	更埴市桑原			◎	◎			20	
15	山ノ神遺跡	飯山市静岡 池花寺・宮下		○	○			◎	2・26	55	小坂西遺跡	更埴市桑原			◎	◎			9	
16	横沢遺跡	飯山市重深沢					◎		1・2・26	56	鳥井遺跡	更埴市桑原			◎	◎			20	
17	三枚原遺跡	木島平村高三 枚原		○	○	○	○		6・26	57	池尻遺跡	更埴市桑原			○	○	○		9	
18	貫ノ木遺跡	信濃町柏原		◎	◎	◎	◎		14・15・16	58	佐野山遺跡	更埴市桑原							9	
19	日向林B遺跡	信濃町宮邊		◎	○				15	59	鍋久保遺跡	大岡村鍋久保 中牧		◎	◎				26・62	
20	藤ノ神遺跡	信濃町宮邊							24・26	60	巾田遺跡	戸倉町幡田			◎	◎			26	
21	上赤塚遺跡	三水村上赤塚						○	38	61	橋原遺跡	戸倉町羽尾					◎		32	
22	黒島屋遺跡	豊田村今井				○			15	62	保地遺跡	坂城町南条				◎	◎		26・33	
23	南大原遺跡	豊田村今井 南大原				◎			4・26	63	磨沢岩陰遺跡	真田町 長十ノ原		○	○	○			26	
24	姥ヶ沢遺跡	中野市大俣				◎	◎		48	64	障の岩岩陰遺跡	真田町 長十ノ原		○	○	○			26・60	
25	栗林遺跡	中野市栗林 北原					◎	◎	19	65	四日市遺跡	真田町長尾 四日市		○	◎	◎			25	
26	立ヶ花遺跡	中野市立ヶ花				◎			47	66	大川遺跡	真田町和			◎	◎			41	
27	開山遺跡	中野市開山 森下				○	○		48	67	鍛冶屋遺跡	東郷町市・ 丹高			◎	◎	◎			40
28	伊勢宮遺跡	山ノ内町 夜間瀬						◎	26・64	68	塚畑遺跡	東郷町林津 敷町			◎	◎			44	
29	佐野遺跡	山ノ内町 佐野畑中						◎	26・63	69	古里遺跡	東郷町新原			◎	◎			39	
30	上林中道南遺跡	山ノ内町上林		○	◎	◎			65	70	不動坂遺跡	東郷町新原			◎	◎			39	
31	屏井遺跡	高山村中山				◎	◎		28・34	71	久保在家遺跡	東郷町新原					◎	◎	42	
32	橋邊遺跡	須坂市日塊				○			30・31	72	桜井戸遺跡	東郷町滋野 桜井戸							45	
33	三入遺跡	須坂市八町				◎	◎		31	73	成立遺跡	東郷町滋野成 立・小幡市井 子寺ノ浦					◎	◎	26	
34	山手遺跡	須坂市仁礼				○			31	74	郷土遺跡	小幡市 甲中郷土					◎	◎	26	
35	高瀬沢岩陰遺跡	須坂市仁礼 仙仁山				◎			26・31	75	石神遺跡	小幡市八幡			◎	◎	◎		10・12	
36	石小原洞穴遺跡	須坂市仁礼 仁礼山		○	○	○	○		26・31	76	大庭遺跡	立野町芦田 大庭			◎	◎			37	
37	上浅野遺跡	豊野町上浅野				◎			26	77	深町遺跡	丸子町生田 深町					◎	◎	57	
38	丸山遺跡	牟礼村 高岡丸山		◎	◎	◎			26・61	78	例ノ上遺跡	丸子町腰越			◎	◎	◎		69	
39	菅取洞窟遺跡	戸隠村 藤治通管取		○					26	79	下久保遺跡	丸子町東内							58	
40	宮遺跡	中条村中条 宮本				◎	◎		26・43	80	岩ノ口遺跡	武石村上武石 岩ノ口							36	
										81	六反田遺跡	長門町古町 六反田							54	
										82	中道遺跡	長門町古町 中道							53	
										83	片羽遺跡	長門町長久保 新町片羽							26・62	
										84	向六工遺跡	坂北村向六工							18	
										85	北村遺跡	明科町光			◎	◎			17	

第1表 縄文時代遺跡地名表

(33)で中期後半から後期にかけての敷石住居及び配石遺構が地表下0.5mの地点から検出されている。これを含めても集落が形成されている遺跡は本遺跡と合わせて3遺跡のみで、いずれも盆地平坦部に立地する。また、断片的な資料が、同様な立地をもつ長野市中村遺跡(3)・榎口遺跡(8)等から得られている。山間地においても前掲の稲葉遺跡などで遺物出土の報告がなされている。

後期：遺跡数は増大化傾向にあり、遺構を伴う遺跡としては、村東山手遺跡一敷石住居址・石棺墓等一、更埴市更埴条里遺跡(50)一建物址・焼土址等一などが挙げられる。更埴市日ノ尾遺跡(46)でも、地表下5mの所で土器が発見されたという報告があり、近接する更埴市土口遺跡(45)を含めて集落の存在が推定されている。

晩期：終末期に属する資料を上出した遺跡が多く、松代地区でも屋地遺跡(2)・四ツ塚遺跡(5)があり、他に、屋代遺跡群・更埴条里遺跡などがある。これらの遺跡は、いずれも弥生時代を代表する遺跡となっており、次代への継続性が窺える。なお、今回の報告では掲載できなかったが、本遺跡からも弥生中期の河川址から該期の土器が出土している。

以上のように、長野盆地南東部には縄文時代を通して遺跡数は少なく、周囲の山間部を含めても、縄文文化を叙述するには未だ材料不足と言わざるを得ないのが現状である。本遺跡や屋代遺跡群のような、地中深く包蔵されている遺跡が特別な事例ではなく、むしろ一般的であったとすれば、ここに来てようやく当地域の縄文文化の片鱗に触れたことになる。こうした遺跡の発見には偶然が伴い、ゆえにそれを調査するとすると多岐にわたる諸条件をクリアしなければならない。いずれにしても、今後の動向に期待すると共に注意を払う必要がある。

引用・参考文献(五十音順)

- 1 飯山北高校地歴部 1966 『深沢遺跡』
- 2 飯山市誌編纂委員会 1993 『飯山市誌』歴史編・上
- 3 小川村教育委員会 1991 『筏遺跡』
- 4 神田五六 1951 「長野県下水内郡豊井村南大原縄文新築式遺跡略報」『信濃』3-8
- 5 神田五六 1953 「長野県下水内郡飯山町有尾遺跡調査略報」『信濃』5-8
- 6 木島平村教育委員会 1977 『三枚原遺跡』
- 7 更埴市教育委員会 1969 『生仁』
- 8 更埴市教育委員会 1992 『長野県更埴市屋代清水遺跡』
- 9 更埴市史編纂委員会 1994 『更埴市史』第一巻古代・中世編
- 10 小諸市教育委員会 1994 『石神遺跡群 石神』
- 11 (附) 長野県埋蔵文化財センター 1991 『長野県埋蔵文化財センター年報』7
- 12 (附) 長野県埋蔵文化財センター 1991 『長野県埋蔵文化財センター年報』8
- 13 (附) 長野県埋蔵文化財センター 1993 『長野県埋蔵文化財センター年報』9
- 14 (附) 長野県埋蔵文化財センター 1994 『長野県埋蔵文化財センター年報』10
- 15 (附) 長野県埋蔵文化財センター 1995 『長野県埋蔵文化財センター年報』11
- 16 (附) 長野県埋蔵文化財センター 1996 『長野県埋蔵文化財センター年報』12
- 17 (附) 長野県埋蔵文化財センター 1993 『中央自動車道長野県埋蔵文化財発掘調査報告書11 明科町内 北村遺跡』
- 18 (附) 長野県埋蔵文化財センター 1993 『中央自動車道長野県埋蔵文化財発掘調査報告書12 東筑摩郡坂北村・麻績村内 向六工遺跡 十二遺跡 野口遺跡 古司遺跡 子尾入遺跡』
- 19 (附) 長野県埋蔵文化財センター 1994 『県道中野豊野線バイパス志賀中野有料道路埋蔵文化財発掘調査報告書 栗林遺跡・七瀬遺跡』
- 20 (附) 長野県埋蔵文化財センター 1994 『中央自動車道長野県埋蔵文化財発掘調査報告書13 更埴市内・長野市内その1 烏林遺跡 小坂西遺跡 鶴萩七岩除遺跡 赤沢城跡 塩崎城見山砦遺跡 地之日遺跡 一丁田遺跡』

- 21 (財)長野県埋蔵文化財センター 1997 『中央自動車道長野緑地蔵文化財発掘調査報告書15 長野市内その3 石川条里遺跡』
- 22 (財)長野県埋蔵文化財センター 1997 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書22 更埴市内その1 清水製鉄遺跡大穴遺跡』
- 23 笹沢 浩 1964 『北信松代町中村神社出土土器』『連絡紙』12
- 24 笹沢浩・小林孚 1966 『長野県上水内郡信濃町壱ノ神遺跡出土の押型土器』『信濃』18-4
- 25 真田町教育委員会 1996 『四日市遺跡 II』
- 26 (社)長野県史刊行会 1982 『長野県史 考古資料編』主要遺跡(北・東信)
- 27 信州新町教育委員会 1971 『斎宮遺跡遺物図録』
- 28 信州新町教育委員会 1989 『お供平遺跡 II』
- 29 信州新町史編纂委員会 1979 『信州新町史』上巻
- 30 須坂市教育委員会 1982 『織場遺跡』
- 31 須坂市史編纂委員会 1981 『須坂市史』
- 32 関 孝一 1966 『長野県埴科郡戸倉町鎌葉遺跡の調査』『信濃』18-4
- 33 関 孝一 1966 『長野県埴科郡保地遺跡発掘調査概報』『考古学雑誌』51-3
- 34 関 孝一 1969 『長野県上高井郡高山坪井遺跡の発掘調査』『信濃』21-8
- 35 高橋桂・中島庄一・金井正三 1976 『北信濃大倉崎遺跡調査報告』『信濃』28-4
- 36 武石村教育委員会 1993 『岩ノ口遺跡』
- 37 立科町教育委員会 1990 『大庭遺跡』
- 38 寺内 隆夫 1991 『長野県上水内郡三木村上赤堀遺跡出土の縄文中期土器について』『長野県考古学会誌』61・62
- 39 東部町教育委員会 1986 『不動坂遺跡群Ⅱ・古屋敷遺跡群Ⅱ』
- 40 東部町教育委員会 1988 『鍛冶屋遺跡』
- 41 東部町教育委員会 1992 『大川遺跡・中原遺跡群』
- 42 東部町教育委員会 1992 『久保在家遺跡』
- 43 中条村教育委員会 1993 『宮遺跡』
- 44 長野県企業局 1968 『桜畑等埋蔵文化財緊急調査報告書』
- 45 長野県教育委員会 1970 『信越線笠野大屋間複線化工事事業地内埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』
- 46 中野市教育委員会 1983 『姥ヶ沢』
- 47 中野市教育委員会 1991 『立ヶ花遺跡発掘調査報告書』
- 48 中野市教育委員会 1992 『関山 II』
- 49 長野市教育委員会 1978 『中村遺跡』
- 50 長野市教育委員会 1980 『四ツ屋遺跡・徳間遺跡・堀崎遺跡群』
- 51 長野市教育委員会 1988 『宮崎遺跡』
- 52 長門町教育委員会 1976 『片羽遺跡』
- 53 長門町教育委員会 1984 『長門町中道遺跡』
- 54 長門町教育委員会 1987 『長門町六反田 II』
- 55 永峯光一・鈴木孝志 1957 『長野県埴科郡松代町西条地区入稻稲葉遺跡調査報告』『信濃』9-4
- 56 日本歴史研究所 1977 『隠地遺跡』
- 57 丸石町教育委員会 1980 『深町』
- 58 丸石町教育委員会 1990 『下久根遺跡・二反田遺跡』
- 59 丸石町教育委員会 1992 『淵ノ上遺跡』
- 60 丸山敏一郎 1968 『長野県菅平陣の岩岩除遺跡調査概報』『信濃』20-5
- 61 牟礼村教育委員会 1979 『牟礼村丸山遺跡発掘調査報告書』
- 62 森嶋隆・笹沢浩・原田鶴美・福島邦男 1976 『長野県更級郡大岡村鍋久保遺跡の調査』『長野県考古学会誌』23・24
- 63 山ノ内町教育委員会 1967 『佐野』
- 64 山ノ内町教育委員会 1981 『伊勢宮』
- 65 山ノ内町教育委員会 1996 『上林中道南遺跡 III』

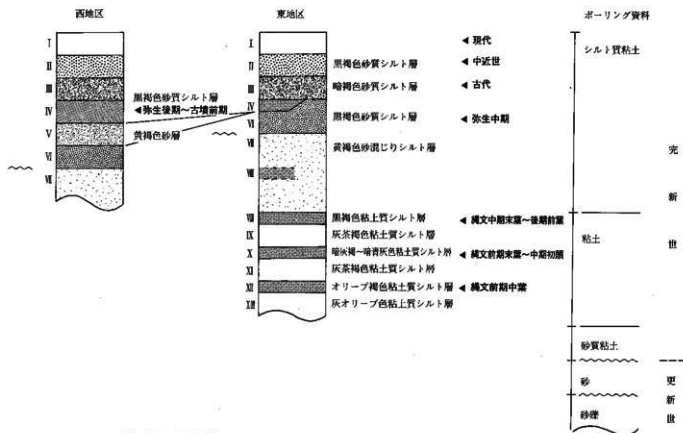
第3章 基本層序

調査地の層序

発掘調査地の堆積物は粒度の違いにより上部層と下部層の2つに分けられる。これらをさらに色調、粒度、遺物包含の有無によってI層からXII層に細分した。上部層はI層からVI層、下部層はVII層からXII層である。上部層は全体的に砂質であり下部層は粘土質である。なおI層からVI層までは調査中に基本層序として確定されたものであり、VII層より下位は整理作業中に区分したものである(第4図)。

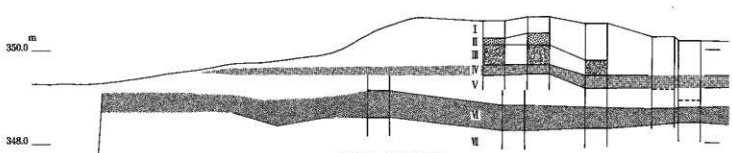
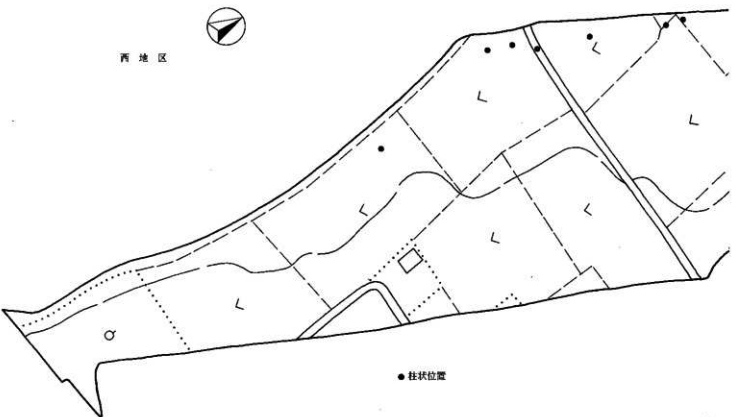
I層は層厚20~30cmの茶褐色砂質シルト層で現耕作土である。II層は層厚20cmの黒褐色砂質シルト層で中・近世の遺物を包含する。III層は層厚20~40cmの暗褐色砂質シルト層で古代の遺物包含層である。IV層は層厚20cmの黒褐色砂質シルト層で古墳・弥生後期の遺物包含層である。V層は層厚20~60cmの黄褐色砂層で無遺物層である。松原東地区にはIV層の一部とV層は欠如している。VI層は層厚20~60cmの黒褐色砂質シルト層で弥生中期の遺物包含層である。VII層は層厚80~140cmの黄褐色砂混じりシルト層で無遺物層である。淡褐色のバンドを一部で挟むこともあるが層準として認められないのでVII層で一括した。

松原西地区では記録がないためVII層以下に相当する地層については不明である。VIII層は層厚10~40cmの黒褐色粘土質シルト層で縄文中期末葉から後期前葉の遺物包含層である。IX層は層厚20~50cmの灰茶褐色粘土質シルト層である。X層は層厚40~50cmの暗灰褐色から暗青灰色の粘土質シルト層で縄文前期末葉から中期初頭の遺物包含層である。XI層は層厚40cmの灰茶褐色粘土質シルト層である。XII層は層厚20~30cmのオリブ褐色粘土質シルト層で縄文前期中葉の遺物包含層である。XIII層は層厚20cmの灰オ



第14図 基本層序

西地区

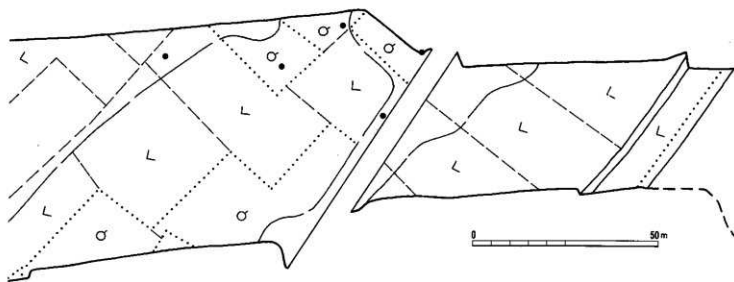


第15図 柱状断面図

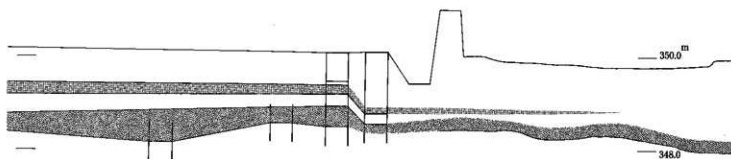
リーブ色粘土質シルト層である。青色やオリーブ色味を帯びるのは地下水の影響と考えられる。

ボーリングコアの層序

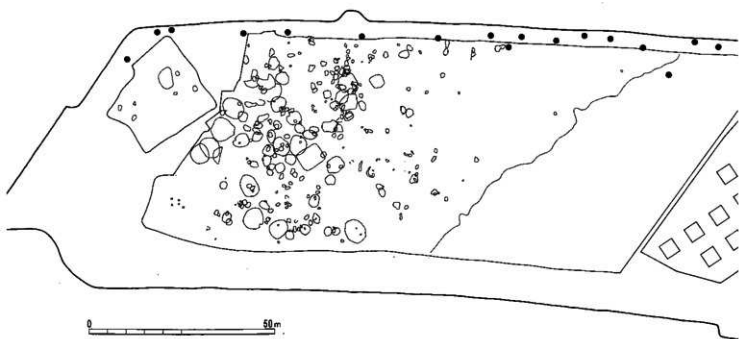
昭和59年の道路公団によるボーリング調査の第一次土質調査報告書によると、松原遺跡内ではB1-41、B1-42、Ss1-3の3本の機械ボーリングがおこなわれている。ボーリング位置は、B1-41はおよそⅡI-25グリッド付近、B1-42はⅤH-16グリッド付近、Ss1-3はⅥY-25グリッド付近である(第4図)。B1-41は深度37.25mのコアで深度5.4mまでは上位より砂質粘土、シルト質粘土、砂混じり粘土からなる。深度5.4m~6.5mはシルト質の砂層からなり、深度6.5m以下は礫層からなる。深度16.35m以下では再びシルト質粘土からなり、腐植物を混入する層準もある。深度26.5m以下では砂層、深度28.7m以下で砂礫層となる。B1-42は深度10.45mのコアで、深度7.4mまでは上位よりシルト質粘土、粘土、砂質シルト、シルト混じり細粒砂からなる。深度7.4m以下では砂礫層からなる。Ss1-3は詳しい記載はない。2本のボーリングとも上部はシルト・粘土などの細粒物質からなり、深度6~7m以下は砂礫などの粗粒



- I 現耕作土
- II 中近世遺物包含層
- III 古代遺物包含層
- IV 弥生後期-古墳前期包含層
- V 砂層
- VI 弥生中期遺物包含層
- VII シルト層

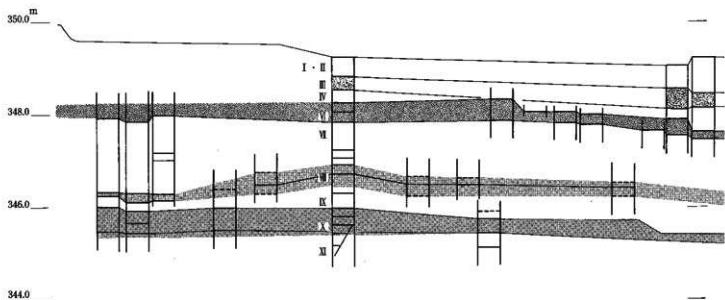


物質からなる。またB1-41では再び細粒物質と粗粒物質の堆積が繰り返されることが分かった。急激な岩相の変化は堆積環境の変化を表している。細粒物質は小規模な洪水の堆積物、粗粒物質は大規模な洪水の堆積物としてとらえることができる。このボーリング調査ではC14年代測定や年代の指標となる火山灰層の検出などが行われていないので明確なことは言えないが、更新世と完新世の境界付近で海岸に接する沖積低地では同じ時期に粗粒物質から細粒物質への岩相変化がみられること（井関1962, 1983）、内陸盆地では諏訪湖の湖底堆積物に認められる岩相変化（安間ほか1990）や長野盆地北部の延徳低地のボーリングコアに認められる岩相変化（赤羽1995）が報告されている。このことから深度6～7mの急激な岩相変化が見られる層準がほぼ更新世と完新世の境ではないかと考えられる。

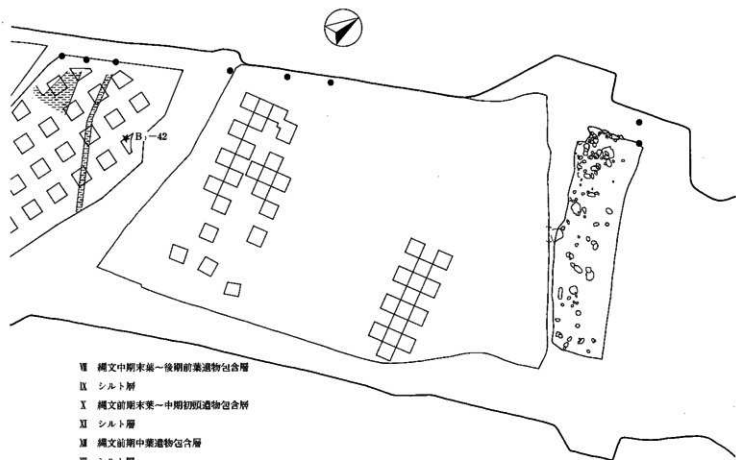


● 柱状位置

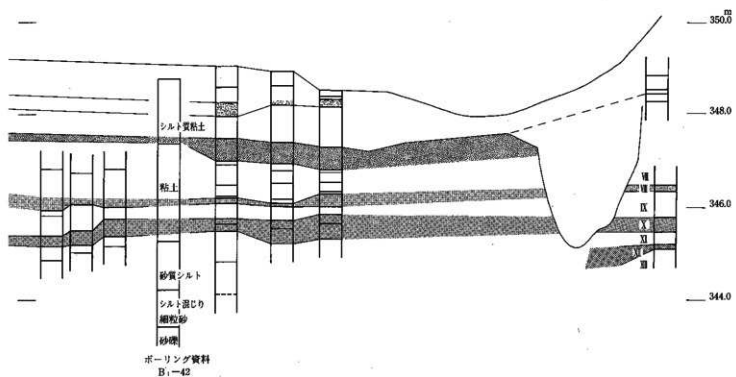
- I 現耕作土
- II 中近世遺物包含層
- III 古代遺物包含層
- IV 弥生後期-古墳前期遺物包含層相当層
- V 砂層
- VI 弥生中期遺物包含層
- VII シルト層



第16図 柱状断面図



- Ⅶ 縄文中期末葉—後期前葉遺物包含層
- Ⅷ シルト層
- Ⅷ 縄文前期末葉—中期初頃遺物包含層
- Ⅸ シルト層
- Ⅹ 縄文前期中葉遺物包含層
- Ⅺ シルト層
- Ⅻ 縄文前期中葉遺物包含層
- Ⅼ シルト層



第4章 遺構

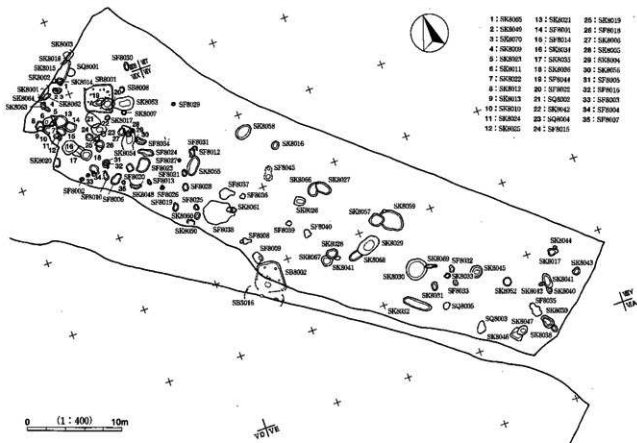
第1節 縄文時代早期末葉～前期後葉

概要：時期別の遺構の種類・数は下記のとおりである。数字をみても明らかのように、前期中葉有尾式期の遺構が主体を占め、前後の時期の遺構はわずかである。いずれも、金井山麓斜面部の③-3区に位置する。出土土器の分布も、諸磯b式土器を除いてこの地区に限定される。早期末葉に位置付けられる絛条体圧痕文土器や貝殻背圧痕文が施文される土器等の出土はわずかであり、それ以後有尾式に至るまで、該当する土器型式の土器の出土は皆無となる。有尾式期以前もしくは有尾式期でも古段階と考えられる2基の焼土址については、遺構検出面が深いものの遺物の出土が無く時期を特定できない。また、有尾式に後続する諸磯a式土器は本遺跡から出土しておらず、本遺跡としては2度目の大きな断絶期を迎える。諸磯b式期に至ると、土器の分布状況が示すように、斜面部から平坦部への、いわば生活領域の拡大化が見てとれるが、生活の痕跡となる遺構の存在は、調査した範囲では、斜面部に限られている。以後、断絶をはさんで下島式期に至るが、この段階で生活領域の中心は平坦部へと移動していく。

前期中葉有尾式期以前：焼土址2基

前期中葉 有尾式期：竪穴住居址2軒、焼土址42基、遺物集中箇所4か所、土坑68基

前期後半 諸磯B式期：竪穴住居址2軒、遺物集中箇所1か所



第17図 早期末葉～前期後葉遺構分布図 (1:400)

1. 竪穴住居址

SB3016 位置：ⅣY16

検出：弥生中期前の調査終了後、SD102（河川址）の河床面よりさらに下の遺構検出を実施したところ、調査区域の断面でSD102に削平される住居址の床面及び立ち上りを確認。法面での検出のため、法面をその部分だけ垂直に掘り下げていくことで調査を実施し、次年度に多くを託した。しかしながら、調査面が深く、加えて軟弱地盤とおびただしい出水のため、次年度についても安全確保のためにこの部分を法面として確保せざるを得なくなり、調査は不能となってしまった。

規模・形状：40cm幅の調査のため不確定ではあるが、平面形は円形を基調としていることが予想される。なお、円形と仮定した場合、直径は4mとなる。

覆土：炭化物を含む単一層。

床面：平坦で、全体的に堅く締まっている。粒子状に粉砕された焼骨片が散布する。

炉：調査した範囲のほぼ中央に位置し、30cm×25cmの範囲に赤褐色の被熱痕跡を残す。焼土及び炭化物等の堆積は認められなかった。

柱穴：柱穴とは断定しがたいが、径50cmの円形ピットが1基確認された。

遺物の出土状況：ピット内から大量の安山岩製の破片類が集中して出土している他、床面直上部などからも大量の安山岩製の破片類が出土した。

出土遺物：[土器] 諸磯b式の土器片が3点出土。2点は浮線文系土器群で、1点は沈線文系土器群である。[石器] 石核1点、剥片・破片が2,708点出土。

時期：出土した土器から、前期後半諸磯b式期とする。

SB8001 位置：ⅣX5

検出：周囲との含有物の差及び土器片・剥片類の出土から遺構の存在を確認し、平面精査の結果、遺構のコーナー部分が残つか確認され、その規模から住居址と判断し調査を進めた。

規模・形状：302×281cmの方形プランを呈し、深さは21cmを測る。床面積はおよそ7㎡である。

覆土：上下2層に分層されるが漸移的で、大小の礫や炭化物が含まれる。

床面：掘り方は見られず、地山を掘り下げ床面としている。特に堅緻な部分は見られず平坦であるが、地山に含まれている大礫等が所々突出しており、それらは除去されていない。北西隅の壁は地山の巨礫の側面をそのまま利用している。

炉：なし。

柱穴：竪穴の四辺に平行する配置のようにも見えるが、柱間は不揃いで、かつ直線的な配列も見出し難く不明確。径15cm前後を最大とし、10cm前後が主体を占める。深さはいずれも10cm以下。

出土遺物：[土器] 大半が本址以外の所属とした土器の接合破片及び同一個体片である。本址所屬の土器は20片程で、爪形文を施した有尾式土器（No.9）の他は、有尾式の範疇で捉えられる縄文が施文された胴部・底部片である。一方、本址以外の所屬とした土器は、多遺構間接合土器としたNo.107,115、遺構外土器としたNo.81,109,151、SQ8002遺物としたNo.28の接合破片が出土している。また、諸磯b式土器の遺構外遺物としたNo.180の接合破片が出土している。[石器] 小形刃器1点、石核3点の他、剥片・破片が11点出土。[その他] 骨片・礫が出土。

時期：所屬を問わず、出土土器のほとんどが有尾式土器であることから、前期中葉有尾式期とする。

SB8002 位置: WY11, 16

検出: 調査区境に排水用として溝を設けた際、その断面に落ち込みを確認した。ほぼ中央には焼土の集中箇所があり、落ち込みの規模から住居と判断した。前年度に調査したSB3016に近い位置にあり関連が予想されたが、両者とも炉が検出されていること、床面レベルに隔りがあることから別々の住居と判断した。重複部分が調査不能地域となってしまったため、新旧関係は不明である。

規模・形状: 322×297cmの隅丸長方形プランを呈することが予想される。深さは34cmを測る。床面積は3.5㎡以上9.6㎡以下と想定される。

覆土: 3層に分層され、壁際に所謂逆三角堆土が形成されている。

床面: ほぼ平坦であるが、北側(山側)に向かって低く傾斜する。

炉: 断面のみの確認ではあるが、中央南寄りに位置する。浅い皿状の掘り込み内に、多量の炭化物と共に焼土がブロック・粒子状に遺存する状態で、被熱痕跡等は確認されなかった。

柱穴: 径15cm以下、深さ14cm以下の小規模なピットが8基検出され、その内、壁に近い3基が径・深さとも最大の部類で、柱穴としての機能を想定することが可能である。

遺物の出土状況: 出土遺物はほとんど無いという状況だが、西壁寄りの床面付近に剥片・碎片類の集中箇所が見られた。

出土遺物: [土器] 2点出土しており、一つは、屈曲する口縁部形態から諸磯b式土器に比定され、一つは、斜縄文が施文される胴部破片である。いずれも遺存状況が悪く文様が不鮮明であり、図示し得ない。

[石器] 安山岩・黒曜石・チャート製の剥片・碎片が19点出土。

時期: わずかに出土した土器片から、諸磯b式期とする。

SK8015 位置: WS24, 25

検出: 他遺構との重複関係が多く判然としない部分もあったが、色調や炭化物の混入の度合いによって、平面精査で範囲を確認した。他遺構との重複部分については断面精査により新旧関係を把握した。

規模・形状: 大部分が調査区外にかかっているため推定の域を脱し得ないが、おそらく隅丸長方形プランを呈することが想定される。深さは16cmを測る。

覆土: 炭化物の混入の度合いや壁際など、部分的に異なる箇所が存在するが、いずれも漸時的な変化で、基本的には単一層と捉えた。

床面: ほぼ平坦で、壁面部分等は確認されなかった。また、付近の等高線と同様に、南西方向に緩やかに傾斜している。なお、炉・柱穴とも調査した範囲では検出されなかった。

出土遺物: [土器] 本址所属とした土器では、口唇部に縦位に短沈線が施文される有尾式土器や、有尾式土器の胴部屈曲部破片などがある。他に、絡条体圧痕文の施文された早期末葉の土器片や諸磯b式の口縁部破片が出土している。また、重複するSK8014所属土器とした、全面縄文施文の有尾式土器の接合破片

遺構No.	位置	範囲(cm)			面積(㎡)	平面形	炉	柱穴	出土遺物			時期	備考
		長軸	短軸	深さ					土器	石器	その他		
3016	WY16	400	(46)	24	(1,533)	—	地炉型	不明	No.6(Ⅱ), No.7(Ⅱ), No.8(Ⅱ)	石槌、剥片B、大形剥片、碎片	—	諸磯b式	ピット内から大量の安山岩製大形剥片
8001	WY5	302	281	21	7,086	隅丸方形	無	20基、散在	No.9(ⅡAa), No.10(ⅡBb), No.28(ⅡA), No.81(ⅡA1c), No.108(ⅡA2a?), No.109(ⅡA4a?), No.115(ⅡA3a?), No.151(ⅡB2a), No.180(Ⅱ), ⅡBb, 瓦片	小形刃器、石槌、剥片B、大形剥片、剥片、碎片	■	有尾式	
8002	WY11 WY16	(322)	(297)	34	(3,567)	隅丸長方形	皿状ピット	8基、中央と壁に沿う	No.11(Ⅱ), Ⅱ	剥片B、大形剥片、剥片、碎片	■	諸磯b式	
SK8015	WS24 WS25	206	(112)	16	(1,477)	(隅丸長方形)	不明	不明	No.12(ⅡA2a?), No.13(Ⅱ) ⅠA, ⅡA2, ⅡBb, 文様不明	石槌、石斧、小形刃器、剥片、石釘、石環、大形剥片、剥片B、碎片	■	有尾式	

第2表 前期中・後葉 竪穴式住居址(SB)一覽表

が出土している。[石器] 石鏃3点、石匙1点、小形刃器2点、石皿・台石1点、磨石類1点の他、剥片・碎片類が5点出土。

時期：調査時はその規模から土坑(SK)として扱ったが、整理作業の段階で、底面が平坦なことや想定される規模、出土遺物の組成及び量から、有尾式期の竪穴住居址と判断した。

2. 焼土址

45基が検出・調査された。このうち1基は土坑として調査され、整理作業の段階で焼土址と把握した。いずれの遺構も検出が困難で、約7割が火床面での遺構検出となってしまった。このことは、調査区が斜面堆積物で覆われていることや、弥生から中世まで続く河川址の影響を受けているといった土壌環境のみに起因するのではなく、消火の際に周囲の土を利用するといったような焼土址の機能的な背景も一要因となったことが考えられる。半数近くの焼土址は、火床面下に覆土を伴っており、これは、数次にわたる使用の痕跡が窺えるばかりでなく、利用方法の一端を示唆しているものと考えられる。

焼土址の平面分布を見ると、粗密があるものの、第23・25図にあるように視覚的に弧状もしくは環状に分布する地点が2か所見られる。規模・形態等諸属性に共通性を見出し難いが、何等かの規制が働いていたことが予想される。また、垂直分布からは高低差が認められ、時期差を想定し得るが、傾斜地という立地を考慮すれば即座に判断しかねる。むしろ、旧地表面の傾斜を表していると捉えるべきと考えられる。ただし、同一地点での高低差については、時期差と判断したい。こうしたケースは、第21図のSF8042,8044とそれ以外の遺構、第42図の土坑群と焼土址群に認められる。SF8042,8044を有尾式期以前もしくは古い段階の所産と想定したことは、このことによる。

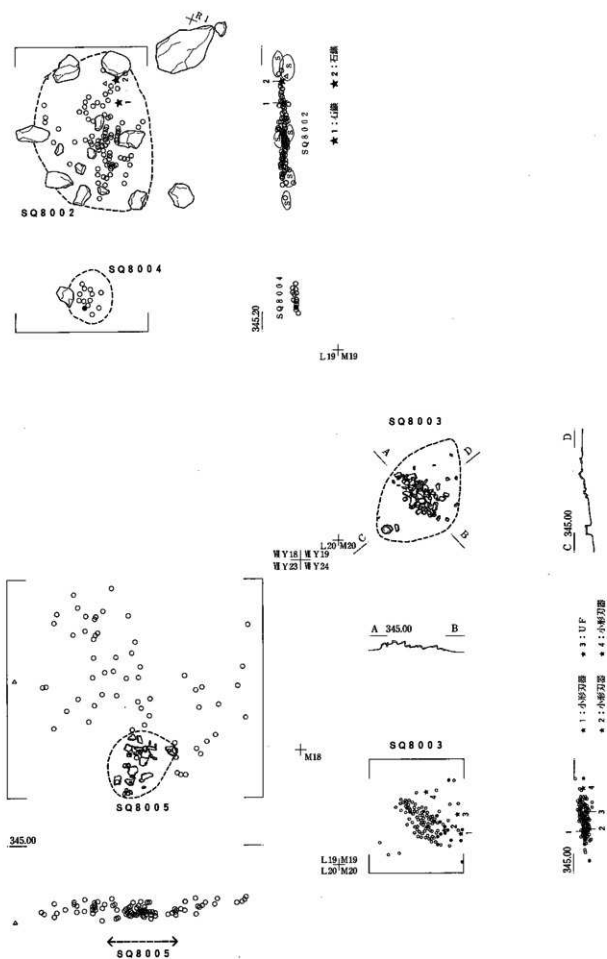
遺構No.	位置	規模 (cm)				平面形	被熱痕跡の状況	出土遺物			備考	
		長横	短横	火床面までの深さ	張り込みの深さ			土器	石器	その他		
8001	ⅧX 4	106	91	8	16	楕円形	底面にブロック状に赤褐色の被熱痕跡。その周辺に暗赤褐色の被熱痕跡。	文様不明	小形刃器	礎・骨		
8002	ⅧX 9	37	31	4	4	楕円形	底面から底面にブロック状に被熱痕跡。色不明	—	—	—		
8003	ⅧX 9	38	32	6	6	楕円形	底面から壁面にブロック状に被熱痕跡。色不明	—	—	—		
8004	ⅧX 9	52	31	4	4	長楕円形	底面から壁面にブロック状に被熱痕跡。色不明	文様不明	—	骨片		
8006	ⅧX 5 ⅧX10	133	69	9	9	楕円形	底面にブロック状に被熱痕跡。色不明	No.126(ⅡA3a), ⅡB1b No.86(ⅡA2), ⅡB1b/, ⅡB1 文様不明	石鏃 小形刃器	礎・骨片	大塚で覆われる	
8006	ⅧX10	128	88	0	7	不整形 楕円形	ブロック状に被熱痕跡。色不明	No.14(ⅠA), No.16(ⅡA2a) No.86(ⅡA2), ⅡB1b/, ⅡB1 文様不明	石鏃	礎・骨片		
8007	ⅧX10	43	37	0	4	楕円形	被熱痕跡。色不明	ⅡB、文様不明	—	—	骨片	
8008	ⅧY11	124	118	7	7	不整形	底面に分散する形で暗赤褐色の被熱痕跡。	—	台石・石皿 剥片	礎・骨片	地山焼土化	
8009	ⅧY11	118	83	4	4	不整形	壁面から底面に至る範囲に赤褐色の被熱痕跡。	—	—	—	骨片	地山焼土化
8010	ⅧX10	96	54	0	8	不整形 楕円形	ブロック状に被熱痕跡。色不明	No.15(ⅡA1), 文様不明	硯、砂片	礎・骨片		
8011	ⅧX 9 ⅧX10	111	73	0	6	楕円形	ブロック状に被熱痕跡。色不明	No.16(ⅡA2a)	原石、割片B	礎・骨片		
8012	ⅧY 6	73	54	0	6	不整形 楕円形	ブロック状に被熱痕跡。色不明	No.144(ⅡB1b/)	—	—	礎・骨片	
8013	ⅧX10	51	29	0	5	不整形 楕円形	ブロック状に被熱痕跡。色不明	—	—	—	骨片	
8014	ⅧX 4	104	70	0	6	不整形 楕円形	ブロック状に暗褐色の被熱痕跡	No.85(ⅡA2), 文様不明	台石・石皿	礎・骨片		
8015	ⅧX 5	86	75	0	10	楕円形	ブロック状に暗褐色の被熱痕跡	No.18(ⅡB1b/), No.115(ⅡA3a) ⅡB1b/, ⅡB	—	—	礎・骨片	
8016	ⅧX10	64	54	3	3	不整形 楕円形	底面にブロック状に被熱痕跡。色不明	No.85(ⅡA2), 文様不明	—	—	礎・骨片	
8017	ⅧY25	81	77	9	9	不整形	壁面から底面に至る範囲に被熱痕跡。色不明	—	—	—	礎	
8018	ⅧX 5	117	96	0	12	不整形	ブロック状に被熱痕跡。色不明	No.17(ⅡA2a), No.18(ⅡB1b/) No.125(ⅡA5c), ⅡB	大形剥片 砂片	礎・骨片		
8019	ⅧX10	74	57	0	5	不整形 楕円形	ブロック状に被熱痕跡。色不明	No.88(ⅡA2a/), No.90(ⅡA2a/)	—	—	礎・骨片	

第3表 前期中葉 焼土址(SF)一覧表(1)

遺構 No.	位階	取組 (cm)				平面形	被熱痕跡の状況	出土遺物			備考		
		長軸	短軸	火床面ま での深さ	掘り込み の深さ			土器	石器	その他			
8020	ⅣX10	74	65	0	8	不整 長方形	暗赤褐色の被熱痕跡	No.95(ⅡA2a), No.125(ⅡA5c) No.137(ⅡB4b), ⅡA2, ⅡB	—	—	骨片		
8021	ⅣY 6	63	42	0	4	楕円形	ブロック状に被熱痕跡、色不明	—	—	—	—	底面に小ビット	
8022	ⅣX 5	156	119	0	10	楕円形	中央に暗赤褐色の被熱痕跡	No.46(ⅡA2b?), No.115(ⅡA3a) No.174(ⅡG), ⅡB, 文様不明	—	—	石核、石鏃 削片B, 骨片		
8023	ⅣX10	153	111	0	7	不整 長方形	被熱痕跡、色不明	No.65(ⅡA2), No.95(ⅡA2a) No.107(ⅡA2b?), No.117(ⅡA2a) 文様不明	—	—	磨石類		
8024	ⅣX10	154	71	0	12	不整 長楕円形	ブロック状に被熱痕跡、色不明	No.19(ⅡB1a), No.89(ⅡA2e) ⅡA1, ⅡB, 底面、文様不明	—	—	—	礎・骨片	
8025	ⅣY 6	60	59	0	8	不整 楕円形	分散した被熱痕跡、色不明	No.20(ⅡA2), No.65(ⅡA2) ⅡA3, ⅡB, 文様不明	—	—	骨片		
8026	ⅣX10	39	30	—	3	不整形	なし	ⅡA, ⅡB	—	—	—	溝縁外に暗赤褐色の被熱痕跡	
8027	ⅣY 6	30	26	4	4	楕円形	壁面から底面にかけて被熱痕跡 色不明	No.98(ⅡA2a)	—	—	—		
8028	ⅣY 6	72	53	0	3	不整 楕円形	底面にドーナツ状に被熱痕跡 色不明	ⅡB	—	—	礎・骨片		
8029	ⅣY 1	46	30	0	4	不整 楕円形	中央に被熱痕跡、色不明	—	—	—	—		
8030	ⅣS25	87	48	4	8	楕円形	断面及び壁面にブロック状に被 熱痕跡、色不明	—	—	—	—		
8031	ⅣY 6	46	(32)	0	10	楕円形	ブロック状に被熱痕跡、色不明	—	—	—	—	骨片	
8032	ⅣY18 ⅣY19	71	51	0	0	不整 楕円形	赤褐色の被熱痕跡	—	—	—	—	地山焼土化	
8033	ⅣY18 ⅣY23 ⅣY24	69	34	0	0	不整 楕円形	暗赤褐色の被熱痕跡	—	—	—	—	地山焼土化	
8034	ⅣX 5	(105)	59	0	13	不整 楕円形	上面に壁土堆積が認められるが 断面な被熱痕跡は認められない	文様不明	—	—	—	礎 (敷積)	
8035	ⅣY24	152	83	0	0	楕円形	2ヶ所に暗赤褐色の被熱痕跡あり	—	—	—	—	地山焼土化	
8036	ⅣY11	58	55	0	0	不整 楕円形	被熱痕跡、色不明	—	—	—	—	大形削片	
8037	ⅣY 6	154	120	0	0	楕円形	中央に被熱痕跡、色不明	ⅡB	—	—	—	礎	
8038	ⅣY 6 ⅣY11	330	236	12	12	不整 楕円形	両面中央に赤褐色の被熱痕跡	No.21(ⅡA2a?), No.22(ⅡA2a) No.23(ⅡA2c), No.24(ⅡB1c) No.65(ⅡA2), No.90(ⅡA2a) ⅡA1a, ⅡA2b?, ⅡA2, ⅡA3 ⅡB3a, ⅡB, 底面、文様不明	—	—	—	石核、小形刃器 磨石類、削片B 骨片	礎・骨片 地山焼土化
8039	ⅣY12	55	49	0	0	不整形	暗赤褐色の被熱痕跡	—	—	—	—	礎	
8040	ⅣY12	86	72	0	0	不整形	赤褐色の被熱痕跡	文様不明	—	—	—	地山焼土化	
8041	ⅣY17	69	47	0	0	不整好 長楕円形	壁土堆積	—	—	—	—	礎	
8042	ⅣX 5	158	117	0	8	楕円形	中央に暗赤褐色の被熱痕跡	—	—	—	—	UF	
8043	ⅣX 5	130	68	—	21	楕円形	壁土粒を多量に含むが顕著な 被熱痕跡は認められない	—	—	—	—		
8044	ⅣY 7	(146)	(63)	0	0	不整形	壁面から底面にかけて、色不明	—	—	—	—		
SK 8022	ⅣX 4	57	51	13	13	不整 楕円形	壁面から底面にかけて暗赤褐色 の被熱痕跡	ⅡB	—	—	—	小形刃器	

第4表 前期中葉 焼土址(SF)一覧表(2)

約7割が火床面での遺構検出となってしまうため、全体的な属性分析は困難であるが、いずれの焼土址にも被熱痕跡が認められることから、機能的には火を焚いた施設とすることができる。さらに、火床面で検出された焼土址のうち6割が火床面下に覆土を伴っており、地表面を掘りくぼめて構築されることが一般的であったことが窺える。また、SF8008(第25図)やSF8034(第23図)のように、大礫を伴う例があり、注目される。両者とも、掘り込み長軸の延長上に大礫があり、機能的な側面からの必然性を表している可能性がある。しかも前者については石皿・台石であり、被熱により破砕した状態で出土している。同様に、SF8034の礫にも被熱痕跡が認められる。したがって、これら二者については、礫を構造物の一部とするか対象物とするかは別として、火を扱う行為において、礫が重要な意味をもって介在していたことが理解される。出土した遺物の種類・組成で注目されるのは、SF8038である。突出した規模の焼土址で、遺物の組成は、竪穴住居址に類似し、土器の接合関係も豊富で、中心的な役割を担っていた施設であったことが想定される。したがって、他の焼土址とは一線を画して捉えておくことが必要となろう。いずれにしても、焼土址は、本遺跡においては有尾式期の主要な遺構であり、情報量は少ないとはいえ、いまだ活発化していない該期の遺構研究に一石を投じる重要な資料となり得るだろう。



第19図 前期中・後葉 遺物集中 (1:40)

3. 遺物集中

土器片の集中する5か所を遺物集中として把握した。その内1か所(SQ8001)については調査上の不手際により、詳細が不明となってしまった。前期後葉のSQ8003を除き、他は前期中葉の土器群が集中する。前期中葉の遺物集中については、SQ8002のように複数個体の土器片が集中するものと、SQ8004,8005のように1～2個体の土器片が集中するものがある。前者については、地山に包含される大礫に囲まれた部分に土器片が集中しており(第19図)、大礫が地表面からそれぞれ露出していたとすれば、大礫は土坑と同様な機能を有していたと考えられ、他の遺物集中とは性格が異なる可能性がある。なお、三者とも石器類の出土は無に等しい。

SQ8003は、ほぼ1個体分の諸磯b式土器が破片の状態出土しており、他に多種の石器類が出土した。

遺跡No.	位置	範囲(cm)				検出面での遺物種類(%)			出土遺物			時期	備考	
		径線	短軸	長軸	絶対高(m)	土器	石器	骨	土器	石器	その他			
8001	ⅡS25	84	79	13	345.52～345.45	--	--	--	--	--	--	--	詳細不明	
8002	ⅡX 5	168	123	18	344.87～345.05	94	3	2	1	No.25(ⅡA2), No.26(ⅡB4b) No.27(ⅡB1b), No.28(ⅡA) No.108(ⅡA2a?), No.146(ⅡB1a) ⅡA2, ⅡBb	石鏃	骨片	有形式	
8003	ⅡY24	137	82	18	344.81～344.99	80	20	0	0	No.29(ⅡV), 文様不明	小形刃部、UF はF、大型柄片 破片、砕片	--	諸磯b式	ほぼ1個体分の土器
8004	ⅡX 5	56	45	8	344.82～344.90	92	8	0	0	No.30(ⅡA2b?), No.115(ⅡA3a) ⅡA2	破片	--	有形式	
8005	ⅡY23	77	63	12	344.23～344.35	100	0	0	0	No.31(ⅡA2b?), ⅡBb, 文様不明	--	--	有形式	図例にも散布

第5表 前期中・後葉 遺物集中(SQ)一覽表

4. 土坑

66基が検出・調査された。規模・形態は様々であるが、相互の相関関係は認められない。断面形は皿状を呈するものが半数以上あり、深さ20cm以下の土坑が約8割を占め、覆土は単一層のものが多い。また、底面に凹凸のあるものや、地山の礫を壁または底面としている土坑も1割近く存在する。これらの特徴を合わせて考えると、地表面において微地形としてあらわれる窪みに、遺物や堆積土が集積した可能性も否定できない。ただし、その判断は困難で、今回土坑として報告する中にそうしたものが包括されている可能性もあることを指摘しておきたい。

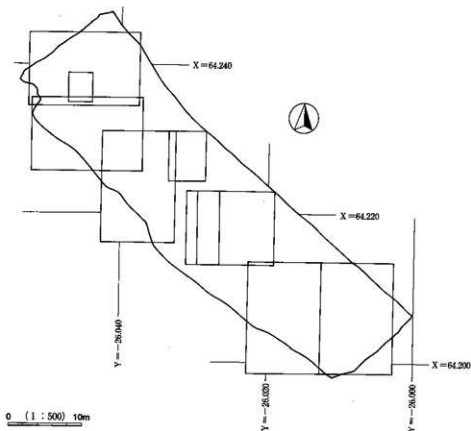
土坑の平面分布を見ると、他の遺構同様粗密が認められる。注目されるのは、重複関係が無く単独で構築されているものが少ないという特徴があることに加え、重複関係をもつ土坑はほとんどの場合、土坑同士という点である。また、焼土址が検出に困難を極めていたのに対して、比較的検出が容易であったことが指摘できる。これは、土坑覆土と地山の判別が焼土址に比し容易であったことを示している。このことから、土坑自体の機能が、多くの場合、地表面の一定の範囲を掘りくぼめ開放しておくことにあったことが推測される。したがって、今回報告する土坑群については、穴を埋め戻した状態で機能する墓塚等に相当する遺構とは、一線を画することができると言えよう。種類・量とも豊富な遺物出土したSK8053,8054,8055,8057,8059などの大型で断面皿状の浅い土坑については、廃棄の場としての機能が想定され、焼土址と重複、または近接するSK8044,8061などは、焼土址と直接的あるいは間接的な関連を持って構築されていたと考えられる。一方、単独で構築されているSK8052は、断面袋状を呈しており、貯蔵穴であった可能性が指摘される。いずれにせよ、上記の土坑も含めて機能・性格を云々するには、今回の調査で得られた情報は少なく、さらなる資料操作が必要であることは言うまでも無く、竪穴住居址や焼土址を含めた遺構群の一資料として、今回は提示せざるを得ない。

遺構No.	位置	規模 (cm)			形状	土質	層上の状況	出土遺物			備考
		長軸	短軸	厚さ				土器	石器	その他	
8001	WS24	154	(72)	28	楕円形	竪坑状	埋藏、炭化物混	—	—	—	SK0002→SK0001
8002	WS24	(37)	42	9	楕円形	竪坑状	単一層	—	—	—	SK0015→SK0002
8003	WS25	(85)	118	28	楕円形	竪坑	単一層 炭化物・焼土粒混	No.29(ⅡB1b), No.83(ⅡA2a) ⅡB1b, ⅡBb	石鏃、小形刀鏃、磨石、磨石片B、碎片	—	SK0015, SK0018 →SK0003
8004	WX 5	44	31	13	楕円形	すのこ状	単一層	—	—	—	—
8005	WX 5	56	52	7	楕円形	竪坑状	単一層	—	—	—	—
8006	WX 5	78	62	10	楕円形	竪坑状	単一層	—	—	—	—
8007	WX 5	49	44	8	楕円形	竪坑状	単一層	—	—	—	—
8008	WX 5	56	50	12	楕円形	竪坑	単一層、炭化物混	—	—	—	骨片 地行の大橋を壁面として利用
8009	WX 4	(63)	33	11	長楕円形	竪坑	単一層	ⅡBb	—	—	SK0009→SK0003
8010	WX 4	(72)	81	9	隅丸長方形	竪坑状	単一層	No.105(ⅡA2a), ⅡA1, ⅡB	—	—	既述に即内有り SK0009→SK0012
8011	WX 4	108	78	7	楕円形	竪坑	単一層	No.105(ⅡA2a), ⅡB 文様不明	—	—	SK0012, SK0022, SK0023→SK0011
8012	WX 4	(30)	86	9	楕円形	竪坑状	単一層	No.105(ⅡA2a), ⅡB 文様不明	—	—	SK0009→SK0012→ SK0011, SK0013
8013	WX 4	(44)	52	13	楕円形	竪坑状	単一層	ⅡB	石鏃	—	SK0010→SK0013 SK0012→SK0013
8014	WS24	69	64	22	楕円形	竪坑状	単一層、炭化物混	No.36(ⅡB1b), No.39(ⅡB1b) ⅡA2	—	—	SK0015→SK0014→ SK0005
8015	MY 7	83	71	15	楕円形	竪坑	単一層、炭化物混	文様不明	銅片、鉄片	—	—
8017	WX 5	(56)	50	10	楕円形	竪坑状	単一層	—	—	—	—
8018	WS25	(28)	(50)	20	—	竪坑	単一層、炭化物混	ⅡB	小形刀鏃, 90°片B	—	SK0015→SK0018→ SK0005
8019	WX 5	67	47	6	楕円形	竪坑	単一層	—	—	—	SK0019→SF0018
8020	WX 4	90	(54)	9	楕円形	竪坑	単一層、炭化物混	No.37(ⅡA3a), No.38(ⅡB1b) No.137(ⅡB4b), ⅡB	—	—	—
8021	WX 4	126	121	12	不規則	竪坑	単一層、炭化物混	No.39(ⅡB1b), No.40(ⅡB1b) No.146(ⅡB1b), ⅡA1, ⅡA2 ⅡBb, ⅡA, 文様不明	石鏃、小形刀鏃	—	SK0021→SK0023
8023	WX 4	73	63	9	不規則楕円形	竪坑状	単一層	No.33(ⅡA1a)	銅片	—	SK0021→SK0023→ SK0011, SK0022
8024	WX 4	63	51	15	楕円形	竪坑	上下2層 炭化物・焼土粒混	No.41(ⅡA3b), No.42(ⅡA) No.81(ⅡA1c)	石鏃、小形刀鏃、鉄片	—	—
8025	WX 4	46	30	19	楕円形	すのこ状	単一層 炭化物・焼土粒混	—	—	—	—
8026	MY12	117	90	12	楕円形	竪坑状	単一層	—	—	—	底面に段差有り 上層に炭化物
8027	MY12	172	108	12	楕円形	竪坑状	単一層	—	—	—	SK0009→SK0027
8028	MY17	129	97	13	楕円形	竪坑	単一層	—	—	—	SK0007→SK0028
8029	MY17	241	141	20	長楕円形	竪坑	単一層	ⅡBb	—	—	SK0008→SK0029
8030	MY18	224	210	23	小楕円形	竪坑状	単一層	—	—	—	SK0009→SK0069
8031	MY18	86	56	10	楕円形	竪坑	単一層	—	—	—	—
8032	MY23	298	86	17	長楕円形	竪坑	単一層	—	—	—	—
8033	MY16	61	42	6	楕円形	竪坑	単一層	—	—	—	—
8034	WX 4	155	127	21	不規則楕円形	竪坑状	上下2層 炭化物混	—	—	—	SK0035→SK0034
8035	WX 4	(58)	103	14	長楕円形	竪坑	単一層 炭化物・焼土粒混	No.41(ⅡA3b), ⅡA2, ⅡBb	石鏃, 77°片, 鉄片	—	SK0035→SK0034, SK0036
8036	WX 4 WX 5	110	108	22	小楕円形	竪坑状	3層に分別 (地山崩落土層含) 炭化物混 焼土粒下層のみ混	No.65(ⅡA2), No.83(ⅡA2a) No.154(ⅡB2e), ⅡB1b, ⅡBb 文様不明	石鏃, 石鏃, 鉄片, 鉄片	—	SK0005→SK0036
8038	MY24 V E 4 V E 5	74	55	7	楕円形	竪坑	単一層、炭化物混	—	—	—	SK0039→SK0038
8039	MY24 MY25	142	101	24	不規則楕円形	竪坑状	単一層	—	—	—	SK0039→SK0038
8040	MY25	78	46	6	楕円形	竪坑	単一層	—	—	—	SK0040→SK0041
8041	MY25	144	84	13	長楕円形	竪坑状	単一層、炭化物多混	ⅡBb, 文様不明	—	—	SK0040→SK0041→ SK0042
8042	MY26	62	37	7	楕円形	竪坑	単一層、炭化物多混	—	—	—	SK0041→SK0042
8043	MY25	77	68	11	楕円形	竪坑	単一層	—	—	—	—
8044	MY25	42	37	21	楕円形	片状	単一層	—	—	—	SK0044→SF0017
8045	MY19 MY24	132	120	45	楕円形	竪坑状	上下2層 単層に炭化物混	—	—	—	—
8046	MY24 V E 4	118	114	31	隅丸方形	竪坑状	単一層	—	—	—	SK0046→SK0047
8047	MY24	118	90	21	楕円形	竪坑	単一層	—	—	—	SK0046→SK0047
8048	WX10	117	(32)	5	(長楕円形)	竪坑	単一層 炭化物・焼土粒混	No.39(ⅡA2a), No.36(ⅡA2a) No.148(ⅡB1b), ⅡA2, ⅡBb ⅡBb, 文様不明	—	—	骨片
8049	WS24	75	48	23	楕円形	竪坑	埋藏	No.34(ⅡA2a), No.35(ⅡA2) ⅡA1, ⅡBb, 既述	原石	—	骨片 SK0049→SK0070
8050	WX15	82	(43)	9	楕円形	竪坑状	単一層、炭化物混	No.42(ⅡA1a), No.35(ⅡA2a) ⅡA1, ⅡBb, 既述	—	—	—
8052	MY24	83	78	19	不規則形	竪坑	埋藏	文様不明	—	—	壁オーバーハンド 底面凹凸有り

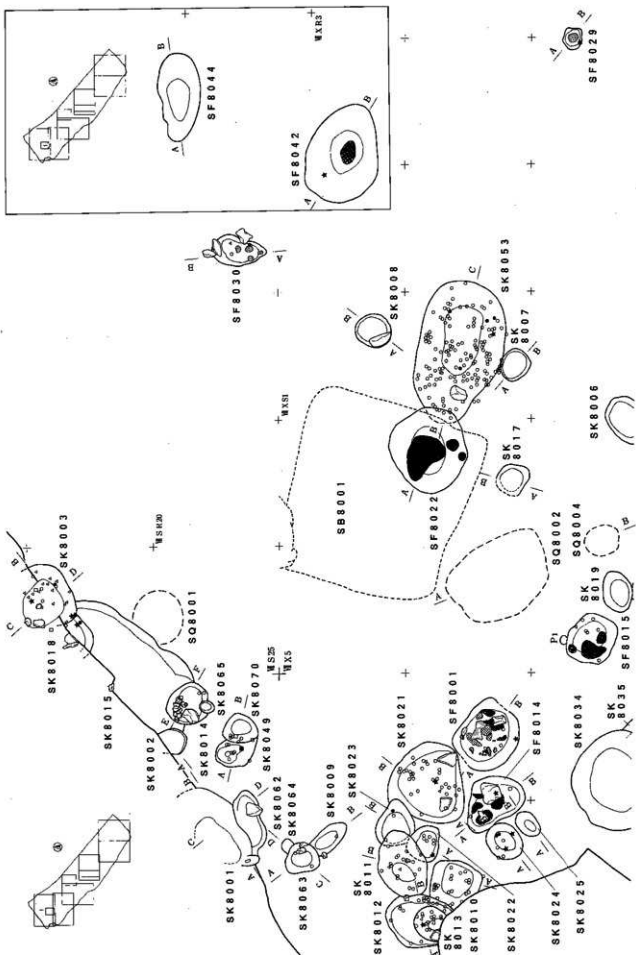
第6表 前期中葉 土坑 (SK) - 一覧表 (1)

遺構No.	位置	規模 (cm)			形状		覆土の状況	出土遺物			備考
		長軸	短軸	深さ	平面形	断面形		七器	石器	その他	
8053	ⅡX 5	228	136	9	長楕円形	皿状	複層 (陶器的)	No.23 (ⅡA), No.34 (ⅡBc) No.45 (ⅡA2c), No.46 (ⅡA) No.47 (ⅡA1a), No.48 (ⅡB4b) No.80 (ⅡA1a), No.115 (ⅡA2a) No.136 (ⅡB1b), No.174 (ⅡG) ⅡA1, ⅡA2, ⅡB1b, ⅡBb ⅡC, 磁器, 文様不明	石鏡, 大形割片, 砕片	礎	北園部凸作り 中央部窪まる SK0053→SF0022
8054	ⅡX 5	245	130	14	不整形	皿状	単層	No.18 (ⅡB1b), No.52 (ⅡA4b) No.33 (ⅡA2a), No.54 (ⅡA2) No.55 (ⅡB4b), No.86 (ⅡA2) No.89 (ⅡA2a), No.125 (ⅡA3a) 磁器, 文様不明	石鏡, ⅡF, 磨石類 割片, 砕片	礎	SK0056→SK0054
8055	ⅡY 6	200	107	10	長楕円形	皿状	単層 炭化物・焼土散混	No.51 (ⅡA1a), ⅡBb, 文様不明	石鏡, 白石・石組, 割片 砕片	付片	
8056	ⅡX 5	42	36	8	楕円形	すり鉢状	単層, 炭化物混	ⅡBb	—	—	SF0054→SK0056→ SK0054
8057	ⅡY13	150	136	19	楕円形	皿状					
8059	ⅡY13 ⅡY18	273	190	13	楕円形	皿状		No.56 (ⅡA1a), No.57 (ⅡA2a) No.58 (ⅡA2a), No.59 (ⅡA2) No.80 (ⅡB4b), No.61 (ⅡB1b) No.81 (ⅡA1c), No.98 (ⅡA2a) No.141 (ⅡB1b), ⅡA1, ⅡA2 ⅡA2, ⅡB4b, ⅡBb, 瓦部 文様不明	石鏡, 石鏡, 石磨 磨石類, 白石・石鏡 ⅡF, 割片, 砕片		SK0059→SK0057
8058	ⅡY 6 ⅡY 7	171	123	12	楕円形	皿状	複層	No.115 (ⅡA2a), ⅡBb	—	礎・骨片	地山の窪を壁面と して使用
8060	ⅡY11	88	52	10	楕円形	皿状	上下2層 炭化物・焼土散混	No.21 (ⅡA2a), No.62 (ⅡA) No.63 (ⅡB4b), No.149 (ⅡB4b) ⅡA2, ⅡBb, 文様不明	石鏡	—	
8051	ⅡY11	95	47	22	長楕円形	一段状		No.64 (ⅡB1b), ⅡBb	石鏡, 割片 B	付片	SF0056→SK0061
8062	ⅡS24	97	131	14	楕円形	皿底状	単層	—	—	—	SK0062→SK0061
8063	ⅡX 4	54	46	10	不整形 楕円形	皿状	単層, 炭化物混	磁器, 文様不明	—	—	SK0063→SK0064→ SK0063
8064	ⅡX 4	(15)	20	7	不整形 楕円形	皿状	単層, 炭化物混	—	—	—	SK0064→SK0063
8055	ⅡS24	34	18	5	楕円形	皿状	単層	—	—	—	SK0014→SK0065
8056	ⅡY12	148	96	12	楕円形	鉢底状	単層	—	—	—	SK0066→SK0027
8067	ⅡY17	(98)	115	13	(楕円形)	皿状	単層	—	—	—	SK0067→SK0028
8068	ⅡY17	(126)	82	18	長楕円形	皿状	単層	—	—	—	SK0068→SK0029
8059	ⅡY18	(97)	32	10	長楕円形	皿底状	単層	—	—	—	SK0033→SK0069
8070	ⅡS24	57	46	10	楕円形	皿状	単層, 炭化物混	—	—	—	SK0049→SK0070

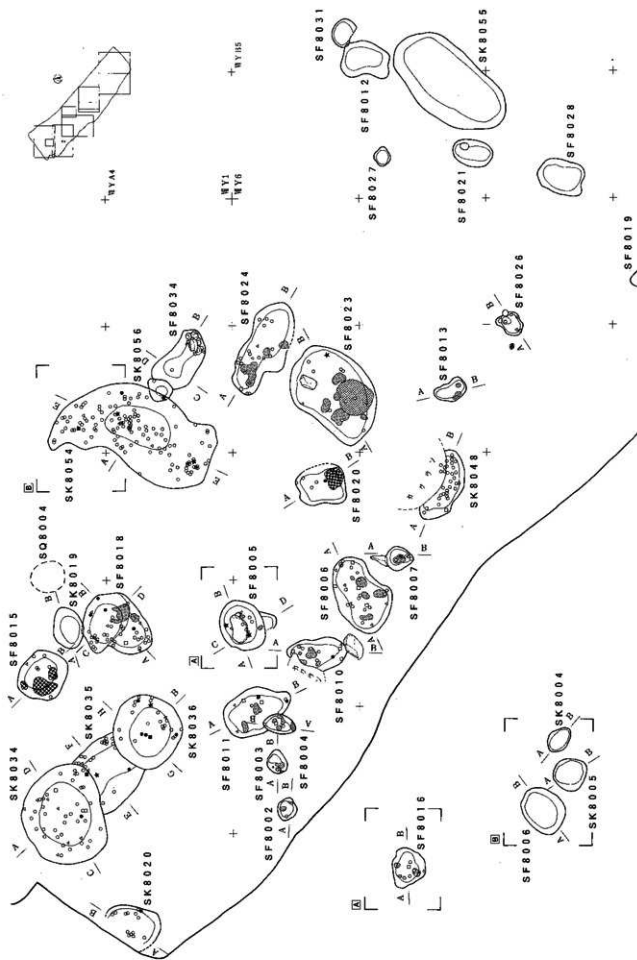
第7表 前期中葉 土坑 (SK) 一覧表 (2)



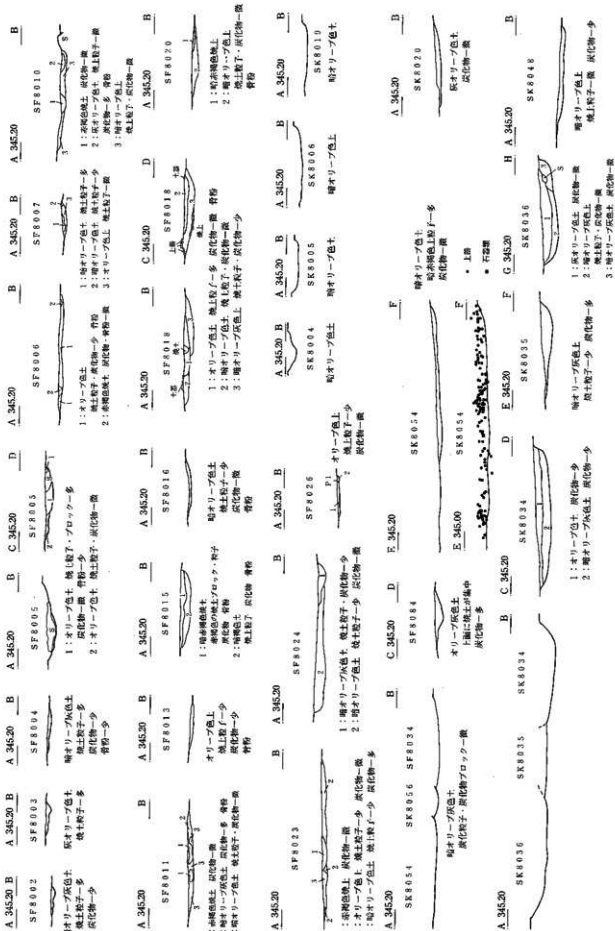
第20図 前期中・後葉 遺構図割付



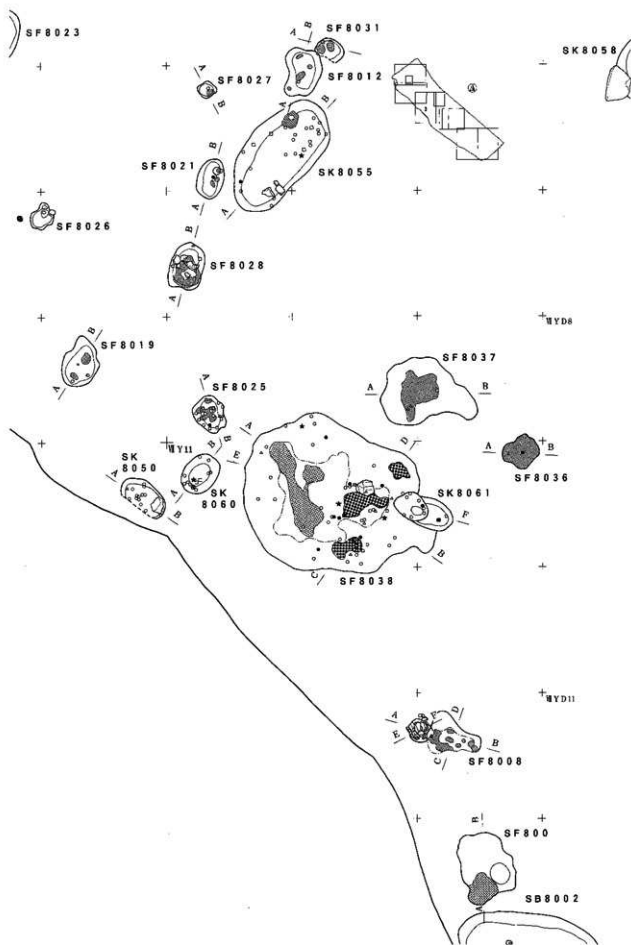
第21図 前期中・後葉 遺構図1 (1:60)



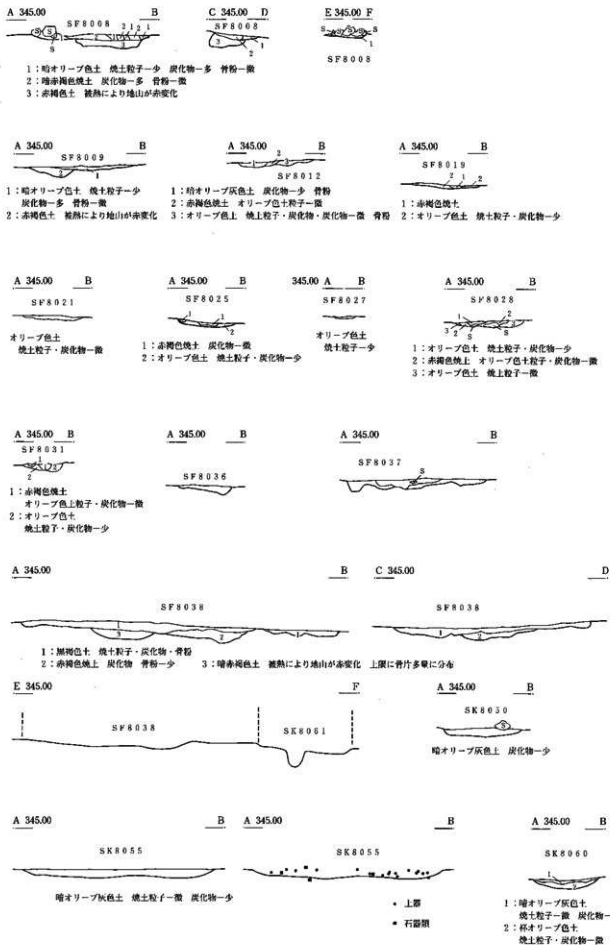
第23図 前期中・後葉 遺構図2 (1:60)



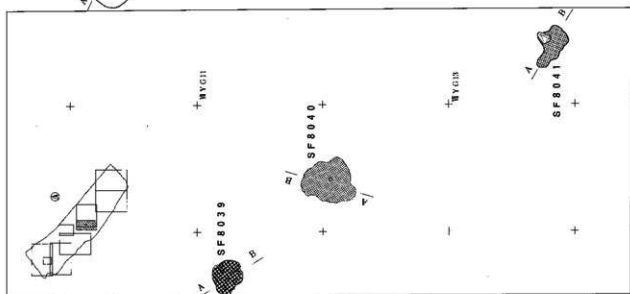
第24図 前期中・後葉 遺構図2 断面図(1:40)



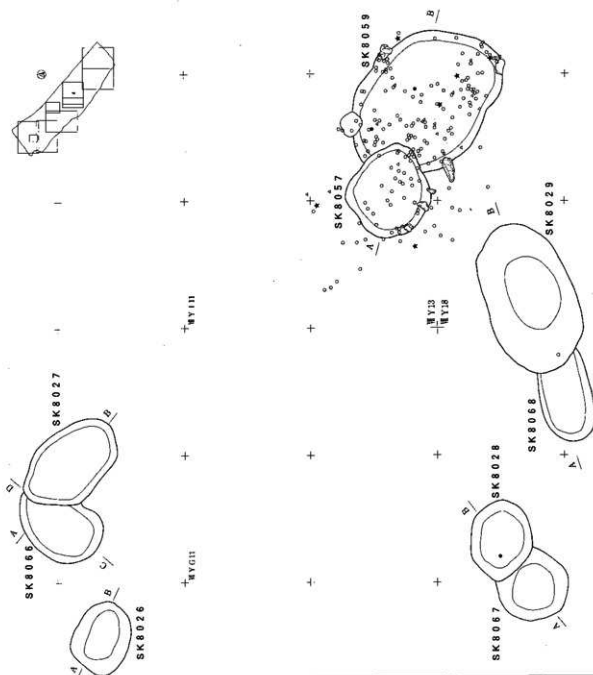
第25図 前期中・後葉 遺構図3 (1:60)

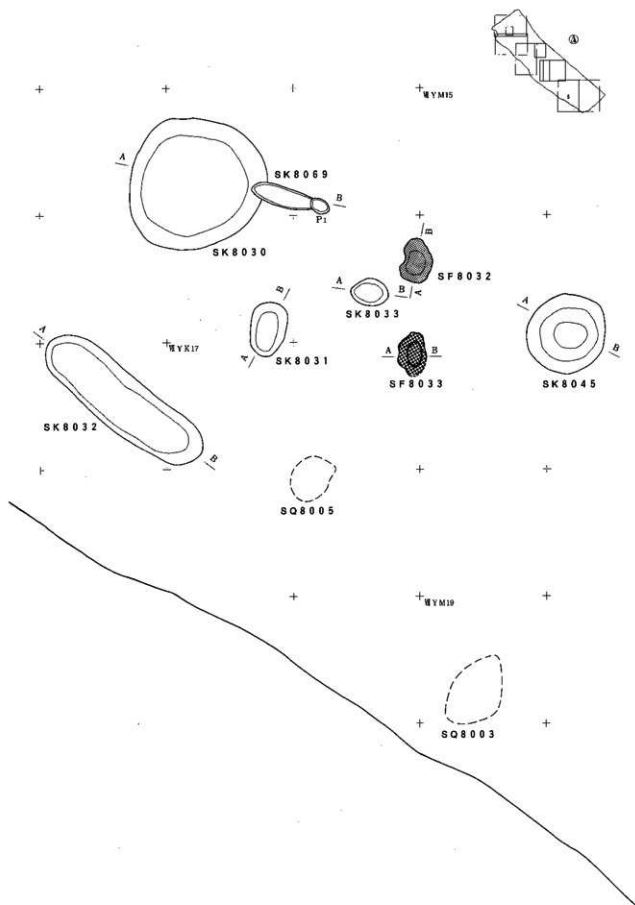


第26図 前期中・後葉 遺構図3 断面図(1:40)

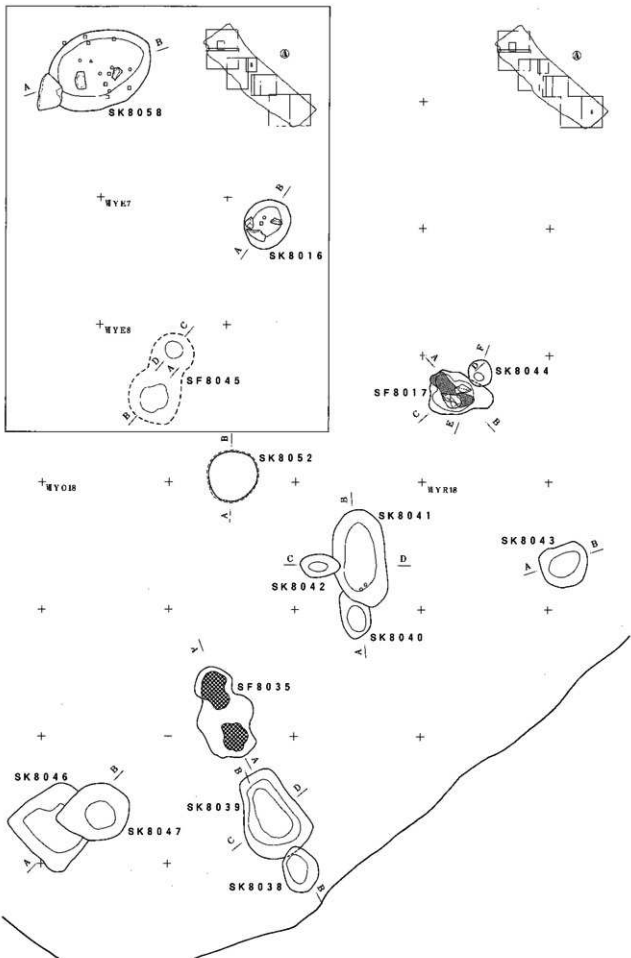


第27図 前期中・後築 遺構図4 (1:60)

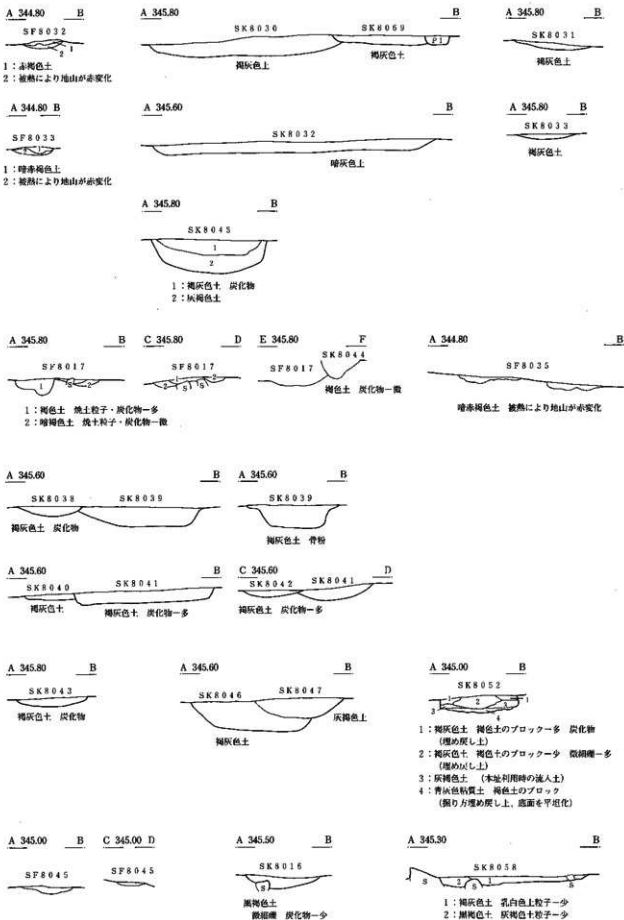




第29図 前期中・後葉 遺構図5 (1:60)



第30図 前期中・後葉 遺構図6 (1:60)



第31図 前期中・後葉 遺構図5・6 断面図(1:40)

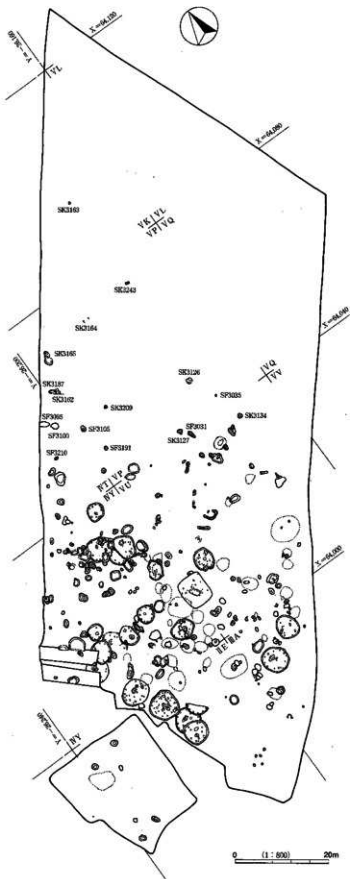
第2節 縄文時代前期末葉～中期初頭

概要：該期の遺構数は、遺物の出土量とともに木遺跡では最も多く、同時に、重複関係も著しい。遺構分布をみると、調査区南西部に集中し、ほぼVP区を境に分布が散漫かつ希薄になり、調査区北東部は遺物散布が確認されるのみとなる。

数値的にみると、前期中葉と同様に焼上土が主要な遺構となろうが、竪穴住居址も、該期においては検出例の多い遺跡として捉えられよう。検出された遺構の種類・数は下記の通りであるが、遺構の重複関係が示すとおり、相対的にはさらに細分時期が与えられる。しかしながら、伴出遺物が僅少あるいは皆無であったり、構築―使用―廃絶といったサイクルが施設によって異なっていることが予想されるので、総合的な評価を得るには至っていない。ただ、竪穴住居址については、ある程度均一的なサイクルが予想され、かつ遺物からの情報が得られているので、個々の遺構の項に記した。

また、土器編年上、前期末葉暗ケ峯式期には、該当する土器も含めて、遺構の減少化傾向が窺えるものの、下島式期から中期初頭に至るまで一貫して平坦部を生活領域の中心としており、斜面部(③-3区)には、わずかに土器片が散布するに留まる。斜面部には該期の遺構が一切検出されておらず、前期中葉の在り方とは対照的である。以後、断絶をはさんで中期末葉に至るが、生活領域の変動は見られない。

竪穴住居址：22軒
 焼土址：140基
 遺物集中：34か所
 土坑：103基



第32図 前期末葉～中期初頭遺構分布図1

1 竪穴住居址

SB1165 位置：ⅡE8, 9 SB1167を切る

検出：中期初頭遺構検出面にて、一定の範囲でおびただしい量の土器・石器類の出土がみられ、その遺物の集中箇所にてトレンチを入れたところ、立ち上がり等が確認できたため、後述するSB1166・1167とともに竪穴住居址と判断し、調査を進めた。

床面：堅緻な部分や貼り床等検出されなかったものの、遺物出土の減少とそれが面的に抑えられたこと、また、その面で複数の落ち込みが確認された点を考慮し、床面と判断した。床面以下には、掘り方は確認されず、地山を掘り下げて床面を形成している。

炉：明確な痕跡は見出せなかったが、床面のほぼ中央に皿状のピットがあり、覆土中から焼土が検出されている。床面上で検出された他のピット内からは焼土は検出されていないことやその位置関係などから、中央部の皿状ピットを炉址もしくは炉に相当する施設として捉えておく。

柱穴：15基確認されたが、いずれも深さ15cm内外と浅く、配置も規則性はみられない。

遺物の出土状況：石器類が主体を占め、ほぼ全域からの出土をみるが、東半部により集中する。

時期：本址を分布の主体とする土器はいずれもⅡ群に属し、また、文様不明の土器片を含めても、出土土器全体の60%以上がⅡ群であることに加え、SB1167を切って構築されていることから、中期初頭とする。

SB1166 位置：ⅡE4, 9 SB1167を切る

検出：SB1165と同様に、遺物の集中する範囲を竪穴住居址と捉え、断面観察から遺構のプランを確定したが、住居址の東半部となる③-2区においては、遺物の集中出土、掘り込み等は確認できなかった。

床面：堅緻な部分や貼り床等検出されなかったものの、遺物出土の減少とそれが面的に抑えられたこと、また、その面で複数の落ち込みが確認された点を考慮し、床面と判断した。床面以下には、掘り方は確認されず、地山を掘り下げて床面を形成している。

柱穴：7基確認され、いずれも深さ15cm以下と浅いものの、壁に沿って分布する。

遺物の出土状況：石器類が主体を占め、床面からやや浮いた状態で、調査範囲のほぼ全域から出土する。

時期：本址を分布の主体とする土器のほとんどはⅡ群に属し、また、文様不明の土器片を含めても、出土土器全体の74%以上がⅡ群であることに加え、SB1167を切って構築されていることから、中期初頭とする。

SB1167 位置：ⅡE3, 4, 8, 9 SB1165, 1166, 1173に切られる

覆土：単一層であるが、部分的に焼土粒子・炭化物が集中する箇所がある。本址を切るSB1165よりも炭化物等の混入物が多く、やや軟弱である。

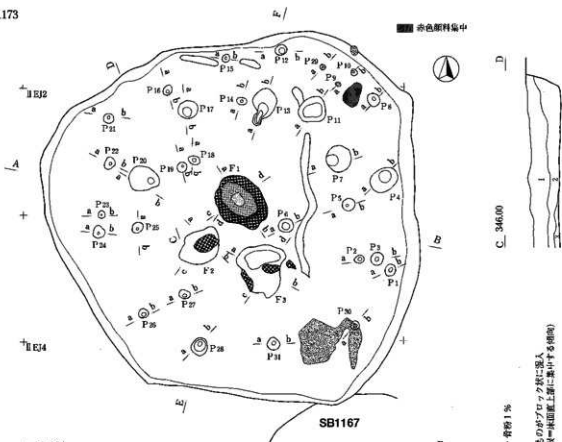
床面：堅緻な部分や貼り床等検出されなかったものの、遺物出土の減少とそれが面的に抑えられたこと、また、その面で複数の落ち込みが確認された点を考慮し、床面と判断した。床面以下には、掘り方は確認されず、地山を掘り下げて床面を形成している。

炉：明確な痕跡は見出せなかったが、床面のほぼ中央に大形のピットがあり、覆土上層から焼土ブロックが検出されている。床面上で検出された他のピット内からは焼土は検出されていないことやその位置関係などから、中央部のピットを炉址もしくは炉に相当する施設として捉えておく。

柱穴：15基確認され、最大40cm、最小9cmと深さにばらつきがある。中央寄りに3基分布するが、基本的に壁に沿って分布する形態をとる。

その他の施設：長軸96cm、短軸55cmの不整楕円形プランを呈し、深さ47cmを測るピットが北東壁際で検

SB1173



A 346.00



E 346.00



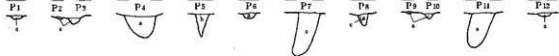
- C-346.00
- 1: 2.5% (オリーブ類) 炭化物2% 繊維・骨粉1%
 - 2: 2.5% (オリーブ類) 炭化物3% 繊維・骨粉1%
 - 3: 2.5% (オリーブ類) 炭化物7% (下段=床面直上層に集中する傾向)

345.40 a b c d a b c d a b c d

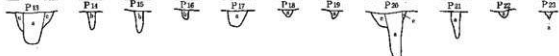


- a: 黄褐色の炭化物層 炭化物2% c: 暗赤褐色の炭化物層 炭化物3% e: 炭化物層 骨粉2%
- b: 赤褐色の炭化物層 炭化物2% d: 2.5% (オリーブ類) 炭化物5%

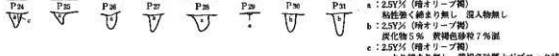
345.40 a b a b a b a b a b a b a b a b a b a b a b



345.40 a b a b a b a b a b a b a b a b a b a b a b



345.40 a b a b a b a b a b a b a b a b a b a b a b



- a: 2.5% (オリーブ類)
 粘土質なく締まり無し 投入物無し
- b: 2.5% (オリーブ類)
 炭化物5% 黄褐色骨粉7%混
- c: 2.5% (オリーブ類)
 aより締まり無し 黄褐色砂質土がブロック状に混入

第36図 前期末葉～中期初頭竪穴住居址 (3)

出された。底面にやや斜めながらも正位に置かれていたかのように中期初頭の完形土器(13)が出土した。ピット自体及び完形土器の持つ機能・用途については不明であるが、柱穴とは異なった施設とすることができよう。

遺物の出土状況：石器類を主体に、床面から浮いた状態で、南西部に集中する。

時期：P3底面から中期初頭の完形土器(13)が出土していることから、中期初頭とする。

SB1173 位置：ⅡE3, 4 SB1167を切る

検出：調査区境に位置することから、調査行程の関係で3次に分けての調査となる。

床面：貼り床等は施されていないものの、ほぼ全面にわたってタタキ状の堅緻な床面をなす。床面以下には、掘り方は確認されず、地山を掘り下げて床面を形成し、敷き締めたと考えられる。部分的に周溝状の落ち込みが検出されたが、間仕切り等の意図を持って施されたものかどうかは不明である。また、赤色顔料、炭化物の集中箇所がそれぞれ床面直上で検出された。

炉：床面のほぼ中央に3基検出され、いずれも著しい被熱痕跡が床面と同レベルで確認されているが、様相はそれぞれ異なっている。F1は、黄褐色の被熱痕跡を中心に、赤褐色、暗赤褐色の順で同心円状に被熱痕跡が観察されており、使用した時間・回数とも頻繁であったことが想定される。F2は、浅い掘り込みの上面に暗赤褐色の被熱痕跡のみが確認された。F3は、炭化物層の下位及び周囲に暗赤褐色の被熱痕跡が確認された。これら三者に、用途面で使い分けがあったのか、あるいはF1の状況が、炉または住居使用の最終形態を示しているのかは判断がつかい兼ねるところである。なお、各炉址からそれぞれ2点の土壌試料を採取し、燃料材を推定する目的でプラント・オパール分析を(株)パリオ・サーヴェイに依頼した。詳細な報告については別の機会に譲るが、イネ科植物及びイネ科以外の植物珪酸体を形成しない植物を燃料材として利用していたことが分析結果から導き出されている。また、組織片ではなく単体の植物珪酸体の座状から、住居址または集落の周囲に、ススキ属やヨシ属などのイネ科植物の生育が推定されている。

柱穴：規模の相違はあるものの、30基が壁に沿う配置形態で検出された。径45cm前後の大形のピットは深く、かつ炉の周囲に位置し、小形のもの壁際を巡る。前者を主柱穴、後者を支柱穴と言えようか。

遺物の出土状況：土器・石器類とも覆土中、床面直上、ピット内等、満遍なく出土。赤色顔料が北東の壁際、床面直上に集中出土している。

時期：本址を分布の主体とする土器のほとんどはⅡ群に属し、また、文様不明の土器片を含めても、出土土器全体の70%以上がⅡ群であることに加え、SB1167を切って構築されていることから、中期初頭とする。

SB3009 位置：ⅢA1, 6, 7

検出：不明確ながらも、周囲との遺物出土状況の差及び含有物の差から平面的にプランを抑え、その規模から住居址を想定した。先行トレンチにて壁の立ち上がりを確認し、ほぼ中央に位置する古代の井戸址にて炉及び床面を確認し、住居址と判断した。

覆土：上下2層に分層されるが、漸移的である。焼骨片を多量に含むことが特徴的である。

床面：床面全面というわけではないが、炉の周囲を中心として比較的堅固な部分が面的に広がる。床面以下には、掘り方は確認されず、地山を掘り下げて床面を形成している。

炉：床面のほぼ中央に2か所構築されている。いずれも、掘り込みの浅い皿状の地床炉で、被熱痕跡が顕著にみられる。なお、両者の使用に関わる時間的な先後関係等は見出せなかった。

柱穴：壁に沿う配置形態で13基検出された。いずれも径20cm前後、深さ10cm前後と規模の小さいもので、主柱穴とみなせるようなものは存在しない。

遺物の出土状況：床面より浮いた状態で、多量に出土。平面・垂直とも特に集中する部分は見られない。時期：本址を分布の主体とする土器のほとんどはⅣ群に属し、No.38の同一個体がSB1165,1173からも出土していること、また、文様不明の土器片を含めても、出土土器全体の73%以上がⅣ群であることから、中期初頭とする。

SB3010 位置：ⅢA2,7

検出：不明確ながらも、周囲との遺物出土状況の差及び含有物の差から平面的にプランを抑え、その規模から住居址を想定した。先行トレンチにて壁の立ち上がりを確認し、プラン内に位置する古代の井戸址にて炉及び床面を確認し、住居址と判断した。

覆土：上中下の3層に分層され、色調からは漸移的な変化が読み取れる。ただし、中層には焼骨片が混入し、下層には地山の砂質土がブロック状に混入しており、混入物の変化は明確である。

床面：堅緻な部分や貼り床等検出されなかったものの、遺物出土の減少とそれが面的に抑えられたこと、また、その面で被熱痕跡の明確な炉址と思われる部分が3か所確認された点を考慮し、床面と判断した。床面以下には、掘り方は確認されず、地山を掘り下げて床面を形成している。

炉：3基検出され、いずれも床面中央ではなく壁に寄った部分に位置する。掘り込みは浅く、不整なプランを呈する。なお、F1・F2は暗赤褐色の被熱痕跡、F3については、赤褐色・暗赤褐色の被熱痕跡が確認されている。

柱穴：不規則な配置で6基検出されている。すべてが柱穴と言えるかどうかは、不規則な配置・深さといった点から、疑問が残る。

遺物の出土状況：平面的には、石器類は満遍なく分布するものの、土器片は南北2極に集中する傾向が読み取れる。

時期：本址を分布の主体とする土器のほとんどはⅤ群に属し、また、文様不明の土器片を含めても、出土土器全体の86%以上がⅤ群であることから、前期末葉下島式期とする。

SB3013 位置：ⅣY20, VU16

検出：中期初頭の遺物包含層を掘り下げ中、焼土址が2基検出され、その周囲から器形復元が可能な土器の大形破片が数個体出土したことで、この一帯を竪穴住居址と想定し、調査を進めた。柱穴と考えられる落ち込みが同一面で数か所確認され、床面と判断した。整理作業の段階で、上面で検出された遺物集中(SQ)の分布範囲と重なることから、調査時点で確認したプランを若干広げ、竪穴住居址として遺構図を作成した。

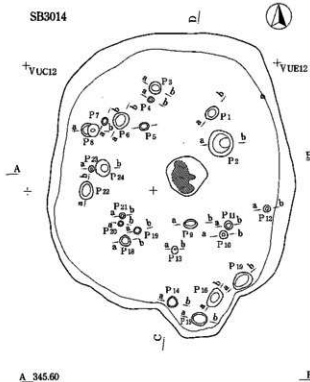
覆土：上下2層に分層されるが、漸移的である。

床面：堅緻な部分や貼り床等検出されなかったものの、遺物出土の減少とそれが面的に抑えられたこと、また、その面で複数の落ち込みが確認された点を考慮し、床面と判断した。床面以下には、掘り方は確認されず、地山を掘り下げて床面を形成している。

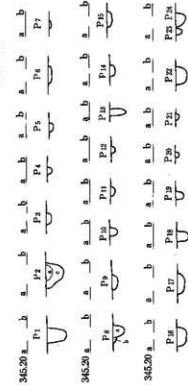
炉：床面のほぼ中央に、明瞭な被熱痕跡(赤褐色・暗赤褐色)を伴う地床炉が2基検出された。両者とも掘り込みを伴わず、周囲に小ピットが巡る。被熱痕跡内には焼獣骨片集中部が観察される。なお、両者の使用に関わる時間的先後関係等は見出せなかった。

柱穴：炉周囲の小ピットを除き15基が検出された。P1～P6は径・深さとも大形で、炉をはさみほぼ対称形の配置が窺えることから主柱穴と想定できよう。

遺物の出土状況：床面から土器の大形破片が個別にまとまりを持って出土している。

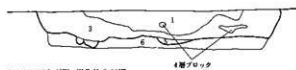


D
C. 345.60



a : 2.5Y/6 (暗オリーブ褐色) 炭化物3-5% 黄褐色砂質土のプロック3%
 b : a層+地山の黄褐色砂質土の混在
 c : 2.5Y/6 (オリーブ褐色) 炭化物2-3% 黄褐色砂質土のプロック20% (無炭素)

A_345.60

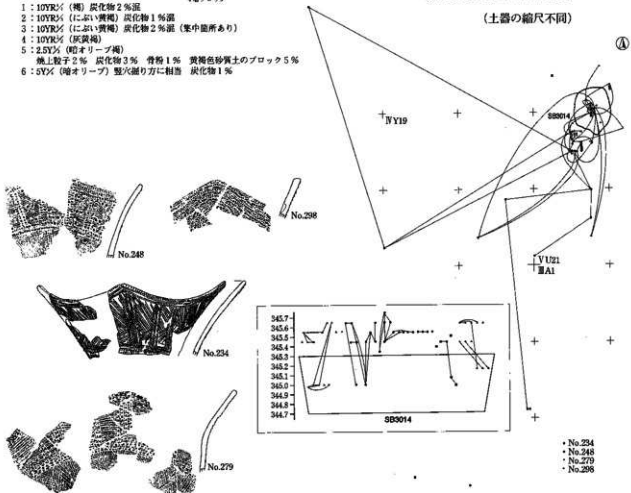


- 1 : 10YR/6 (褐色) 炭化物2%混
 - 2 : 10YR/6 (にぶい黄褐色) 炭化物1%混
 - 3 : 10YR/6 (にぶい黄褐色) 炭化物2%混 (集中箇所あり)
 - 4 : 10YR/6 (灰黄緑)
 - 5 : 2.5Y/6 (暗オリーブ褐色)
- 焼上粒子2% 炭化物3% 骨粉1% 黄褐色砂質土のプロック5%
 6 : 5Y/6 (暗オリーブ) 壁穴廻り方に相違 炭化物1%

遺構外出土土器No.234・248・279・298

接合関係及び同一個体分布図

(土器の縮尺不同)



第40図 前期木築～中期初頭竪穴住居址(7)

時期：床面からまとまって出土した土器の人形破片がいずれもⅡ群に属し、加えて、本址を分布の主体とする土器についてもほとんどがⅡ群に属することから、中期初頭とする。

SB3014 位置：V U11, 12, 16, 17

検出：遺物包含層最下部で土器片等の遺物が集中して出土したため、トレンチを入れ遺構検出をしたところ、住居址床面と想定される堅緻な面が平坦に、一定範囲広がることから住居址と判断し調査を進めた。

覆土：基本的に上下2ないし3層に分層されるが、漸移的であり、いずれも堅く締まった覆土である。ブロック状の堆積土を含むことから、人為的な埋め戻しが想定される。

床面：本址は竪穴に掘り方を伴うことから、粗掘り後、土を入れ平坦に整えた上で、床面を形成していることが窺える。

炉：床面のほぼ中央に、断面形が皿状で、覆土に焼土粒子・骨粉が混入するピットが検出された。明確な被熱痕跡は確認されなかったが、竪穴覆土・柱穴覆土ともに焼土粒子は混在しておらず、形状・位置・覆土といった点から炉址と判断した。

柱穴：小規模なものを含めて24基検出された。P1・P2・P8・P13・P18は深く、主柱穴の可能性がある。その他の施設：南壁東部に台形状の突出部があり、4基の浅い柱穴とともに出入口部を形成していた可能性がある。

土器の接合関係：遺構外に分布の主体を持つ土器群（234・248・279・298）が、本址出土の土器片と接合関係を持つ。垂直分布からも明らかのように、いずれも本址検出面よりも高位置に分布の主体があり、遺構外に廃棄された複数の土器が、本址の埋没過程にともなって破片として混入していると判断される。

時期：出土土器及び上記の土器の接合関係から、下島式期とする。

SB3015 位置：IV Y20, 24, 25

検出：遺物包含層最下部で土器片等の遺物が集中して出土したため、トレンチを入れ遺構検出をしたところ、住居址床面と想定される堅緻な面が平坦に一定範囲広がることから住居址と判断し調査を進めた。

覆土：上下に2大別され、下層はさらに、混入物と位置によって3細分される。2・3層は竪穴を全体的に覆うが炭化物の混入の度合いで2分され、4層は壁際でブロック状の崩落土を混入する。

床面：炉を中心として柱穴に囲まれた範囲に、2～3cmの厚さをもつ堅緻な貼り床が施される。本址は竪穴に掘り方を伴うことから、粗掘り後、土を入れ平坦に整えた上で、床面を形成していることが窺える。

炉：4か所確認され、いずれも被熱痕跡が著しい。そのうち、床面中央の2か所については掘り込みを伴う。なお、これらの使用に関わる時間的な先後関係等は見出せなかった。

柱穴：壁に沿う配置形態で、13基確認された。深さに差は見られるものの、柱穴として安定した深さを保ち、規模も比較的そろっている。このうち、北壁際に位置するP1については、位置関係や規模からいって柱穴としての機能差、もしくは柱穴以外の機能を想定することもできよう。

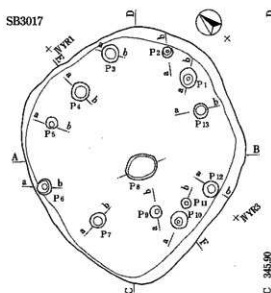
土器の接合関係：遺構外出土土器とした個体（233・236・294）の接合関係をみると、遺構外に廃棄された複数の土器が、本址の埋没過程にともなって破片として混入していると判断される。

時期：出土土器及び上記の土器の接合関係から、下島式期とする。

SB3017 位置：IV Y4, 5

覆土：炭化物を混入する単一土層で、炭化物は床面直上に集中する傾向にある。

床面：堅緻な部分や貼り床等検出されなかったものの、遺物出土の減少とそれが面的に抑えられたこと、



A. 345.90

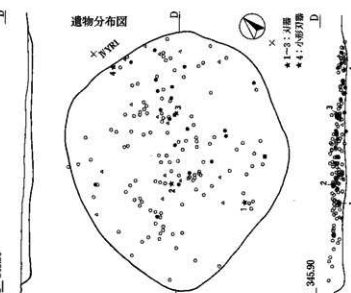
2.5Y% (オリーブ褐)

炭化物3～5%混 (下層=床面直上層に集中する傾向)
黄褐色砂粒2%混

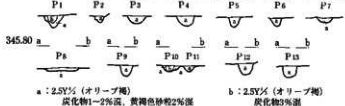
E. 345.90



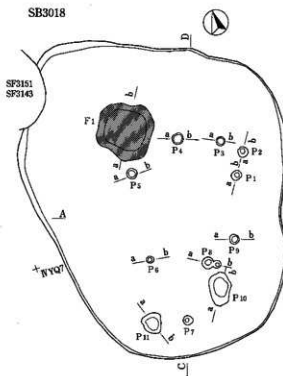
B. 345.80



C. 345.90



SB3018



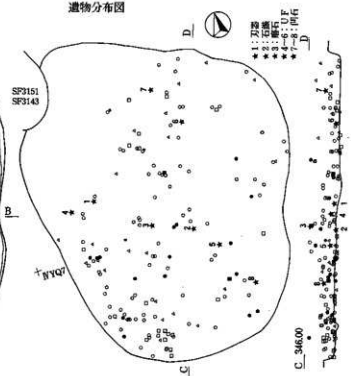
A. 346.00



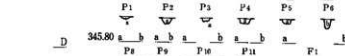
C. 346.00



増黄褐色土 炭化物一微 黄褐色砂粒一少



D. 345.80



a : 黄褐色土 炭化物一微
b : 黄褐色土 炭化物一微
c : 増黄褐色土 焼土粒子・炭化物一少
焼土粒子・炭化物一少 骨粉一微 骨粉一微

1 : 赤褐色焼土の混中
2 : 増黄褐色土

第42図 前期末葉～中期初頭整穴住居址 (9)

また、その面で複数の落ち込みが確認された点を考慮し、床面と判断した。床面以下には、掘り方は確認されず、地山を掘り下げて床面を形成している。

炉：床面のほぼ中央に皿状のピットが検出され、その位置・形態から、このP8が炉に相当する施設であった可能性も考えられる。ただし、P8は覆土中わずかに炭化物が混入するのみで、被熱痕跡や焼土堆積は見られない。

柱穴：壁に沿う配置形態で、12基確認された。深さは20cmに満たないものばかりだが、2段底となるものや柱痕跡と想定し得る覆土の状況もあることから柱穴と認識する。

遺物の出土状況：覆土上部を中心に分布し、集中箇所等は認められない。

時期：本址を分布の主体とする土器のほとんどはV群に属し、また、文様不明の土器片を含めても、出土土器全体の82%以上がV群であることから、前期末葉下島式期とする。

SB3018 位置：IVY10 SF3143・3151に切られ、SB3030を切る

床面：堅緻な部分や貼り床等検出されなかったものの、遺物出土の減少とそれが面的に抑えられたこと、また、その面で複数の落ち込みが確認された点を考慮し、床面と判断した。床面以下には、掘り方は確認されず、地山を掘り下げて床面を形成している。床面は平坦ではなく、緩やかな起伏が観察される。

炉：床面の北西部に偏った位置に焼土堆積層を含む皿状のピットがあり、明確な被熱痕跡は認められないものの炉址と捉えた。また、南部に焼土粒子を含む皿状のピットが2基あり（P10・11）、炉に関わる施設と考えられる。なお、本址覆土で焼土粒子が混入するものは上記3基のピットに限られる。

柱穴：径・深さとも小規模ながら、長方形に配される。規模という点では、P6以外は、深さよりも径が上回る。したがって、10基すべてを柱穴と判断してよいか疑問が残る。

遺物の出土状況：平面的には南西部に多く、垂直分布では覆土上層から床面まで満遍なく出土している。

時期：本址を分布の主体とする土器のほとんどはV群に属し、また、文様不明の土器片を含めても、出土土器全体の76%以上がV群であることから、前期末葉下島式期とする。

SB3019 位置：IVY4、9、10 多数のSFに切られ、SB3030を切る

検出：遺物包含層掘り下げの際に、豊富な遺物を出土する部分が確認された。その範囲からして、複数の住居址の重複が予想され、トレンチを設定し、遺構検出を試みた。その結果、多数の焼土址とそれらに切られる住居址が検出された。検出面はどの遺構についても同様なことから、竪穴の埋没過程に焼土址を構築したとは考えにくく、住居址覆土についても分層は不可能であった。

覆土：焼土粒子・ブロックと炭化物を含む単一層。

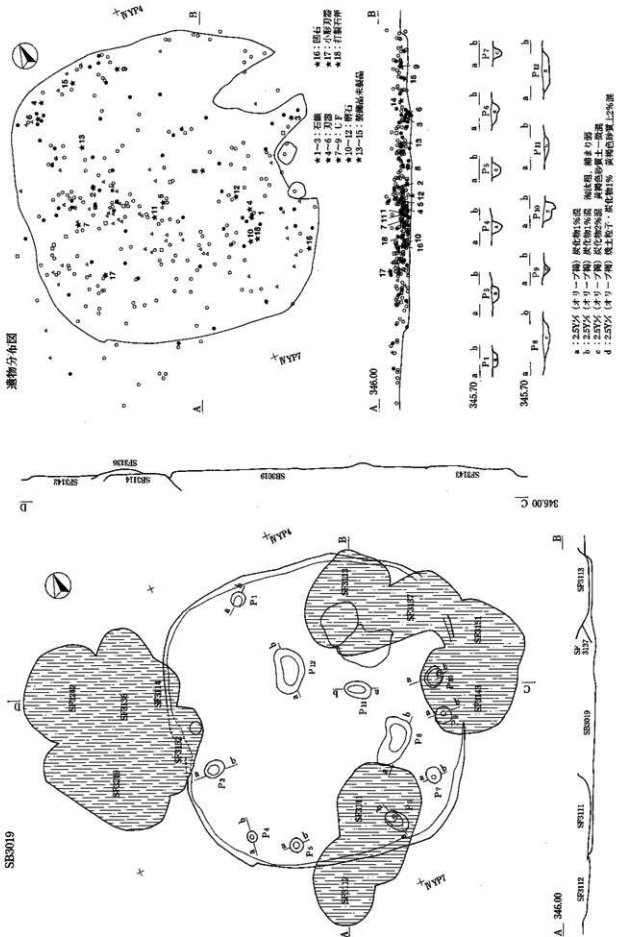
床面：堅緻な部分や貼り床等検出されなかったものの、遺物出土の減少とそれが面的に抑えられたこと、また、その面で複数の落ち込みが確認された点を考慮し、床面と判断した。床面以下には、掘り方は確認されず、地山を掘り下げて床面を形成している。

炉：なし。SF3113、SF3137に重複する形で焼土の分布が捉えられたが、どちらの遺構に付随するか判断としないまま調査を終えてしまった。本址の炉址とすれば、極めて偏った位置に構築されているといえる。

柱穴：9基が壁に沿う配置形態で検出された。径・深さとも小規模である。また、中央に寄って皿状のピットが3基検出されており、柱穴とは異なった機能が想定される。

遺物の出土状況：遺物量は豊富で、覆土中位を中心に、平面的には北部に集中する傾向が窺える。

時期：本址を分布の主体とする土器のほとんどはV群に属し、また、文様不明の土器片を含めても、出土土器全体の75%以上がV群であることから、前期末葉下島式期とする。



第43図 前期末葉～中期初期竪穴住居址 (10)

SB3021 位置：ⅣY15

検出：SQ3041・3042の分布範囲と重なる部分があるが、本址のプランが検出されたことから、それらよりも新しいと判断した。また、SK3239を切って本址は構築されている。

覆土：基本的に単一層だが、炉の位置する南半部には焼土粒子が多く混入する。

床面：堅緻な部分や貼り床等検出されなかったものの、遺物出土の減少とそれが面的に抑えられたこと、また、その面で複数の落ち込みが確認されたことを考慮し、床面と判断した。床面以下には、掘り方は確認されず、地山を掘り下げて床面を形成している。床面は、比較的平坦であるが、若干の凹凸が見られる。炉：被熱痕跡を伴うしっかりとした炉は検出されなかったが、床面のほぼ中央に焼土粒子の集中する極めて浅いくぼみが検出された。この部分を炉として捉えることとする。

柱穴：不規則な配置で18基確認された。いずれも単一の覆土で、径15cm・深さ10cm前後のものが主体を占める。深さ15cmを超えるものが2基、北東の壁際に位置している。

遺物の出土状況：遺物量は多く、覆土中位を中心に全体に満遍なく出土している。

時期：本址を分布の主体とする土器のほとんどはⅤ群に属し、また、文様不明の土器片を含めても、出土土器全体の72%以上がⅤ群であることから、前期末葉下島式期とする。

SB3022 位置：ⅣY12, 17

覆土：上下2層に分層される。下層に炭化物・焼骨片の混入を見る。

床面：堅緻な部分や貼り床等検出されなかったものの、遺物出土の減少とそれが面的に抑えられたことから、床面と判断した。掘り方は見られず、地山を掘り下げ床面としている。床面は、比較的平坦である。炉・柱穴：なし。

遺物の出土状況：遺物量は少なく、南東部に偏って出土。

時期：規模も小さく、炉・柱穴とも確認されなかったので、竪穴状遺構と捉えておきたい。時期は、本址を分布の主体とする土器のほとんどがⅥ群に属し、また、文様不明の土器片を含めても、出土土器全体の69%以上がⅥ群であることから、中期初頭とする。

SB3023 位置：ⅣY19

覆土：単一層で、包含層に比し、鉄分(Fe)の沈着が少ない。覆土上面をSF3121に切られる。

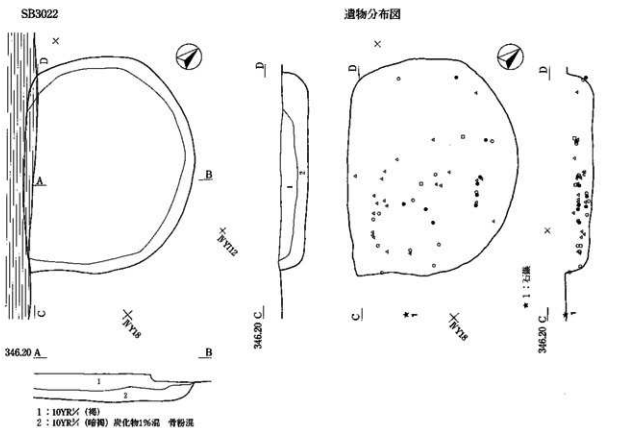
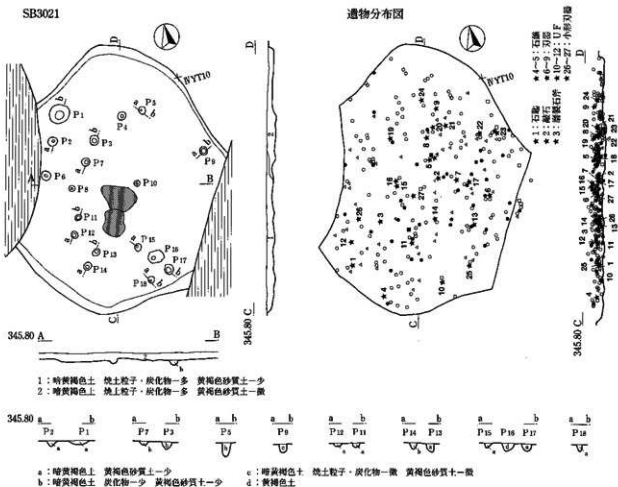
床面：貼り床等検出されなかったものの、遺物出土の減少とそれが面的に抑えられたこと、また、その面で複数の落ち込みが確認されたことを考慮し、床面と判断した。床面以下には、掘り方は確認されず、地山を掘り下げて床面を形成している。ほぼ平坦な床面で、全体に堅くしめるが、タタキ状の硬化面は認められない。

炉：被熱痕跡を伴う炉址は検出されなかったが、床面のほぼ中央に皿状のピットが検出された。焼土粒子・炭化物を伴うこと、構築された位置から、この部分を炉として捉えることとする。

柱穴：9基が壁に沿う配置形態で検出された。いずれも径・深さとも小規模のものであるが、P5については形態が異なっており、出入口施設に関わる可能性も指摘されよう。

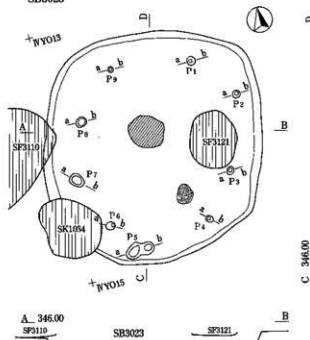
遺物の出土状況：覆土上位から中位にかけて集中する。他に、2か所の黒曜石製剥片・砕片集中範囲と1か所の骨片集中範囲が確認されている。

時期：本址を分布の主体とする土器のほとんどはⅥ群に属し、また、文様不明の土器片を含めても、出土土器全体の65%以上がⅥ群であることから、中期初頭とする。

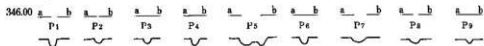


第44図 前期木葉～中期初頭竪穴住居址(11)

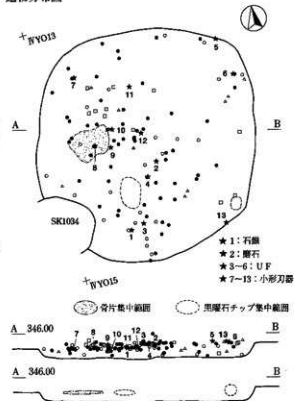
SB3023



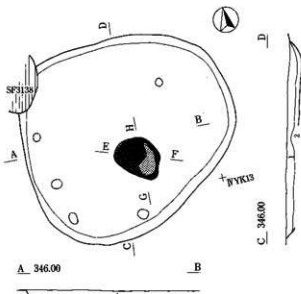
5Y5 (灰オリーブ) 地山に比べ鉄分 (Fe) の沈着が少ない



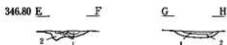
遺物分布図



SB3025

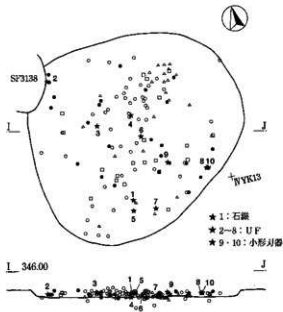


1: 10YR5 (L) 赤褐色の焼熟痕跡 焼上粒子1%未炭 炭化物1%
2: 10YR4 (M) 暗赤褐色の焼熟痕跡 炭化物5% 骨粉多量



1: 5YR4 (M) 赤褐色の焼熟痕跡
2: 2.5YR2 (L) 赤褐色の焼熟痕跡 炭化物5% 骨粉多量

遺物分布図



第45図 前期末葉～中期初頭型穴住居址 (12)

SB3024 位置：ⅣY18, 19 SB3027を切る

検出：遺物包含層を掘り下げていく段階で、遺物の集中出土が確認され、遺物集中(SQ)と判断し、調査を進めた。調査面を水平に揃え再精査を試みたところ、一帯が土層の色調・含有物という点で周囲と異なっていることが確認された。トレンチを設定し、断面精査の結果、床面及び立ち上がりが確認されたことから竪穴住居址と判断し、同時にSQとした遺構についても、住居址に含めることとした。

覆土：基本的には単一層と考えられるが、竪穴の東西で混入物が異なる。東端部はSB3027と重複する部分であり、その影響によるものか、東半部の覆土(1層)には焼土粒子・炭化物・骨粉が含まれている。床面：堅緻な部分や貼り床等検出されなかったものの、遺物出土の減少とそれが面的に抑えられたこと、また、その面で複数の落ち込みが確認されたことを考慮し、床面と判断した。床面以下には、掘り方は確認されず、地山を掘り下げて床面を形成している。床面には、起伏が見られる。

炉：床面中央南東寄りに、明確な被熱痕跡を伴う地床炉が検出された。周囲に焼土粒子・炭化物が分布し、その分布内に小ピットが1基穿たれている。

柱穴：9基が壁に沿う配置形態で検出された。いずれも径・深さとも小規模のものである。

遺物の出土状況：炉址の周囲を中心に、平面・垂直分布とも竪穴内から満遍なく出土している。特に、炉址北東部に密な集中が捉えられ、平面的には本址よりも下層にあたるSQ3043の範囲と重なる。両者に土器の接合関係は見られず、範囲を本址全体に広げたととしても、土器の接合関係は1個体(VB)しか見られない。しかも、分布の主体は遺構外にある。したがって、本址とSQ3043の関係については、層位が表すように、新旧関係にある別遺構として捉えられる。

時期：本址を分布の主体とする土器のほとんどはⅣ群に属し、また、文様不明の土器片を含めても、出土土器全体の60%以上がⅣ群であることから、中期初頭とする。

SB3025 位置：ⅣY13, 18

覆土：上下2層に分層され、下層は焼土粒子・炭化物及び骨粉の混入の度合いが高い。

床面：堅緻な部分や貼り床等検出されなかったものの、遺物出土の減少とそれが面的に抑えられたこと、また、その面で複数の落ち込みが確認されたことを考慮し、床面と判断した。床面以下には、掘り方は見られず、地山を掘り下げて床面を形成している。床面は、ほぼ平坦である。

炉：床面中央より南側に偏って、明確な被熱痕跡(赤褐色・暗赤褐色)を伴う地床炉が検出された。

柱穴：5基のピットが壁に沿う配置形態で検出されたが、平面精査に留まっており、詳細については不明である。

遺物の出土状況：覆土下層から床面を中心に集中する。

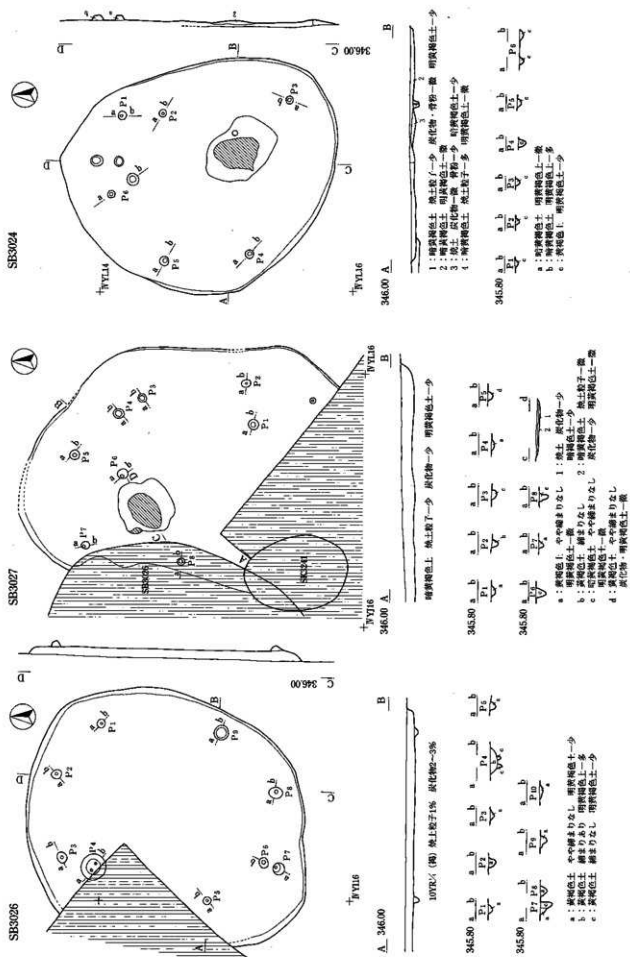
時期：本址を分布の主体とする土器のほとんどはⅣ群に属し、また、文様不明の土器片を含めても、出土土器全体の67%以上がⅣ群であることから、中期初頭とする。

SB3026 位置：ⅣY17, 18 SB3027, SB3029を切り、SF3141, SK3241に切られる

検出：北西部は、中期末葉～後期前葉面で実施したトレンチ調査のため破壊されている。トレンチ断面では、本址の覆土及び立ち上がり等は注意されず、この時点で本址の検出はなされなかった。中期初頭面の調査に至り、土層の色調及び周囲との含有物の差によって、遺構であることが推測され、前記のトレンチ断面により、床面及び立ち上がり等を確認し、竪穴住居址と判断した。

覆土：焼土粒子・炭化物を含む単一層。

床面：堅緻な部分や貼り床等検出されなかったものの、遺物出土の減少とそれが面的に抑えられたこと、



第46図 前期末葉～中期初頭整穴住居址 (13)

また、その面で複数の落ち込みが確認されたことを考慮し、床面と判断した。床面以下には、掘り方は見られず、地山を掘り下げ床面を形成している。床面には、緩やかな起伏が見られる。

炉：なし。

柱穴：9基が壁に沿う配置形態で検出された。P4を除いて、いずれも径・深さとも小規模のものである。P4は、覆土・形態とも他の柱穴と異っており、柱穴以外の機能も想定できよう。また、P7については、その断面から、柱痕跡を想定することが可能と考えられる。

遺物の出土状況：壁の周縁部に集中する傾向があり、特にSB3027と重複する部分に密に集中する。

時期：本址を分布の主体とする土器のほとんどはⅡ群に属し、また、文様不明の土器片を含めても、出土土器全体の80%以上がⅡ群であることから、中期初頭とする。

SB3027 位置：ⅣY18 SB3024, SB3026に切られる

覆土：焼土粒子・炭化物を含む単一層。

床面：堅緻な部分や貼り床等検出されなかったものの、遺物出土の減少とそれが面的に抑えられたこと、また、その面で複数の落ち込みが確認されたことを考慮し、床面と判断した。床面以下には、掘り方は見られず、地山を掘り下げ床面を形成している。床面には、緩やかな起伏が見られる。

炉：床面中央北西寄りに、明確な被熱痕跡及び掘り方を伴う地床炉が検出された。周囲に焼上粒子・炭化物が分布している。検出された被熱痕跡は、炉の最終使用面（燃焼面）であり、掘り方として捉えられる部分については、構築及び使用時の炉の範囲と考えられる。

柱穴：8基が壁に沿う配置形態で検出された。いずれも径・深さとも小規模のもので、底面は鋭角的である。P6・P8については比較的深いもので、炉址をはさみ対峙する配置となっている。

遺物の出土状況：南側の一部は住居址と判断されないまま掘り下げが進められており、床面等は欠落するものの、遺物は炉址を中心とした北半部に集中する傾向がある。

時期：本址を分布の主体とする土器のほとんどはⅡ群に属し、また、文様不明の土器片を含めても、出土土器全体の76%以上がⅡ群であることから、中期初頭とする。

SB3028 位置：ⅡE3, ⅣY22, 23

検出：調査区境の壁面を精査し、立ち上がりを確認し、ピットの配置等を含めてプランを想定した。

覆土：水平堆積する上下2層に分層されるが、上層は下層の土をブロック状に混入する。

床面：床面が残存する範囲では、床面以下に掘り方は見られず、地山を掘り下げ床面としている。ほぼ平坦で、僅かな起伏が観察された。堅緻な部分等は確認されなかった。ただし、炉を中心とした部分と西側1/4以外は、床面及び壁面をとばしてしまっているため、その限りではない。

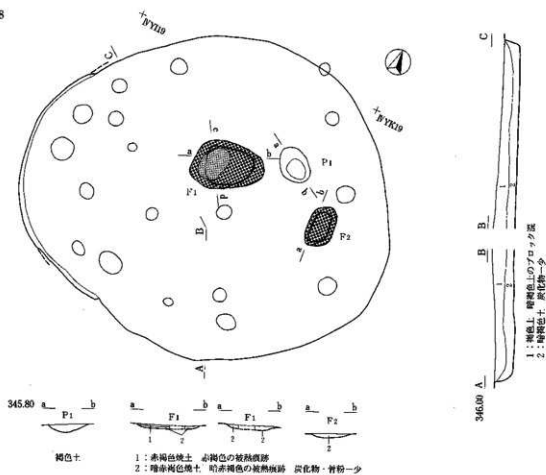
が：床面のほぼ中央に、明確な被熱痕跡（赤褐色・暗赤褐色）を伴う地床炉が検出され（F1）、それを北端として長軸325cm、単軸250cmの範囲に焼土粒子が集中する。また、暗赤褐色の被熱痕跡を伴う地床炉（F2）が焼土粒子集中範囲に東接して検出されている。

柱穴：17基のピットが検出されたが、平面精査に留まっており、詳細については不明である。

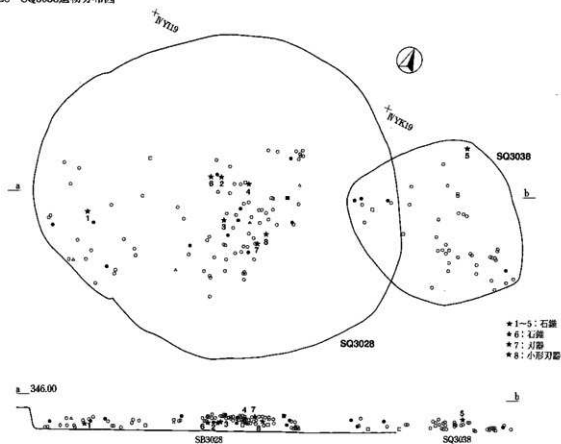
遺物の出土状況：床面中央部で、床面より浮いた位置に集中する。

時期：本址を分布の主体とする土器のほとんどはⅡ群に属し、また、文様不明の土器片を含めても、出土土器全体の70%以上がⅡ群であることから、中期初頭とする。

SB3028



SB3028・SQ3038遺物分布図



第48図 前期末葉～中期初頭竪穴住居址 (15)

SB3029 位置：ⅣY17, 18, 22 SB3026に切られる

検出：中期末葉～後期前葉面で実施したトレンチ調査のため破壊された部分が多い。トレンチ断面では、本址の覆土及び立ち上がり等は注意されず、この時点で本址の検出はなされなかった。中期初頭面の調査に至り、焼土址が検出され、それを中心とした範囲に遺物・ビッドが検出された。それらは、ほぼ同一レベルで捉えられたため、住居址床面と判断し、調査を進めることとなった。

床面：床面が残存する範囲では、堅緻な部分等は確認されなかった。床面以下には、掘り方は見られず、地山を掘り下げて床面としている。

炉：明確な被熱痕跡（赤褐色・暗赤褐色）を伴う地床炉である。

柱穴：5基検出された。いずれも規模の点では、深さよりも開口部径が上回る。

時期：本址を分布の主体とする土器のほとんどはⅣ群に属し、また、文様不明の土器片を含めても、出土土器全体の62%以上がⅣ群であることから、中期初頭とする。

SB3030 位置：ⅣY9, 10 SB3018・3019に切られる

覆土：南西壁際の堆積土形成後に、骨粉が混入する土層が竪穴全面を覆う。水平堆積する覆土は上下2層に分層されるが、その変化は漸移的である。

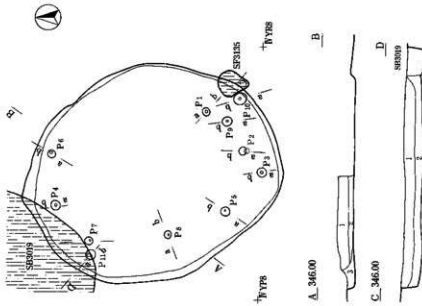
床面：堅緻な部分や貼り床等検出されなかったものの、遺物出土の減少とそれが面的に抑えられたこと、また、その面で複数の落ち込みが確認されたことを考慮し、床面と判断した。床面以下には、掘り方は見られず、地山を掘り下げ床面を形成している。床面は、緩やかな起伏を伴う。

炉：なし。

柱穴：11基が壁に沿う配置形態で検出された。いずれも径は小規模ながら、深さは10～25cmで、底面が鋭角的になっている。P2・P11は断面形が斜位で、床面中央に向けて傾斜している。

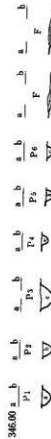
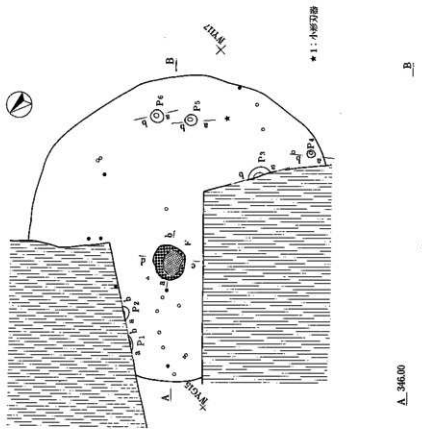
時期：本址を分布の主体とする土器のほとんどはⅤ群に属し、また、文様不明の土器片を含めても、出土土器全体の86%以上がⅤ群であることから、前期末葉下高式期とする。なお、Ⅳ群土器の出土は皆無。

SB3020



- 1 : 100% (黄) 灰化層1% 骨粉混
- 2 : 100% (黄) 灰化層1% 骨粉混
- 3 : 100% (黄) 灰化層1% 新褐色砂質土混
- 4 : 100% (黄) 灰化層1% 新褐色砂質土混
- 5 : 100% (黄) 灰化層1% 新褐色砂質土混
- 6 : 100% (黄) 灰化層1% 新褐色砂質土混

SB3029



- 1 : 2.5% (黄) 灰化層の層状混
- 2 : 2.5% (黄) 灰化層の層状混
- 3 : 10% (黄) 灰化層1% 横上灰子・骨粉混 灰層に灰化層・骨粉混中
- 4 : 10% (黄) 灰化層1% 横上灰子・骨粉混 灰層に灰化層・骨粉混中
- 5 : 10% (黄) 灰化層1% 横上灰子・骨粉混 灰層に灰化層・骨粉混中
- 6 : 10% (黄) 灰化層1% 横上灰子・骨粉混 灰層に灰化層・骨粉混中

第49図 前期末葉～中期初頭竪穴住居址 (16)

遺構 No.	位置	規模(m)			面積(m ²)	平面形状	基	柱穴	出土遺物			時期	備考
		長径	短径	高さ					土器	内山器類	石器		
1165	ⅢE 8 ⅢE 9	530	509	22	17.761	不整形四角	瓦葺 ビツ	15基 配置不明	N63(ⅡA) 2(ⅡA), 3(ⅡA), 4(ⅡA), 5(ⅡC), 38(ⅡB1) 86(ⅡB1), 144(ⅡC), 337(ⅡA), 472(ⅡA), 489(ⅡA), 491(ⅡA), 494(ⅡA), 497(ⅡA), 509(ⅡA), 514(ⅡB), 516(ⅡB), 517(ⅡB), 522(ⅡB), 523(ⅡB), 578(ⅡB), V A1a, V B, V C V D, ⅡA, ⅡB	石椁(1), 刺片(92) 埴片(13), 石鏡(2) 陶器(1), 小形舟楫(2) 石鏡(1), RFP(10) RF(1)	骨片 土器	中 期	
1166	ⅢE 4 ⅢE 9	462	(202)	7	(6.084)	(内形)		7基 壁に沿う	N6(ⅡA), 7(ⅡB), 8(ⅡA), 9(ⅡA), 10(ⅡA), 11(ⅡA), 22(ⅡB), 14(ⅡB), 29(ⅡA), 44(ⅡB), 153(ⅡB), 205(ⅡA), 482(ⅡA), 490(ⅡA), 509(ⅡA), 522(ⅡB), 523(ⅡB), V Aa, V Aa', V B, ⅡA, ⅡB	刺片(11), 埴片(141) 小形舟楫(1), 石鏡(1) 土(1)	骨片 土器	小 期	
1167	ⅢE 3 ⅢE 4 ⅢE 9	588	501	24	20.306	不整形四角	ビツ	15基 中央部に沿う	N613(ⅡB1), 14(ⅡB1), 15(ⅡB), 26(ⅡB), 29(ⅡB), 144(ⅡC), 151(ⅡA), 259(ⅡA), 490(ⅡA), 495(ⅡA), 497(ⅡA), 509(ⅡA), 514(ⅡB), 516(ⅡB), 522(ⅡB), 523(ⅡB), 526(ⅡB), 578(ⅡB), V A, V B, V C, V D, V E1 ⅡA, ⅡB	刺片(83), 埴片(104) 石鏡(1), 小形舟楫(8) UF(10), RFP(1)	骨片 土器	中 期	
1173	ⅢE 3	614	572	54	25.431	不整形四角	地蔵石 3	30基 柱穴壁に 沿う	N64(ⅡA), 16(ⅡB), 17(ⅡB), 18(ⅡA), 19(ⅡB), 20(ⅡA), 21(ⅡB), 22(ⅡB), 23(ⅡC), 24(ⅡC), 25(ⅡA), 26(ⅡB), 27(ⅡA), 28(ⅡA), 29(ⅡB), 38(ⅡB), 148(ⅡC), 191(ⅡA), 289(ⅡA), 326(ⅡA), 489(ⅡA), 490(ⅡA), 495(ⅡA), 497(ⅡA), 512(ⅡB), 516(ⅡB), 523(ⅡB), 551(ⅡB), V Aa, V Aa', V B, V C, V D, ⅡA ⅡB	石椁(1), 刺片(151) 埴片(235), 石鏡(10) 打製石(1), 陶器(1) 骨鏡(1), 内山石鏡(1) 小形舟楫(2), 石鏡(2) 石鏡(1), RFP(2)	骨片 土器 陶器	中 期	東部に副葬 集中状況
3009	ⅢA 1 ⅢA 6 ⅢA 7	563	512	32	22.166	楕円形	地蔵石 2	13基 壁に沿う	N630(Ⅱ) 31(Ⅱ), 32(Ⅱ), 33(ⅡC), 34(Ⅱ), 35(Ⅱ), 36(Ⅱ), 37(ⅡB), 38(ⅡB), 39(ⅡB), 40(ⅡA), 44(ⅡA), 442(ⅡA), 218(ⅡB), 284(ⅡA), 326(ⅡB), 578(ⅡB), V Aa, V Aa', V Aa', V B, V C, V D ⅡA, ⅡB	原石(1), 石鏡(1) 埴片(38), 埴片(202) 骨鏡(1), 骨鏡(5) 小形舟楫(2), 石鏡(2) 石鏡(1), UF(13)	骨片 土器 陶器	中 期	
3010	ⅢA 2 ⅢA 7	502	450	45	16.367	楕円形	地蔵石 6	6基 配置不明	N628(ⅡA), 43(ⅡA), 44(ⅡA), 45(ⅡA), 47(ⅡA), 48(ⅡA), 49(ⅡA), 50(ⅡA), 51(ⅡA), 52(ⅡB), 53(ⅡB), 54(ⅡA), 55(ⅡA), 56(ⅡA), 57(ⅡA), 58(ⅡA), 216(ⅡD), 241(ⅡA), 241(ⅡA), 241(ⅡA), 249(ⅡA), 251(ⅡA), 252(ⅡA), 255(ⅡA), 236(ⅡA), 328(ⅡA), 330(ⅡA), 330(ⅡA), 337(ⅡA), 362(ⅡB), 377(ⅡB), 390(ⅡB), 410(ⅡB), 421(ⅡB), 492(ⅡB), 518(ⅡB), 523(ⅡB), V A1a, V Aa, V Aa', V B, V C, V D ⅡA, ⅡB	石椁(1), 刺片(44) 埴片(19), 石鏡(4) 原石(1), 石鏡(1) 小形舟楫(4), 骨鏡(1) UF(6), RFP(2)	骨片 土器 陶器	最 末	
3013	ⅢV20 ⅢV16	649	543	30	33.805	(楕圓長 方形)	地蔵石 2	15基 柱穴土 壁に沿う	N639(ⅡB), 50(ⅡA), 60(ⅡA), 61(ⅡB), 62(ⅡB), 63(ⅡB), 64(ⅡB), 65(ⅡB), 66(ⅡB), 72(ⅡB), 68(ⅡB), 89(ⅡB), 92(ⅡB), 71(ⅡC), 72(ⅡC), 71(ⅡA), 182(ⅡB), 192(ⅡB), 330(ⅡA), 455(ⅡD), 483(ⅡB), 484(ⅡB), 491(ⅡA), 494(ⅡA), 496(ⅡA), 500(ⅡA), 514(ⅡB), 516(ⅡB), 520(ⅡB), 523(ⅡB), 530(ⅡB), V Aa, V Aa', V B, V C, V D, ⅡA, ⅡB	石椁(2), 刺片(50) 埴片(48), 石鏡(6) 土(2), 小形舟楫(3) 土鏡(1), 石鏡(1) UF(10), RFP(2)	骨片 土器 陶器	中 期	
3014	ⅢV11 ⅢV12 ⅢV16 ⅢV17	479	385	49	12.297	楕円形	瓦葺 ビツ	24基 柱穴土 壁に沿う	N664(ⅡB), 74(ⅡA), 75(ⅡA), 76(ⅡB), 77(ⅡB), 78(ⅡB), 231(ⅡA), 246(ⅡA), 246(ⅡA), 274(ⅡA), 279(ⅡA), 280(ⅡA), 298(ⅡA), 312(ⅡA), 323(ⅡA), 330(ⅡA), V Aa, V Aa', V B, V D	埴片(17), 埴片(58) 石鏡(10), 小形舟楫(2) UF(4), RFP(2)	骨片 土器	最 末	突川南台 (遺構18)
3015	ⅢV20 ⅢV21 ⅢV25	526	421	38	14.645	楕円形	地蔵石 4	13基 壁に沿う	N678(ⅡA), 80(ⅡA), 81(ⅡA), 82(ⅡB), 83(ⅡB), 84(ⅡB), 85(ⅡB), 86(ⅡB), 193(ⅡA), 194(ⅡB), 233(ⅡA), 236(ⅡA), 246(ⅡA), 274(ⅡA), 294(ⅡA), 318(ⅡA), 332(ⅡA), 337(ⅡA), 426(ⅡC), 483(ⅡD), 478(ⅡA), 492(ⅡA), 575(ⅡA), V Aa, V Aa', V B, V C, V D	石椁(2), 刺片(35) 埴片(105), 石鏡(12) 原石(1), 石鏡(4) 小形舟楫(3), 石鏡(3) 石鏡(4), UF(10) RF(4)	骨片 土器	最 末	
3017	ⅢV 4 ⅢV 5	403	319	19	8.932	楕円形	瓦葺 ビツ	12基 壁に沿う	N688(ⅡA), 88(ⅡA), 90(ⅡA), 91(ⅡA), 92(ⅡA), 93(ⅡA), 94(ⅡA), 95(ⅡB), 246(ⅡA), 274(ⅡA), 294(ⅡA), 318(ⅡA), 332(ⅡA), 337(ⅡA), 426(ⅡC), 483(ⅡD), 478(ⅡA), 492(ⅡA), 575(ⅡA), V Aa, V Aa', V B, V C, V D, ⅡA, ⅡB	原石(1), 刺片(15) 埴片(15), 石鏡(3) 小形舟楫(1)	骨 土器	最 末	
3018	ⅢV10	552	421	26	16.460	不整形四角	瓦葺 ビツ	10基 長方形配	N696(ⅡA), 97(ⅡA), 98(ⅡC), 100(ⅡA), 150(ⅡB), 161(ⅡB), 230(ⅡA), 275(ⅡA), 283(ⅡA), 306(ⅡA), 332(ⅡA), 336(ⅡA), 341(ⅡA), 342(ⅡC), 431(ⅡD), 455(ⅡD), 575(ⅡC), V Aa, V Aa', V B, V C, V D, ⅡA, ⅡB	石椁(2), 刺片(7) 埴片(11), 石鏡(1) 原石(1), 石鏡(1) 埴片(1), 刺片(2) 打製石(1), UF(3) RF(1)	骨片 土器	最 末	
3019	ⅢV 9 ⅢV10	480	460	32	18.387	扇長方形	—	9基 壁に沿う	N698(ⅡC), 99(ⅡA), 100(ⅡA), 101(ⅡA), 102(ⅡA), 103(ⅡA), 104(ⅡA), 105(ⅡB), 106(ⅡB), 107(ⅡA), 108(ⅡA), 215(ⅡA), 283(ⅡA), 292(ⅡA), 307(ⅡA), 309(ⅡA), 311(ⅡA), 313(ⅡA), 318(ⅡA), 332(ⅡA), 338(ⅡA), 339(ⅡA), 344(ⅡA), 345(ⅡA), 380(ⅡB), 426(ⅡC), 428(ⅡC), 431(ⅡD), 472(ⅡC), 478(ⅡA), 480(ⅡA), 498(ⅡA), 575(ⅡC), V A1a, V Aa, V Aa', V B, V C, V D, ⅡA, ⅡB	石椁(1), 刺片(41) 埴片(18), 石鏡(3) 打製石(1), 刺片(3) 河石(1), 土鏡(4) 小形舟楫(2) 磨製土器(2) 磨製土器(3)	骨片 土器	最 末	

第8表 前期末葉～中期初頭頃柱穴住居址一覽表(1)

遺構 No.	位置	面積 (㎡)			平面形	炉	柱穴	出土遺物			時期	備考	
		長軸	短軸	深さ				土器 (○)は副産	石器 (○)は土点	その他			
3021	BY15	419	282	18	(9,075)	楕円形	圓状 ピット	18基 不明	No.65(ⅡB1),95(ⅡB),98(ⅡC1),109(ⅡA1),110(ⅡA),111(ⅡA),112(ⅡA),113(ⅡB2),114(ⅡB1),115(ⅡB),116(ⅡB),117(ⅡC1),118(Ⅱ),197(ⅡA),274(ⅡA),275(ⅡA),280(ⅡA),292(ⅡA),311(ⅡA),312(ⅡA),313(ⅡA),318(ⅡA),323(ⅡA),426(ⅡC1),428(ⅡC1),431(ⅡC1),455(ⅡD1),478(ⅡA1),523(ⅡB1),ⅤA1a,ⅤAa7,ⅤAa7,ⅤAb,ⅤB,ⅤC,ⅤD,ⅡB	石器(2),銅片(28) 埴片(15),石皿(2) 磨石(1),刀子(4) 小形刃器(2) 石匙(1),磨石片(1) UF(16)	骨片 礎	前期	
3022	BY12	340	(271)	44	(6,293)	楕円形	—	—	No.119(Ⅱ),120(Ⅱ),121(Ⅱ),191(ⅡA1),314(ⅡA),494(ⅡA1),530(ⅡB1),ⅤB,ⅤC,ⅡB	銅片(2),埴片(6) 石匙(1),RF(1)	骨片 礎	中期	
3023	BY19	368	339	24	9,498	楕円形	圓状 ピット	10基 壁に沿う	No.122(Ⅱ),123(Ⅱ),124(ⅡB),125(ⅡA1),126(ⅡB2),310(ⅡA),311(ⅡA),455(ⅡD1),482(ⅡA2),492(ⅡA1),493(ⅡA1),ⅤB,ⅤC,ⅡA,ⅡB	銅片(21),埴片(405) 石器(2),磨石(1) 小形刃器(7),UF(4)	骨片 礎	中期	
3024	BY18	431	369	10	12,016	楕円形	地床炉	2基 壁に沿う	No.127(ⅡB2),128(ⅡB),129(ⅡB1),573(ⅡC),ⅤB	銅片(45),埴片(295) 石匙(5),小形刃器(2) LF(7),RF(2)	骨片 礎	中期	
3025	BY13	362	319	22	(7,523)	楕円形	地床炉	3基 壁に沿う	No.129(ⅡB1),130(Ⅱ),131(Ⅱ),132(Ⅱ),133(Ⅱ),274(ⅡA),319(ⅡA),495(ⅡA1),515(ⅡD1),517(ⅡB2),ⅤAb,ⅤB,ⅤC,ⅡB	石器(1),銅片(11) 埴片(18),石皿(1) 小形刃器(2),UF(7)	骨片 礎	中期	
3026	BY17	494	398	15	(12,237)	楕円形	—	3基 壁に沿う	No.133(Ⅱ),134(ⅡB1),135(ⅡA),136(Ⅱ),137(Ⅱ),138(Ⅱ),139(Ⅱ),140(Ⅱ),141(ⅡA),142(ⅡA),143(Ⅱ),145(ⅡB1),274(ⅡA),278(ⅡA),312(ⅡA),494(ⅡA1),495(ⅡA1),529(ⅡB1),537(ⅡB),ⅤA1a7,ⅤAa7,ⅤB,ⅤC,ⅤD,ⅡA,ⅡB	銅片(13),埴片(25) 石匙(5),小形刃器(3) UF(2),RF(1)	骨片 礎	中期	
3027	BY18	(543)	(408)	23	(12,550)	楕円形	地床炉	3基 壁に沿う	No.129(ⅡB1),144(Ⅱ),145(ⅡB1),494(ⅡA1),495(ⅡA),498(ⅡA2),512(ⅡA1),515(ⅡB2),573(ⅡC),574(ⅡA),ⅤC,ⅤD,ⅡA,ⅡB	銅片(13),埴片(37) 石匙(1),UF(3)	骨片 礎	中期	
3028	BY22	595	513	38	22,948	楕円形	地床炉	—	No.146(ⅡB1),147(ⅡB1),148(ⅡC),149(Ⅱ),150(Ⅱ),151(ⅡA),152(ⅡA1),231(ⅡB2),143(ⅡC2),445(ⅡC2),448(ⅡD1),464(ⅡD2),490(ⅡA1),495(ⅡA1),516(ⅡB1),527(ⅡB1),529(ⅡB1),537(ⅡB),ⅤA1a7,ⅤAa7,ⅤB,ⅤC,ⅤD,ⅡA,ⅡB	石器(1),銅片(11) 埴片(13),石皿(4) 刀子(1),小形刃器(1) 石匙(1)	骨片 礎	中期	
3029	BY17	483	459	36	(10,962)	楕円形	地床炉	6基	No.133(ⅡB1),154(ⅡB1),155(ⅡA),312(ⅡA),495(ⅡA1),498(ⅡA2),520(ⅡB1),ⅤB,ⅤC,ⅡA,ⅡB	銅片(3),埴片(9) 小形刃器(1),UF(1)	骨片 礎	中期	
3030	BY10	413	341	34	9,733	楕円形	—	11基 壁に沿う	No.88(ⅡA),98(ⅡC1),156(ⅡA),157(ⅡA),158(ⅡB),159(ⅡB),160(ⅡA),161(ⅡB2),292(ⅡA),311(ⅡA),332(ⅡA),333(ⅡA),339(ⅡA),344(ⅡA),426(ⅡC1),427(ⅡC1),428(ⅡC1),ⅤA1a7,ⅤAa7,ⅤB,ⅤC,ⅤD,ⅡB	銅片(27),埴片(53) 石匙(3),石皿(1) UF(1)	骨片 礎	前期	

第9表 前期末葉～中期初頭竪穴住居区一覧表(2)

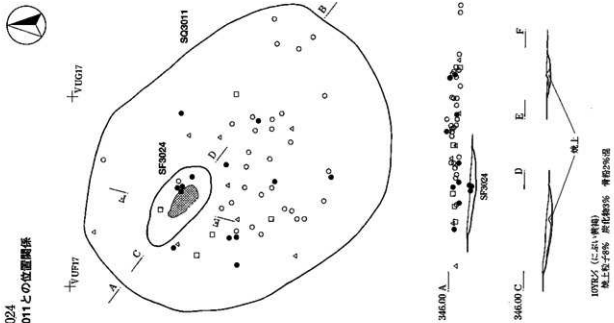
2. 焼土址

調査段階では149基を数えたが、整理作業の段階で整理統合され140基が焼土址として認識される(第11～14表)。このうち、4基が土坑として調査され、整理作業の段階で焼土址と把握した。平面分布では、視覚的にも集中するブロックが幾つか捉えられ、構築・利用の際に何らかの規制が働いていたことが予想される(第33図)。中でも、SB3019周辺、SB3010とSB3013にはさまれた部分の2か所は、密な分布を示している。火床面の垂直分布からは、二つのまとまりが捉えられるものの、伴出遺物が少ないため、即座に時期差と認識することはできない。

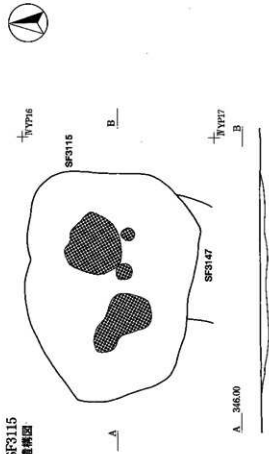
焼土址の規模・形態はまちまちであるが、火床面という観点からすると、掘り込み底面に火床面が確認されるもの54基、火床面が検出面となったもの64基、火床面が検出されなかったもの14基、不明8基となる。4割近く掘り込みが確認されたことから、機能的には地面を掘りくぼめ火を焚いた施設とすることができよう。ただ、火床面が検出面となったものが5割弱あり、前期中葉の焼土址と類似した状況で、消化の際に周囲の土を利用するといったような焼土址の機能的側面を、ここでも推測させる。

また、火床面に見られる被熱痕跡は黄褐色、赤褐色、暗赤褐色に三大別される。色の変化は、被熱の度合い、時間等によって色の差が生じることが推測される。本遺跡は冬季にも調査が実施されたこともあって、ドラム缶を利用した焚火を行っていた。調査の進展とともにドラム缶も移動していきわけたが、ドラ

SF3024
SQ3011との位置関係

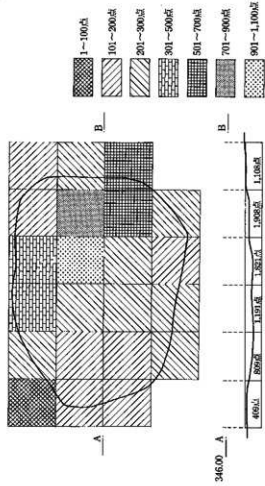


SF3115
遺構図



第51図 前期末葉～中期初頭焼土址(2)

水差選別資料による細線輪片分布図



ム缶の置かれていた部分を観察すると、中央から黄褐色、赤褐色、暗赤褐色という順で同心円状に被熱痕跡（＝焼土）が形成されていることが確認された。もちろん焼土址と同一条件下で生成された被熱痕跡ではないにしろ、色により三大別された被熱痕跡がセット関係にあったことは注目しておきたい。実際に、SF3056（第50図）やSF3143（第55図）など6基の焼土址では、3色の被熱痕跡がセットで、同心円状に分布している。さらに、中央の黄褐色を除いた2色の被熱痕跡が同心円状に分布する焼土址が、SF3022（第65図）やSF3027（第64図）など21基ある。これらの焼土址の被熱痕跡は、平面分布のみならず、垂直分布＝断面においても同心円状に分布している。このような状況は、本遺跡の竪穴住居址の炉（SB1173・3013等）についても同様であり、屋内外を問わず、同様な被熱痕跡が生成されたといえよう。以上のことから、1回の使用（火床の掻き出しや周辺の土による消化など手を加えない使用期間）につき3色の被熱痕跡セットが同心円状に生成されることが想定される。したがって、3色セットで検出されるものについては最終使用時を示しており、3色セットに欠落が生じているものについては使用後に何等かの手が加えられたと考えられることなどといった解釈が導き出される。

本遺跡の焼土址の特徴の一つとして、土層注記には便宜的に「骨粉」としたが、ミリメートル単位の粉碎された焼けた獣骨片が大量に伴うことがあげられる。後述のように、獣骨が燃料として用いられたことが容易に想定される。代表的な例としてSF3115が上げられる。第51図は、水洗選別資料に基づいた分布図で、獣骨片の総点数は7,245点にも及ぶ。第50図はSQ3026の水洗選別資料であるが、獣骨片の総点数302点で、焼土址（SF3056・3057）に近いまたは重なる部分に多く分布している。あくまでも獣肉が食料としての第一義的存在であり、獣骨を単なる残滓のみとしては捉えきれないだろう。残滓とした場合、大型の獣骨が遺存すると考えるからである。

一方、火を利用した対象物として検出されたものには、炭化種実（SF3024・3107・3115・3137・3143）と赤色顔料（SF3028・3044）がある。後者については、本遺跡の場合、竪穴住居址（SB1173・3010・3013）や遺構外からも出土しているが、顔料を精製していく過程で、焼土址が利用されたことは想像に難くない。この顔料については、藤川鉄テクノロジーに分析を委託し、その結果、「当初、顔料塊と思われた赤色塊は、顔料やその原料塊ではない。赤色の弁柄をまぶした粘土（胎土）小塊である。」という報告を得ている。ベンガラを顔料として用いるためには、良く焼いて純度を高める精製工程が必要であり（徳永1994）、本遺跡で最も多い遺構数を誇る焼土址が、これに関与していたことは十分考えられる。顔料の出土、赤色塗彩の土器、焼土址の存在と、有機的な関連が想定されるが、さらに分析を深める必要があり、今後の課題の一つである。

他遺構との関連を見ると、遺物集中との関係が最も注意される。本遺跡の場合、住居址の炉と焼土址が極めて類似した形態であり、遺物集中が竪穴覆上の遺物、焼土址が炉という想定が成り立つからである。SQ3026とSF3056・3057（第50図）やSQ3011とSF3024（第51図）は、まさにその関係を指摘できる遺構群である。後者については、遺物垂直分布と焼土址断面に差が見られるが、竪穴覆土中に遺物が集中する住居址もあり、否定する材料とはならない。しかし、両者とも周囲に柱穴と想定されるピットが検出されておらず、このことを以て、竪穴住居址とは見做さない事とする。それぞれの焼土址と遺物集中は、屋外において緊密な関係を持つものと解釈しておきたい。

以下、焼土址については一覧表を参照されたい。

遺跡 No.	位置	範囲 (m)				平面形	被熱痕跡の状況	出土遺物			備考
		長軸	短軸	大径溝ま での深さ	掘り込み の深さ			土器 ○内は数量	石器 ○内は点数	その他	
1001	ⅡK11 ⅡE16	150	103	12	12	不整形 楕円形	痕跡不明ながら底部に赤褐色・暗赤褐色の被熱痕跡あり	—	片(1), 碎片(3)	骨片	焼土がブロック状に流入
1002	ⅡE11	174	93	9	9	不整形 楕円形	痕跡不明ながら底部に暗赤褐色の被熱痕跡あり	VB, VC, VE1, ⅡA, ⅡB	片(1), 碎片(1) 台石・石皿(2)	骨片	焼土がブロック状に流入
1003	ⅡE11	126	85	12	12	不整形 楕円形	痕跡不明ながら底部に赤褐色・暗赤褐色の被熱痕跡あり	No.541(Ⅱ), VB, ⅡB, ⅡC, ⅡD	石錐(1), 片(3), 碎片(3) 小形刀(1), UF(1)	骨片	焼土がブロック状に流入
1004	ⅡE 6	100	76	—	9	不整形 楕円形	なし	VC	片(2), 碎片(6), 石皿(1)	骨片	焼土がブロック状に流入 焼土層被
1006	ⅡE 1	125	125	25	15	不整形 円形	なし	No.569(ⅡA), V Aa1, VC ⅡA, ⅡB, ⅡC, ⅡD, ⅡE, ⅡF	片(1), 碎片(4)	骨片	焼土がブロック状に流入
1007	ⅡE 1 ⅡE 2	147	120	—	25	楕円形	痕跡不明ながら底部に赤褐色・暗赤褐色の被熱痕跡あり	No.162(ⅡB1), VB, VB	磁石(1), 片(1), 碎片(11) UF(1)	骨片	焼土がブロック状に流入
1008	ⅡE19	(63)	(40)	0	7	不整形	被熱痕跡のない部分を中央に赤褐色・暗赤褐色の被熱痕跡がめぐる	—	—	骨片	—
1009	ⅡK19	(47)	(40)	0	6	不整形	被熱痕跡のない部分を中央に赤褐色・暗赤褐色の被熱痕跡がめぐる	—	—	骨片	—
1010	ⅡE20	(47)	(45)	0	11	不整形	被熱痕跡のない部分を中央に赤褐色・暗赤褐色の被熱痕跡がめぐる	—	—	骨片	—
1011	ⅡK19	(46)	(39)	0	7	不整形	被熱痕跡のない部分を中央に暗赤褐色の被熱痕跡がめぐる	—	—	骨片	—
3010	VU 9	105	93	—	21	不整形	なし	—	—	—	プランが一定しない 被熱痕跡・焼土層被・ 炭化物分布とも風刺性が ない
3011	VU 9 VU14	161	45	—	11	不整形	なし	—	—	—	プランが一定しない 被熱痕跡・焼土層被・ 炭化物分布とも風刺性が ない
3012	VC14	244	242	0	26	不整形 楕円形	暗赤褐色の被熱痕跡	—	—	—	プランが一定しない 被熱痕跡・焼土層被・ 炭化物分布とも風刺性が ない
3014	VU11	48	48	0	10	不整形 楕円形	暗赤褐色の被熱痕跡	—	—	—	骨片
3015	ⅡE10	11	5	0	0	楕円形	被熱痕跡(色不明)のみ検出	—	—	—	—
3016	VU18	13	8	0	0	楕円形	暗赤褐色の被熱痕跡のみ検出	—	—	—	—
3020	VU23	100	86	0	25	不整形 楕円形	中央の掘り込み周囲に赤褐色(内側)・暗赤褐色(外側)の被熱痕跡	—	片(1), 碎片(4)	骨片	被熱痕跡の中央に焼土・炭化物を混入する 掘り込みの 最下層に土層被
3021	VU19	36	23	0	0	楕円形	被熱痕跡(色不明)のみ検出	—	—	—	—
3022	VU17	108	94	12	12	不整形 楕円形	赤褐色の被熱痕跡の範囲及び 下部に暗赤褐色の被熱痕跡	—	片(3)	骨片	—
3023	VU17 VU22	(148)	72	8	8	不整形 楕円形	底部に被熱痕跡(色不明)有	—	片(2), 碎片(111)	骨片	水洗選別試料採取
3024	VU22	97	46	6	6	長楕円形	底部中央に被熱痕跡(色不明)有	文様不明	片(2), 碎片(500)	骨片	水洗選別試料採取
3025	VU 3 VU 4 VU 8 VU 9	139	106	—	7	不整形 楕円形	なし	—	—	—	水洗選別試料採取
3027	ⅡA 2	113	83	2	7	楕円形	赤褐色の被熱痕跡の範囲及び 下部に暗赤褐色の被熱痕跡	No.241(VA1a7), 496(ⅡA1) VB	片(3), 碎片(5), 石皿(1)	骨片	—
3028	VU22	158	93	5	11	長楕円形	赤褐色の被熱痕跡の範囲及び 下部に暗赤褐色の被熱痕跡	No.179(ⅡC), 489(ⅡA1)	原石(2), 片(15) 卵石(10), 小形刀(1) 石錐(1)	骨片	—
3029	ⅡV20	62	48	0	1	不整形	底部にブロック状に赤褐色の被熱痕跡	—	—	—	—
3030	VU 3 VU 4	249	232	21	34	楕円形	底部に赤褐色, その周辺に暗赤褐色の被熱痕跡	—	—	—	—
3031	VU 3 VP23	182	67	17	17	不整形	底部・壁面に暗赤褐色の被熱痕跡	—	—	—	—
3032	VU 3 VU 4	262	93	4 45 53	91	長楕円形	赤褐色・暗赤褐色の被熱痕跡	—	—	—	カマド構造に類似した 状況
3033	ⅡV15 ⅡV20	113	97	0	10	不整形 楕円形	赤褐色の被熱痕跡の範囲及び 下部に暗赤褐色の被熱痕跡	No.163(ⅡA), 192(ⅡA2) 224(VAa7), VA1a7	片(10), 碎片(14) 石皿(2), 小形刀(2) UF(1)	骨片	—
3034	ⅡA 1	62	56	0	6	不整形	赤褐色の被熱痕跡	—	—	—	—
3035	VP24	33	21	—	9	不整形	なし	—	—	—	—
3036	VU21	150	103	0	12	楕円形	底部中央から外, 赤褐色の被熱痕跡, 暗赤褐色の被熱痕跡を いう層で同心円状に分布	No.164(Ⅱ), 165(Ⅱ) 491(ⅡA1), 496(ⅡA1) VC, ⅡA, ⅡB	片(6), 碎片(11), UF(1)	骨片	—
3037	VU22	70	44	5	5	不整形 楕円形	暗赤褐色の被熱痕跡	—	—	—	—
3038	VU22	82	(40)	5	5	不整形	壁面に被熱痕跡(色不明)	—	—	—	—
3040	ⅡE 5	112	82	0	6	不整形 楕円形	底部中央から外, 赤褐色の被熱痕跡, 暗赤褐色の被熱痕跡と いう層で同心円状に分布	—	—	—	骨片

第10表 前期末葉～中期初頭焼土址 (SF) 一覧表 (1)

第4章 遺構

遺構 No.	位置	規模(m)			平ら面	被熱炭跡の状況	出土遺物			備考	
		長軸	短軸	埋り込みの深さ			土層 (1)内は類型	石層 (1)内は点数	その他		
3042	ⅡY24	37	23	0	7	楕円形	赤褐色の被熱炭跡の周囲及び下部に暗赤褐色の被熱炭跡	—	—	—	—
3043	ⅡY20	36	28	0	10	楕円形	ブロック状に被熱炭跡(色不明)	No167(ⅡB1),ⅡBⅡ	石層(1)	—	骨片
3044	ⅡA 2	134	102	5	5	不整形	灰皿から壁面にかけて被熱炭跡(色不明)	No196(ⅡB1),492(ⅡA1)	片(1),骨片(1)	—	網罟
3046	ⅡA 6	107	81	0	3	楕円形	中央に赤褐色の被熱炭跡	—	骨片(1),小形刀鋸(1)	—	—
3046	ⅡA 2	81	70	3	12	不整形	中央部の被熱炭跡の周囲及び下部に暗赤褐色の被熱炭跡	No328(ⅡA2a7),ⅡB	UF(1)	—	—
3047	ⅡC14	238	155	—	32	不整形	なし	—	—	—	—
3048	ⅡC13	50	21	—	9	不整形	なし	—	—	—	—
3049	ⅡU23	95	23	—	7	不整形	なし	—	—	—	—
3051	ⅡA 6	101	55	9	9	長楕円形	灰皿に暗赤褐色の被熱炭跡	—	—	—	—
3052	ⅡU21	120	64	4	6	長楕円形	被熱炭跡はないが黄土ブロックの分布をもって穴塚面とする	ⅡAa7	—	—	—
3053	ⅡU21 (141)	118	0	8	楕円形	赤褐色の被熱炭跡の周囲及び下部に暗赤褐色の被熱炭跡	No59(ⅡA1),ⅡAa7	—	—	—	—
3054	ⅡU21	140	100	0	4	楕円形	赤褐色の被熱炭跡	No255(ⅡA1a7)	—	—	—
3054	ⅡU 3 ⅡU 8	120	45	0	16	長楕円形	赤褐色の被熱炭跡の周囲及び下部に暗赤褐色の被熱炭跡	—	—	—	—
3056	ⅡE 3	128 (106)	12	12	楕円形	近所中央から黄褐色・赤褐色・暗赤褐色という順で同心円状に被熱炭跡が分布	—	—	—	—	—
3057	ⅡE 5	160	105	19	27	楕円形	近所中央から黄褐色・赤褐色・暗赤褐色という順で同心円状に被熱炭跡が分布	No329(ⅡB1),532(ⅡB)ⅡB,ⅡA	片(8),骨片(38),石層(1)UF(1)	—	骨片
3058	ⅡU 7 ⅡU 8	49	24	0	4	不整形	暗赤褐色の被熱炭跡	—	—	—	骨片
3059	ⅡU 7 ⅡU12	37	19	0	3	不整形	暗赤褐色の被熱炭跡	—	—	—	骨片
3060	ⅡY24	128	121	0	10	不整形	赤褐色の被熱炭跡の周囲及び下部に暗赤褐色の被熱炭跡	—	—	—	骨片
3061	ⅡA 1 (57)	51	0	7	楕円形	暗赤褐色の被熱炭跡	—	—	—	—	骨片
3064	ⅡY25 (106)	106	13	15	楕円形	近所中央に赤褐色・黄褐色に暗赤褐色の被熱炭跡	No163(ⅡD1),文層不明	—	—	—	骨片
3065	ⅡU24	71	58	0	0	不整形	暗赤褐色の被熱炭跡	—	—	—	—
3066	ⅡA 2	20	47	0	6	不整形	暗赤褐色の被熱炭跡	—	—	—	骨片
3067	ⅡA 2	129	88	0	8	不整形	赤褐色の被熱炭跡の周囲及び下部に暗赤褐色の被熱炭跡	ⅡD1	—	—	骨片
3068	ⅡY25	101	78	9	9	楕円形	近所中央から黄褐色・赤褐色・暗赤褐色という順で同心円状に被熱炭跡が分布	—	—	—	骨片
3070	ⅡA 2	74	30	0	0	不整形	暗赤褐色の被熱炭跡	—	—	—	骨片
3071	ⅡA 2	120	118	0	0	不整形	暗赤褐色の被熱炭跡	ⅡB	—	—	骨片
3073	ⅡA 1 (56)	52	0	4	楕円形	赤褐色の被熱炭跡の周囲及び下部に暗赤褐色の被熱炭跡	—	—	—	—	骨片
3074	ⅡA 1	118	64	0	5	長楕円形	赤褐色の被熱炭跡の周囲及び下部に暗赤褐色の被熱炭跡	—	—	—	骨片
3075	ⅡA11 (88)	85	12	12	楕円形	暗赤褐色の被熱炭跡	—	—	—	—	骨片
3076	ⅡE15	135	92	0	0	楕円形	赤褐色の被熱炭跡の周囲に暗赤褐色の被熱炭跡	—	—	—	—
3077	ⅡU22	97	74	3	5	楕円形	赤褐色の被熱炭跡	No337(ⅡA2a7)	—	—	骨片
3078	ⅡE15 ⅡA11	(89)	6	0	0	楕円形	赤褐色の被熱炭跡の周囲に暗赤褐色の被熱炭跡	—	—	—	—
3081	ⅡA 2 ⅡA 7	79	52	0	3	不整形	暗赤褐色の被熱炭跡	—	—	—	—
3082	ⅡA 6	134	125	10	10	不整形	赤褐色の被熱炭跡の周囲に暗赤褐色の被熱炭跡	—	—	—	—
3083	ⅡA 6	118	89	2	2	楕円形	暗赤褐色の被熱炭跡	—	—	—	—
3084	ⅡA 6	163	134	0	0	楕円形	暗赤褐色の被熱炭跡	No337(ⅡA2a7),ⅡAa7	—	—	—
3085	ⅡA 2	51	45	0	0	不整形	暗赤褐色の被熱炭跡	—	—	—	骨片
3086	ⅡA 2	82	56	0	0	楕円形	暗赤褐色の被熱炭跡	—	—	—	骨片
3087	ⅡA 2 ⅡA 7	75	48	0	0	楕円形	暗赤褐色の被熱炭跡	—	—	—	骨片
3089	ⅡA 6 (14)	(88)	5	5	楕円形	壁面に暗赤褐色の被熱炭跡	—	—	—	—	骨片
3092	ⅡK 4	46 (15)	0	0	0	楕円形	暗赤褐色の被熱炭跡	—	—	—	骨片
3083	ⅡY25	34	27	0	5	不整形	暗赤褐色の被熱炭跡	—	—	—	骨片
3094	ⅡU11	104	71	不明	0	楕円形	不明	—	—	—	—
3095	ⅡY24 ⅡY 4	(247)	109	0	0	長楕円形	暗赤褐色の被熱炭跡	—	—	—	—
3096	ⅡY 4	125	86	10	10	不整形	赤褐色の被熱炭跡	—	—	—	—
3097	ⅡY24 ⅡY 4	173	115	12	12	不整形	赤褐色の被熱炭跡	No35(ⅡB)	—	—	—
3098	ⅡY 3	114	72	10	10	長楕円形	壁面に暗赤褐色の被熱炭跡	ⅡAa7,ⅡB	—	—	—
3099	ⅡY 3	103	82	0	0	楕円形	被熱炭跡有(色不明)	—	—	—	—
3100	ⅡY13	190	128	0	27	長楕円形	暗赤褐色の被熱炭跡	—	—	—	—
3101	ⅡY 4	158 (90)	11	11	長楕円形	壁面に暗赤褐色の被熱炭跡	—	—	—	—	—
3102	ⅡY 8	170	116	10	10	楕円形	灰皿に被熱炭跡(色不明)	No472(ⅡD3)	—	—	—
3103	ⅡY 3 ⅡY 8	(115) (122)	15	15	圓丸方形	壁面に暗赤褐色の被熱炭跡	—	—	—	—	—

第11表 前期末築～中期初頭焼土址(SF) 一覧表(2)

遺構 No	図記	幅員(m)			平面形	波状痕跡の状況	出土遺物			備考			
		長軸	短軸	穴床面までの深さ			土器	石器	その他				
3104	MY11	84	61	0	9	楕円形	赤褐色の波状痕跡	—	文様不明	埴片(1)	骨片	—	
3105	VP16	155	106	13	13	楕円形	暗赤褐色の波状痕跡	—	—	—	—	—	
3106	MY 3	32	41	0	12	楕円形	波状痕跡(色不明)	—	—	—	—	SF3116→SF3106	
3107	MY 9	119	121	12	12	楕円形	底面に暗赤褐色の波状痕跡	No328(VA2b-f)	—	小形刃片(1)	—	炭化種子	
3108	MY14	39	44	0	6	楕円形	暗赤褐色の波状痕跡	—	—	—	—	—	
3109	MY21	46	29	10	10	楕円形	底面に波状痕跡(色不明)	—	—	片(3), 埴片(7)	—	骨片	
3110	MY19	165	109	0	0	楕円形	暗赤褐色の波状痕跡	—	—	片(2), 石礫(1)	—	—	
3111	MY 9	190	131	18	18	楕円形	底面に赤褐色の波状痕跡	No305(VB), 307(VA1b-f) 311(VA1b-f), 428(VC1) 489(MA2), VAa, VB	—	片(3), 埴片(1)	—	埴片 骨片	
3112	MY 9	140	94	14	14	楕円形	底面に赤褐色の波状痕跡	No456(VD1), VB	—	—	—	骨片 骨片	
3113	MY 4 MY 9	158	100	30	30	楕円形	底面に赤褐色の波状痕跡	No169(VA1a-f) 313(VA1b-f), 428(VC1) 428(VC1), VB, VC	—	片(1)	—	骨片 骨片	
3114	MY 4 MY 9	156	121	—	25	楕円形	なし	No39(VA2a-f), 107(VAa-f) 168(VAa-f), 222(VA1a-f) 338(VA2a-f), VAa-f, VB	—	石礫(1), 片(17), 埴片(8) 刃片(1), UF(1)	—	骨片 骨片 骨片	
3115	MY19	212	179	0	10	不整形 楕円形	暗赤褐色の波状痕跡	No483(MA1), 515(MB2) 522(MB1), 526(MB1), VAa VB, VC, VD, VB	—	—	—	骨片 骨片 骨片 炭化種子	
3116	MY 3	82	78	5	5	不整形	掘り込み外にまで波状痕跡 (色不明)が及ぶ	No402(VH)	—	—	—	—	
3117	MY13	56	42	—	10	楕円形	なし	—	—	—	—	骨片	
3119	MY 7	103	103	0	0	不整形	暗赤褐色の波状痕跡	—	—	—	—	骨片	
3120	MY12	59	44	不明	12	楕円形	不明	—	—	—	—	骨片	
3121	MY19	92	76	3	3	楕円形	底面に暗赤褐色の波状痕跡	—	—	—	—	骨片 SB3203の覆土	
3122	MY 9	159	131	17	17	楕円形	底面から壁面にかけて暗赤褐色の波状痕跡	VAa, VAc, VR, VC, VD	—	片(5), 石礫(1), 磨石(1) 凹石(1), UF(1), RF(1)	—	骨片 骨片	
3123	MY 9	109	98	12	12	楕円形	底面から壁面にかけて暗赤褐色の波状痕跡	—	—	片(7), 埴片(1), 石礫(1) 打製石片(1)	—	—	
3124	MY 9	145	107	11	11	楕円形	底面から壁面にかけて暗赤褐色の波状痕跡	No98(VC1), 99(VA2a)	—	埴片(1)	—	—	
3125	MY12 MY13	156	125	—	13	不整形 楕円形	なし	No191(MA1), 274(VA1b-f) 515(MB2), VA1b-f, VC, VB	—	片(1), 埴片(6), UF(2)	—	骨片 骨片	
3126	MY 8	202	154	0	19	不整形 楕円形	暗赤褐色の波状痕跡	VAa, VD	—	片(150), 埴片(118) 石礫(2), RF(1)	—	骨片 骨片 骨片	
3127	MY 9	133	81	不明	11	不整形 楕円形	不明	—	—	文様不明	埴片(1)	骨片	
3128	MY14	174	106	0	11	不整形 楕円形	なし	VAa-f	—	—	—	骨片	
3130	MY 7	77	59	0	6	楕円形	波状痕跡(色不明)	—	—	—	—	—	
3131	MY19	62	42	0	0	楕円形	波状痕跡(色不明)	—	—	—	—	—	
3132	MY16	70	44	0	0	楕円形	波状痕跡(色不明)	—	—	—	—	—	
3133	MY16 MY17	223	128	0	87	楕円形	壁面に暗赤褐色の波状痕跡	VAa-f	—	—	—	—	
3134	MY10	168	75	3	3	長方形	波状痕跡(色不明)	—	—	—	—	骨片	
3135	MY10	49	43	4	4	不整形	底面に暗赤褐色の波状痕跡	—	—	—	—	骨片	
3136	MY 4 MY 9	209	106	—	15	長方形	なし	No167(VAa-f), 169(VAa-f) VB	—	片(1), 埴片(2), 石礫(1)	—	—	
3137	MY 4 MY 5 MY 9 MY10	208	87	9	33	長方形	壁面部分と掘り込まれる部分に赤褐色の波状痕跡	No100(VA1a-f), 106(VD1) 107(VA2a-f), 273(VA1b-f) 283(VA1a-f), 291(VA1a-f) 313(VA1b-f), 322(VA2a-f) 428(VC1), VAa-f, VAa VA, VB, VC, VD, VA	—	石礫(2)	—	—	炭化種子 (クヌシ)
3138	MY13	60	63	0	6	楕円形	なし	—	—	—	—	骨片	
3139	MY12 MY17	82	82	11	11	楕円形	底面に赤褐色の波状痕跡	—	—	—	—	骨片	
3141	MY18	108	95	0	8	楕円形	なし	No133(VB), 496(MA1), VB	—	—	—	骨片 骨片	
3142	MY 4	157	118	6	6	楕円形	底面中央に赤褐色の波状痕跡	—	—	—	—	—	
3143	MY 9 MY10	162	152	21	21	円形	底面に黄褐色・赤褐色・暗赤褐色という帯状の同心円状に波状痕跡が分布	No283(VA1a-f) 332(VA2a-f), 314(VA3d-f) 466(VD2), VAa, VA, VA, VB VC, VD	—	片(7), 埴片(4), 石礫(2)	—	骨片 骨片 炭化種子 (クヌシ)	
3144	MY17	81	63	0	10	楕円形	暗赤褐色の波状痕跡	—	—	—	—	石礫(2)	
3145	MY14	146	118	—	21	楕円形	なし	No291(VA1a-f), VAa-f VAa-f, VAa	—	—	—	骨片	
3146	MY 9	48	42	不明	0	楕円形	不明	—	—	—	—	—	
3147	MY19 MY24	175	127	—	10	楕円形	なし	VAa-f	—	—	—	骨片	
3148	MY 9	127	78	6	6	楕円形	底面に赤褐色・暗赤褐色の波状痕跡がブロック状に点在	—	—	—	—	—	
3149	MY19	22	14	0	3	不整形	赤褐色の波状痕跡	—	—	—	—	骨片	
3150	MY17	148	109	0	15	楕円形	暗赤褐色の波状痕跡	—	—	—	—	—	

第12表 前期末葉～中期初頭焼土上(SF) 一覧表 (3)

遺構No.	位置	規模(m)				平面形	被熱痕跡の状況	出土遺物			備考
		長径	短径	大塚面までの深さ	堀の込みの深さ			土器 (内は類型)	石器 (内は点数)	その他	
3131	WV10 BY 9	(143)	(75)	37	37	(堀内形)	底面に赤褐色の被熱痕跡	—	—	—	—
3132	WY 4 BY 9	151	(115)	10	10	不明	底面に赤褐色の被熱痕跡	—	—	骨片	焼土に小ピット群
3133	WY 4 BY 5	88	56	0	0	楕円形	底面に赤褐色の被熱痕跡	—	—	—	—
3154	VU21	105	71	0	0	不取 楕円形	赤褐色の被熱痕跡の周辺及び 下部に黒赤褐色の被熱痕跡	—	—	骨片	—
3155	WA 1	68	51	0	3	楕円形	赤褐色の被熱痕跡	—	—	骨片	—
SK 3144	WV17	132	75	4	16	不取 楕円形	底面に赤褐色、その周辺に地 表褐色の被熱痕跡	—	—	骨片 土器(3)	—
SK 3163	VK11	44	39	不明	8	不整形	不明	—	—	骨片 土器	石部が塚に埋?銅配置 詳細不明
SK 3165	VP 6	278	162	12	12	不整形	底面に赤褐色の被熱痕跡	—	—	骨片	複数遺構の名残か?
SK 3224	WV 7	157	92	13	13	長楕円形	底面に赤褐色の被熱痕跡	—	—	骨片(4)	—

第13表 前期木葉～中期初頭焼土址(SF)一覽表(4)

3. 遺物集中

掘り込みは明確ではないものの、遺物の分布が視覚的にまとまり捉えられたものを遺物集中とした。調査段階では45か所を数えたが、整理事業の段階で住居址に含めて考えるなど整理統合され、34か所が遺物集中として認識される(第15・16表)。平面分布では、住居址の周辺部に集中する傾向が窺え、焼土址が密に分布する範囲とは重ならない。土器片がすべてのものに少なからず含まれているので、時期については一覽表に記した。内訳は、前期木葉1(下島式期):6、前期木葉2(暗ヶ峯式期):2、中期初頭:26である。一覽表に絶対高を記したが、おおむね、高い標高をもつものが中期初頭に位置付けられ、低い標高のものが前期木葉1に位置付けられる。遺物の種類に捉われず認識していったので、検出面での遺物組成には、土器片を主体とするもの、焼けた獣骨片を主体とするものなどといった偏差が見られる。なお、遺物組成が二通りあるのは、「骨」が前項で記したのと同じく、ミリメートル単位の焼けた獣骨片が主体となるため、図面上に点を落とすのみで遺物として取り上げてこなかった例がほとんどのためである。

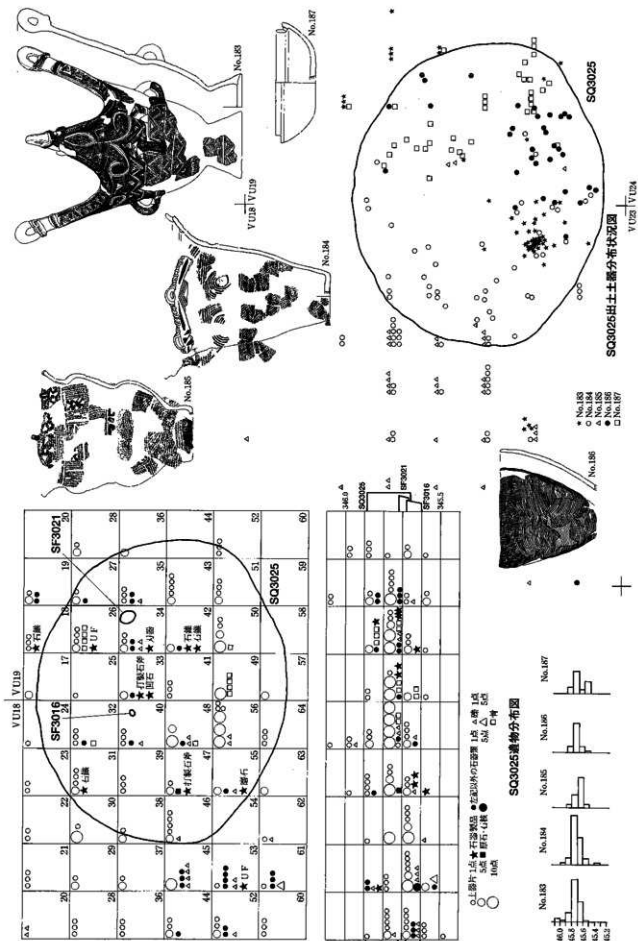
土器片を主体とする遺物集中は、土器の出土状況から、以下のパターンが読み取れる。

- ① 1個体の土器が破片の状態での主体的に分布するもの(SQ3011・3016・3022・3023・3024・3029・3063)
- ② 複数個体の土器が破片の状態での主体的に分布するもの(SQ3025)
- ③ 他遺構と1個体の土器片の主体的分布を共有するもの(SQ3023・3028)
- ④ 複数個体の土器片がそれぞれ均一的に少数分布するもの(SQ3017・3038・3041・3042・3051)

①とした遺物集中は、SQ3011はNo.173、SQ3016はNo.178、SQ3022はNo.181、SQ3023はNo.180、SQ3024はNo.182、SQ3029はNo.190、SQ3063はNo.209がそれぞれ出土しており(第190・191・194・196図)、時期的に見ても前期木葉から中期初頭に該当する。

②としたSQ3025は、No.183～187の5個体の土器が破片の状態での主体的に分布する。いずれも暗ヶ峯式期の土器であるが、それぞれ別々の文様・器形を有している。しかも、個体によって分布範囲も異なる点、注目される(第52図)。SQ3025は当初、その規模から竪穴住居址を想定したが、掘り込み等確認されず、遺物垂直分布範囲の下面に焼土址(SF3016・3021)が検出されたものの(第52図)、住居址と認定するには至らなかった。遺構分布が希薄な部分に位置しており、同時期における異なった土器が一定の区域にそれぞれ特有の分布範囲をもつことなど、本址を特別視する状況が窺える。土器の中には、トロフィー形土器や浅鉢形土器が含まれ、祭祀的な色合いが見え隠れする。いずれにしても、単なる廃棄ブロックとは考えられず、何かの意図に基づいて本址は形成されたと捉えておきたい。

③としたSQ3023・3028は、多遺構間接合土器と捉えた土器(No.484・282)の分布の極を有する遺構で、



第52図 前期木葉—中期初頭遺物集中 (1)

前者はSB3013 (第53図)、後者はSK3137 (第199図)とそれぞれ土器片分布の極を共有する。このうち、SQ3023は、前記したようにNo.180 (ⅧB 2) が主体的に分布することから中期初頭の所産と考えられる。SB3013も中期初頭の竪穴住居址であり、分有するNo.484 (Ⅵ) のみが前期末葉という時期を示している。No.484の接合状況を見ると、土器を縦に2分割し、十数m離れた地点にそれぞれを廃棄(?)したことが窺える。このことは、SB3013の埋没時期とSQ3023に遺物が集められた時期とがほぼ同時期であることを示すばかりでなく、No.484自体が、土器編年上、中期初頭に組み込まれるか、今回中期初頭とした土器群及び遺構群が前期末葉に組み込まれるかというような大きな問題をほらんでいる。後者については後述するとして、1個体の土器を分割共有(分割廃棄)する背景について、類例を集成し分析・検討する必要があると考える。

以下、遺物集中については一覽表を参照されたい。

遺物 No.	図号	発掘(m)			絶対深(m)	遺物組成比率			Ⅰ内は検出		出土遺物				時期	備考
		長軸	短軸	厚さ		土器	石器	骨	土器	Ⅰ内は検出	石器	Ⅰ内は検出	その他			
3001	ⅡY24	296	248	40	345.80~346.20	11 (34)	29 (0)	7 (0)	0 (58)		No.495(ⅧA1), 509(ⅧA1), V.Aa, ⅧB	片(2), 砂片(19) 石礫(1)	骨片 土器	中 初		
3002	ⅡY24 ⅡY25	346	317	30	345.90~346.20	54 (20)	46 (27)	0 (17)	0 (36)		No.170(V.Aa), 192(ⅧA2), 309(V.A1b- c), 346(ⅧB1), V.Aa7, V.Aa4, V.B, V.C, ⅧB	片(5), 砂片(4), 石礫(1) 砥石(1)	骨片 土器	中 初		
3003	ⅡY20	537	447	30	345.80~346.10	17 (13)	37 (8)	0 (8)	0 (61)		No.60(ⅧA1), 61(ⅧB2), 167(ⅧB1), 171(Ⅷ) 172(Ⅷ), 441(V.C2), 481(ⅧB), 496(ⅧA) 520(ⅧB1), 523(ⅧB1)	片(6), 砂片(11) 石礫(1), 小形刃器(1) UF(2)	骨片 土器	中 初		
3004	ⅡY20 ⅡY25	306	270	20	345.90~346.10	12 (9)	76 (32)	12 (14)	0 (45)		No.510(ⅧA2)	砥石(1), 片(2), 砂片(3)	骨片 土器	中 初		
3006	ⅡY25	214	175	20	345.90~346.10	67 (3)	33 (170)	0 (5)	0 (5)		V.C, ⅧA	砂片(1)	骨片 土器	中 初		
3007	ⅡY25	269	250	20	345.90~346.10	57 (44)	13 (12)	0 (9)	0 (35)		No.191(ⅧA1), 192(ⅧA2), 322(ⅧB1), V.B V.C, ⅧA, ⅧB	片(1), 砂片(1)	骨片 土器	中 初		
3008	ⅡY25	286	231	20	345.90~346.10	0 (6)	89 (18)	11 (8)	0 (68)		—	砂片(8)	骨片 土器	中 初		
3010	ⅡY20	380	209	20	345.80~346.00	6 (8)	90 (73)	2 (3)	0 (18)		No.163(ⅧA), 182(ⅧB), 192(ⅧA2)	石礫(1), 砂片(5) 砂片(42)	骨片 土器	中 初		
3011	V.U22	351	261	20	345.80~346.00	67 (35)	20 (19)	13 (0)	0 (9)		No.67(ⅧB2), 173(ⅧB1), V.C, ⅧA, ⅧB	片(1), 砂片(8) 小形刃器(1), UF(1)	骨片 土器	中 初		
3012	ⅡE 4 ⅡY24	129	367	70	345.40~346.10	5 (13)	15 (11)	79 (2)	0.7 (73)		No.67(ⅧB2), 174(Ⅷ), 175(ⅧB1), 176(Ⅷ) 177(Ⅷ), 492(ⅧA1), 501(ⅧA2), 520(ⅧB1) 529(ⅧB1), 531(Ⅷ), V.D, V, ⅧA, ⅧB	片(43), 砂片(950) 石礫(6), UF(1)	骨片 土器 骨 土器 骨 土器	中 初	水洗遺物	
3013	ⅡY24	91	82	10	345.80~345.90	75 (16)	25 (5)	0 (0)	0 (79)		No.38(ⅧB1), ⅧB	砂片(1)	骨片 土器	中 初		
3014	ⅡY24	354	213	13	345.87~346.00	31 (8)	69 (13)	0 (6)	0 (73)		No.483(ⅧD), 531(Ⅷ), V1)	片(3), 砂片(3), 石礫(1) 小形刃器(1), 装飾品(3)	骨片 土器	中 初		
3015	ⅡY19 ⅡY20	134	96	10	345.90~346.00	67 (5)	33 (17)	0 (0)	0 (78)		No.496(ⅧA1), 文部不明	UF(1)	骨片 土器	中 初		
3016	V.U23	242	201	10	345.80~345.90	92 (92)	0 (5)	8 (3)	0 (3)		No.173(ⅧB1), 179(ⅧC), 179(ⅧC) 410(V.B), V.B	—	骨片 土器	中 初		
3017	V.U23	196	195	10	345.80~345.90	38 (32)	23 (19)	31 (8)	8 (29)		No.173(ⅧB1), 513(ⅧB2)	砂片(3)	骨片 土器	中 初		
3018	ⅡA 2 ⅡA 3 V.U22 V.U23	293	273	18	343.75~345.93	21 (14)	68 (67)	8 (9)	0 (10)		No.28(ⅧA1), 43(V.A1c7), 179(ⅧC) 410(V.B), V.B	片(10), 砂片(28) 石礫(1), UF(1)	骨片 土器	中 初		
3019	ⅡA 2 ⅡA 3 V.U 8 V.U 9 V.U13 V.U14	261	224	6	345.90~345.96	10 (7)	90 (57)	0 (0)	0 (16)		No.489(ⅧA1)	片(3), 砂片(15)	骨片 土器	中 初		
3022	ⅡE 5 ⅡE 6 ⅡE 7 ⅡE 8 ⅡE 9 ⅡE 10 ⅡE 11 ⅡE 12	221	195	40	343.70~346.10	100 (97)	0 (0)	0 (3)	0 (0)		No.181(ⅧC)	—	骨片 土器	中 初		
3023	ⅡE 5	238	156	28	345.79~346.07	76 (71)	11 (11)	13 (16)	0 (2)		No.180(ⅧB2), 484(ⅧB), 531(Ⅷ), V.B, ⅧB	石礫(1), 片(3), 石礫(1)	骨片 土器	中 初		
3024	V.C16 V.U17	289	254	30	345.70~346.00	100 (89)	0 (4)	0 (1)	0 (6)		No.182(ⅧB), 148(ⅧC), V.C, ⅧA	—	骨片 土器	中 初		
3025	V.U18 V.U19	635	533	23	345.66~345.89	84 (85)	8 (6)	3 (4)	5 (5)		No.183(ⅧA1), 184(ⅧC), 185(ⅧA1) 186(ⅧA2), 187(V.D1), 189(ⅧA1) 189(ⅧA2), 523(V.A2a7), V.A, V.B V.C1, V.D, V.E1, Ⅷ	石礫(1), 片(2), 砂片(6) 石礫(1), 打製石片(1) 砥石(1), 刃器(1), 石礫(1) UF(1), RF(1)	骨片 土器	中 初		
3026	ⅡE 5 ⅡE 10 ⅡA 1 ⅡA 6	596	426	20	343.60~345.80	4 (0)	29 (0)	57 (8)	0 (0)		No.495(ⅧA1), 498(ⅧA2), 512(ⅧA1) V.Aa, ⅧB	石礫(2), 片(8) 砂片(960), 石礫(1) 打製石片(1), 小形刃器(1) 石礫(1), UF(1)	骨片 土器 骨 土器 骨 土器	中 初	水洗遺物	
3028	ⅡA 1	154	100	22	345.48~345.71	100 (96)	0 (0)	0 (4)	0 (0)		No.55(V.A2a7), 232(V.A1a7), 282(V.A1c7) V.Aa7, V.D	—	骨片 土器	中 初		

第14表 前期末葉～中期初頭遺物集中(SQ)一覽表(1)

遺構No	位置	規模(m)			絶対高(m)	遺物出土状況(1)内は検出数				出土遺物				時期	備考
		長軸	短軸	垂直面		土器	石函	礎	竹	土器	(1)内は類型	石器	(1)内は点数		
3029	ⅡA 1 ⅡA 2 VU21 VU22	125	7.5	31	345.31~345.66	91 (85)	7 (12)	2 (0)	0 (3)	№190(VD1), VB, VD	片(1), 埴片(3)	骨片 礎	前 末 1		
3032	ⅡY18 ⅡY23	192	172	11	345.70~345.81	87 (82)	2 (4)	31 (32)	0 (2)	№191(ⅡA1), VD, VC, ⅡB	UF(1)	骨片 礎	中 期		
3033	ⅡY15 ⅡY26	237	161	45	345.48~345.93	1 (9)	2 (89)	80 (1)	11 (1)	№192(ⅡA2), 311(VA1a-f), 455(VD1) 480(ⅡA2), 493(ⅡA1), VC, ⅡA	石輪(2), 片(9?) 埴片(39459), 石輪(1?) 小形牙磨(4), 石輪(1) UF(4), RF(5)	骨片 礎 礎	中 期	水産遺物	
3038	ⅡY23	303	256	17	345.52~345.69	89 (87)	11 (9)	0 (0)	0 (4)	№193(VA1a-f), 194(VB), 195(VA1a-f) 248(VA1a-f), 495(ⅡA1), VA, VB, VC VD, ⅡA, ⅡB	片(3), 埴片(1), 石輪(1)	骨片	前 末 1		
3041	ⅡY15	264	(200)	20	345.44~345.64	58 (58)	14 (29)	21 (5)	7 (8)	№110(VAa-f), 197(VAa-f), 198(VAa-f) 195(VB), 200(VD1), 201(VC) 292(VA1a-f), 311(VA1a-f), 332(VA2a-f) 426(VC1), 438(VC2), 455(VD1) 478(ⅡA1), 574(ⅡA), VA1a-f, VA, VB VC, VD	片(4), 埴片(7), 石輪(1) UF(2), RF(1)	骨片 礎	前 末 1		
3042	ⅡY10 ⅡY15	164	119	12	345.45~345.57	89 (90)	9 (10)	2 (0)	0 (0)	№113(VD2), 202(VAb), 203(VAa) 275(VA1a-f), 292(VA1a-f), 313(VA1a-f) 317(VA1a-f), 327(VA2a-f), 426(VC1) 468(VD2), VAa-f, VA, VB, VD	埴片(4)	礎	前 末 1		
3043	ⅡY19	169	153	24	345.48~345.72	0 (4)	99.5 (94)	0.1 (0)	0.1 (1)	№347(VA3a-f), VB, ⅡB, ⅡB	片(24), 埴片(1573) 48輪(1), 小形牙磨(3) LF(7), RF(1)	骨片 礎	前 末 1		
3050	ⅡA 6 ⅡA11	288	223	9	345.86~345.95	35 (26)	60 (44)	5 (4)	0 (9)	№167(ⅡB1), 204(ⅡC), 203(ⅡA), VA	埴片(1), 石輪(1)	骨片 礎	中 期		
3051	ⅡA 2	81	42	2	345.71~345.73	89 (89)	11 (0)	0 (1)	0 (0)	№179(ⅡC), 328(VA2a-f), 464(VD1)	—	礎	中 期		
3063	VU13	189	142	11	345.73~345.84	97 (100)	0 (0)	3 (0)	0 (0)	№209(ⅡB), Vh, VC, ⅡB	—	礎	中 期		
3064	ⅡE 1 ⅡE 6 ⅡH10	563	391	4	345.49~345.53	64 (10)	33 (1)	3 (5)	0 (8)	№206(ⅡA2), 207(Ⅱ), 208(Ⅱ), VC, ⅡA ⅡB	石輪(2), 片(4), 埴片(1) 石輪(1), 皿台(1), UF(1)	骨片 礎	中 期		

第15表 前期末集～中期初頭遺物集中(SQ)一覽表(2)

4. 土坑

調査段階では114基を数えたが、整理作業の段階で整理統合され103基が土坑として認識される(第17～19表)。このうち、1基が焼土址として調査され、整理作業の段階で土坑と把握した。平面分布では、SB3018周辺に若干集中するが、比較的散漫に分布する。複数の土坑が近接して構築されている場合が多く見られる。時期を類推させる土器片の出土が土坑により偏っているため、時期については明示しなかったが、土器片が出土する土坑については、土器片の総体が示す時期と前後することはないと考える。

土坑の規模・形態は様々であるが、相互の相関関係は認められない。覆土は単一層のものが約8割を占め、炭化物を混入するものが多い。出土する遺物に特徴があり、石器類破片を多量に出土しているもの(SK3100・3122・3142・3175・3195・3225)、小礫を多量に出土しているもの(SK3159・3170・3197)、出土土器自体で器形復元が可能な大形の土器片が出土しているもの(SK3137・3216・3244)、複数の個体の土器片が多量に出土しているもの(SK3137・3170・3204・3205・3214・3215)がある。これらのうち、複数個体の土器片が多量に出土する土坑については、長軸が200cmを越えるものが多いと言えるだけで、土坑の規模・形態と出土遺物という属性の相関関係についても見出せない。また、土坑の埋没過程において、焼土址が形成されているもの(SK3103・3134)があり、地表面の一定の範囲を掘りくぼめ開放しておくことを目的とした土坑があったことが推測される。いずれにせよ、上記の土坑も含めて、土坑の機能・性格を云々するには、本遺跡のみならず多くの資料集が必要であり、さらなる資料操作が必要であることは言うまでもない。堅穴住居址や焼土址などを含めた遺構群一資料として、今回は資料提示に留めざるを得ない。

以下、土坑については一覽表を参照されたい。

遺跡No.	位置	位置(m)			形状		覆土の状態	出土遺物			備考	
		長	短	深	平面形	断面形		土器	石器	その他		
1701	ⅡE19	47	40	35	楕円形	柱穴状	上下2層、漸移的 焼土層、炭化物混	VB	—	—	—	
3100	ⅡA11 ⅡA11	173	157	13	楕円形	竪坑状	単一層、炭化物混	No204(ⅡC), No205(ⅡA) No578(ⅡB), VE1	片(4) 埴片(867) 石籠(8)	炭化種子 骨片、藤 縄跡	埴片867点	
3102	ⅡE10	197	185	17	楕円形	竪坑状	上下2層、漸移的	文様不明	—	—	—	
3103	ⅡD22 ⅡU23	267	196	18	不整形楕円形	竪坑	階層、焼土層、炭化物混	—	—	—	層土中にSF3038	
3122	ⅡC22 ⅡC23	(128)	107	10	楕円形	竪坑	単一層、焼土層、炭化物混	—	片(5) 埴片(9) 石籠(1)	—	—	
3126	ⅡP19	121	97	27	不整形	竪坑状	単一層、炭化物混	—	—	—	骨片	
3127	ⅡP23	102	85	11	楕円形	竪坑状	単一層、炭化物混	—	—	—	—	
3128	ⅡC3	104	62	16	不整形楕円形	竪坑	単一層、炭化物混	—	—	—	—	
3130	ⅡU3 ⅡU8	60	52	10	楕円形	竪坑	単一層、焼土層、炭化物混	—	—	—	焼土層に骨中遺物	
3131	ⅡU4	51	35	10	楕円形	竪坑	単一層、炭化物混	—	—	—	—	
3132	ⅡU4	85	65	15	楕円形	竪坑	単一層、炭化物混	—	—	—	—	
3133	ⅡU3 ⅡU8	288	109	26	不整形	竪坑状	単一層、炭化物、骨粉混	—	—	—	—	
3134	ⅡU4	108	99	9	楕円形	竪坑	単一層、炭化物混	—	—	—	—	
3135	ⅡU4	175	130	12	不整形	竪坑	単一層、炭化物混	—	—	—	—	
3136	ⅡU13	239	164	36	楕円形	十字竪坑	単一層、焼土層、炭化物混	—	—	—	—	
3137	ⅡA1	284	173	34	楕円形	竪坑状	単一層、炭化物混	No54(ⅡA2a), No210(ⅡAa) No211(ⅡAa), No212(ⅡB) No213(ⅡB), No214(ⅡB) No215(ⅡB), No216(ⅡB) No217(ⅡB), No241(ⅡA1a) No252(ⅡA1a), No280(ⅡA1a) No282(ⅡA1a), No333(ⅡA2a) No377(ⅡB1), No431(ⅡC2) No429(ⅡA1), ⅡB, VE1	片(5) 埴片(1) UF(1), KF(1)	藤 (乾燥)	—	
3139	ⅡU21	161	102	22	長楕円形	竪坑状	単一層、 焼土層、炭化物、骨粉混	—	—	—	骨片	SF3053→SK3139
3140	ⅡU11 ⅡU12	91	(48)	30	(楕円形)	十字竪坑	上下2層、漸移的 焼土層、炭化物混	—	—	—	骨片	—
3141	ⅡY15	107	96	17	楕円形	十字竪坑	上下2層、漸移的、焼土層 炭化物、骨粉混	No127(ⅡC1)	埴片(1)、石籠(1)	骨片、藤	—	
3142	ⅡY25	110	90	30	楕円形	十字竪坑	単一層、焼土層、炭化物 骨粉混	No236(ⅡA1a), ⅡD	片(6) 埴片(218)	骨片、藤 縄跡	水産資源記録簿 埴片218点	
3145	ⅡC7	62	31	11	楕円形	竪坑	単一層、焼土層、炭化物混	—	—	—	—	
3147	ⅡU3	112	88	12	楕円形	竪坑	単一層	—	—	—	—	
3148	ⅡY26	107	90	9	不整形楕円形	竪坑	単一層、 焼土層、炭化物、骨粉混	—	—	—	骨片	
3150	ⅡU2	108	67	14	楕円形	竪坑	単一層	—	—	—	—	
3151	ⅡU2	126	52	20	不整形	竪坑状	単一層	—	—	—	—	
3152	ⅡU7	107	53	7	長楕円形	竪坑	単一層	—	—	—	—	
3153	ⅡU7	45	21	32	不整形楕円形	柱穴状	単一層	—	—	—	—	
3155	ⅡA11	25	19	不明	楕円形	不明	不明	No406(ⅡB), ⅡB	埴片(1)	—	—	
3156	ⅡU11	(157)	104	32	楕円形	竪坑	単一層、焼土層、炭化物混	No59(ⅡA1), ⅡB	片(1)	—	—	
3158	ⅡA6	37	33	6	楕円形	竪坑	単一層、 焼土層、炭化物、骨粉混	—	—	—	骨片	
3159	ⅡU16	153	138	36	楕円形	竪坑状	単一層、炭化物混	ⅡAa, ⅡB	片(1)	—	—	
3160	ⅡA6	20	18	22	円形	柱穴状	上下2層、漸移的 焼土層、炭化物、骨粉混	—	—	—	骨片	SK3160→SF3089
3162	ⅡP11	(109)	89	11	不整形楕円形	竪坑	単一層、焼土層、炭化物混 (使>炭)	ⅡB	片(2) 埴片(10) 石籠(1)	骨片	—	
3166	ⅡE4	54	52	30	不整形楕円形	柱穴状	上下2層、漸移的 焼土層、炭化物、骨粉混	No191(ⅡA1), ⅡA	片(1) 埴片(27) UF(1)	骨片	埴片27点	
3167	ⅡY25	29	(26)	30	円形	柱穴状	単一層、 焼土層、炭化物、骨粉混	—	—	—	骨片	SK3168に隣接
3168	ⅡY25	28	(26)	17	円形	柱穴状	単一層、 焼土層、炭化物、骨粉混	—	—	—	骨片	—
3169	ⅡY25	86	69	26	楕円形	十字竪坑	単一層、 焼土層、炭化物、骨粉混	ⅡD, ⅡA	石籠(1)	骨片、藤	—	
3170	ⅡE4 ⅡY20	159	122	40	楕円形	十字竪坑	単一層、 焼土層、炭化物、骨粉混	No323(ⅡA2a), No330(ⅡA2a) No465(ⅡD2), No522(ⅡB1) ⅡB, ⅡD1	埴片(3) 埴片(1)	骨片、藤	小堀集申(195点)	
3171	ⅡY20 ⅡY25	86	71	30	楕円形	竪坑状	上下2層、漸移的 焼土層、炭化物、骨粉混	ⅡB, ⅡC, ⅡA	石籠(1)、石籠(1) 片(48) 埴片(38) UF(2)	骨片、藤	—	
3172	ⅡY25	137	93	34	不整形楕円形	竪坑	単一層、炭化物混	No220(ⅡB), ⅡB, ⅡA, ⅡB	片(1) 埴片(2)	—	—	
3173	ⅡU2	90	25	8	不整形	竪坑状	単一層	—	—	—	—	
3174	ⅡU21	98	71	不明	不整形楕円形	不明	不明	—	—	—	—	
3175	ⅡU16	96	94	9	隅丸方形	竪坑	単一層、焼土層、炭化物 骨粉混	文様不明	—	—	—	
3180	ⅡY18	83	30	16	不整形楕円形	竪坑	単一層、炭化物混	—	—	—	—	
3181	ⅡP6 ⅡP11	143	(67)	30	(楕円形)	竪坑	単一層、焼土層、炭化物 骨粉混	ⅡB	片(2) 埴片(2) UF(1)	骨片	既出	
3182	ⅡU6	45	(16)	7	(楕円形)	竪坑	単一層、焼土層、炭化物混	—	—	—	—	
3183	ⅡU6	37	53	10	不整形楕円形	竪坑	単一層、焼土層、炭化物混	—	—	—	—	
3184	ⅡU6	(109)	(61)	16	(楕円形)	竪坑	単一層、 焼土層、炭化物混	—	—	—	—	

第16表 前期木葉～中期初頭土坑(SK)一覧表(1)

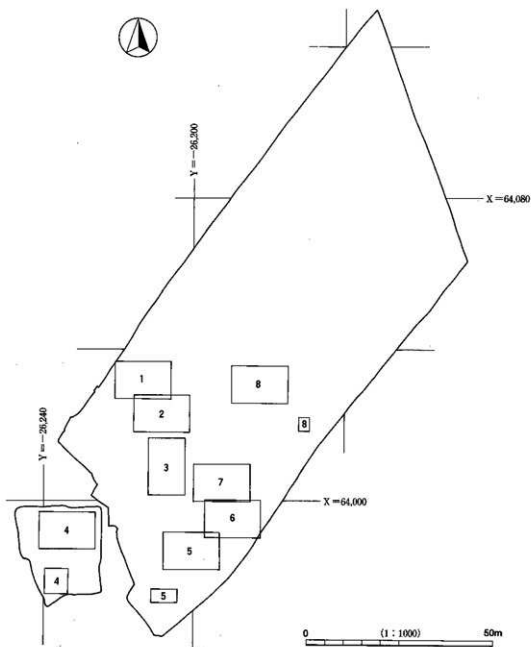
第4章 遺構

遺構 No.	位置	規模(m)			形状		掘上の状況	出土遺物			備考	
		長軸	短軸	深さ	平面形	断面形		土層	内は埋戻	石層		内は土点
3187	VU 1 Vp21	(201)	(120)	26	(長軸内形)	竪穴状	上下2層(上層は灰層)	—	—	—	—	—
3188	VU 1	39	(28)	3	(横内形)	竪穴状	単一層、灰化物質	—	—	—	—	洗面盆状
3189	VC 1	103	76	8	横内形	竪穴状	単一層、灰化物質	—	—	—	—	—
3190	WY23 Vp21	98	97	28	円形	すり鉢状	単一層	—	—	—	—	—
3191	Vp21	77	69	11	横内形	竪穴状	単一層	—	—	—	—	—
3192	VU 6	115	(90)	20	(横内形)	竪穴状	土層に灰化物質中ブロック	—	—	—	—	庭園に小ビット
3193	VU 2	30	22	8	不整形内形	竪穴状	単一層、灰化物質	—	—	—	—	庭園付近
3195	WY19	285	92	20	不整形	竪穴状	灰化物質	№347(VA34f),WB	石椀(3)、片(17) 砂片(3569)、石蓋(3) UF(3)	骨片、陶 磁器	水先遺跡試掘採取 時付3569点 磁器109点	
3196	Vp21 VC 1	231	200	17	横内形	竪穴状	単一層、灰化物質	—	—	—	—	—
3197	WY10	265	165	28	横内形	竪穴状	上下2層、漆移的、灰化物質	№283(VA1e7),№449(VD1) VB	—	—	—	骨片、陶 磁器
3198	WY12	217	105	25	(横内形)	竪穴状	単一層	№A	片(1)	—	—	—
3199	WY24	(234)	(163)	18	(横内形)	竪穴状	単一層、焼土粒下、灰化物質 付粉遺	№528(WB1)	砂片(3)	骨片、陶	—	—
3200	WY23	329	132	30	不整形	すり鉢状	単一層、灰化物質	№231(VE1),№512(WA1),WB	砂片(1)、赤石(1)	陶	二段壁	
3204	WY10	130	95	30	横内形	竪穴状	単一層、灰化物質	№307(VA1b-f),№332(VA2a-f) №436(VC1),№323(WB1) VAk,VB,VC,WB	片(5)	陶	—	
3205	WY10	(209)	(149)	16	(円形)	竪穴状	複雑、漆移的、灰化物質	№375(VA1b7),№396(VA1b-f) №310(VA1b-f),№332(VA2a-f) №455(VD1),VA67,VAk,VC	片(1)、砂片(1) UF(1)	陶	—	
3206	WY 3	82	66	3	横内形	竪穴状	単一層	—	—	—	—	—
3207	WY 3	(72)	(239)	22	横内形	竪穴状	上下2層、漆移的、灰化物質	Va7	片(1)	—	—	段壁
3208	WY 3	111	56	13	長軸内形	竪穴状	単一層、灰化物質	№347(VA34f)	—	—	—	—
3209	Vp17	(56)	47	10	(横内形)	竪穴状	単一層	—	—	—	—	—
3210	WY29	71	52	8	横内形	竪穴状	単一層	—	—	—	—	—
3211	WY19	178	120	25	横内形	竪穴状	単一層、焼土粒下、灰化物質	№451(VD1),VC,Vd	片(1)	—	—	—
3212	WY19 WY20 WY24 WY25	286	208	47	不整形内形	すり鉢状	複雑、灰化物質	№431(VC1),VA1a-c,VD1	寶石(1)、磨石(1)	—	—	—
3213	WY14	82	35	9	横内形	竪穴状	複雑、漆移的、灰化物質	—	—	—	—	—
3214	WY19 WY20	278	231	19	不整形内形	型穴状	内層、焼土粒下、灰化物質 付粉遺	№318(WA),№219(WB1) №455(VD1),VAk,VB,WB	石椀(1)、片(22) 砂片(28)、石蓋(1) 小形石蓋(3),UF(3)	骨片、陶	—	
3215	WY10	274	178	14	長軸内形	型穴状	単一層、灰化物質	№68(VC1),№229(VB) №221(VA1b-f),№275(VA1b7) №306(VA1b-f),№332(VA2a-f) №336(VA2b-f),№390(VB2) №259(VC1),VB,VC	石椀(1)、片(1) 刃物(1)	骨片、陶	長軸型壁にビット	
3216	WY 4	77	65	6	横内形	竪穴状	単一層	№222(VC2)	—	—	—	—
3217	WY24	155	151	40	不整形	すり鉢状	単一層、灰化物質	№223(VA6),№307(VA1b-f) №451(VD1),VB	—	—	—	—
3218	WY21	119	84	16	不整形内形	竪穴状	単一層、灰化物質	—	—	—	—	—
3219	WY 9	(204)	(146)	9	不整形内形	竪穴状	単一層、焼土粒下、灰化物質	№221(VA2a7),№349(VA1a7) №313(VA1b-f),VAa-f,VB	片(6)、砂片(4) 石蓋(1)	陶	—	
3220	WY 4	29	23	6	横内形	竪穴状	単一層、灰層、壁際に埋り砂 が溜り入る	№338(VA2b-f)	—	—	—	—
3221	WY 8 WY 9	129	101	6	横内形	竪穴状	単一層、灰化物質	№225(VE1),№349(VE1) №374(WA),VC2,WA	砂片(22)、石蓋(1) 磨製石片(1),UF(1)	陶	—	
3222	WY 4	22	21	24	円形	柱穴状	不明	VAla-f	—	—	—	—
3223	WY12	179	89	31	長軸内形	竪穴状	単一層	—	文庫不明	—	—	—
3225	WE 3	(133)	106	12	長軸内形	竪穴状	単一層	№226(VE1),VC,WB	片(32)、砂片(5027) 石蓋(1)	骨片、陶 磁器	水先遺跡試掘採取 時付5027点 磁器352点	
3226	WY 7	15	13	17	円形	柱穴状	単一層	—	—	—	—	—
3227	WY 7	69	64	10	横内形	竪穴状	単一層、灰化物質、付粉遺	—	—	—	—	—
3228	WY24	(68)	(67)	12	(横内形)	竪穴状	単一層	—	—	—	—	—
3229	WY24	116	(50)	12	長軸内形	竪穴状	単一層	—	—	—	—	—
3230	WY24	218	135	34	長軸内形	竪穴状	単一層、灰化物質	№192(WA2),№529(WB1) WB	片(4)、砂片(3) 石蓋(1)	骨片、陶	—	
3231	WY10	(87)	(74)	10	(横内形)	竪穴状	単一層、灰化物質	—	—	—	—	SK3231→SK3204
3232	WY10	101	71	10	横内形	竪穴状	単一層	—	—	—	—	SK3231→SK3233→ SK3232
3233	WY10 WY12	(81)	71	6	(横内形)	竪穴状	単一層、灰化物質	—	—	—	—	骨片
3234	WY 9 WY10 WY14 WY15	238	(156)	12	縦丸長方形	型穴状	単一層、灰化物質	№427(VC1),№428(VC1)	石椀(1)、片(1)	—	—	SB3030→SK3234→ SK3232、SK3233
3235	WY14	54	51	15	円形	掘底状	不明	—	—	—	—	—
3236	WY 9 WY14	204	198	45	縦丸方形	型穴状	複雑、灰化物質、付粉遺	Va7	片(4)、砂片(2) UF(1)	骨片、陶	—	
3237	WY19	63	51	12	横内形	竪穴状	単一層、灰化物質、付粉遺	№496(WA1)	砂片(63)、小形石蓋(1)	骨片、陶	—	
3238	WY19 WY24	(83)	86	18	横内形	竪穴状	単一層、焼土粒下、灰化物質 付粉遺	—	片(6)、砂片(16) UF(1)	骨片、陶	庭園面凸出しい	

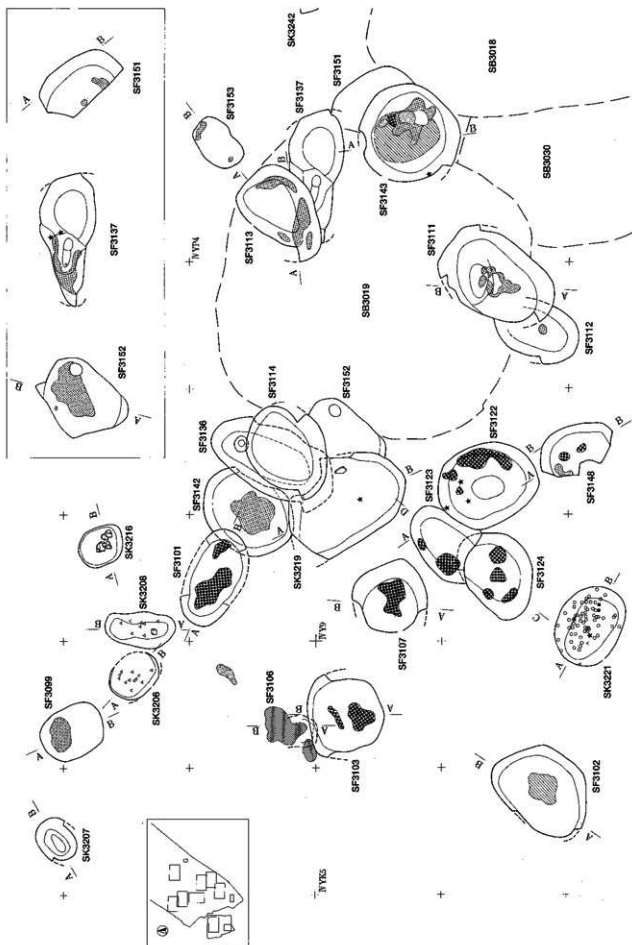
第17表 前期末葉～中期初頭土坑(SK)一覧表(2)

遺跡 No	位置	規模(m)			形状		覆土の状況	出土遺物				備考
		長軸	短軸	深さ	平面形	断面形		土器 (内は型式)	石器 (内は点数)	その他		
3239	IVY15	(104)	(81)	16	不明	竪状	単一層、焼土粒子・炭化物混	Ns275(VA11P),Ns312(VA2a) Ns425(VC1),VB	—	—	—	遺跡にピット
3241	IVY18	164	120	20	横四角	竪状	単一層、炭化物混	Ns133(VD),Ns227(W) VA,VB	—	片(4),埴石(11)	骨片、織	—
3242	IVY5 IVY10	101	93	33	横四角	すり鉢状	単一層	—	—	—	—	—
3243	IVP4	76	54	12	横四角	竪状	単一層、炭化物混	—	—	—	—	遺跡編入
3244	IVY23	117	82	13	横四角	竪状	単一層	Ns228(VAa7),Ns229(VAa7) Ns230(VA1a7),Ns231(VE1) VAa7,VAa7,VB,VC,VE1	—	—	—	土器片集中
3245	III A 2	49	32	2	不整形円形	—	不明	—	—	—	—	—
3246	III B 5 III A 1	(48)	45	12	不明円形	柱ノ礎	単一層、焼土粒子・炭化物 骨粉混	—	—	—	骨片	—
SF 3118	IVY23 IVY24	243	134	19	長横円形	竪状	単一層、炭化物多混	Ns413(VB),VB	—	埴片(4)	—	—

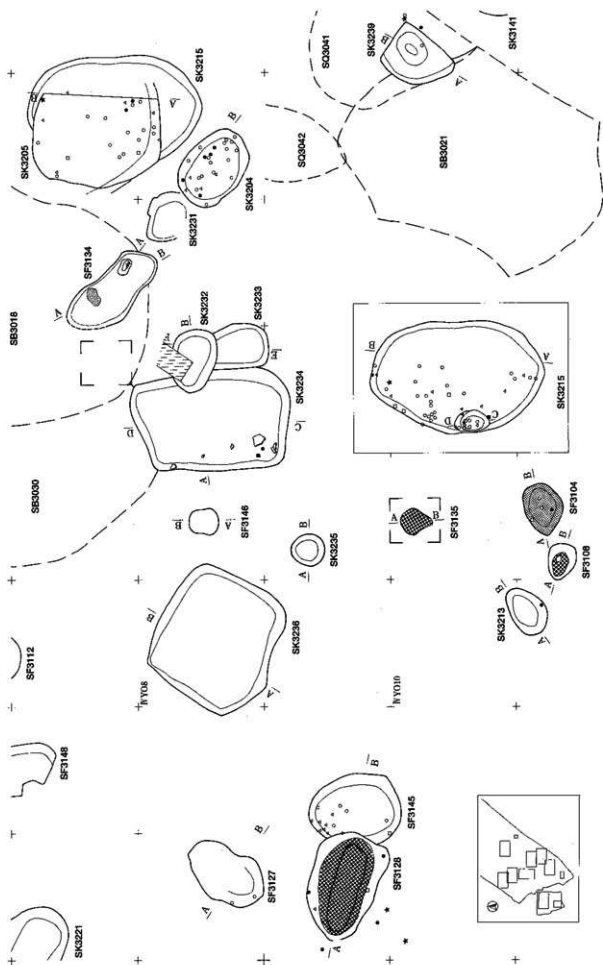
第18表 前期末葉～中期初頭土坑(SK)一覧表(3)



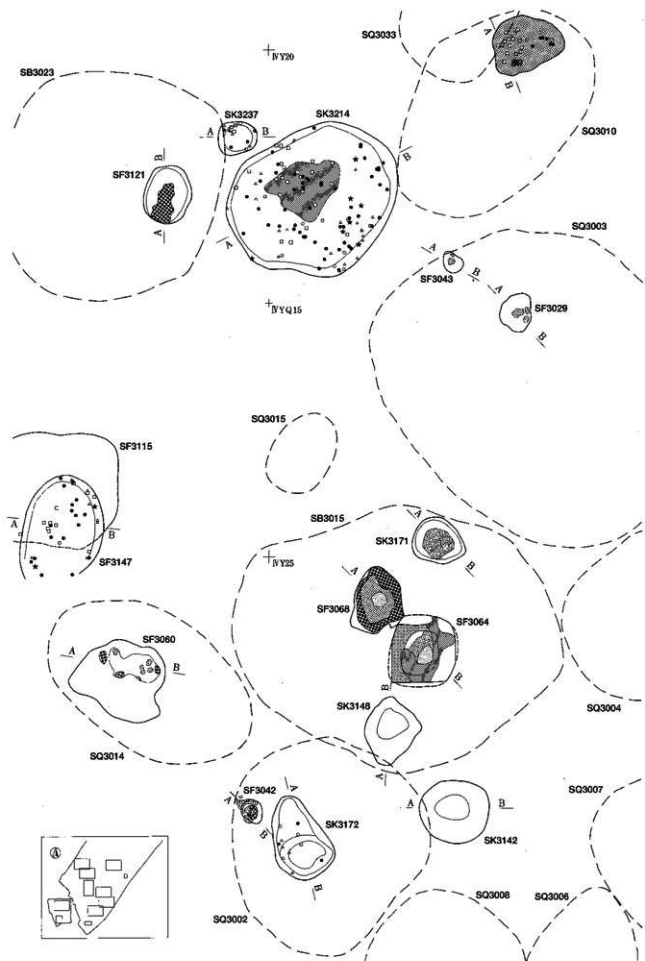
第54図 前期末葉～中期初頭遺構図割付



第55図 前期末葉～中期初頭遺構図1



第57图 前期末葉~中期初頭道構造 2



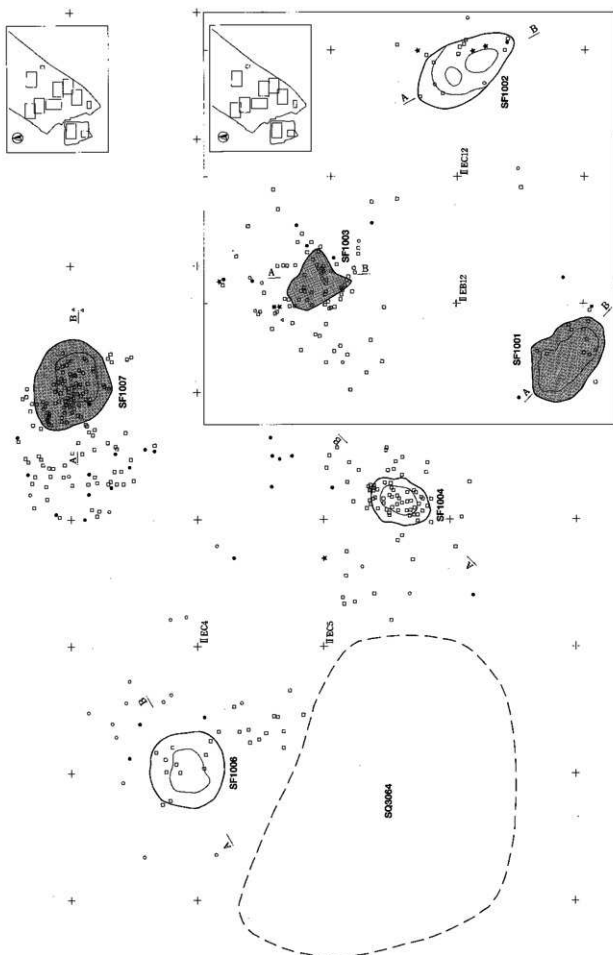
第59図 前期木築～中期初頭遺構図3

346.00 A — B
SF306910YR5 (にぶい黄褐色)
焼土粒子3% 炭化物2% 骨粉12%混346.00 A — B
SF30331: 赤褐色焼土 赤褐色の被熱痕跡
2: 赤褐色焼土 焼土ブロッカー多
3: 暗赤褐色焼土 暗赤褐色の被熱痕跡 骨粉混346.00 A — B
SF30421: 赤褐色焼土 赤褐色の被熱痕跡
2: 赤褐色焼土 焼土ブロッカー多
3: 暗赤褐色焼土 暗赤褐色の被熱痕跡346.00 A — B
SF30431: 焼土ブロッカー多 炭化物・骨粉混
2: 焼土粒子・炭化物・骨粉混346.00 A — B
SF30601: 焼土層 赤褐色の被熱痕跡
2: 焼土層 暗赤褐色の被熱痕跡
3: 焼土粒子・骨粉混346.00 A — B
SF3068 SF30641: 2.5Y (オリーブ褐) 焼土2% 炭化物3% 骨粉2%
2: 2.5Y (洗炭) 黄褐色の被熱痕跡 焼土4% 炭化物3% 骨粉8%
3: 2.5Y (橙) 赤褐色の被熱痕跡 焼土75% 炭化物・骨粉3%
4: 5Y (灰濁) 暗赤褐色の被熱痕跡 焼土60% 炭化物7% 骨粉3%1: 10YR5 (にぶい黄褐色) 焼土7% 炭化物・骨粉4%
2: 2.5Y (洗炭) 黄褐色の被熱痕跡 焼土・炭化物5% 骨粉7%
3: 2.5Y (橙) 赤褐色の被熱痕跡 焼土75% 炭化物4% 骨粉3%
4: 2.5Y (オリーブ褐) 焼土10% 炭化物15% 骨粉3%346.00 A — B
SF3121灰色土
焼土粒子・炭化物一混 骨粉一多346.00 A — B
SF31471: 暗黄褐色土 焼土粒子一多 炭化物一少 骨粉混
2: 暗黄褐色土 焼土粒子・炭化物・骨粉一混346.00 A — B
SF3142オリーブ褐色土
焼土2% 炭化物7% 骨粉2%346.00 A — B
SF31482.5Y (暗オリーブ褐)
焼土6% 炭化物8% 骨粉3%345.80 A — B
SF31711: 2.5Y (暗オリーブ褐) 炭化物50% 灰15% 焼土粒子・ブロッカー2% 骨粉10%
2: 2.5Y (オリーブ褐) 炭化物5% 焼土粒子1%未混 骨粉3%345.80 A — B
SF317210YR5 (にぶい黄褐色)
炭化物2%346.00 A — B
SF3214

346.00 A — B

1: 暗黄褐色土 焼土粒子一多 炭化物一混 骨粉一少
2: 黄褐色土 黄褐色砂質土混345.80 A — B
SK3237暗黄褐色土
炭化物一多 骨粉一少 黄褐色砂質土一混

第60図 前期末葉～中期初頭遺構Ⅲ 断面図



第61図 前期末葉～中期初頭遺構図4

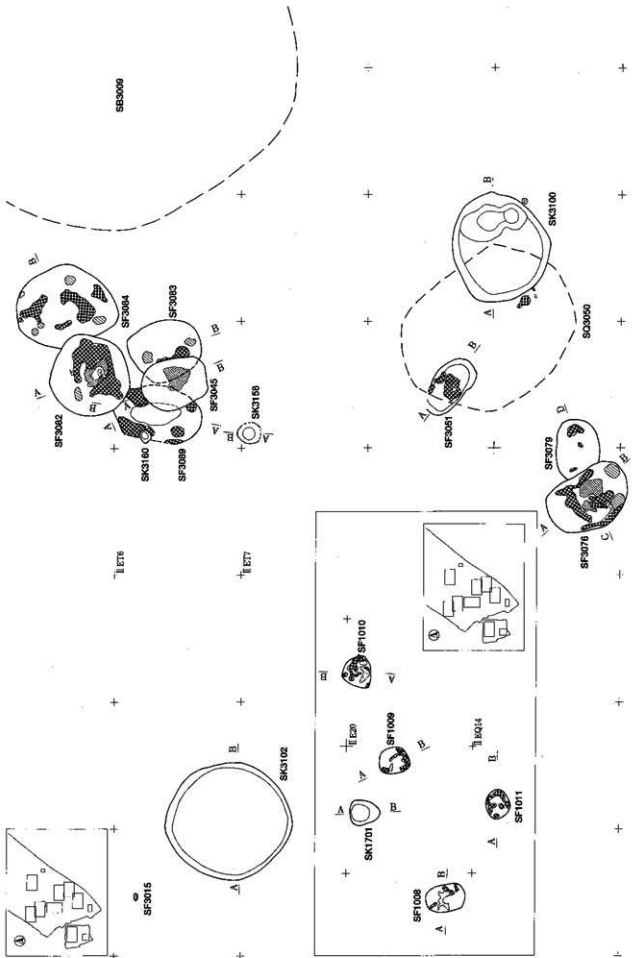
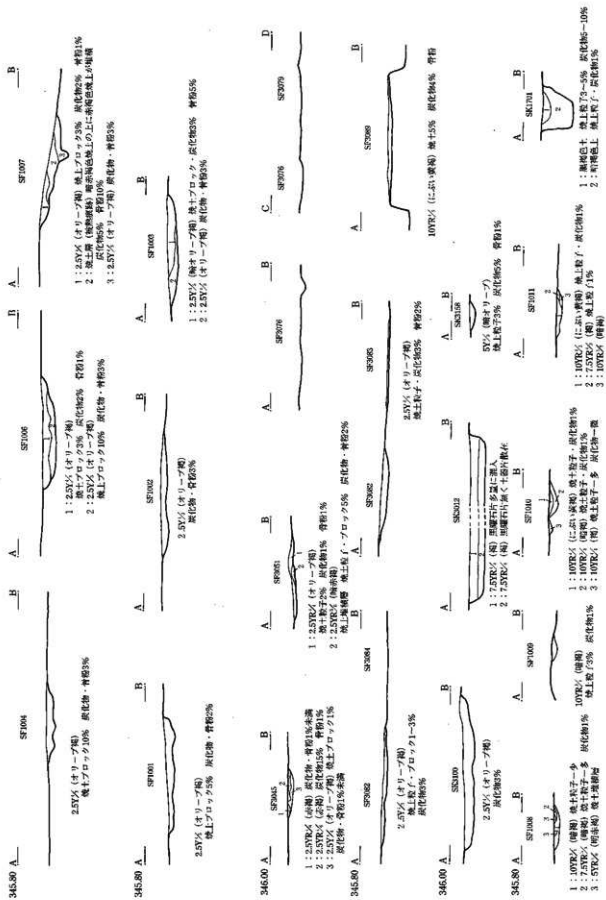
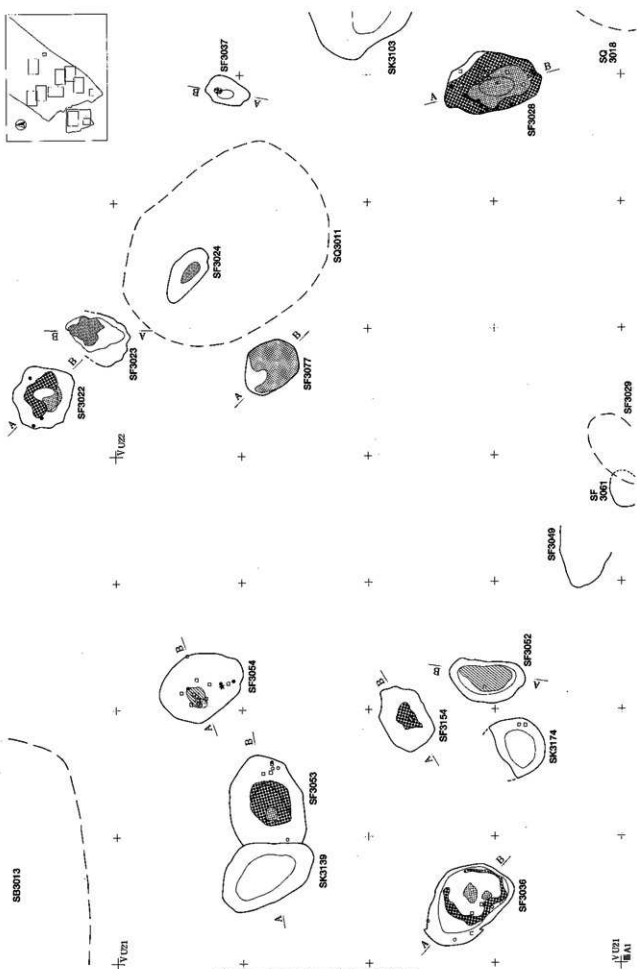


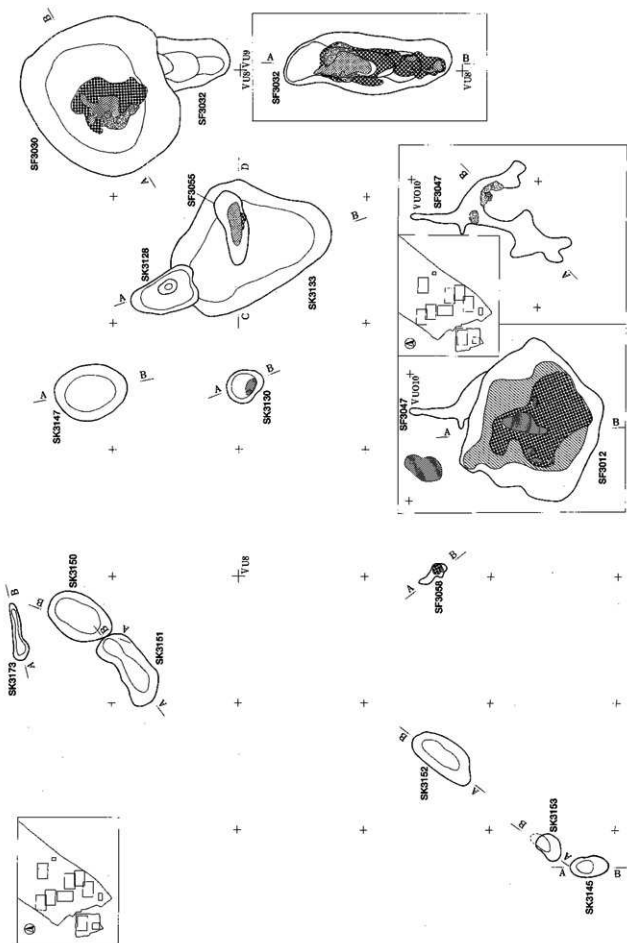
图62图 前期末葉～中期初頭遺構图 5



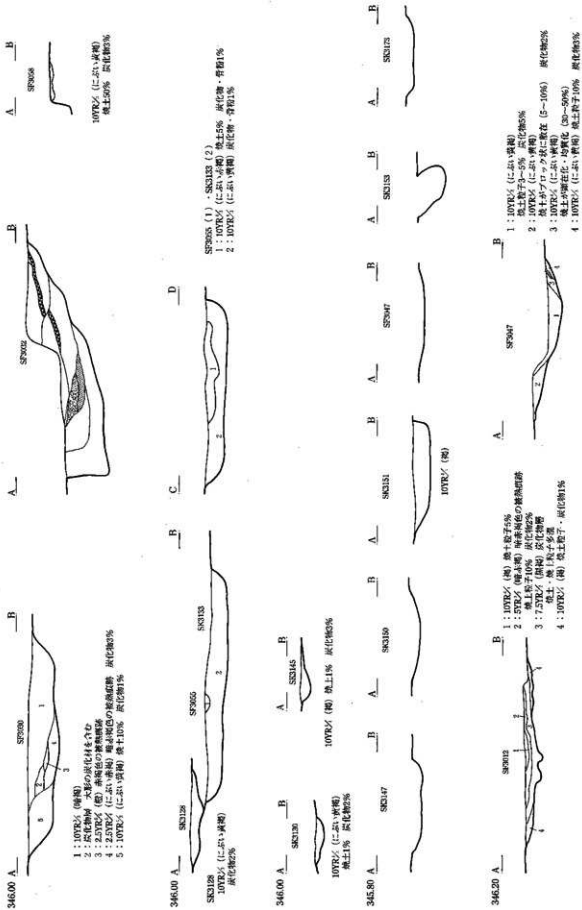
第63区 前期末葉～中期初頭遺構区4・5断面図



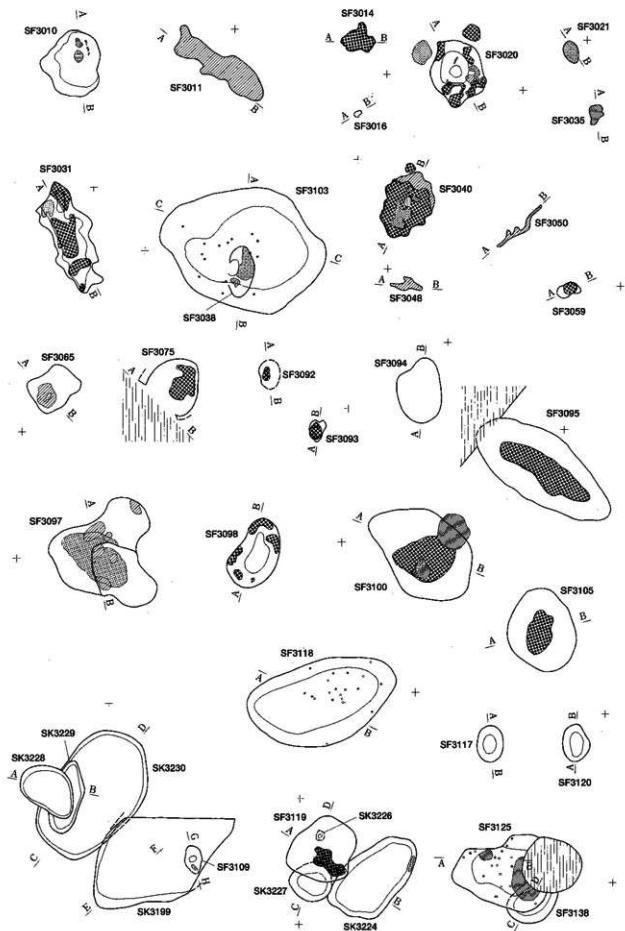
第65図 前期末葉～中期初葉遺構図7



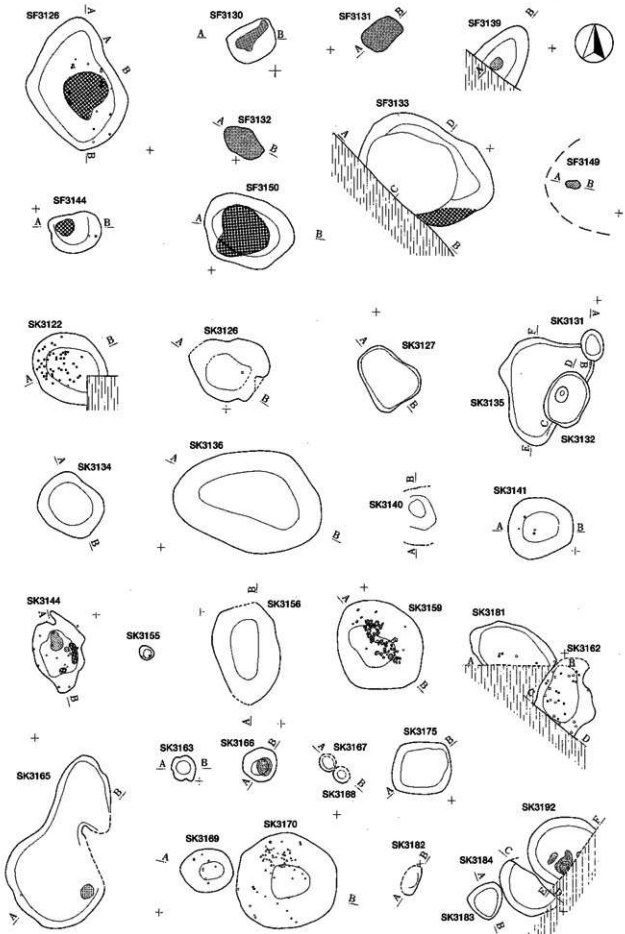
第67図 前期末葉～中期初頭通標圖 8



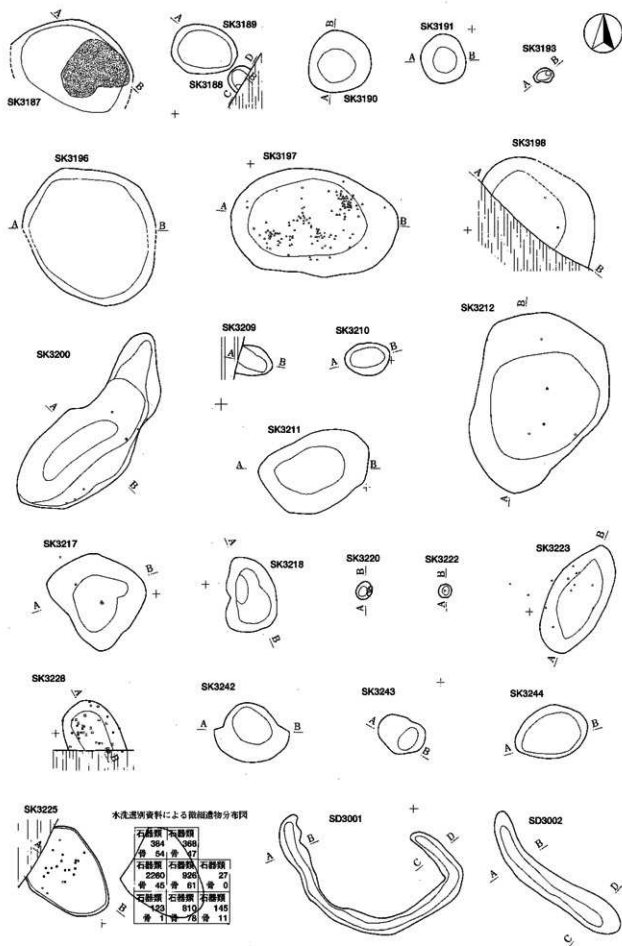
第68図 前期末葉 - 中期初頭遺構Ⅷ断面図



第69圖 前期末葉—中期初頭燒土址・土坑遺構圖1



第70図 前期末葉～中期初葉縄文土址・土坑遺構図2



第71図 前期末葉～中期初頭焼土址・土坑遺構図3

第3節 縄文時代中期末葉～後期前葉

1 竪穴住居址

概要

分布：調査区の中央部から南部にかけて、7軒の住居址が検出された。特に、南部には5軒の住居址が集中しており、3軒及び2軒がそれぞれ切り合っている。

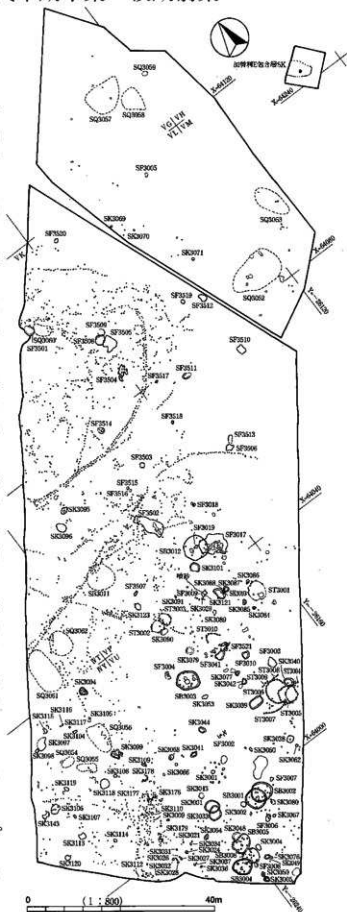
時期：中期末葉から、後期初頭称名寺式期、前葉堀之内式期の住居址である。

検出：平面精査でプランが明確に捉えられた住居址はSB3003のみで、他の住居址は、周囲との含有物の差や他の遺構調査時の断面・平面によって、またトレンチによる断面精査によって判断し、プランを確認した。

規模・構造：床面積から大型、中型、小型の三種に分けられるが、時期による差異は見られない。南部の切り合っている3軒と2軒は、前者が床面積9㎡前後の小型で、後者が12㎡前後と中型の住居址である。住居址の形状は不整形円形～不整形楕円形を呈し、覆土は炭化物・焼土粒子を含むものが多く、またSB3003が複層のほかは単一層であった。なお、住居址の深さは断面図から最深の値を求め、文中に記した。

炉については、石組みなどの構築物はどの住居址においても検出されなかったが、住居址の中央付近に炭化物・焼土粒子が集中している箇所があり、そのほとんどが不整形を呈し掘り込みも浅く、内部には炭化物・焼土粒子を多く含むことなどから、炉址と判断した。

床については、貼り床は検出されず、多少の凹凸はあるがほぼ平坦である。ただ、SB3003では炉址の周囲の一部に堅い床が検出されている。壁は、斜めに傾いて立ち上がるものが多い。なお、文中の壁高の値は、断面図・平面図から求めた壁高のうち最も大きな値を記した。柱穴は7軒すべての住居址で検出されたが、大きさ・深さ・傾きなどはそれぞれ異なり、時期に



第77図 中期末葉～後期前葉遺構分布図

よる傾向等は特にない。

遺物の出土状況：ほとんどが覆土から出土しており、出土量は住居址により異なる。

その他：住居址の埋没状況は、覆土等から判断して自然埋没と思われる。

SB3001 位置：ⅢA1～2 SB3002を切る

検出：上器等の遺物出土状況、炭化物の分布状況により判断、炉址の位置によりプランを確認した。

規模・形状：径4.2mの隅丸方形ないしは不整形円形を呈し、深さは41cmを測り、床面積はおよそ11.71㎡。覆土：しまり、淘汰の良い褐色土の単一層である。

床面・壁：床面は多少の凹凸はあるがほぼ平坦で、壁は北側で高さ20cmを測り斜め傾いて立ち上がる。

炉：床面のほぼ中央に90cm×80cmの範囲で焼土が散在しており、炉址とした。内部は炭化物・焼土粒子が混入し、深さ22cm、不整形に掘り込まれている。

柱穴：柱穴はP₁～P₉の9本検出され、径15～20cm、円形を呈する。P₁は深さ15cm丸底で直に立ち上がっている。

遺物の出土状況：覆土上部一半ばに集中し、住居址の北東区及び炉址周辺やSB3002と切り合っている部分に多く出土している。土器はほとんどが破片である。

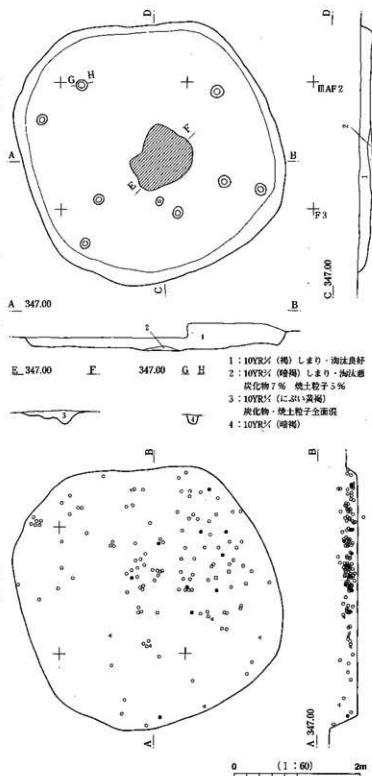
出土遺物：〔土器〕称名寺式期の土器(第336図1～5)が最も多く出土しており、中期後半の土器(第336図6)も多い。堀之内式期ものが数片出土している。〔石器〕打製石斧、黒曜石の剥片・細片が出土している。〔その他〕骨片が2点出土。

時期：後期初頭称名寺期

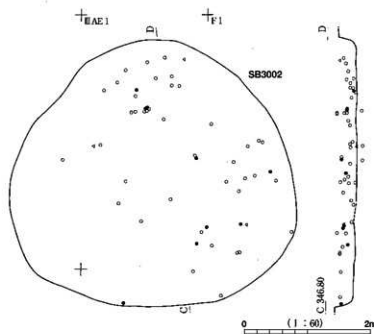
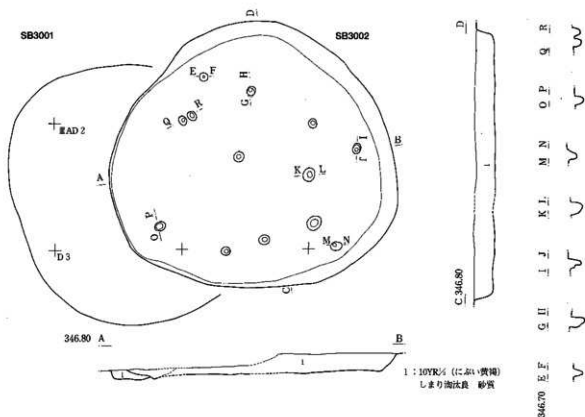
SB3002 位置：ⅢA1

～2 SB3001に切られる

検出：周囲との含有物の差や、SB3001の断面・平面観察によりプランを確認。



第78図 SB3001遺構図・遺物分布図



第79図 SB3002遺構図・遺物分布図

二段落ちのものは2本であった。

遺物の出土状況：覆土中～下部に多く、住居地の北東半分に散在するが、SB3001調査時に切り合っている部分の遺物を取り上げたことを考慮すると、全体に分布していたと思われる。

出土遺物：〔土器〕中期末葉～称名寺式期のもの（第337図7～8）がほとんどを占め、堀之内式期のものは2片だけであった。〔石器〕剥片・細片出土。

時期：中期末葉

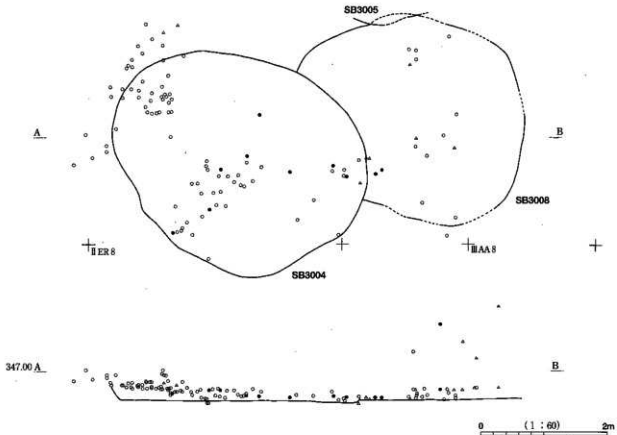
規模・形状：径4.2～4.5mの不整円形を呈し、深さ34cm、床面積12.70㎡である。

覆土：しまり、淘汰の良い砂質のにぶい黄褐色土の単一層である。

床面・壁：床面はほぼ平坦で、壁は北側で高さ29cmを測り、斜めに立ち上がる。

炉：検出されなかった。

柱穴：径13～18cmの柱穴が9本、径20～25cmの柱穴が2本、2つ以上の小ピットの集合と思われる柱穴が1本、計12本の柱穴が検出された。深さは約15～23cmを測る。断面調査をした7本の柱穴のうち、底が丸いものは4本、



第82図 SB3004・3008 遺物分布図

SB3004 位置：ⅡE10 SB3008に切られる

検出：周囲との含有物の差や土の粘性の違いによりプランを検出。

規模・形状：4.1m×3.3mの不整形円形を呈し、深さ22cm、床面積9.16㎡である。

覆土：粘質でしまりの良い、炭化物・焼土粒子を含んだにぶい黄褐色土の単一層である。なお、覆土より包含層の方がより粘質である。

床面・壁：床面はほぼ平坦で、壁は西側で約22cmを測り、斜めに立ち上る。東壁側はSB3008に切られているが、一部わずかに立ち上がりが見出された。

炉：住居址の中央西側に、80cm×50cm・深さ14cmの不整形楕円形を呈する掘り込みがあり、表面には炭・焼土粒・焼けて変色したと思われる土がみられ、内部にも炭・焼土粒子が混入している。以上のことから炉址と捉えた。

柱穴：径32～45cmの柱穴が3本、径18～26cmのものが5本、径12～16cmのものが2本、計10本の柱穴が検出され、北西～南東を軸にほぼ平行に並ぶ。平面形状は円～楕円形を呈し、深さは13～34cmを測る。断面形状や傾きはそれぞれ異なる。

遺物の出土状況：覆土上部～下部にかけて、壁から炉址にいくにしたがってより下方に、帯状に出土している。また、住居址の北西部と炉址周辺に集中している。

出土遺物：〔土器〕炉址周辺には10・12（第338図）の土器片が集中している。北西部の集中箇所には、11（第338図）が出土している。なお11の土器はSK3099からも1/2～1/3個体分の土器片が出土し、互いに接合している。〔石器〕黒曜石の剥片・細片が出土している。

時期：後期前葉之内式期

SB3005 位置：ⅡE5・10、

ⅢA1・6 SB3008, SK3048に切られる
 検出：トレンチによる精査、周囲との含有物の差、他の遺構の平面・断面調査によりプランを検出。

規模・形状：4.0m×3.2mの不整楕円長方形を呈し、深さ32cm、床面積9.55㎡である。
 覆土：炭化物・焼土粒子が混入するにぶい黄褐色土の単一層である。

床面・壁：床面は西側にやや低くなるが、ほぼ平坦である。壁はトレンチにより数箇所切られて不明な部分があるが、南側で28cmを測り、斜めに立ち上がる。

炉：炭化物・焼土粒が集中して残っているところが2か所検出され、含有物などから炉址とした。

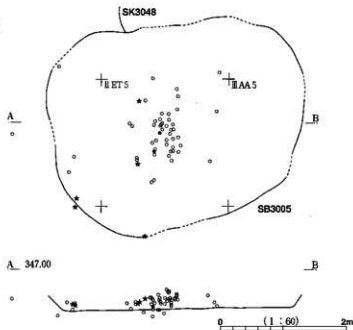
住居址中央北寄りにある炉址1は、径34cm、深さ10cmの円形に掘り込まれており、内部には炭化物・焼土粒子を多く含んでいる。炉址2はほぼ中央に位置し、55cm×20cm、深さ8cmの不定形の掘り込みがあり、炭化物・焼土を含み、特に表面に焼土が集中していた。

柱穴：主柱穴はP₁～P₆の6本で、P₁・P₂、P₆・P₃が左右対称に並ぶ。径30cm前後、不整円形～不整楕円形を呈し、P₃は深さ30cm、P₆は深さ12cmを測る。柱穴内覆土は炭化物を含む砂質のにぶい黄褐色土である。

遺物の出土状況：住居址の中央部炉址2付近に集中して遺物が出土している。また、覆土上部～床面まで分布している。

出土遺物：[土器] 出土した土器片のほとんどが14(第338図)のもので、胴部の一部がないほかは口縁部から底部まであり、復元を試みた。その他、中期末葉～後期前葉の土器片が数点ずつ出土している。中でも中期末～後期初頭に比定される新潟県に分布の中心をもつ土器片が出土しており、復元された三十稻場式土器とともに本址の性格を探る上で興味深い。[石器] 打製石斧、剥片・細片が出土している。

時期：後期初頭



第83図 SB3005 遺物分布図

SB3008 位置：ⅡE10, ⅢA6 SB3005, SB3004を切る

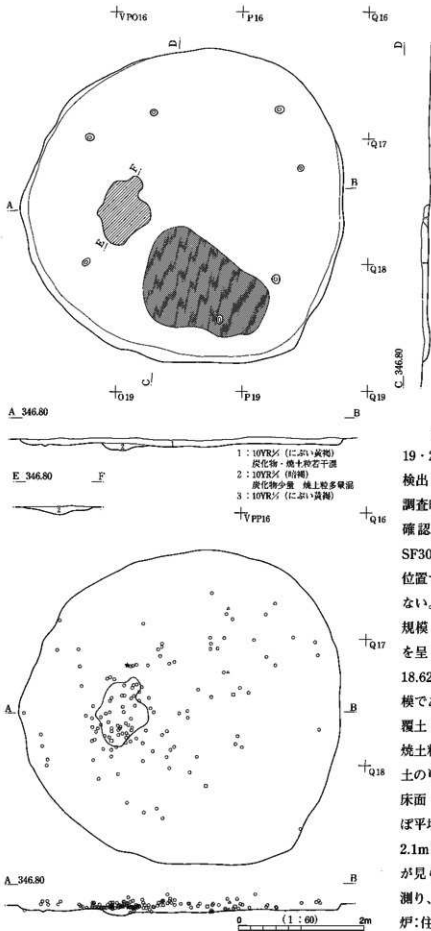
検出：トレンチによる精査、周囲との含有物・土質の差によってプランを検出したが、不明瞭である。

規模・形状：3.7m×3.1mの不整楕円形を呈すると推定される。深さ20cm、床面積はおよそ8.64㎡である。
 覆土：炭化物・焼土粒子を多く含む暗褐色土の単一層である。

床面・壁：床面は、多少の凹凸はあるがほぼ平坦である。壁は、トレンチや住居址との切り合いにより所々不明であるが、南側で高さ15cmを測り、斜めに立ち上がる。

炉：住居址の南西に偏って85cm×75cm、深さ24cmの不整楕円形の掘り込みがあり、内部には炭化物・焼土粒子が混入しており、炉址とした。

柱穴：9本の柱穴が検出された。P₈は径32cmの不整三角形を呈するビットで、焼土の塊が検出され柱穴ではないと思われる。P₇、P₉は径12～14cmの円形を呈する小柱穴で、P₅、P₆、P₁₁、P₁₂、P₁₄は径16



第84図 SB3012 遺構図・遺物分布図

～20cm、深さ13～28cmの円～不整形の、P₁₆、P₁₉は径28cm、深さ22～26cmの円～不整形を呈する柱穴である。断面は主にU字状で、傾きはそれぞれ異なる。柱穴内部には、炭化物が混入しており、焼土粒子を含む柱穴もある。

遺物の出土状況：覆土上部から床面直上にかけて出土。上器は破片で数は少ない。出土遺物：[土器] 中期末葉と堀之内式期の土器片が数点ずつ出土。

時期：後期初頭～前葉

SB3012 位置：VP

19・24

検出：周囲との含有物の差や他の遺構調査時の断面・平面によってプランを確認。同じグリッド内にSF3017、SF3019があるが本住居址より上層に位置するので、直接の切り合い関係はない。

規模・形状：5.0m～5.5mの不整形を呈し、深さ12cm、床面積はおよそ18.62㎡と7軒の住居址の中で最大規模である。

覆土：しまり・淘汰の良い、炭化物・焼土粒子を少量含んだ、にぶい黄褐色土の単一層である。

床面・壁：床面は不明確であるが、ほぼ平坦である。また、住居址南部に約2.1m×1.3mの範囲で焼土粒の広がりが見られた。壁は東側で高さ12cmを測り、緩やかに立ち上がる。

炉：住居址中央の西寄り奥に、114cm×80cm、深さ12cmの焼土が散在した不定形の掘り込みがあり、炉址とした。

内部の土は、しまり・淘汰の良い、炭化物・焼土粒子を含んだ暗褐色土であった。

柱穴：柱穴と思われるピットが7本検出されたが、いずれも径10cm～15cm、深さ5cm～10cmの楕円形ないしは円形の小さいピットである。

遺物の出土状況：覆土上部から床面にかけて、特に炉址周辺に集中して出土している。

出土遺物：[土器] 炉址及びその周辺に22（第339図・堀之内1式）の土器片が多量に出土。23（第339図・堀之内1式）は炉址とその周辺の覆土上部～半ばに散在している。25（第339図・加曾利EⅣ式）の土器片は住居址北東部に、覆土上部～下部に散在している。称名寺式期の土器片は炉址の周辺に数片出土している。[石器] 凹石が1点出土。[その他] 骨片が3点出土。

時期：後期前葉堀之内式期

2 焼土址

調査区の中央部を帯状に分布するように34基の焼土址が確認された。とりわけV L, V P, V Q区に集中している。Ⅲ A, Ⅱ E区の焼土址は竪穴住居址とほとんど同じ面で検出されている。プランは、焼土粒子・炭化物の集中範囲や、周囲との含有物の差により検出した。規模・形状はまちまちである。火床面や焼痕が確認された焼土址は8基のみで、他は、焼土塊や焼土集中・炭化物集中が確認されたり、覆土に焼土粒子や炭化物を含んだものがほとんどであった。遺物の出土した焼土址は4基のみで、そのうち時期のわかるものは2基あり、後期初頭に比定される。他の焼土址もおそらく中期末葉～後期前葉の所産と思われる。また、調査段階で後期後半のものと想定した焼土址13基から、抽出した6基（SF3501, 3502, 3508, 3510, 3512, 3514）について、炭化物を対象とした放射性炭素年代測定をバリノ・サーヴェイにて依頼したところ、縄文後期に相当するという結果が出ている。これら13基のうちSF3508からは後期初頭の土器が出土しており、他の12基からは出土遺物がないため、ここで扱うことにした。焼土址の機能・用途に関しては、住居の炉と思われるものもあるが、ほとんどは火を焚いた跡あるいはその残滓を捨てた跡ではないかと推測されるだけで詳細は不明である。以下、特記される焼土址を説明し、他は一覧表に表す。

SF3001 位置：V U21

検出：焼土粒子の集中分布範囲をもってプランを検出した。

覆土及び焼土の堆積状況：覆土は焼土粒子・焼土ブロック・炭化物を含んだ褐色土の単一層で、掘り込みは8cmと浅く、底面は緩やかな凹凸がある。

被熱痕跡の状況：覆土上限に赤褐色及び暗赤褐色の焼痕が輪状に確認できた。

他の施設との関連：本址の周囲に11箇所落ち込みが検出されたが、本址との関連は不明。

遺物の出土状況：周辺からは中期末～後期初頭の土器片が出土している。

時期：不明

SF3006 位置：Ⅲ A1・6

検出：焼痕が確認され焼土・炭化物の集中分布によりプランを検出した。

覆土及び焼土の堆積状況：覆土は焼土粒子・炭化物を含む、しまり・淘汰の悪い1層（暗褐色土）、2層（褐色土）からなる。2層上限、とりわけ本址南部分には焼土粒子が集中していた。

被熱痕跡の状況：本址北部分、1層上限に不整形の焼痕が見られた。

他の施設との関連：本址の東側に、54（第344図）の土器が出土したSK3067があり、周辺からも土器が多く出土していることなどを考えると、住居の炉址とも思われる。（SK3067参照）

遺物の出土状況：覆土及び底面近くから土器3片が出土しているが、多くは検出面より上位の出土である
出土遺物：〔土器〕中期後半から後期初頭称名寺式期の土器片が出土している。

時期：後期初頭と思われる。

S F 3 0 1 7 位置：V P24～25

検出：焼土粒子・炭化物の分布範囲によりプランを決定した。

覆土及び焼土の堆積状況：600×430cmの広い範囲に炭化物が散在し、その内側に炭化物集中・焼土粒集中・焼土が検出された。炭化物集中範囲とおおよそ一致するように落ち込みがあり、その覆土は二層に分かれる。1層はしまりやや良く淘汰の良い炭化物・焼土粒子を含むふい黄褐色土で、2層はしまり・淘汰の悪い炭化物・焼土粒子・焼土ブロックを含む暗赤褐色土である。1層より2層の方が、炭化物・焼土粒子の含有量が多い。

被熱痕跡の状況：炭化物集中範囲の中に暗赤褐色の焼土が3か所確認された。この焼痕は、大きいものは160×85cmの不整形を呈し、小さい2つは長径約40cm前後の不整形円形を呈する。また、焼土粒集中も4か所で確認された。

他の施設との関連：炭化物散布範囲と炭化物集中範囲の北西側一部がSB3012と重なるが、調査段階ではSB3012がより下層で検出されており、直接の切り合い関係等は確認できていない。

遺物の出土状況：土器片が数片検出時に出土している。

時期：不明

S F 3 0 4 1 位置：V U 8

検出：焼土粒子・炭化物の集中範囲によりおおむねプランを検出したが、サブトレンチによる断面観察を併用し、プランを確定した。

覆土及び焼土の堆積状況：覆土は三層に分けられ、1層は焼土粒が混じる褐色土、2・3層はふい黄褐色土である。上層ほど焼土粒子・炭化物の含有量が多く、2層には破砕小礫が含まれる。

被熱痕跡の状況：1層上限に径20cmの不整形円形を呈する焼痕が確認された。

他の施設との関連：本址の周囲にはピット状の落ち込みが9箇所検出された。また、本址を中央に6.8×6.2mの不整形円形状の落ち込みが検出され、住居址かと思われたが壁は確認できなかった。本址は住居の炉と思われるが推測の域を出ない。

遺物の出土状況：本址からは出土していないが、周辺から土器片が出土している。

時期：不明

S F 3 5 0 8 位置：V K20・V L16

検出：炭化物の集中範囲をもってプランを検出した。北東側は一部分SF3509に切られる。SF3505は本址より上層で確認され、切り合いはない。

覆土及び焼土の堆積状況：覆土は単一層で、炭化物が北壁に沿って検出された。

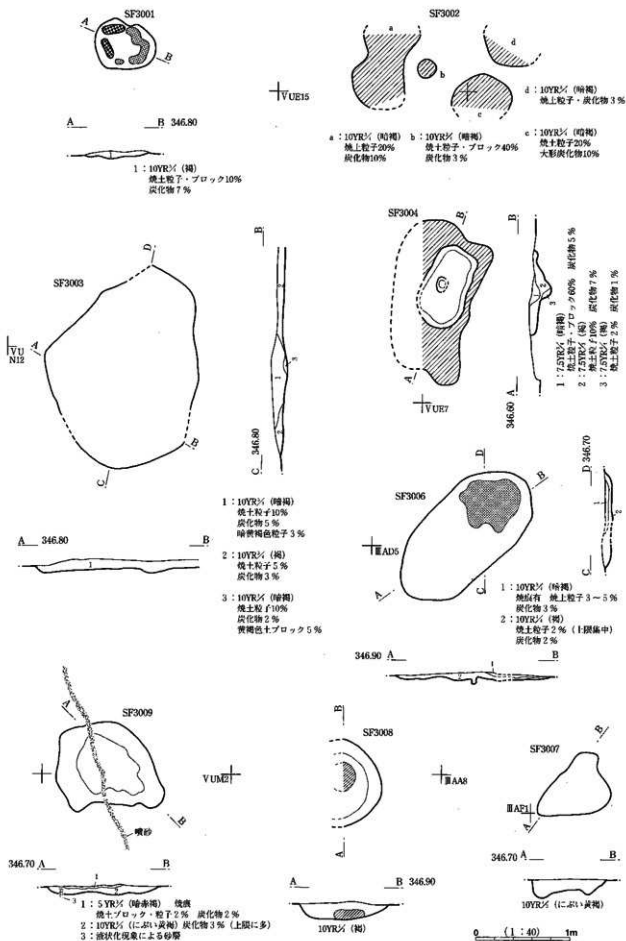
被熱痕跡：なし

他の施設との関連：SF3509に切られるが、特に関連はないと思われる。

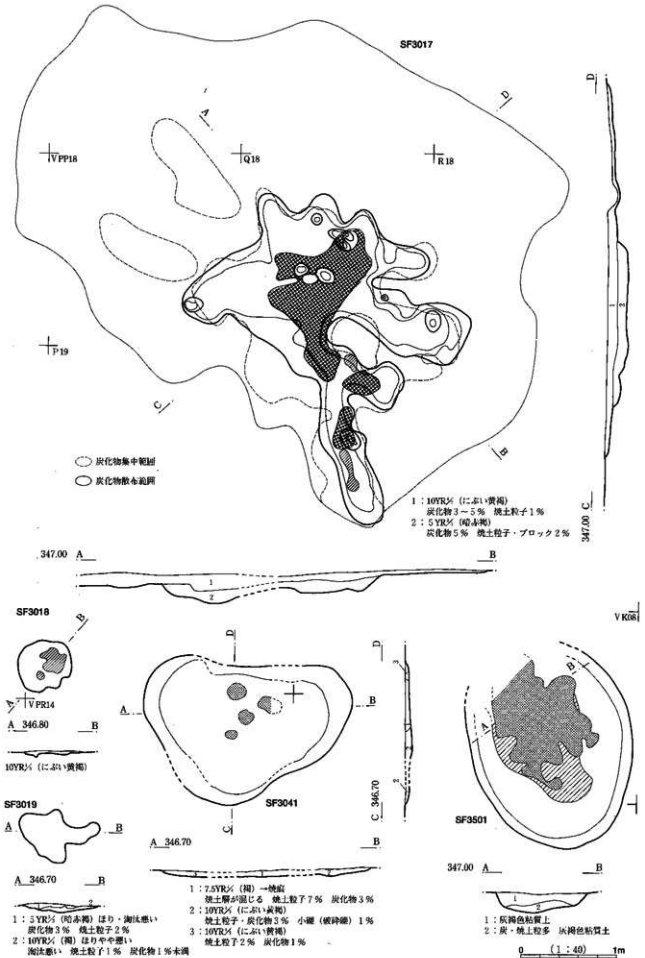
遺物の出土状況：覆土の中～上層にかけて、土器片が出土している。

出土遺物：〔土器〕称名寺式期の土器（第340㉔28）が出土。

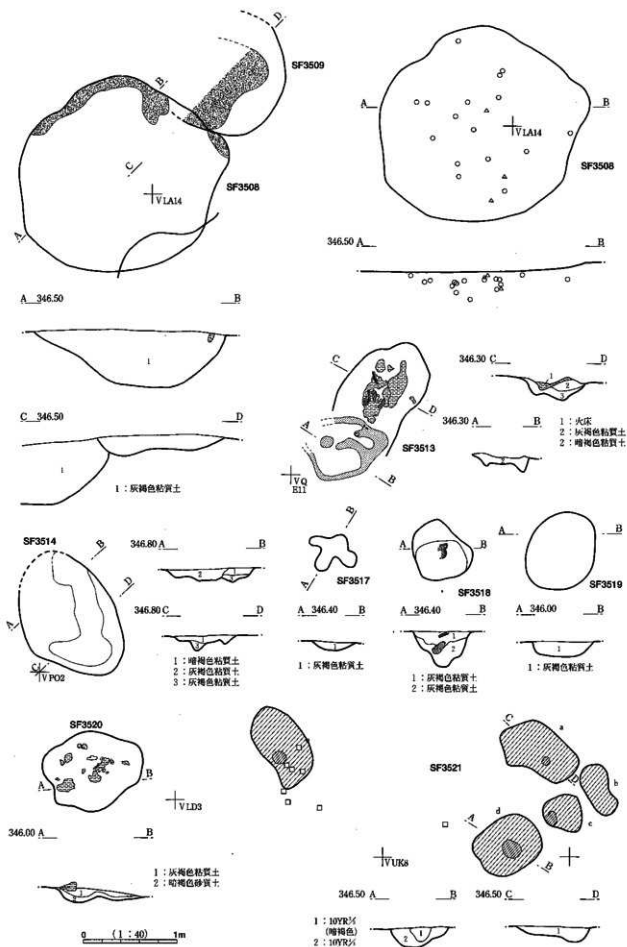
時期：後期初頭称名寺式期。覆土中の炭化物を採取し放射性炭素年代測定を実施したところ、3560土



第85図 焼土址遺構(1)



第86図 焼土址遺構図(2)



第88图 烧土址遺構图(4)

100y.B.p (Gak-17577) という結果が得られた。

SF3513 位置：VQ12

検出：焼土粒子・炭化物の集中範囲によりプランを決定した。

覆土及び焼土の堆積状況：覆土は四層に分けられ、1層は火床面、2層は地山に近い灰褐色粘質土、3層は炭・焼土粒子が多く混入する暗褐色粘質土、4層は黒味があった灰白色粘質土である。南側には硬い粘質土の広がり確認され、ボソボソした灰褐色粘質土の単一層よりなり、焼けた粘土の塊と思われる焼土ブロックが混じる。なお、本址北部分には火床、南部分には硬い粘質部があり、断面も考え合わせると住居の炉址とも思われる。

被熱痕跡の状況：覆土1層の火床面は2～5cmの厚さで焼けているのが確認された。

他の施設との関連：特になし。 出土遺物：なし。 時期：不明。

SF3521 位置：VU8

検出：後期面再精査中に、焼土粒子・炭化物集中範囲を5箇所検出(a～e)、互いに近接しているのどひとつのまとまりとして、SF3521として扱った。

覆土及び焼土の堆積状況：a, c, eでは覆土上限に焼七粒の集中箇所が確認された。覆土には焼土粒子・炭化物が全体に混入している。

被熱痕跡の状況：dでは赤褐色を呈する焼土が確認された。

他の施設との関連：特になし

出土遺物：e及びその周辺には骨片が出土している。

時期：不明

SF No.	位置	規模 (cm)		形状	状況	覆土の堆積状況	被熱痕跡の状況	出土遺物	時期	備考
		長軸	短軸							
3001	VU21	65	62	8	不整形四角形	焼土粒子・炭土ブロック・炭化物を多量に含む	1層：土間に赤褐色～暗赤褐色の焼痕	なし	不明	溝間に落ち込み11箇所検出。本址との関連不明
3002	VU17 (233)	(173)	—	—	(不整形)	焼土粒子・炭化物が混入。焼土ブロック・大形の炭化物も一見見られる	なし	上部片2個	不明	既知間・東側をトレンチに切られる
3003	VU14	219	163	17	不整形四角形	焼土粒子・炭化物の混入量が下層にいくにしたがって減少	なし	なし	不明	トレンチに切られる
3004	VU7	86	47	23	縦長 長方形	1層は焼土粒子・焼土ブロックが多く混入。2層・3層は焼土粒子の混入は減少	なし	なし	不明	焼土粒子・炭化物分布範囲150×80cmまで拡大
3005	VL4	(80)	52	3	不整形四角形	—	なし	なし	不明	北側不明
3006	■A1 ■A6	172	86	8	四角形	焼土粒子・炭化物が覆土に混入。下層ほど減少。2層以降に焼土粒子集中	1層：土間に赤褐色の焼痕あり	中層後半～後期終末寺式部の土層片	後附2段階	SK3087と関係があると思われる
3007	■A2	89	62	19	不整形長 三角形	下層に焼七粒がやや集中	なし	なし	不明	
3008	■E10	(93)	(90)	18	四角形	焼土粒子・炭化物を含む。中央下部に焼土粒子が集中	なし	なし	不明	西半分をトレンチに切られる
3009	VU4	127	104	10	不整形	1層に焼土粒子・焼土ブロック・炭化物。2層・3層は多量の炭化物が見られる	1層に暗赤褐色の焼痕が見られる	なし	不明	現状化現象による層割が見られる
3017	V P21 V P23	360	300	30	不整形	焼土粒子・炭化物が全体に混入。1層では炭化物集中。2層では焼土粒子集中	2層に暗赤褐色の焼痕が見られる	鉄造時に土器敷出済み	不明	炭化物分布範囲はSK3012より広い
3018	V P20	53	52	4	不整形四角形	焼土粒子が混入。特に底面20cm以内に焼土粒子が集中	赤褐色土が混入した部分あり	なし	不明	
3019	V P24	82	55	9	不整形	1層に焼七粒・炭化物が混入。2層では焼土粒子は少量。炭化物はない	1層に暗赤褐色を呈し、赤紫色も見られる	なし	不明	SK3012の上層で検出
3041	VL8	218	144	7	横長 三角形	焼土粒子・炭化物の含有量は下層にいくにしたがって減少。2層：焼七粒の焼土	1層に焼痕あり	なし	不明	周囲に落ち込み9ヶ所あり
3501	V K 9 V K14	(226)	166	20	四角形	1層：炭化物混入。2層：炭化物・焼土粒子多量に含む	なし	なし	不明	3000±90y.B.P (Gak-17575)
3502	V P13 V P14 V P18 V P19	680	280	(19)	不整形	炭化物が全体に分布	なし	なし	不明	掘り込みごく浅い 3660±100y.B.P (Gak-17576)
3503	V P9	105	81	18	不整形 四角形	1層：多量の焼土ブロック・小江太の炭粒混入。2層：小形～小江太の焼土混入	なし	なし	不明	
3504	V K25 V L21	352	194	38	不整形	炭混じりの暗褐色土～灰褐色土。焼七粒が上部に有	なし	なし	不明	

第19表 中期末葉～後期前葉焼土址一覧表(1)

S/F No.	位置	規模 (cm)			形状	層上の堆積状況	炭化物群の状況	出土遺物	時期	備考
		縦長	横長	深さ						
3505	VK20 VL15	368	300	10	不整楕円形	小皿程度の炭が全体に散在	なし	なし	不明	越後のプラン不確定 SF3505は下層で検出
3506	VQ11 VQ12	162	120	11	不整楕円形	焼土粒子若干、炭化物多量に含む	なし	なし	不明	西側のプラン不確定
3507	VP22	123	69	17	不整形		なし	なし	不明	
3508	VK20 VL16	210	204	61	不整方形	炭化物を多量に含む	なし	28、18の土器片9種	不明	SF3509に切られる 3509±190y.B.P. (Gal-17577) 最期初葉 作れず入庫
3509	VL16	(138)	(135)	20	(円形)	焼土は見られない	なし	なし	不明	上部プラン不明 SF3508を切る
3510	VQ 3	172	138	10	不整形	プランの輪郭に炭のブロックが入る 比較的大きなブロック状の炭が混入	なし	なし	不明	3390±210y.B.P. (Gal-17578)
3511	VQ 2	(148)	(88)	18	不整楕円形	2層:炭粒が混入	なし	なし	不明	東側プラン不明
3512	VL18 VL23	205	138	4	不整楕円形	板状炭化材・炭が平面的に分布	なし	なし	不明	北西側プラン不明 3508±100y.B.P. (Gal-17577)
3513	VQ12	(148)	(88)	18	不整楕円形	3層:炭化物・焼土粒子が多量に混入	厚さ2～5cmの穴床が検出された	なし	不明	南側に壁・紐貫部有 焼けた粘土の塊が入る
3514	VP 4	(143)	(100)	15	(不整楕円形)	1層:焼土粒子・炭粒が多く含まれる	なし	なし	不明	北西側プラン不明 3600±200y.B.P. (Gal-17580)
3515	VQ 9	(57)	(46)	18	(不整楕円形)	焼土粒子・炭化物が混入 特に2層は炭化物を多量に含む	なし	なし	不明	北半分プラン不明
3516	VQ 5	(52)	(35)	8	(不整楕円形)	焼土粒子混入。炭化物を多量に含む	なし	なし	不明	北半分プラン不明
3517	VP 1	45	(55)	9	不整形		なし	なし	不明	
3518	VP 6	66	55	37	不整圓角方形	焼土粒子若干、炭化物多量に含む	なし	なし	不明	
3519	VP18	87	72	16	楕円形		なし	なし	不明	
3520	VL 1	(106)	(84)	13	不整楕円形	1層:上面に焼土ブロックがある	なし	なし	不明	
3521 F1	VL 8	88	53	16	不整楕円形	焼土粒子が全層に分布 焼土粒子集中有	なし	なし	不明	
3521 F2	VL 8	35	30	—	不整楕円形		なし	なし	不明	
3521 F3	VL 8	45	40	—	楕丸二角形	焼土粒子集中有	なし	なし	不明	
3521 F4	VL 8	69	57	20	楕丸長方形	焼土粒子・炭化物を含む 2層:焼土粒子が混入	1層(上面)に赤褐色を呈する焼土が見られる	なし	不明	
3521 F5	VL 8	85	68	—	不整楕円形	焼土粒子集中有	なし	骨片が円筒内に散在	不明	

第20表 中期末葉～後期前葉焼土址一覧表(2)

3 遺物集中

調査段階で遺物集中として捉えた遺構はない。該期に属する遺物の出土量そのものが他の時期に比べて少ないことも一つの要因となろうが、整理作業の段階で遺物分布図を作成したところ、遺物が集中して出土している箇所がいくつかあり、それらの部分を遺物集中と捉えることとした。遺物集中と焼土址・掘立柱建物址・杭列状遺構など、他の施設との関連は不明である。なお、文中、杭列状遺構○とあるが、第97図を参照されたい。

SB3011 位置: VP11～12・16～17

当初周周との含有物の差により落ち込みを検出し住居址と想定したが、炉や柱穴が確認できなかったの、遺物集中として捉えた。なお当初プランの規模は、平面6.0×5.4m、深さ4～9cmの不整楕円形を呈し、覆土は焼土粒子・炭化物を含んだ暗褐色粘質土であった。

遺物の出土状況: 5×4.5mの楕円形状に平面分布し、標高346.20～346.37mに集中して出土している。

出土遺物: [土器] 後期初頭糸名寺式期から前葉堀之内式期の土器片が出土。特に、29(第340図・堀之内2式)が中央南側に集中して出土している。[石器] 覆土から剥片・砕片8点・刃器1点・石鏃1点が出土。[その他] 礫。

SQ3052 位置: VL20・24～25

遺物の出土状況: 平面約13×8mの楕円形状に広範囲にわたって主に土器が分布し、標高346.7～347.0m、

特に346.8～346.9mに集中出土している。また、集中分布範囲の中に焼土集中・炭化物集中・骨集中箇所が検出された。骨集中は土器集中と同じ標高にあるが、平面分布を見ると骨集中の周辺では土器の出土はあまりない。焼土集中は3箇所確認され、遺物集中より下層で検出されており、土器集中は住居の名残りである焼土集中はその炉址とも推測される。

出土遺物：〔土器〕36（第340図・堀之内1式）の土器が集中して出土しており、他に32～35など堀之内2式期の土器片が出土している。

SQ3053 位置：VM11・16

遺物の出土状況：平面8.5×5mの楕円形状に分布し、標高346.5～346.8mに、主に土器が集中出土。

出土遺物：37（第341図・堀之内1式（株名寺Ⅱ併行））の土器片が多く出土し、他に38・39の土器なども出土している。

SQ3054 位置：IVY8

遺物の出土状況：平面2.8×1.5mの楕円形状に礫が集中分布しているのが検出された。垂直分布では標高346.71～346.82mに集中している。なお、北西側に炭の集中箇所があるが、本址より30～40cm下層で検出されており、関連はない。

出土遺物：礫はほとんどが破砕されている。種類は凝灰岩と安山岩で、凝灰岩は一部接合ができ、元は一個の石であったと思われる。

SQ3055 位置：IVY8・13～14

遺物の出土状況：平面4.2×1.4mの楕円形状に分布し、標高346.74～346.86mに集中出土している。

出土遺物：安山岩の破砕礫がほとんどで、同一個体と思われる。

SQ3056 位置：IVY9

遺物の出土状況：平面6.0×3.2mの長楕円形状に分布し、標高346.24～346.8m、特に346.38～346.50mに土器片が集中している。本址の東側には、枕状遺構Ⅰ列が検出されている。両者に時間差はほとんどないと思われるが、関連は不明である。

出土遺物：40（第341図・株名寺式）の土器片が散在している。

SQ3057 位置：VG14～15・19～20

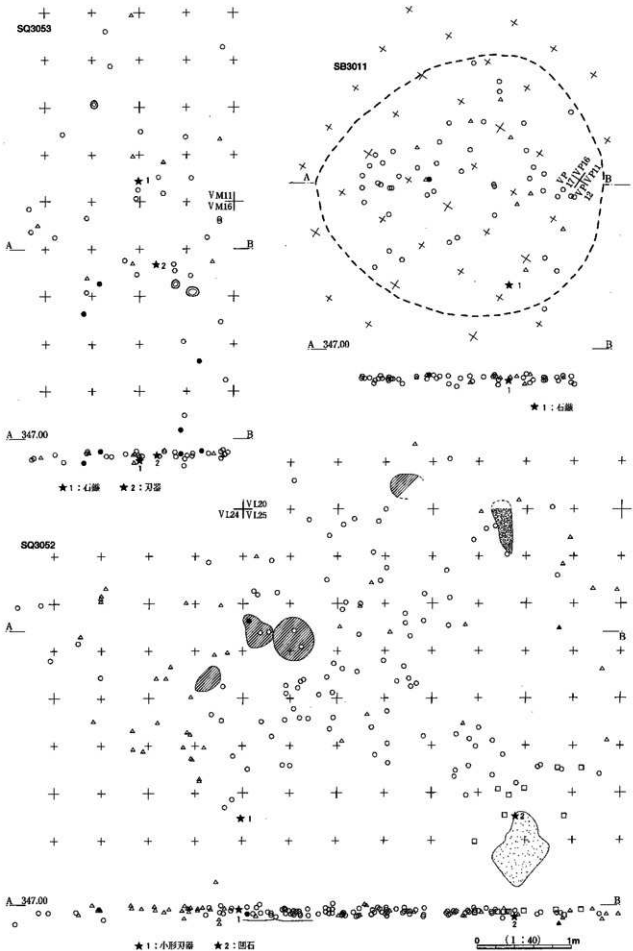
遺物の出土状況：VG19の北東部からVG20の北西部にかけて平面約10×8mの楕円形状に、標高345.6～345.8mに土器片が集中分布している。

出土遺物：41（第342図・堀之内1式）の土器片がVG20北東部に集中分布し、42（第342図・堀之内1式）はVG19北西部からSQ3058にかけて分布している。45（第342図）の土器はVG19・30～31周辺からSQ3058、SQ3059にわたって広く分布している。他に44の土器片も出土している。

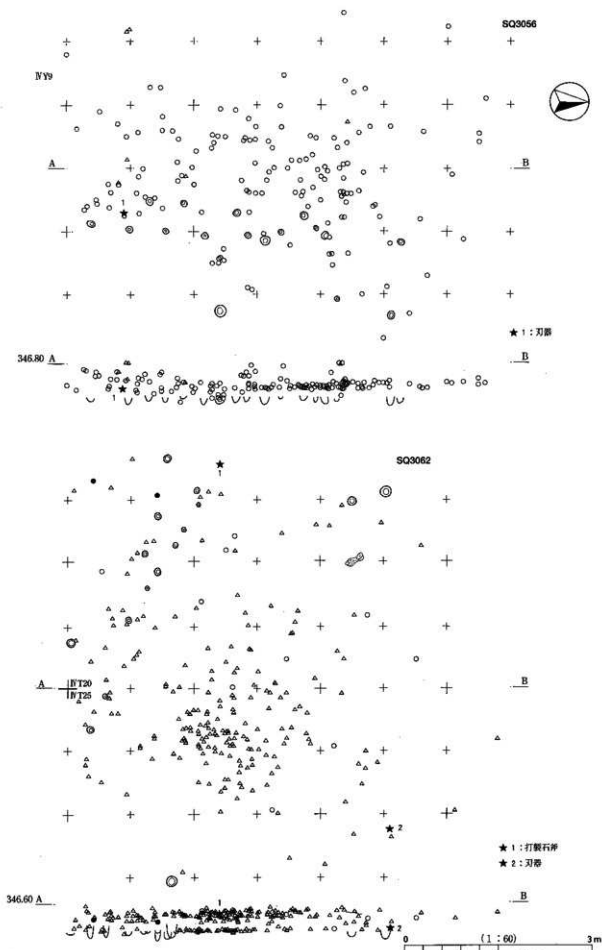
SQ3058 位置：VG20・25

遺物の出土状況：VG20南中央部からVG25北部にかけて、平面7×5mの楕円形状に土器集中が検出された。標高345.49～345.79m、特に345.62～345.75mに集中している。

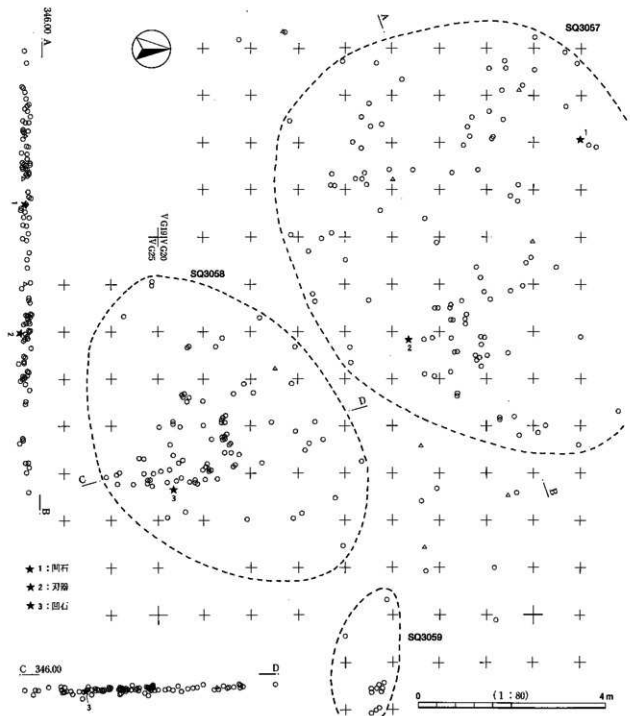
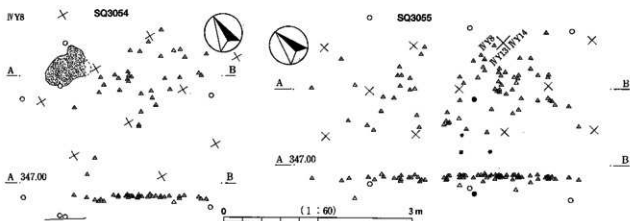
出土遺物：43・44（第342図・堀之内2式）の土器が出土している。



第89図 遺物集中遺構図(1)



第90図 遺物集中遺構図(2)



第91図 遺物集中遺構図(3)

SQ3059 位置：VH16

遺物の出土状況：同一個体の土器片が一ヶ所に集中して出土し、標高345.63～345.69mに分布している。

出土遺物：45（第342図）の土器片が出土。

SQ3060 位置：VK9～

10・14～15

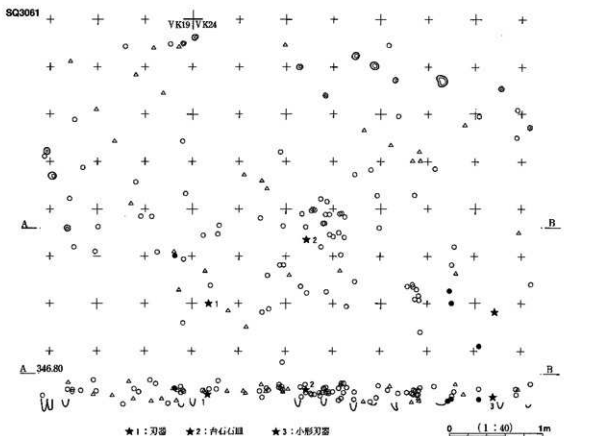
遺物の出土状況：杭列状遺構B列とC列に囲まれた部分に土器片が集中して分布している。標高346.1～346.4m、特に346.1～346.24mに集中している。

出土遺物：分布している土器は主に46（第342図・加曾利EⅣ式）の土器片が多く、同一個体の土器片はⅣT24，SB3012でも多く出土している。

SQ3061 位置：ⅣT19・

24

遺物の出土状況：杭列状遺構Ⅰ列とG列の間、ピットが検出されなかった部分に土器



第92図 遺物集中遺構図(4)

片が集中出土している。標高346.4～346.55mに特に集中している。

出土遺物：主に47（第343図・称名寺式）、他に40・46などの土器片が出土している。

他の施設との関連：47の胴部はV P24・V Kに、46はSQ3060, SB3012に多く出土しており、SB3012・V P24、及び杭列状遺構との関連も考えられるが、詳細は不明である。

SQ3062 位置：ⅣT20・25

遺物の出土状況：杭列状遺構Ⅰ・G・J・N列に囲まれた部分に礫が集中出土した。垂直分布を見ると、分布幅が2極あり、上部は標高346.3～346.5m、下部は346.15～346.2mの幅で集中している。

出土遺物：礫は重さ5～100gの被熱していない完形礫がほとんどで、砂岩が多い。破砕礫は5～15gのものが多い。土器片は10点ほどであった。

他の施設との関連：杭列状遺構との関連は不明である。杭列状遺構Ⅰ列をはさんで西側にはSQ3061があるが、これも関連は不明である。

4 土坑

調査段階では100数基確認されたが、整理の段階で検討した結果84基となった。平面分布状況を見るとⅣY、V U、ⅡE、ⅢA区に多く検出されている。また、ⅣS区において加曾利E式期の遺物包含層が確認され、土坑Ⅰ基が検出された。遺物が出土した土坑は15基のみで、時期を推測できるものは少ない。規模・形状はまちまちで、柱穴と思われる小型のものもあるが、明らかにわかるものは除き、他は土坑として扱った。以下、特記される土坑を説明し、他は一覧表に記した。

SK3001 位置：ⅣY25

検出：炭化物などの分布範囲や遺物の出土状況等からプランを確認した。

覆土：しまりやや良く淘汰良好の褐色土の単一層で、炭化物を多く含むが、焼土粒子はほとんどない。

遺物の出土状況：覆土の中ほどから土器片などが多量に出土している。

出土遺物：[土器] 後期初頭称名寺式期の土器、2（第336図）、48～51（第343図）などが出土している。なお、SB3001、SB3002出土の土器と同一個体のももあり、流れ込みと思われる土器も多く、検討の結果48～51を本址のものとした。[石器] 剥片・刃器・石錐。

その他：南側にSK3033が検出されるが、本址の底面より下の面で検出確認されているので、切り合いはないと思われる。

時期：後期初頭称名寺式期

SK3004 位置：ⅢA6

検出：土器の出土及び炭化物・焼土粒子の分布状況により、プランを確認した。

覆土：しまり・淘汰の悪いにぶい黄褐色土の単一層で、焼土粒子・炭化物を含む。覆土の中ほどには炭化物の集中箇所が見られた。

遺物の出土状況：検出面上から覆土の中ほどにかけて、土器が出土している。

出土遺物：[土器] 52（第343図・堀之内2式）の土器片が出土。

時期：後期前葉堀之内式期

SK3048 位置：ⅡE5・ⅢA1

検出：SB3005のプラン確認の際に落ち込みを検出、炭化物・焼土粒子の分布範囲等によりプランを確認した。一部分不明箇所があるが、SB3005を切って構築されている。

覆土：炭化物・焼土粒を含む褐色土の単一層よりなる。

遺物の出土状況：覆土上層から底面近くにかけて土器片が出土しているが、出土量はあまり多くない。

出土遺物：〔土器〕中期末葉～後期前葉の土器片が出土している。SB3001やSB3004, SB3005などで出土している土器と同一個体のものが多く、本址のものであるかは不明である。

時期：後期前葉か。SB3005よりは新しい。

SK3067 位置：ⅢA2・6・7

検出：遺構検出面上で土器片が集中して出土し、周辺の検出面の土の相違について精査したところ、焼土粒子・炭化物など含有物の量に差がみられ、プランを確認した。

覆土：しまり・淘汰良好の粘性のある褐色土の単一層である。焼土粒子・炭化物を含み、特に焼土粒子は検出面上に多く分布しており、炭化物は検出面上と中間層に集中し、全体に散在している。また、土器の底部下の覆土中には骨片が含まれていた。

遺物の出土状況：土器の胴部下半から底部にかけて、正位の状態覆土の中ほどまで埋没していた。

出土遺物：〔土器〕54(第344図)後期初頭称名寺式期の土器。なお、ⅡE・VU・ⅢA・SB3001などからはこの土器と酷似した上半部が出土しており、同一個体として捉えた。

その他：土器下から採取した骨片を含んだ土について、後日パリノ・サーヴェイに科学分析を依頼した。その結果、土坑外・土坑内・土器直下の試料の間に、リン酸カルシウム成分の含量について有意な差は認められなかったという報告を得た。

SF3006の項でも記したが、本址の北西50cmのところにはSF3006が確認されており、また周辺では遺物も多量に出土している(第93図)。遺構の標高や遺物の垂直分布状況などを検討してみると、SF3006は炉址、SK3067は住居内土坑と考えられ、住居の名残と考えられる。また、周辺出土遺物としては、1・5・55と同一個体の称名寺式期の土器片が出土している。これらのことから後期初頭称名寺式期の住居址であったと推測される。

時期：後期初頭称名寺式期

SK3091 位置：VP23

検出：遺構検出時に土器の集中が検出され、炭化物・焼土粒子の分布範囲等によりプランを確認した。

覆土：しまり・淘汰の良い砂質のふい黄褐色土の単一層で、炭化物・焼土粒子を少量含む。

遺物の出土状況：検出面上から覆土中層にかけて、同一個体土器片が出土している。

出土遺物：〔土器〕56(第344図)。接合の結果、口縁部から胴部上半分の大きな破片となった。

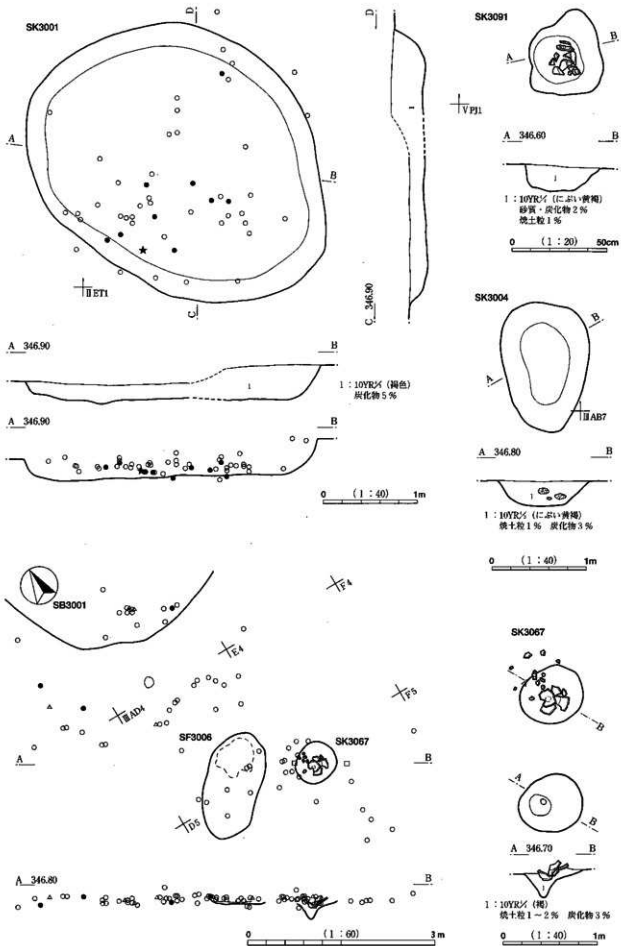
時期：中期末葉

SK3099 位置：ⅣY14

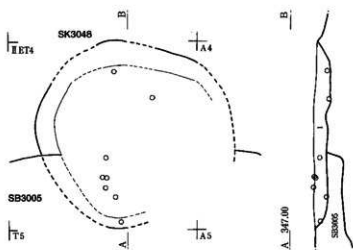
検出：遺物の集中出土、及び焼土粒子・炭化物の分布状況によりプランを確認した。

覆土：1・2層は、粒子の細かい、しまりやや悪く炭化物をやや多く含む暗黄褐色土で、1層には焼土粒子が少量含まれる。3層は、しまり良い、粒子の細かい炭化物をわずかに含む暗黄褐色土である。

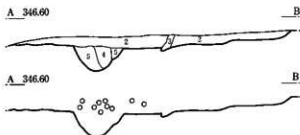
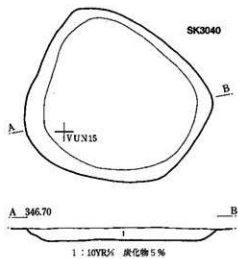
遺物の出土状況：遺構検出面より上層から、覆土1層及び3層上部にかけて土器片が多く出土している。



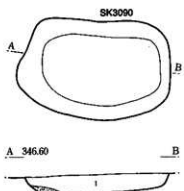
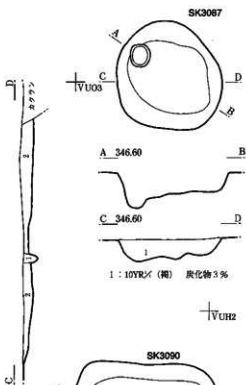
第93図 土坑遺構図(1)



1 : 10YR \times (褐)
炭化物10% 焼土粒子2%



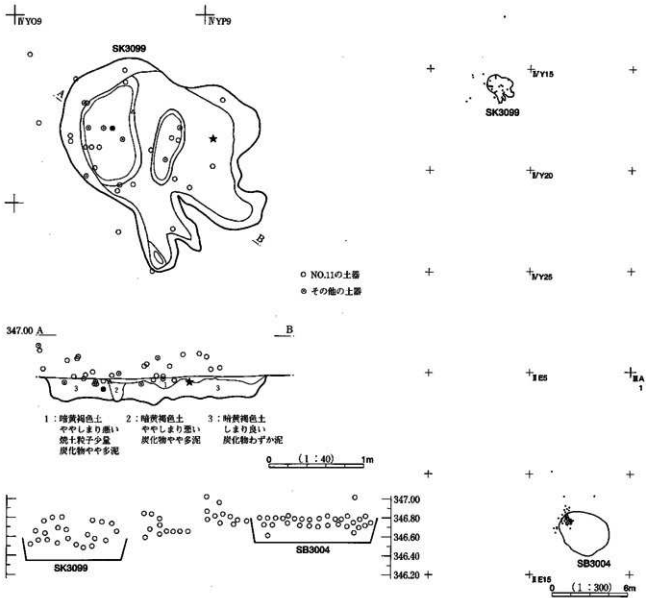
- 1 : 暗灰褐色土 炭化物、青灰色粘土わずか 小石少量混
- 2 : 暗灰褐色土 炭化物わずか 青灰色粘土少量混
- 3 : 暗灰褐色土 炭化物やや多混
- 4 : 暗灰褐色土 炭化物、青灰色粘土わずか混
- 5 : 青灰色土 炭化物わずか混 明灰褐色土やや多混



- 1 : 10YR \times (褐)
焼土粒1~2% 炭化物3~5%

0 (1:40) 1m

第94図 土坑遺構図(2)



第95図 土坑遺構図(3)

出土遺物：【土器】出土した土器のほとんどが11(第338図)の同一個体破片であった。他に、検出面より上層から中期後半と思われる土器片が出土している。

土器の接合関係について：11の土器片は、SB3004からも多量に出土している。接合作業の結果、縦に大きく分割されたように、SK3099では底部～口縁部、SB3004からは胴部～口縁部が出土している。SB3004での出土状況は、平面分布を見ると住居址の北西部に集中しており、垂直分布は検出面上から住居址内にかけて、覆土の中ばまで帯状に分布している。これを見ると、SB3004に流れ込んだように考えられる。また、SB3004では11のほかに10・12など堀之内1～2式期の土器片も出土し、同期の住居址と考えられることから、11の土器はSB3004所属のものとも考えられる。あるいは、本来は他のところにあったものをSB3004とSK3099、あるいはその近辺にそれぞれ大破片を廃棄したか。また、自然営力の所産と捉えて、それぞれのところに流れていったのか、というように様々な推測ができる。客観的な事実、SK3099とSB3004が平面上では約33m離れており、土器出土地点の標高差は約30cmと、SB3004の方がやや高いということである。標高差については、平面での距離を考慮すれば標高差30cmはほとんどとるに足らない数

値といえようが、当時の原地形も把握できていない現段階では、いずれにせよ、どれもみな推測の域を越えないものである。

時期：後期前葉堀之内2式期

VIS加曾利E包含層内SK 位置：VIS24・25

検出：縄文前期末～中期初頭面検出の際に、中期後半に比定される土器が出土し、精査の結果、攪乱を受けているため一部ではあるが、中期後半の包含層及び土坑が確認された。

覆土：包含層の覆土は三つの層に分かれ、1層・3層はブロック状に2層に入り込んでいる。3層は根痕と思われる。4・5層は、2層下の落ち込み部分の覆土である。

遺物の出土状況：平面分布では土坑及びその周辺に集中しており、垂直分布を見るとほとんどが2層中から出土している。

出土遺物：〔土器〕58（第344図）。円縁部及び底部を欠く、中期後葉加曾利E系の同一個体土器片が数点出土。

時期：中期後葉～木葉

SK No.	位置	規模(cm)			形状		覆土の状況	底面・壁の状況	出土遺物	時期	備考
		長軸	短軸	深さ	平面形	断面形					
3001	IVY25	330	270	20~40	不整楕円形	窪穴状	炭化物を含む	底面ほぼ平坦 壁斜め傾く	48.49.20.51等の土器	後期初期	本址の意倉より下層でSK3003が検出される
3002	III A 6	105	105	10~20	隅丸方形	竪坑状	炭化物の集中。焼土粒子少量含む	底面ほぼ平坦 壁斜め傾く	骨土から土器片 出土	不明	
3004	III A 6	140	90	26	楕形	すり鉢状	炭化物・焼土粒子を含む	底面丸い 壁斜め傾く	52(堀之内2式) の土器片	不明	覆土中炭化物集中
3005	II E15	125	90	20	不整楕円形	竪坑状	炭化物多量に、焼土粒子わずかに含む	底面2箇所凹む 壁2段落ち・斜め傾く	なし	不明	
3009	IVY24	45	43	30	円形	柱穴状	炭化物多量に、焼土粒子わずかに含む	底面丸い 壁ほぼ垂直・斜め傾く	なし	不明	炭化物上段~15cm多い 炭化物の堆積
3021	III K 4	32	26	27	楕円形	柱穴状	炭化物多量に含む。集中部あり	底面丸い 壁ほぼ垂直・斜め傾く	なし	不明	
3024	III K 4	45	44	34	不整円形	すり鉢状	炭化物含み。特に覆土上段~15cm下に多い	底面丸い 壁ほぼ垂直・斜め傾く	なし	不明	
3026	III E 4	20	18	15	不整円形	柱穴状	炭化物含み。覆土上段・覆土内炭化物集中	底面丸い 壁ほぼ垂直・斜め傾く	なし	不明	
3027	III E 4	50	44	18	不整楕円形	すり鉢状	炭化物含み。覆土上段・覆土内炭化物集中。焼土粒子わずかに含む	2段落ち・陥って凹む 壁斜め傾く	なし	不明	
3028	III E 4	36	32	14	不整楕円形	柱穴状	炭化物やや多く含む。特に覆土上段~5cm下に多い	2段落ち・陥って凹む 壁ほぼ垂直	なし	不明	
3031	III E 4	33	28	—	楕円形	不明	炭化物多量に、焼土粒わずかに含む	不明	なし	不明	
3032	III E 4	36	40	22	不整楕円形	すり鉢状	炭化物少量含む。特に覆土上段~5cm下に多い	底面丸い 壁西側2段落ち	なし	不明	
3033	IVY25 II E 3	300	250	16	不整楕円形	窪穴状	炭化物少量含む。焼土粒子多量に含む	底面丸かつ平坦で、 骨土・灰が分布 壁斜め傾く	骨土中に土器 1片出土	不明	SK3001より下層で検出
3034	II E 4	38	35	12	不整円形	すり鉢状	炭化物。覆土上段に多い 焼土粒子わずかに含む	底面丸い 壁斜め傾く	なし	不明	
3036	II E 4	53	42	15	不整円形	竪坑状	炭化物は少量。焼土粒子わずかに含む	底面ほぼ平坦 壁斜め傾く	なし	不明	
3037	III K 4	55	50	20	不整円形	柱穴状	炭化物やや多く含む。特に上層に多い 焼土粒子わずかに含む	底面丸い 西側オーバーハンダ状	なし	不明	
3038	VIC23	152	130	14	不整円形	竪坑状	炭化物・焼土粒を多量に含むのが層状に 覆土中一層に入る	底面ほぼ平坦 壁斜め傾く	なし	不明	
3039	VIC18	294	172	13	隅丸 長方形	窪穴状	炭化物・焼土粒少量含む 東側：炭化物集中部あり	底面丸かつ平坦 壁斜め傾く	なし	不明	
3040	VUI9	180	170	11~16	不整 隅丸方形	竪坑状	炭化物含み。全面に分布	底全面かつ平坦 北壁ほぼ垂直・壁壁斜め 傾く	なし	不明	下層にST3004,ST3005の ピットが検出される
3041	VUI8	157	88	19	不整 楕円形	竪坑状	炭化物多量に含む。全面に分布	底全面かつ平坦 壁斜め傾く	なし	不明	
3042	VUI3	110	96	10	不整 隅丸方形	竪坑状	炭化物少量含む。覆土上に炭化物集中部あり	底全面かつ平坦 壁斜め傾く	なし	不明	
3043	IVY25	130	(110)	10~20	不整形	竪坑状	1層：炭化物多量に含む	底面深くて平坦 壁斜め傾く	なし	不明	遺構一部トレンチにより 不明
3044	VUI1 VUI6	144	109	30	不整 楕円形	竪坑状	1層：炭化物多量に含む 2層：炭化物少量含む	底全面かつ平坦 壁斜め傾く	なし	不明	

第21表 中期木葉～後期前葉土坑一覽表(1)

S K NO.	位置	規模 (cm)		形状		遺物の状況	遺構・壁の状況	出土遺物	時期	備考	
		長軸	短軸	深さ	平面形						断面形
3048	H E 5	200	(200)	15~18	不整形	楕圓状	炭化物は多量に、焼土粒子を少量含む	真全面ほぼ平直 断面中に斜め傾く	中層後半～後期前葉の上層	後期前半 堀之内式?	トレンチの一部から、S33の4号
3049	H A 6	120	86	10	楕圓形	楕圓状	炭化物含む、上部に多い	真全面ほぼ平直 断面中に斜め傾く	S3-9の上層 3号出土	後期初期?	堀之内掘削に土層片が散在している
3050	H E 15	85	90	10	不整形	楕圓状	1層:炭化物多量、焼土粒子少量含む 2層:炭化物少量含む	断面平直・壁斜め傾く	なし	不明	
3053	V U12	130	85	(10)	不整形楕圓形	楕圓状	不明	断面不明 壁傾やかに斜め傾く	なし	不明	プラン不明
3060	V U22	82	56	22	楕圓形	すり鉢状	炭化物・焼土粒子少量含む	断面丸い・壁斜め傾く	なし	不明	
3062	V U23	46	42	16	円形	柱状	炭化物少量含む	断面ほぼ平直・側壁ほぼ垂直に斜め傾く	上層1片出土	不明	
3064	H E 5 (150)	(75)	16		不整形楕圓形	楕圓状	炭化物多量に含む、中央部に多い 焼土粒子少量含む	真全面かたかく平直 壁斜めに傾く	なし	不明	中央に集中している炭化物は長さ約1cm
3066	H Y20	70	60	7	楕圓形	楕圓状	壁土上に炭化物有 焼土粒子少量含む	真全面かたかく平直 壁ほぼ垂直に斜め傾く	なし	不明	
3067	H A 2 H A 6 H A 7	68	60	25~30	不整形	すり鉢状	炭化物全体に分布、壁土上に一部集中、焼土粒子少量含む	西2段落ち、西2層目に斜る。東壁部中か、西壁斜め傾く	土層(S4) 土層下に骨片	後期初期	土層サンプル採取、同土分析実施、人為焼?
3068	H Y20	105	90	6	楕圓形	楕圓状	炭化物多量に含む、壁土上に大粒の炭化物分布	真全面かたかく平直 壁ほぼ垂直	なし	不明	
3069	V L 7 V L 8	48	39	16	楕圓形	楕圓状	炭化物含む、焼土粒子少量含む	(断面平直) (壁斜め傾く)	なし	不明	
3070	V L 7	36	28	17	楕圓形	すり鉢状	炭化物少量含む	(断面丸い) (壁斜め傾く)	なし	不明	
3071	V L19	68	(60)	7	楕圓形	楕圓状	炭化物・焼土粒子少量含む	断面平直 壁傾やかに斜め傾く	なし	不明	西側プラン不明
3076	H A 6	40	40	50	円形	柱状	残存部に炭化物少量有 焼土粒子少量含む	断面西側に傾り、一部壁丸い。2段落ち 西壁オーバーハング	なし	不明	
3077	V U13	97	54	10	不整形楕圓形	楕圓状	炭化物わずかに含む	真全面かたかく平直 壁ほぼ垂直	なし	不明	
3078	V U13 V U14	164	150	11	不整形	楕圓状	炭化物・焼土粒子少量含む	真全面かたかく平直 壁斜め傾く	土層1片 グリッド取り上げ	不明	
3079	V U 7	160	154	22	隅丸方形	楕圓状	炭化物を少量含む、壁土中層や下に炭化物集中	真全面かたかく平直 壁斜め傾く	なし	不明	
3080	H A 2 (110)	70	12	(楕圓形)	楕圓状	楕圓状	炭化物わずかに、焼土粒子少量含む 上部・中央部に多い	断面平直 壁斜めに傾く	なし	不明	南側プラン不明
3084	V U 9	72	61	15	不整形楕圓形	楕圓状	1層:焼土粒子少量含む、1層土上に焼土粒、彩色がかった土有	断面平直 壁傾やかに斜め傾く	なし	不明	
3085	V U 9	90	71	14	不整形楕圓形	楕圓状	炭化物少量含む、1層上に集中	断面平直 壁傾やかに斜め傾く	なし	不明	
3086	V U 5	70	56	12	楕圓形	楕圓状	炭化物・焼土粒子少量含む、1層土層中にS37AからS39の2層に多い	断面平直 壁傾やかに斜め傾く	なし	不明	
3087	V U 4	117	110	23 (35)	不整形	楕圓状	炭化物少量含む、土層1層約10cmに集中、一部下層まで入	断面凹凸 壁斜めに傾く	なし	不明	
3088	V U 4	22	20	16	不整形	すり鉢状	炭化物少量含む、全体に散在 焼土粒子わずかに含む	断面丸い 壁斜めに傾く	なし	不明	ピットと思われる
3089	V U 4 (85)	70	8	(楕圓形)	楕圓状	楕圓状	炭化物少量含む、1層に集中 焼土粒子わずかに含む	断面平直 壁傾やかに斜め傾く	なし	不明	西側分層掘トレンチより不明
3090	V U 2	156	103	20	不整形楕圓形	楕圓状	1層:炭化物(土層10cmF集中)、焼土粒子(土層集中)少量含む	断面ほぼ平直 壁斜めに傾く	なし	不明	
3091	V P23	45	36	14	不整形隅丸方形	楕圓状	炭化物を少量、焼土粒子をわずかに含む	断面ほぼ平直 西壁:ほぼ垂直 東壁:斜め	土層(S6)	中層末	
3092	V U 3	33	30	15	円形	楕圓状	炭化物含む、土層長約10~20cmの地点に集中	断面ほぼ平直 壁ほぼ垂直	なし	不明	
3093	V U 4	35	29	14	楕圓形	楕圓状	炭化物を含む、特に土上に多い	断面丸い 壁傾やかに斜め傾く	なし	不明	ピットと思われる
3094	H Y 4 H Y 5	180	140	15~20	不整形五角形	楕圓状	焼土層・炭化物を含む、焼土粒子・骨片を含む	断面2層間傾む 壁傾やかに斜め傾く	骨片・炭灰土	不明	土層1片出土しているが焼土層より上
3095	V P 7	176	123	12	不整形楕圓形	楕圓状	1層:小豆大の焼土粒・炭化物含む 2層:炭化物わずかに含む	断面凹凸 壁傾やかに斜め傾く	厨石・漆	不明	
3096	V P 7	228	162	20	不整形楕圓形	楕圓状	炭化物の灰多量に含む	断面凹凸 壁傾やかに斜め傾く	なし	不明	
3097	H Y 3	290	(150)	2~10	不整形楕圓形	楕圓状	炭化物・焼土粒子少量含む 焼土粒子の集中層有	断面凹凸 壁傾やかに斜め傾く	なし	不明	
3098	H Y 3 (80)	50	12		不整形楕圓形	楕圓状	炭化物やや多く含む	断面凹凸 壁傾やかに斜め傾く	なし	不明	
3099	H Y14	240	140	20~30	不整形	楕圓状	1層:焼土粒子少量含む 1~3層:炭化物を含むが3層はわず	断面凹凸、壁ほぼ垂直	11(焼土層上～壁土上層)	後期前半 堀之内式?	11の土層4SD3004から6号までしている自然埋没
3101	V P24 (210)	185	10	(楕圓形)	不明	不明	不明	(断面平直) 壁傾やかに斜め傾く	S7の土層 層上～壁面	不明	南側プラン不明

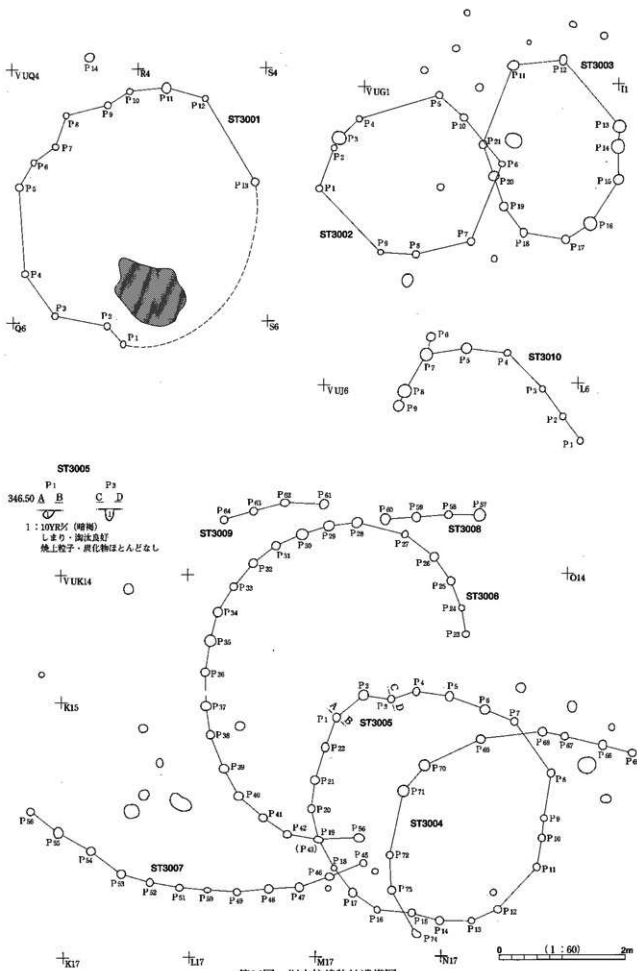
第22表 中期末葉～後期前葉土坑一覧表(2)

S K No.	位置	規模 (cm)			形状		層土の状況	底面・壁の状況	出土遺物	時期	備考	
		長軸	短軸	深さ	平面形	断面形						
3104	ⅡY 9	95	60	10	不整形四角形	竪状	灰化層・焼土粒子少量含む	底浅く、中央部に円形壁わずかな、壁やかに斜傾	礎	不明		
3105	ⅡY 9	48	(40)	(40)	(横)円形	柱状	1層: 灰化層や多く含む 2層: 灰化層わずかに含む	(底2段落ち?丸い)壁ほぼ直に斜め傾く	なし	不明	注意番号、あぜのため不明	
3106	ⅡY12	236	140	8~23	不整形五内角形	竪底状	灰層 (1・2層)	底面凹凸、壁斜め傾く	なし	不明	「層の」と区画記載	
3107	ⅡY12	82	25	12	不整形形	不明	灰化層や多く、焼土粒子も多く含む	底面凹凸 北西壁はほぼ直傾 南東壁緩やか	なし	不明		
3108	ⅡY14	80	55	3 6	横円形	不明	灰化層や多く含む	底面小凹凸のみ	なし	不明	礎り上状	
3109	ⅡY15	84	22 33	8	不整形形	竪状	焼土層: 灰化層わずかに含む 下層部は焼土粒の含有量が減少	底面凹凸 北西壁緩やか 南東壁斜傾	なし	不明	南東部に焼土ピットが2つ検出された	
3110	ⅡY18 ⅡY24	(50)	42	5	不整形四角形	竪状	灰化層は多く、焼土粒子を少量含む	底面丸い 壁緩やかに斜め傾く	なし	不明		
3111	ⅡY23	30	24	8	隅丸長方形	すり鉢状	灰化層多く含む	底面丸い、壁斜め傾く	なし	不明		
3112	ⅡY23	20	17	4	不整形四角形	皿状	灰化層や多く含む	底面2段落ち、凹む 壁斜め傾く	なし	不明		
3113	ⅡY17	110	(95)	19	(不整形)	竪底状	灰化層や多く含む	(底面凹凸) 壁壁は直	なし	不明	片戸壇に切られる	
3114	ⅡY18 ⅡY23	58	54 35 52	5	不整形形	皿状	1層: 灰化層少量、焼土粒子少量含む 2層: 灰化層・焼土粒子や多く含む	底面ほぼ平坦 壁緩やかに斜め傾く	なし	不明		
3115	ⅡY 3	115	35 69	12~25	不整形形	竪底状	灰化層や多く、焼土粒子少量含む 灰化層集中部あり	底面2ヶ所凹む 南壁斜傾 北壁直一オーバーハンク	なし	不明		
3116	ⅡY 4	53	25	10	不整形四角形	皿状	灰化層や多く、焼土粒子少量含む	底面斜め傾く 壁緩やかに斜め傾く	なし	不明		
3117	ⅡY 4	45	30	5	横円形	皿状	灰化層や多く含む	底面丸い 壁緩やかに斜め傾く	なし	不明		
3118	ⅡY13 ⅡY14	200	195	36	円形	竪底状	灰層(1~3層) 1・3層: 灰化層や多く含む	底面丸い、壁斜め傾く 壁緩やかに斜め傾く	なし	不明	平面図の石押は礎土面上より上で出している	
3119	ⅡY13	100	90	10	不整形形	皿状	灰化層は多量に、焼土粒子わずかに含む	底面凹凸、壁斜め傾く	なし	不明		
3120	ⅡY16 ⅡY17	180	35 40 105	8~19	不整形形	皿状	1層: 灰化層や多く含む 2層: 灰化層わずかに含む	底面凹凸、3ヶ所凹む 2段落ち 西壁緩やか、東壁斜傾	なし	不明		
3121	V U 4	271	155	47	不整形形	竪底状	灰層(1~3層)よりなる	底面ほぼ平坦 壁斜め傾く	なし	不明	S35区画に用材七がストーン状に散在する	
3123	V P22	166	34	12	不整形形	竪底状	1層: 灰化層・焼土のブロック層 2層: 灰化層・焼土粒子少量含む	底面平坦 壁緩やかに斜め傾く	石器土器片(ブラス)	不明		
3143	ⅡY12	175	46	33	不整形形	すり鉢状	1層: 灰化層・焼土粒多く含む 2層: 灰化層少量、焼土粒わずかに含む	底面凹凸 中央部に凹む 壁緩やかに斜め傾く	なし	不明	伊土か?	
3176	ⅡY19 (150)	(110)	—	—	不整形形	不明	灰化層・焼土粒子少量含む	不明	なし	不明	西側傾り下げ、南側区域外のためプラン不明	
3177	ⅡY19 (160)	(110)	—	—	不整形形	不明	灰化層を少量、焼土粒子わずかに含む	不明	なし	不明	西側傾り下げ、南側区域外のためプラン不明	
3178	ⅡY19 (140)	(130)	—	—	不整形形	不明	灰化層・焼土粒子少量含む	不明	なし	不明	西側傾り下げ、南側区域外のためプラン不明	
3179	ⅡY24 (130)	(120)	—	—	不整形形	不明	灰化層はや多く、焼土粒子を少量含む	不明	なし	不明	西側傾り下げ、南側区域外のためプラン不明	
加賀川上式 包含層 ⅡS24 ⅡS25	(550)	(272)	(14)	—	不整形形	竪状	1層: 灰化層わずかに含む 2層: 灰化層わずかに含む、青灰色焼土少量含む 3層: 灰化層や多く含む 4・5層: 灰化層わずかに含む	底面凹凸 (壁緩やかに斜め傾く)	58の土器 焼土片一層土内出土、特にピットの上部に多い	不明	不明	北側プラン不明
加賀川上式 内ピット ⅡS24 ⅡS25	(54)	47	41	(横)円形	すり鉢状	不明	不明	底2段落ち 壁斜め傾く	不明	不明	不明	南側プラン不明 加賀川上式 4・5層はピット内覆土

第23表 中期末葉～後期前葉土坑一覧表(3)

5 掘立柱建物址

縄文後期の再精査時に多数の小さい落ち込みを検出、弧あるいは円を描くように列状に並んでいると思われる部分があり、掘立柱建物址として捉えてみた。柱穴の並び方・大きさ・深さを参考に、発掘調査時の遺構把握を重視して検討した結果、10基の掘立柱建物址を確認した。すべてVU区に集中している。柱穴の断面形状や傾きなどはST3005のP₁・P₂のほかは、詳細は不明である。柱穴内覆土は、ST3001～



第96図 堀立柱建物址遺構図

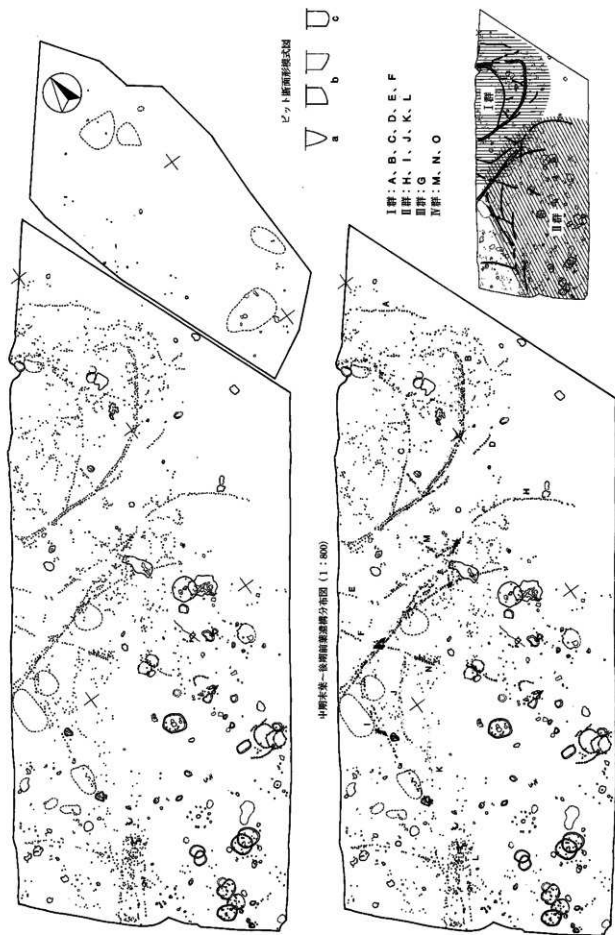
6 杭列状遺構

調査経過：縄文中期末葉～後期前葉の遺物包含層を、遺構検出・調査と遺物取り上げを並行させながら掘り下げていくと、最下層近くになって、径15cm前後のピットが列をなすように検出された。形状が均一的なこと、列をなすように分布することなどから、集合体を遺構と捉え、調査に取り組むこととした。検出されたピットは、総数1851基（調査が先行した③-2区の同種のピットについては調査方法が異なっているため数値からは除外してある）にも上る。これらはすべて半割し、断面の観察結果より類型化を試みた。加えて、遺構分布図を作成し、分布状況から小さく円形または半円形に配置されるものと、列状に配置されるものとに分類した。このうち、前者については建物遺構と想定し、前項で扱った。なお、調査中、小林達雄國學院大学教授、宮本長二郎奈良国立文化財研究所建造物室長（現、東京国立文化財研究所国際文化財保存修復協力センター長）の両先生に、遺構の機能・性格等についてご指導を仰いだ。

概要：ピットの平面形は、上記の類型等に拘らず、円形を基本とし、隅丸方形を呈するものも若干見られる。最大径15cm、最小径7cmで、径12～14cmのものが主体を占める。深さは、10cm以下のものから30cm前後のものまでであるが、50cmを越えるものは検出されていない。ただし、覆上が該期の遺物包含層を基調としていることから、検出面よりも上位に施設構築面があったことは明白である。また、断面観察から、掘り方の確認されたピットは検出されていない。断面形は、第97図に模式図で示したような3タイプに収束する。このうちa・bとした底面の鋭角的なものが大半である。また、検出面に対して垂直ではなく斜位に掘り込まれているものが少なからず存在する。

所見：ピットには掘り方が無く、いずれも径15cmを越えないこと、底面が鋭角的なものが多いことなどから、個々のピットは、先端部を尖らせた木材を打ち込んだ痕跡であることが容易に想定される。集合体として見た場合、視覚的に15列を想定した（第97図）。ピット間の間隔はいずれも40cm以上あり、同じ杭列の中ではほぼ等間隔で規則的に並ぶ。杭列は1列のものが大半であるが、B列やG列、I列の一部のように2列で構成されると考えられるものがある。これらについては、いずれも平行線上に対称にピットが配されるのではなく、平行線上に互い違いになるように配されている点が留意される。また、直線的に並ぶものもあるが、基本的には弧状もしくは環状を意識していると思われる。これら杭列の配置・方向性から便宜的に4群に分類した（第97図）。I群はII群と対峙するように分布するが、E・F列とH列が交差するため、時間差を想定する必要があるだろう。また、II群は居住域を圍繞するかのよう配置していることから、I群の北西方向（調査区外）に居住域が存在する可能性も指摘されよう。あるいは、I群とII群の杭列構造が異なっていることから、祭祀域と居住域、もしくは生産域と居住域といった空間の分割も十分考えられる。一方、III群は、I群とII群の接点部分から直線的に発せられており、三者合わせて検討の必要があるだろう。IV群については、前三者とは若干状況が異なり、地形的な観点も必要となることが予想される。以上のように現段階で、結論を出すことは困難であり、遺物の出土状況やその種類、遺構分布と合わせた「場」の問題、微地形の復原等々、総合的な検討を今後の課題としたい。

ともあれ、一大土木工事があったことは明白であり、今回検出された居住域の構成員のみでは到底困難なことは自明で、複数の集団による共同作業を想定する必要が生じてくる。したがって、当時の社会構成・構造を考えていく上でも、本址は重要な位置付けがなされることと考える。



第97図 梳列状遺構・ピット断面模式図

第5章 遺物

第1節 縄文時代早期末葉～前期後葉

1. 土器 (第98～124図)

本遺跡より出土した早期末葉～前期後葉土器群は、前期中葉土器群を主体に以下の様に分類される。第I群及び第IV群は、遺物の総量が少ない為に細かな分類を避け、一括して扱うこととした。

第I群土器 早期末葉土器群

第II群土器 前期中葉土器群

A類：口縁部文様帯を持つもの

- 1種：橢圓状工具による連点状刺突文を施文する一群
- 2種：半裁竹管による平行沈線を施文する一群
- 3種：半裁竹管による爪形文を施文する一群
- 4種：棒状工具による単沈線を施文する一群
- 5種：1～4種の文様を併用して施文する一群
 - a：菱形・三角形などの文様を構成するもの
 - b：口縁部に平行する直線的な文様を構成するもの
 - c：その他の文様を構成するもの

B類：全面に縄文を施文するもの

- 1種：横位施文で、羽状あるいは菱形を構成する一群
- 2種：口縁部に縦位又は斜位施文し、胴部は横位施文で羽状あるいは菱形を構成する一群
- 3種：縦位施文で、羽状を構成する一群
- 4種：横位施文で斜構成になる一群
 - a：無節縄文
 - b：単節縄文
 - c：附加条縄文

- ア：口縁部形態が平縁を呈し、頸部が括れるもの
 イ：口縁部形態が平縁を呈し、頸部が括れないもの
 ウ：口縁部形態が平縁を呈し、胴上部が膨らみ口縁部が直立するもの
 エ：口縁部形態が4単位波状口縁を呈し、頸部が括れるもの
 オ：口縁部形態が4単位波状口縁を呈し、頸部が括れないもの

- カ：口縁部形態が丸みを帯びた4単位波状口縁を呈し、頸部が括れるもの
 キ：口縁部形態が2単位波状口縁を呈するもの

第Ⅲ群土器 第Ⅱ群に併行する他型式の土器

- A類：半裁竹管による崩れたコンパス文を施文する一群
 B類：肋骨文を施文する一群
 C類：無文の一群
 D類：爪形文を施文する一群
 E類：縄文或いは沈線を施文し、無繊維で内面に指頭痕を残す一群
 F類：縦位沈線・刺突文・崩れたコンパス文を併用する一群
 G類：刺突文・縄文を施文する一群

第Ⅳ群土器 前期後集土器群

(1) 第Ⅰ群土器 (1~5, 14)

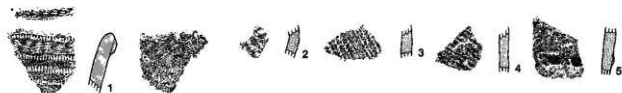
早期木葉の土器群は、図示した6点が出土した。遺構出土資料、遺構外資料の順で概観したい。

SF8006 (14)

14は口縁部で、口縁部上端が緩やかに屈曲し、その屈曲部に貝殻背圧痕文が施文されている。調整は、器面状態が悪く不鮮明であるが、ナデ調整と思われる。

遺構外出土資料 (1~5)

1は、1条の横位隆帯を持つ口縁部で、隆帯及びその上・下部と、口唇部に絡条体圧痕文を施文する。内面はナデ調整が行われるが、器面に若干の凹凸が残る。2~4は、胴部の破片である。2は、絡条体圧痕文が矢羽状に施文されていると思われるが、小破片の為に判然としない。内面の調整は、ナデ調整である。3は、撚糸文Lが斜位施文される。4は、撚糸文あるいは絡条体条痕と考えられるが判然としない。いずれも内面は、ナデ調整が行われている。5は、1条の横位隆帯が貼付される口縁部で、隆帯を押しする。内面の調整は、横方向のナデ調整である。



第98図 早期木葉土器 (Ⅰ群)

(2) 第Ⅱ・Ⅲ群土器(9・10・12・13、15～28、30～274)

第Ⅱ・Ⅲ群は前期中葉土器群で、SB・SF・SQ・SKの遺構出土資料の他、遺構外から良好な資料が出土した。第Ⅱ群は、口縁部に文様帯を有するA類と器面全面に縄文を施文するB類とがあり、A類は施文具及び文様構成の差異から、B類は縄文原体及び施文構成の差異からそれぞれ細分した。更に、A・B類ともに器形が判明する土器については、器形分類も合わせて行った。また、第Ⅲ群については第Ⅱ群に併行する他型式の土器群を一括し、それぞれの系統及び文様構成から分類を行った。遺構出土資料、遺構外出土資料の順で概観し、遺構外出土資料については分類に沿って触れていきたい。

SB8001 (9・10)

9は、口縁部で、爪形文により菱形あるいは三角形の文様を構成する。爪形文は、平行沈線施文後、器面に対してほぼ垂直に刺突する事が特徴である。10は、胴部で、縄文L及びRによる羽状構成の土器である。9はⅡA3a、10はⅡB1aに、それぞれ分類されよう。

SK8015 (12・13)

本SKは、住居址と考えられる遺構である。12は、口縁部で、平行沈線により菱形あるいは三角形の文様を構成し、口縁部上端には縦位沈線を施文する。13は、口縁部で、横位の爪形文と刺突文で文様を構成する。12はⅡA2a、13は第Ⅳ群に、それぞれ分類されよう。

SF8010 (15)

15は、頸部付近で、櫛歯状工具による連点状刺突文及び条線で文様を構成し、胴部には縄文LRを施文する。ⅡA1に分類されよう。

SF8011 (16)

16は、口縁部で、平行沈線により文様を描く。ⅡA2aに分類されよう。

SF8018 (17・18)

17は、平行沈線施文後、器面に対してほぼ垂直に刺突する手法の爪形文で文様を構成する。18は、頸部が括れて口縁部が外反する平縁の上器で、口唇部の4箇所に三角形の突起が貼付される。突起は2個ずつ貼付されるが、3個の突起を持つ部分が1ヶ所見られる。文様は、縄文LR及びRLで羽状を構成し、また、同一施文帯の中で原体を変える為に菱形を構成する部分がある。17はⅡA3a、18はⅡB1bアにそれぞれ分類されよう。

SF8024 (19)

同一個体の4点を図示した。4単位波状口縁で、頸部が括れず、胴部から口縁部に向かって直線的に開く器形を呈すると思われる。文様は、0段多条の縄文LR及びRLを交互に施文して羽状を構成する。また、19-4に貫通しない孔が認められる。ⅡB1bオに分類されよう。

SF8025 (20)

20は、口縁部及び頸部付近で、平行沈線により文様を施文するが、細片のため文様構成は不明である。胴部は、縄文LRが施文される。ⅡA2分類されよう。

SF8038 (21~24)

21は、頸部で括れて口縁部が外反する平縁の土器で、平行沈線で口縁部上端及び頸部を区画し、連続する菱形を構成する。22は、波状口縁で、胴上部がやや膨らみ頸部で括れ口縁部が外反する器形を呈する。平行沈線で口縁部上端及び頸部を区画し、三角形を描いているが、区画と三角形の線が合体した様な状況である。また、胴部の縄文は、RLを施文している。23は、胴部から口縁部に向かって直線的に開く平縁の土器と思われ、単沈線で文様を構成する。口縁部を横位に分割し、方向を上下で変えた矢羽状の斜位沈線を施文するが、さらに、同一施文帯の中で方向を変えて菱形を構成する部分が認められる。胴部には、縄文LRが施文されるようである。24は、底部で、附加条の原体により羽状を構成する。21はⅡA2aア、22はⅡA2aエ、23はⅡA4Cにそれぞれ分類されよう。

SQ8002 (25~28)

25は、口縁部で、平行沈線により文様が描かれる。26・27は、底部で、26は縄文LRを、27は縄文LR及びRLによる羽状縄文を施文する。28は、胴中央部が膨らみ頸部が若干括れ、口縁部が外反する平縁の土器で、口唇部から刻みを持つ縦位隆帯を貼付する。文様は、口縁部上端及び頸部を平行沈線で区画し、横位多段の崩れたコンパス文を施文する。胴部は、縄文LR及びRLによる羽状縄文が施文され、全体で菱形を構成する部分が看取される。25はⅡA2、26はⅡB4b、27はⅡB1b、28はⅢAに、それぞれ分類されよう。

SQ8004 (30)

30は、胴部から口縁部に向かって直線的に開く平縁の土器で、口縁部に狭い文様帯を構成し、数条の横位平行沈線を施文する。胴部の縄文はLRで、斜構成となる。ⅡA2bイに分類されよう。

SQ8005 (31)

図示した12点は同一個体であるが、接合できなかった。器形は、それぞれの破片から推定すると、胴上部が膨らみ頸部が若干括れ、口縁部が外反する平縁の土器と考えられ、平行沈線で口縁部上端及び頸部を区画し、連続する菱形あるいは三角形を描くと思われる。胴部には、縄文LR及びRLが施文され、羽状または全体で菱形を構成するようである。ⅡA2aアに分類されよう。

SK8003 (32)

32は、口縁部で、口唇部に刺突が見られる。器面状態が悪く、不鮮明であるが、単節縄文を施文すると思われる。ⅡB1bに分類されよう。

SK8023 (33)

33は、口縁部で、櫛歯状工具による連点状刺突文を施文する。ⅡA1aに分類されよう。

SK8049 (34・35)

34は、胴上部～口縁部で、平行沈線により菱形を描き、胴部には縄文LRを施文する。35は、波状口縁の波頂部で、垂下隆帯を貼付し、隆帯の両側には数条の平行沈線を施文する。34はⅡA2aに、35はⅡA2に分類されよう。

SK8014 (36)

36は、4単位波状口縁の土器で、胴部～口縁部に向かって直線的に開く器形を呈すると思われる。縄文LR及びRLを施文するが、数単位毎に原体を変えている為、上下ではなく全体で羽状を構成する。ⅡB1bオに分類されよう。

SK8020 (37・38)

37は、やや内湾する波状口縁の土器で、平行沈線施文後、器面に対してほぼ垂直に刺突する手法の爪形文によって文様を描く。38は、胴部で、縄文LR及びRLで羽状又は菱形を構成する。37はⅡA3aカ、38はⅡB1bに分類されよう。

SK8021 (39・40)

39は口縁部、40は胴部で、両者ともに縄文LR及びRLを施文し羽状を構成する。40の原体は、0段多条の原体と思われる。39はⅡB1bイ、40はⅡB1bに分類されよう。

SK8024 (41・42)

41は、波状口縁の土器で、3・4種の文様が併用されており、口縁部上端には5条の爪形文が、その下部には3条の横位沈線が施文される。爪形文は、平行沈線施文後、器面に対してほぼ垂直に刺突される手法である。42は、波状口縁の土器で、口縁部上端に2列の爪形文及び1列の平行沈線を、頸部に2列の爪形文をそれぞれ施文し、その中に数条の崩れたコンパス文を描いている。爪形文の施文手法は41と同様であり、また、コンパス文は、支点が上下2列に並び、90度以下の角度で描く手法による。41はⅡA5bエに、42はⅢA類に分類されよう。

SK8036 (65)

65は、頸部～底部で、0段多条の縄文LR及びRLにより羽状または菱形を構成する。また、頸部に平行沈線が確認でき、ⅡA2に分類されよう。

SK8050 (43・44)

43・44は、口縁部で、43は連点状刺突文により菱形あるいは三角形を構成する。44は平行沈線で菱形あるいは三角形の文様を構成するが、44-2から渦巻き状の文様が組み合わさるようである。43はⅡA1aに、44はⅡA2aに分類されよう。

SK8053 (45-49)

45は、胴上部がやや膨らみ頸部が括れ、口縁部が直立～内湾気味に立ち上がる平縁の土器で、口唇部全体に三角形の突起が貼付される。文様は平行沈線施文後、器面に対してほぼ垂直に刺突される手法で、口縁部に平行する7～8条の爪形文が描かれるが、平行沈線の施文が弱く所々消えており、爪形文の下書き線のようにも見える。胴部は、縄文LR及びRLで羽状を構成するが、部分的に菱形を構成するようである。46は、胴部～口縁部にかけて直線的に開く平縁の土器で、口縁部上端及び頸部を数条の平行沈線で区画し、横位多段の崩れたコンパス文を施文する。コンパス文は、支点が上下に移動し、直角以下の角度で弧を描く手法によって描かれる。胴部は、縄文LR及びRLで、羽状を構成する。47は波状口縁の波頂部で、口縁部に沿って条線及び連点状刺突文を施文し、菱形或いは三角形の文様を描いているようであ

る。48・49は、器面全面に縄文を施文する土器である。48は、口縁部及び胴部で、器面状態が悪く不鮮明であるが、縄文LRを施文すると思われる。49は、胴部で、縄文LR及びRLにより羽状を構成する。45はⅡA3bア、46はⅢA、47はⅡA1a、48はⅡB4b、49はⅡB1bに、それぞれ分類されよう。

SK8051 (50)

50は、頸部で、平行沈線及び縄文LRが施文される。ⅡA2に分類されよう。

SK8054 (52-55)

52は、頸部が括れ口縁部が外反する平縁の土器で、口唇部に三角形の突起が貼付される。文様は、沈線の間隔が揃わない点から単沈線で描いていると思われ、突起の位置から2本の縦位沈線を施し、その両側に鉤歯状文を描いている。また、口縁部を横位沈線で埋め、上端は縦位の短沈線を引く。53は、口縁部で、平行沈線により文様を描く。54は、頸部で、平行沈線及び縄文LR・RLを施文する。55は、完形胴体で、底部～口縁部に向かって直線的に開き平縁を呈する土器である。縄文LRが施文され、全体で斜構成となる。52はⅡA4bア、53はⅡA2a、54はⅡA2、55はⅡB4bイに、それぞれ分類されよう。

SK8055 (51)

51は、頸部付近で、平行沈線及び縄文が施文される。器面状態が悪く不鮮明だが、縄文は単節縄文であろう。ⅡA2に分類されよう。

SK8059 (56-61)

56は、口縁部で、連点状刺突文により菱形等の文様を構成する。57は、平縁の土器で、口唇部に三角形の突起が貼付される。口縁部に平行する5条の爪形文が観察されるが、全体の構成は不明である。58は、口縁部で、爪形文により菱形あるいは三角形の文様を構成する。57・58の爪形文は、平行沈線施文後、器面に対してほぼ垂直に刺突する手法による。59は、頸部で、平行沈線及び縄文RLが施文される。60・61は口縁部または胴部で、斜構成の縄文RLが施文される。56はⅡA1a、57・58はⅡA3a、59はⅡA2、60・61はⅡB4bに、それぞれ分類されよう。

SK8060 (62-63)

62は、口縁部で、崩れたコンパス文及び平行沈線を交互に施文する。焼成が良好な比較的薄手の土器で、器面調整が丁寧であり、ⅢFに類似する。63は、口縁部及び胴部で、斜構成の縄文LRを施文する。62はⅢA、63はⅡB4bに、それぞれ分類されよう。

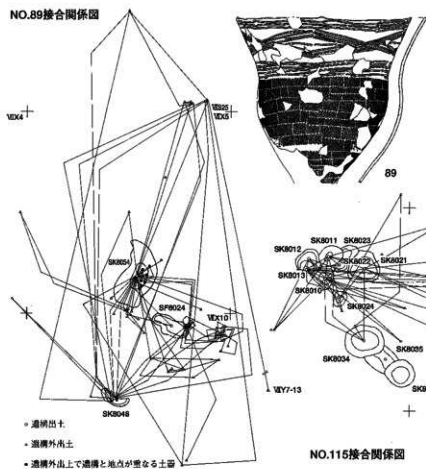
SK8061 (64)

64は、胴上部がやや膨らみ頸部が括れ、口縁部が強外反する波状口縁の土器と考えられ、口縁部に円形突起を貼付し、器面全面に羽状及び菱形を構成する縄文LR及びRLを施文する。縄文原体は、0段多条の原体である。ⅡB1bエに分類されよう。

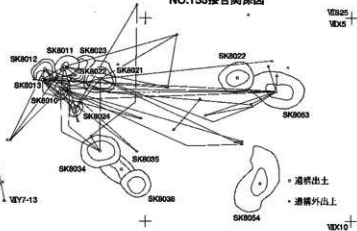
遺構外出土資料 (66-152)

遺構外出土資料を一括するが、多遺構間で接合関係が確認され、遺構に帰属できない資料も本項に含め

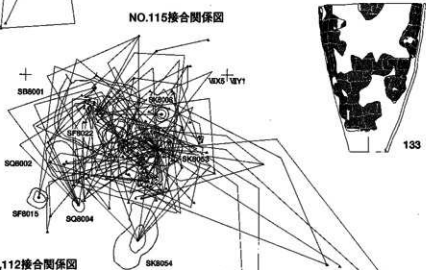
NO.89接合関係図



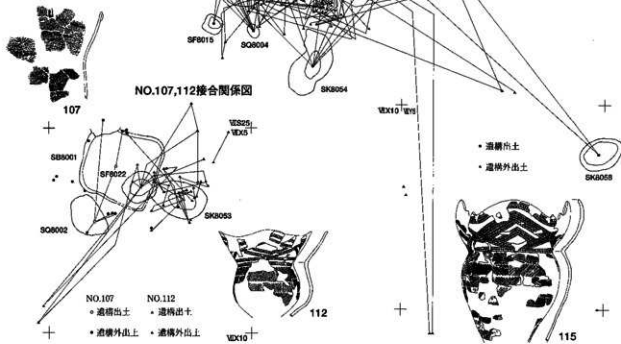
NO.133接合関係図



NO.115接合関係図



NO.107,112接合関係図



第99図 多遺構間接合土器接合関係図 (S=1/150)

て分類を行った。多遺構間接合の確認される資料は、89・107・112・115・133であり、89はSK8048・8054・SF8024、107はSB8001・SQ8002、112はSB8001・SF8022・SK8053、115はSB8001・SQ8002・8004・SF8015・8022・SK8008・8053・8054、133はSK8010~8013・8021~8024・8034~8036・8053・8054・SF8022の遺構間で、それぞれが接合関係を持つ（第99図）。これらは、SB8001・SK8054を中心とし、その周辺の遺構と接合関係にある事が特徴で、集中して多遺構間接合資料が検出された事が注目されよう。

以下、分類に沿って概観したい。

Ⅱ A類：口縁部文様帯を持つもの

1種（66~82）

口縁部文様帯へ、櫛園状工具による連点状刺突文及び条線を施文する一群を本種とする。66~69は、口縁部上端に連点状刺突文を縦位刺突し、その下部に連点状刺突文と条線で菱形を構成する。菱形の内側には、69の様に波状口縁の波頂部から1条の連点状刺突文を縦位刺突するものがある。70は、口唇部に三角形の突起を貼付する平縁の土器で、5条前後の連点状刺突文を横位施文する。71は、波状口縁で、波頂部の内側から外側にかけて、短隆帯を貼付する。口縁部に沿って連点状刺突文を施文するが、刺突の圧痕が揃わず乱れている点から、施文原体の数が1~2本の可能性がある。75~77・79・80は、口縁部上端及び頸部を横位の連点状刺突文と条線で区画し菱形を構成する土器で、菱形の交点へ連点状刺突文を縦位刺突するものも見られる。連点状刺突文は、条線の中に刺突する事が特徴であるが、80は条線が弱く、刺突の区画線の様な感じを受ける。また80は、波頂部・波底部に縦位沈線が残るが、文様施文時の割付線であろう。78は、条線を伴わず、連点状刺突文のみで文様を構成する土器で、口縁部上端及び頸部を区画し、弧状の文様を描いている。波頂部及び波底部の位置から縦位の刺突が行われ、波底部付近には、更に曲線及び円形刺突が施される。また、口縁部の内面には、1条の沈線が施文される。81は、口縁部上端に横位の連点状刺突文を、頸部に条線を施文し、連点状刺突文を起点とする斜位条線を組み合わせ、多くの菱形を構成する。口縁部文様帯が条線で充てられており、こうした文様施文は、有尾式においてはかなり特異である。82は、底部で、横位及び縦位の連点状刺突文を施文している。以上の土器には、4単位波状口縁・平縁を呈するものがあり、4単位波状口縁の土器は波底部に突起を持つものが存在する。66・71・82はⅡA1、67~69・72~74・76・77・79はⅡA1a、70はⅡA1bイ、75・80はⅡA1aエ、78はⅡA1cエ、81はⅡA1cに、それぞれ分類されよう。

2種（83~107）

口縁部文様帯へ、半裁竹管による平行沈線を施文する一群を本種とする。85~87は、菱形以外の文様を構成する土器で、85は横位の集合沈線を、86・87は横位沈線間に斜位沈線を施文する。87は、縦位沈線の両側で、斜位沈線の方向を変えている。85はⅡA2b、86・87はⅡA2cに、それぞれ分類されよう。83・84・88~98・100~102・105・106は、口縁部及び頸部を数条の平行沈線で区画し菱形あるいは三角形を構成する土器で、菱形の内側へ89・91・92のように、横位沈線・十字状の沈線・縦位沈線を施文するものが存在する。また、101には渦状の文様が描かれており、菱形との組み合わせが予想される。97は、菱形を構成するが、口縁部上端及び頸部の区画線と菱形の文様が合体している。105は、菱形の描き方が特異であり、横に長い。口縁部は平縁、4単位波状口縁、波頂部が丸みを帯びた4単位波状口縁があり、口唇部に三角形の突起を貼付するものが幾つか見られる。105・106は、波状口縁の波頂部から口縁部中央にかけて、刻みを有する隆帯を貼付している。また、波頂部が丸みを帯びた土器は、菱形等の文様が口縁部に合わせて描かれるために丸みを帯びる。83・92・93・95・98はⅡA2aカ、84・94・96・

99・100はⅡA2a、88・89はⅡA2aア、90・91・102はⅡA2aエ、97はⅡA2aオ、101はⅡA2cに、それぞれ分類されよう。103・104・107は、口縁部上端に幅の狭い文様を構成する土器で、口縁部上端に縄文施文帯を有しその下部へ菱形を描く103、口縁部上端に鋸歯状文を施し下部の区画内を無文にする104、口縁部上端に横位沈線及び縦位の短沈線を施しその下部へ菱形を描く107が存在する。103の縄文は、胴部と同様の原体で施文して羽状を構成し、また、107は短隆帯を貼付する。103・107はⅡA2aア、104はⅡA2cアに、それぞれ分類されよう。

3種 (113～124、126・127・129)

口縁部文様帯へ、半裁竹管による爪形文を施文する一群を本種とする。基本的な文様構成はⅡA2種と同様で、数条の爪形文で口縁部上端及び頸部を区画し、菱形あるいは三角形の文様を構成するが、113・116のように平縁と平行する直線的な文様を描く土器、122のように口縁部上端に文様帯を構成し三角形を描く土器、123のように口縁部上端の区画を持たず波状口縁に合わせた鋸歯状文と3条の爪形文を施文する土器も存在する。113は、平行沈線と爪形文を交互に施文しており、116は口縁部上端に1条の爪形文を施文する。また、114・129には、菱形の交点及び口縁部上端の区画にV字状あるいは円形の附加文が見られる。爪形文の施文手法は、①器面に対してほぼ垂直に刺突し平行沈線を伴わないもの、②平行沈線施文後、器面に対してほぼ垂直に刺突するもの、③平行沈線施文後、器面に対して斜め方向から棕櫚状に連続刺突するものがあり、②・③の手法で施文するものが多い。①の手法によるのは113等、②は111・112・114等、③は115・119・124等である。③の手法は、波頂部が丸みを帯び口縁部が直立または内湾する波状口縁の土器に多く看取される。器形は平縁、4単位波状口縁、丸みを帯びた4単位波状口縁、2単位波状口縁があり、口唇部に三角形の突起を貼付するものが存在する。117は、波頂部が把手状を呈する。111はⅡA3aキ、112・115・119・124はⅡA3aカ、113・116はⅡA3bイ、114はⅡA3aエ、117・118・120～122はⅡA3a、123はⅡA3cカに、それぞれ分類されよう。

4種 (108～110)

口縁部文様帯へ、棒状工具による単沈線を施文する一群を本種とする。沈線の間隔が不揃いで、乱れている点から単沈線と判断した。108・109は、口縁部上端に縦位刺突を行う土器で、108は横位の集合沈線を、109は横位沈線及び横に長い菱形を描く。110は、平縁の土器で、4条の沈線で区画した口縁部文様帯を3分割し、矢羽状の斜位沈線を施文する。110-1は、1条の縦位沈線を施文する部分があり、沈線の左右で方向を変える為に菱形構成となる。108はⅡA4bア、109はⅡA4aア、110はⅡA4cイに、それぞれ分類されよう。

5種 (125・128)

口縁部文様帯へ、1～4種の文様を併用して施文する一群を本種とするが、併用が認められるのは、2種平行沈線と3種爪形文である。125は、口縁部上端に縦位沈線を施文し、爪形文で文様を描く。爪形文の刺突手法は、平行沈線施文後、器面に対してほぼ垂直に刺突する手法である。128は、横位及び斜位の平行沈線とともに、2列の爪形文を施文する。125・128は、ⅡA5cに分類されよう。

ⅡB類：全面に縄文を施文する一群 (130～152)

1種 (130・132・133・135・136・138、140～146、148)

横位施文で、羽状あるいは全体で菱形を構成する一群を本種とする。縄文LR及びRLを交互に施文し、

羽状または菱形を構成することが基本であるが、138のように交互施文の羽状構成ではなく、全体で羽状を構成するものが存在する。原体の末端を縛るものは少数あるが、結東の原体は見られない。また、141・148等、0段多条の原体が見受けられる。130・132・133・143・144はⅡB1bイ、135・146はⅡB1bエ、136はⅡB1bウ、138はⅡB1bア、140～142・145・148はⅡB1bに、それぞれ分類されよう。

2種 (134)

口縁部に縦位または斜位施文し、胴部は横位施文で羽状あるいは菱形を構成する一群を本種とする。134は、附加条の縄文が施文されるが、胴下部の施文が乱れており、附加された縄の圧痕が強く残る。ⅡB2cウに、分類されよう。

3種 (150)

縦位施文で、羽状を構成する一群を本種とする。150は、胴部で、節の細かいLR及びRLの原体を交互に縦位施文する。ⅡB3bに分類されよう。

4種 (131・137・139・147・149・151)

横位施文で斜構成になる一群を本種とする。131・149はRLを、137・147はLRを、151はRを施文するが、単節の中に0段多条の原体が存在する。131はⅡB4bイ、137・139・147・149はⅡB4b、151はⅡB4aに、それぞれ分類されよう。

Ⅲ群：第Ⅱ群に併行する他型式の土器 (153～174)

A類 (153～165)

半裁竹管による、崩れたコンパス文を施文する一群を本類とする。コンパス文は、口縁部へ横位多段に施文する事を基本とし、平行沈線又は爪形文と併用する162・164、刻みを持つ縦位隆帯を貼付する154・156等が見られる。コンパス文の描き方には、①支点が1列に並び半円を描くもの(160・161)、②支点が上下2列に並び、直角以下の角度で描くもの(153・154等)、③支点が上下に移動し、直角以下の角度で弧を描く山形を呈するもの(156・162等)があるが、②・③の手法によるものが多い。なお、162の爪形文は、平行沈線施文後、器面に対してほぼ垂直に刺突する手法により施文される。

B類 (170・171)

本類は、口縁部文様帯へ肋骨文を施文する一群で、黒浜式を一括した。肋骨文は、細い棒状工具による単沈線で描く170と、半裁竹管で描く171とがある。胴部は単節縄文が施文され、170はRLを、171はRL及びLRの羽状を構成する。

C類 (166～168)

無文土器の一群を本類とする。166は平縁で、頸部が括れ口縁部が外反～直立気味に立ち上がる器形を呈する。167は、底部である。ともに無繊維で、器壁が薄く器面に指頭痕を若干残す点から、東海系の土器群と思われる。168は平縁で、胴部が膨らみ頸部でやや括れ、口縁部が外反する器形を呈する。器壁が厚く繊維を含み、内面にはナデ調整が観察される。また、外面は器面が粗く、剥離が認められ、詳細は不明である。

D類 (169・175～177)

爪形文あるいは細い隆帯を貼付する一群で、関西系の土器群を本類とする。177は北白川下層Ⅱ a式で、口縁部に平行する幅広い連続爪形文を施文する。169・175は、北白川下層Ⅱ b式。169は、0段多条の縄文LR及びRLで羽状を構成し、口縁部に3条の爪形文を施文する。176は北白川下層Ⅱ c式で、刻みを持つ細い隆帯で文様を構成する。

E類 (173)

無繊維で、内面に指頭痕を残し、縄文或いは沈線を施文する一群を本類とした。本類は、長野県諏訪地方～山梨県に分布の中心を持つ、阿久Ⅲ期1群あるいは釈迦堂Z3式と思われる。173は器壁が薄く、内面に指頭痕を残す無繊維の土器で、縄文Lを施文し、平行沈線で弧状及び円状の文様を描いている。

F類 (172)

本類は、縦位沈線・刺突・崩れたコンパス文を併用する一群で、新潟県に主たる分布の中心をもつ「根小屋式」(寺崎1997)に類似する。172は、焼成良好、器壁が薄く調整が丁寧で、口縁部上端に縦位沈線を施し、櫛歯状工具による刺突・崩れたコンパス文を組み合わせて文様を構成する。「根小屋式」そのものではないが、文様構成及び器面調整の点から、「根小屋式」に類似する土器とした。

G類 (174)

本類は、刺突及び縄文を施文する一群で、北陸地方に分布の中心を持つ朝日C式に類似する。174は、平縁で、頸部が括れ口縁部が大きく立ち上がる器形を呈する。頸部及び口縁部上端に2列の刺突を行い、地文の縄文はLR及びRLで羽状あるいは菱形を構成する。縄文は、口縁部上端の刺突下には及ばない。

(3) 第Ⅳ群土器 (1～3、6・24、175～188)

本群は、前期後葉の諸磯b式を一括する。SB3016・8002、SQ8003の遺構出土資料及び遺構外出土資料があるが、総数は僅かである為細かな分類を避け、一括して扱いたい。なお、遺構外出土資料のうち、185～188は該期の遺構が検出されていない③-2・⑦地区からの出土である。

SB3016 (6～8)

浮線文を貼付する3点が出土した。6は縄文RLを地文とし、矢羽状の刻みを有する4条の浮線文を貼付する。7・8は、小破片の為に判然としない。

SB8002 (11)

11は口縁部で、「く」の字に屈曲する。器面状態が悪く詳細は不明であるが、浮線文を貼付すると思われる。

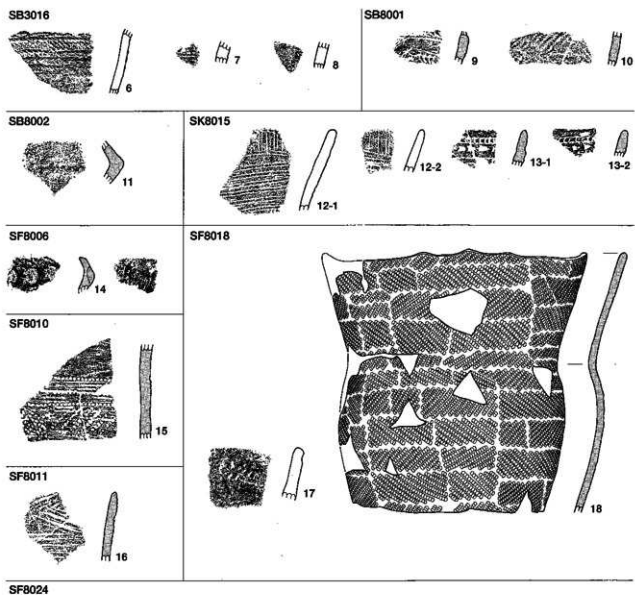
SQ8003 (29)

ほぼ完形となる1個体分の土器片が出土した。29は口唇部に突起を有する平縁の土器で、爪形文・円形刺突文・刺突文により文様を構成し、胴部は縄文RLを施文する。

遺構外出土資料 (178~188)

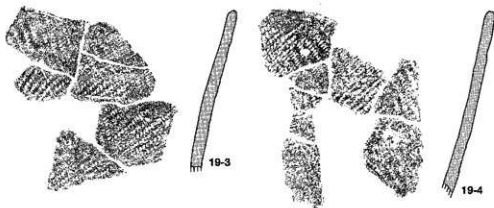
爪形文系 (180・186)・沈線文系 (181~185)・浮線文系 (178・179・187) の各土器群と「格子目文土器」(188) が出土している。

180は、横位の爪形文及び刺突文を交互に施し、縄文L R及びR Lで羽状を構成する。胎土に微量の繊維を含む。186は、地文の縄文R L?上に、爪形文で曲線等を描いている。181・182は、狭い口縁部に縦位の区画あるいはモチーフを平行沈線で描出する。183は、横位多段に平行沈線により区画する土器で、胴部の主文様となる曲線文には沈線脇に羽状となるように爪形の刺突文が施される。184は、屈曲口縁の器形をとる土器の口縁部片で、縄文R L上に横位平行沈線を施文する。178は浮線上に半截竹管による連続押し引き、179はへら状工具による刻みが施される。187は、口唇部と口縁部下端に「刻目梯子状粘土紐」(小杉1985)が付されている。188は、口縁部上下端に爪形文を施文することで施文域を区画し、その中に平行沈線で斜格子を描き、交点には円形竹管の刺突文を施したもので、「格子目文土器AⅢ型」(寺崎1991)に該当する。

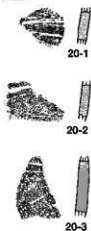


第100図 遺構出土土器1 (I～III群)

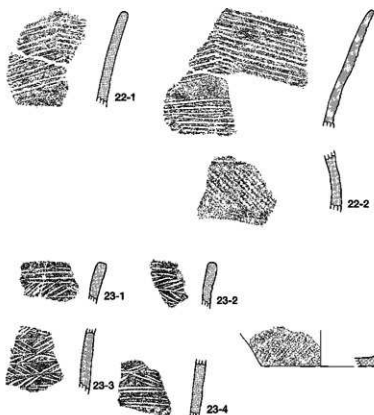
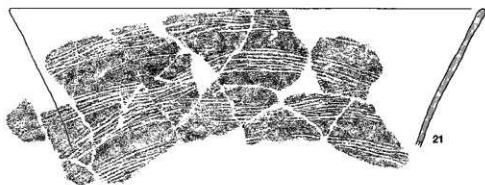
SF8024



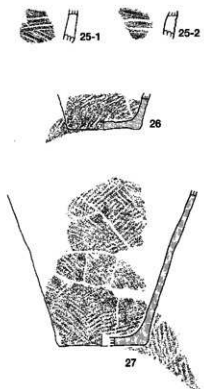
SF8025



SF8038

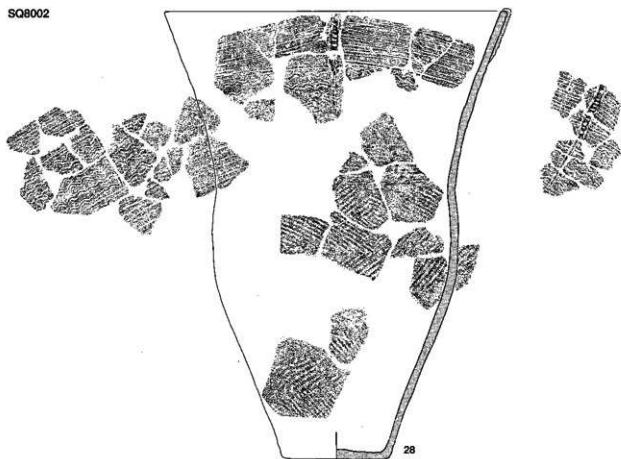


SQ8002

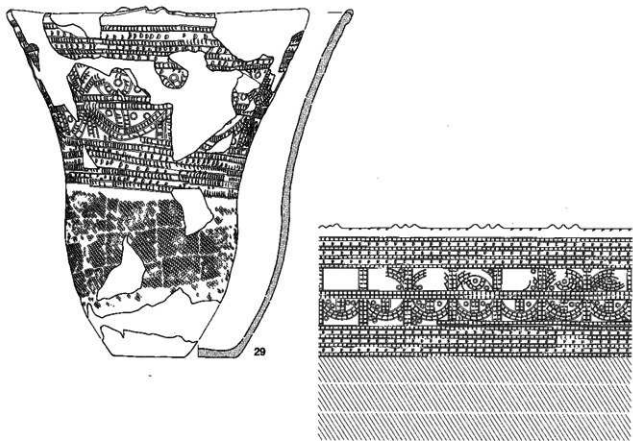


第101図 遺構出土土器 2 (I~III群)

SQ8002



SQ8003

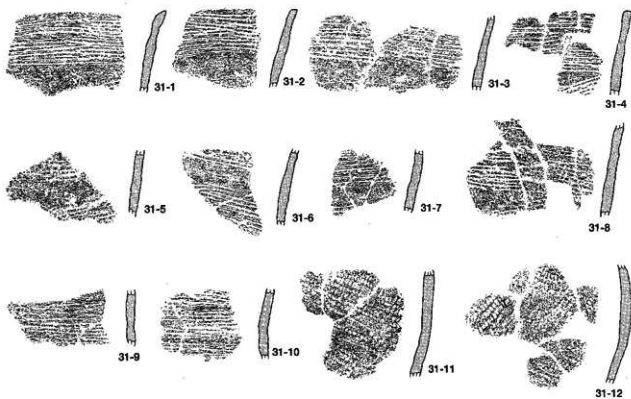


第102図 遺構出土土器3 (I～III群)

SQ8004



SQ8005



SK8003



SK8023

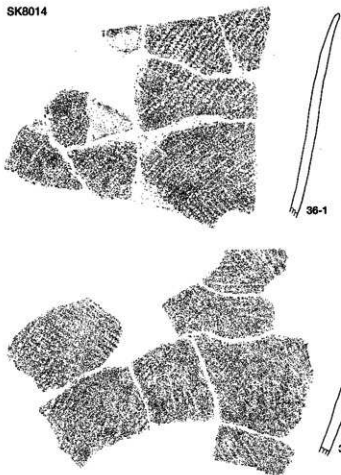


SK8049

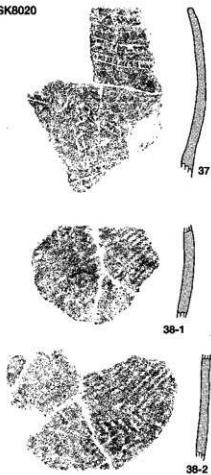


第103図 遺構出土土器4 (I~III群)

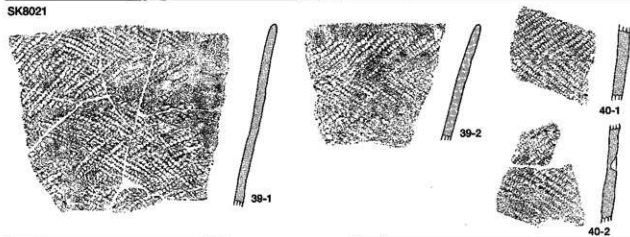
SK8014



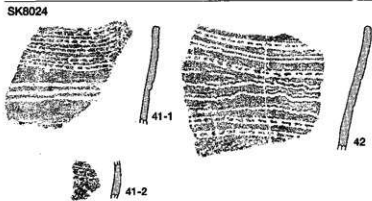
SK8020



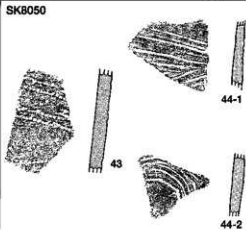
SK8021



SK8024

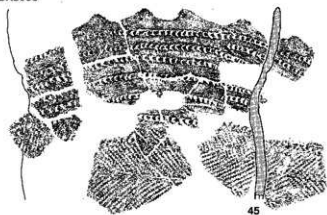


SK8050



第104図 遺構出土土器 5 (I～III群)

SK8053

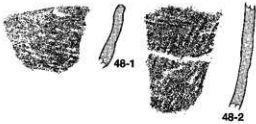


45



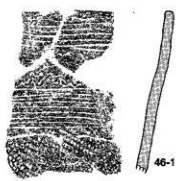
47-1

47-2



48-1

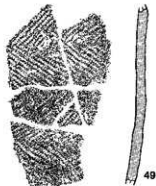
48-2



46-1



46-2



49



46-3



46-4

SK8051



50

SK8055



51-1



51-2

SK8054



52



53



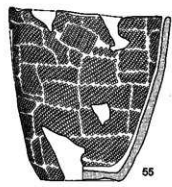
54-1



54-2



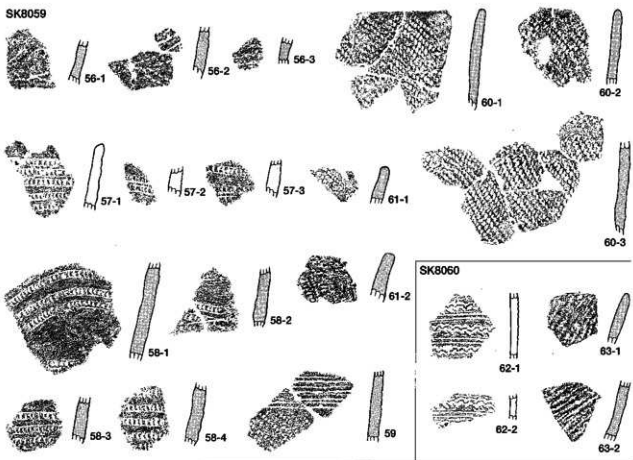
54-3



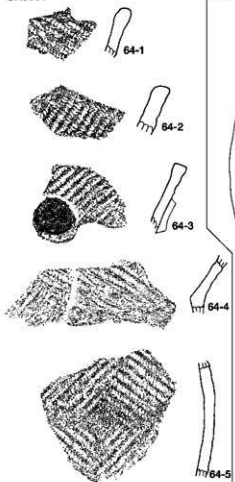
55

第105図 遺構出土土器6 (I~III群)

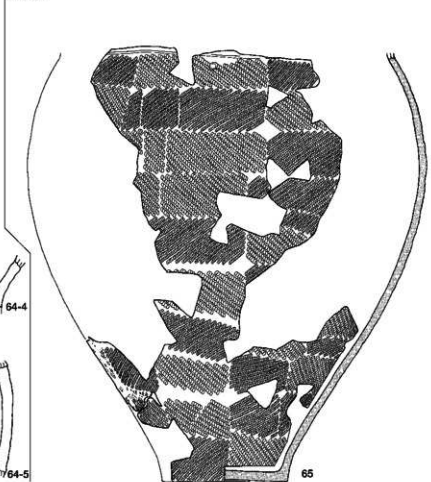
SK8059



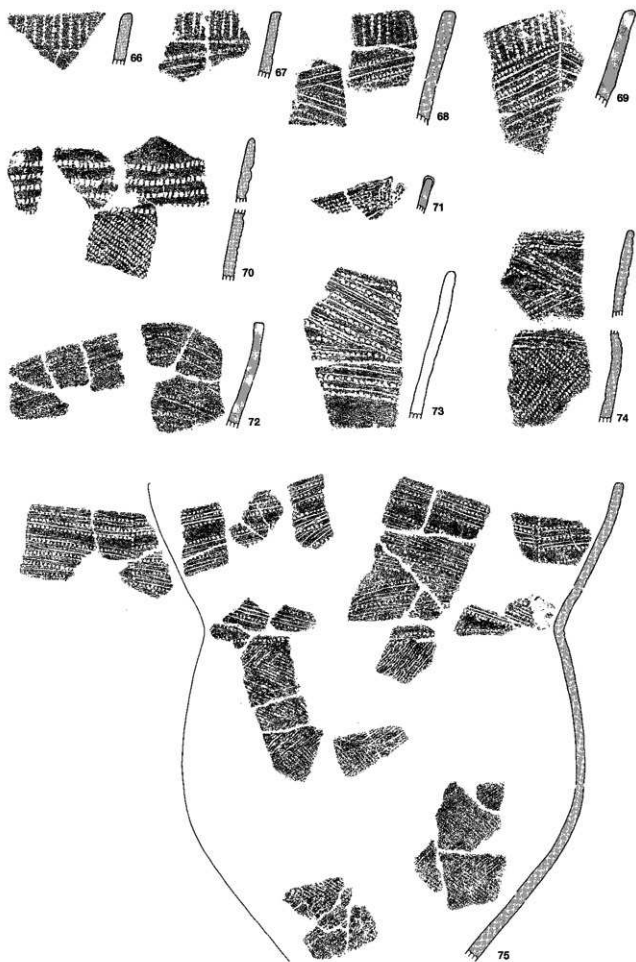
SK8061



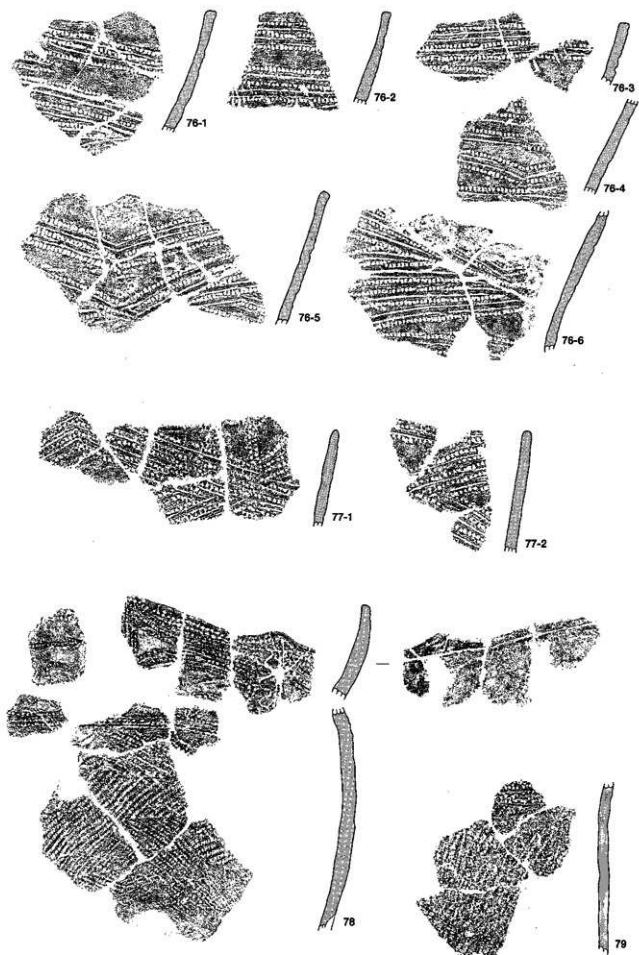
SK8036



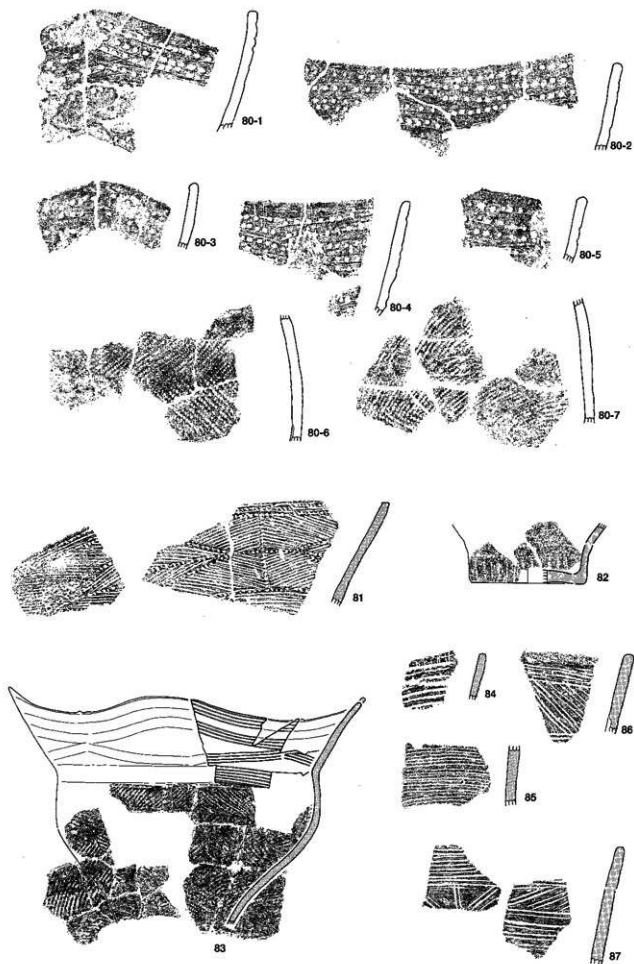
第106図 遺構出土土器7 (I～III群)



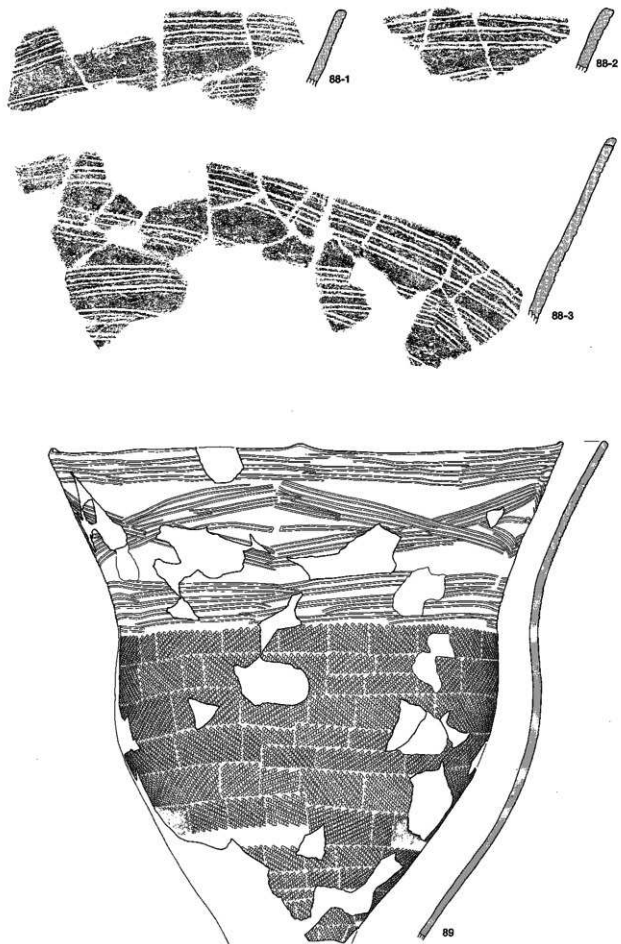
第107图 前期中葉土器Ⅰ(Ⅱ・Ⅲ群)



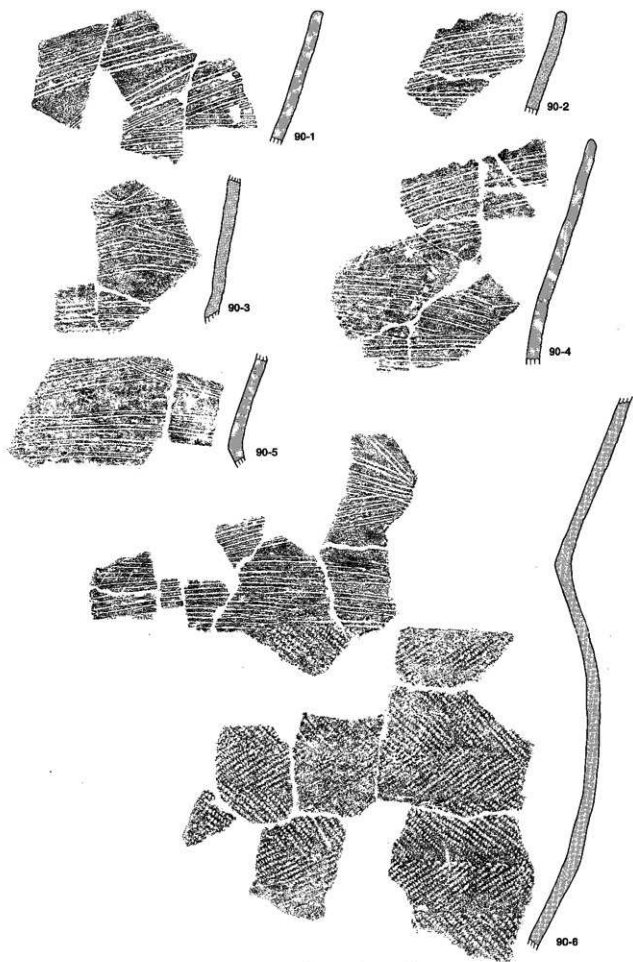
第108図 前期中葉土器2 (Ⅱ・Ⅲ群)



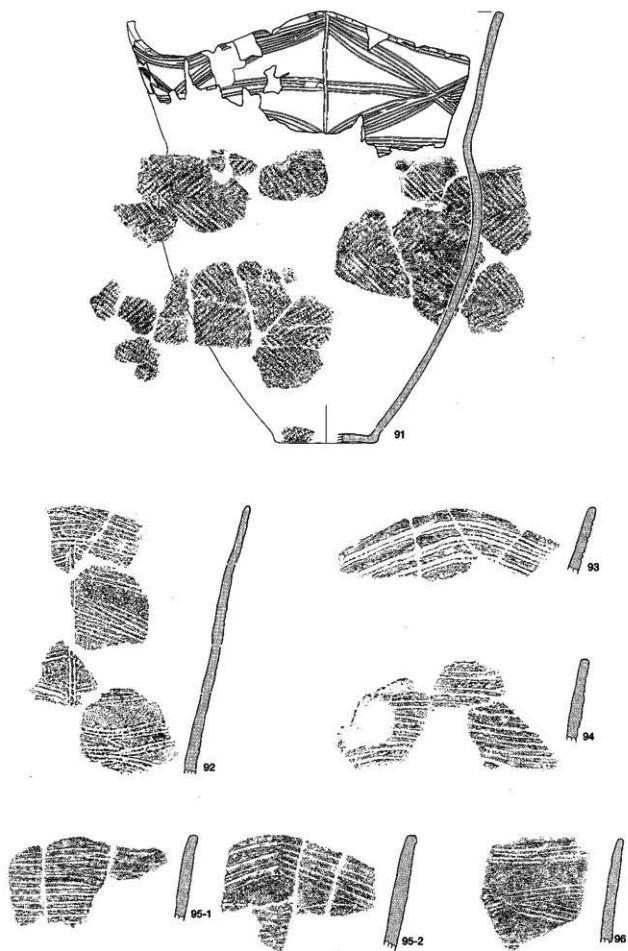
第109圖 前期中葉土器3 (Ⅱ・Ⅲ群)



第110圖 前期中葉上器4 (Ⅱ・Ⅲ群)



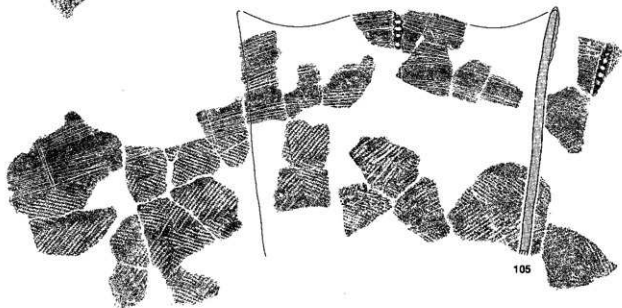
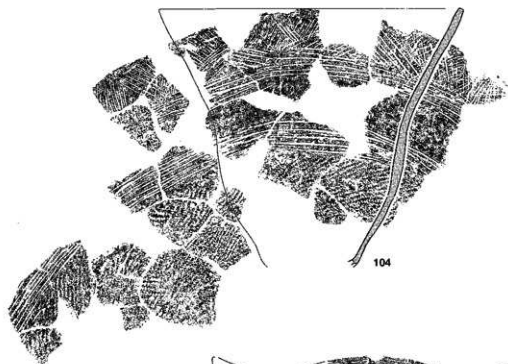
第111图 前期中葉土器5(Ⅱ・Ⅲ群)



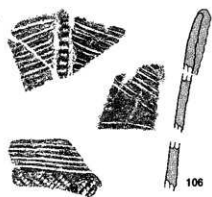
第112図 前期中葉土器6(Ⅱ・Ⅲ群)



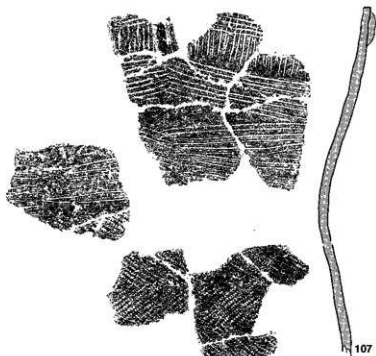
第113图 前期中葉土器7 (Ⅱ・Ⅲ群)



第114圖 前期中葉土器8 (Ⅱ・Ⅲ群)



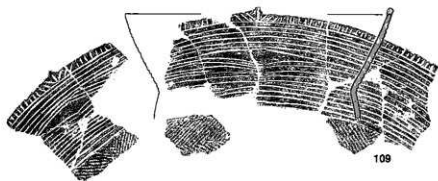
106



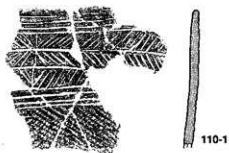
107



108



109

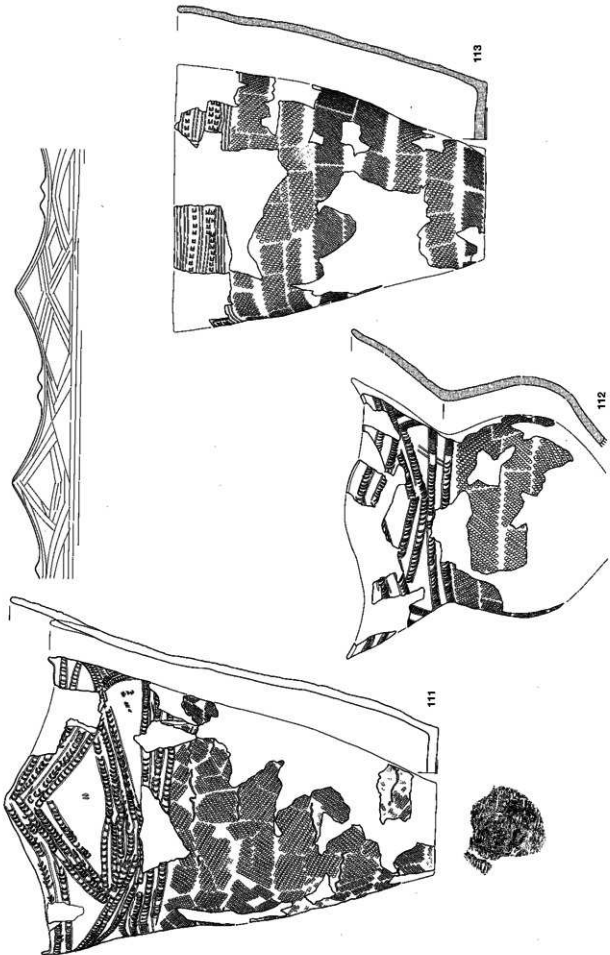


110-1

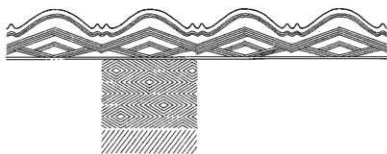
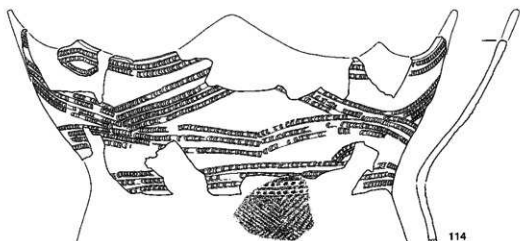


110-2

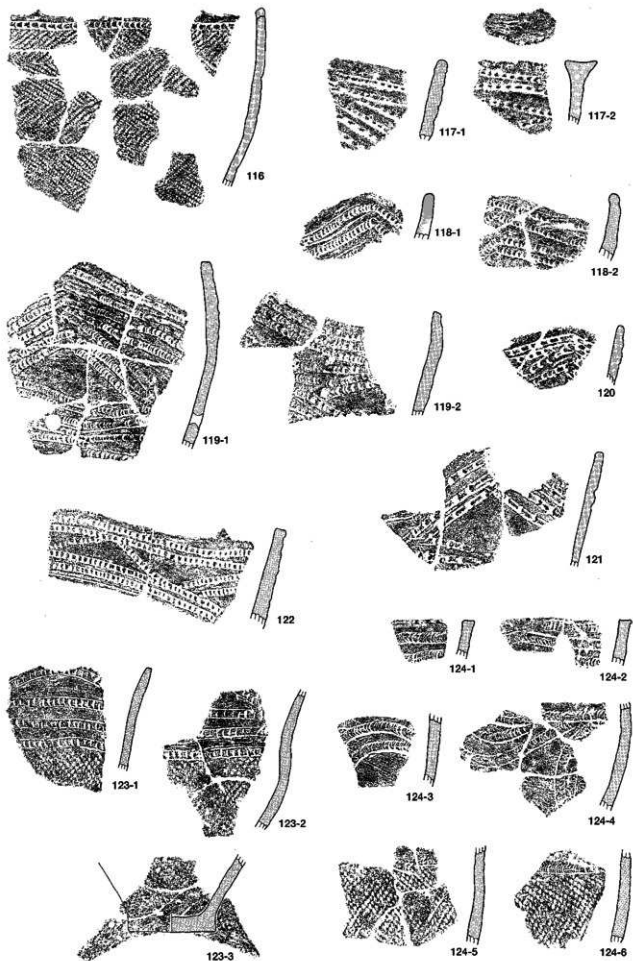
第115図 前期中葉土器9 (Ⅱ・Ⅲ群)



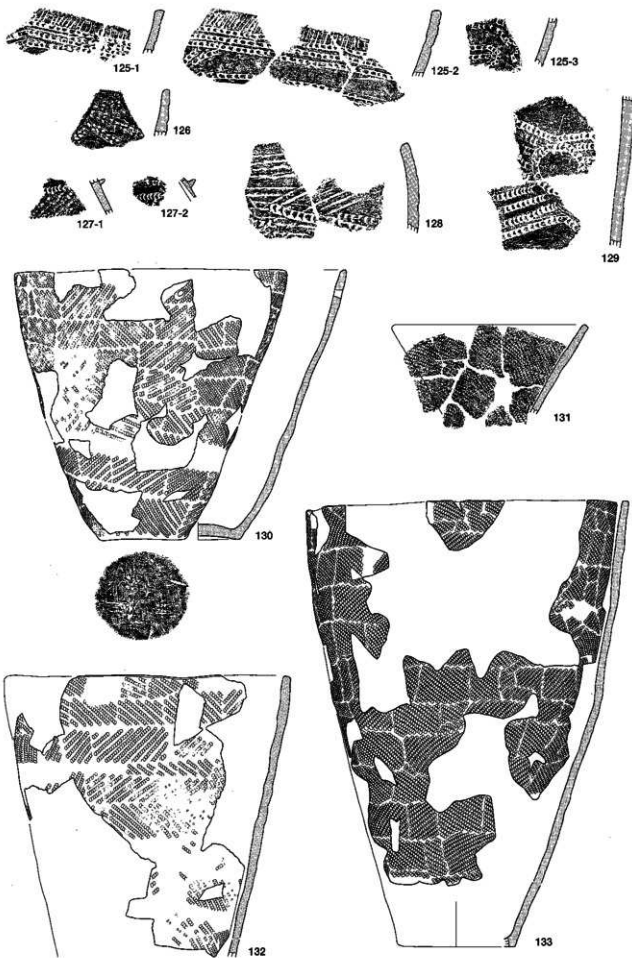
第116図 前期中葉土器10 (Ⅱ・Ⅲ群)



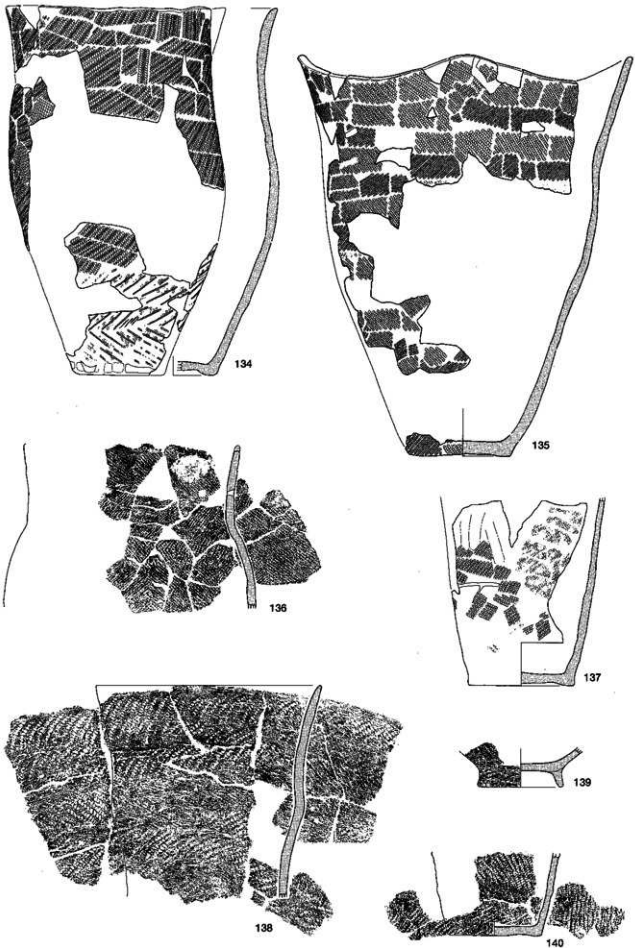
第117図 前期中葉土器11(Ⅱ・Ⅲ群)



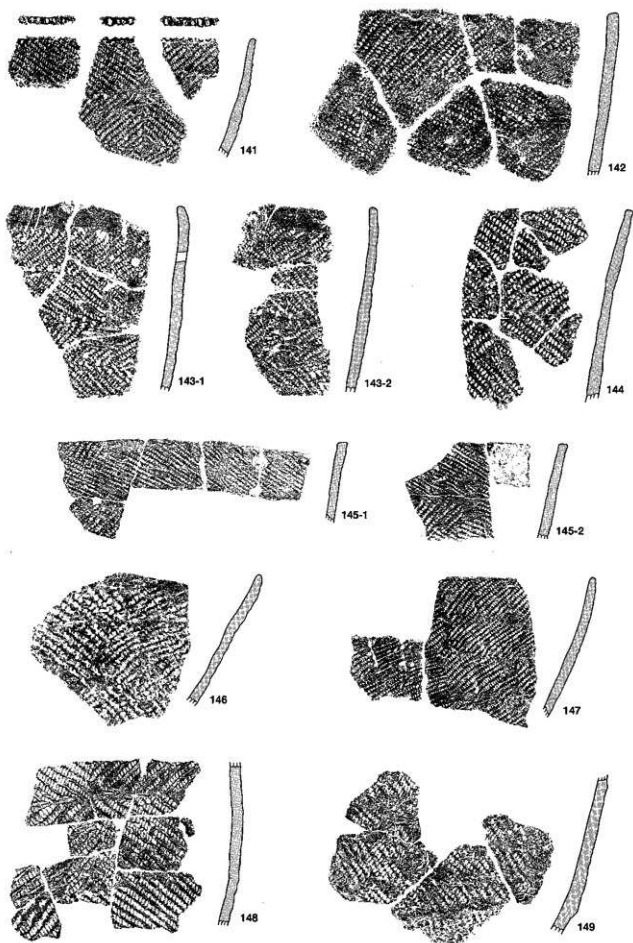
第118圖 前期中葉土器12(Ⅱ・Ⅲ群)



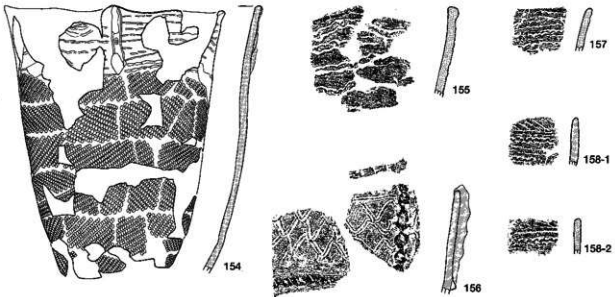
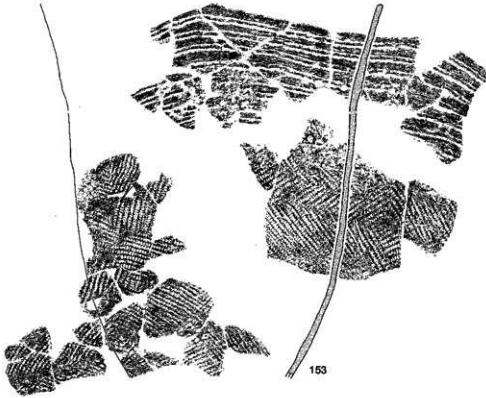
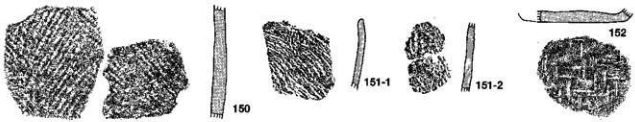
第119図 前期中葉土器13 (II・III群)



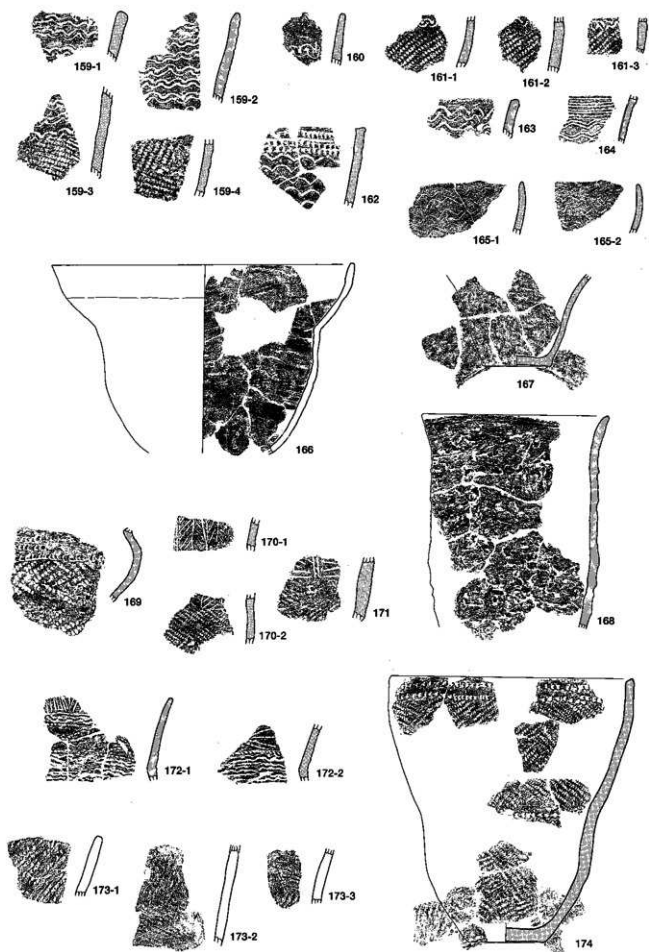
第120図 前期中葉土器14 (Ⅱ・Ⅲ群)



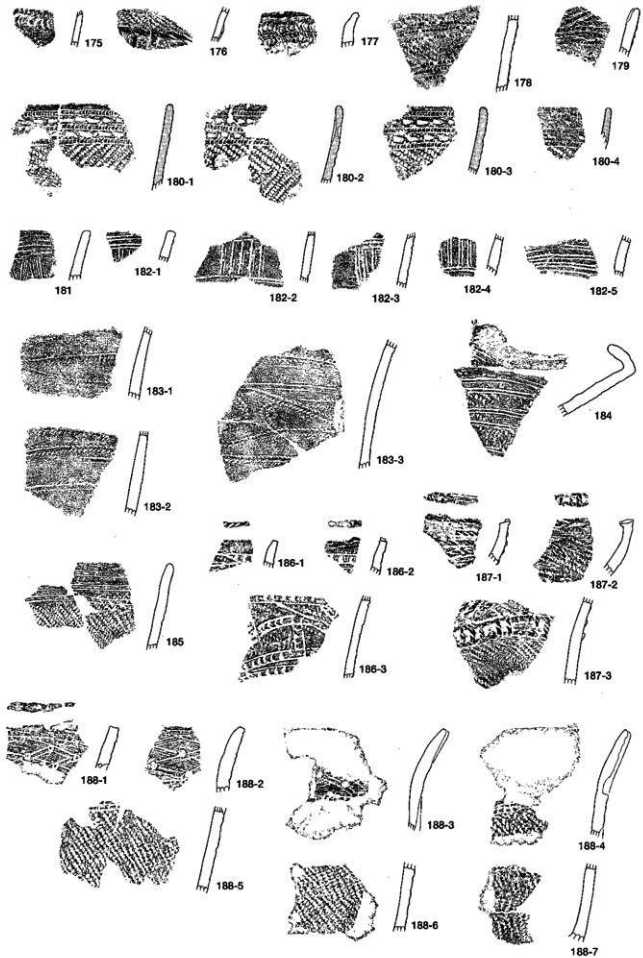
第121图 前期中葉土器15(Ⅱ・Ⅲ群)



第122図 前期中葉土器16 (Ⅱ・Ⅲ群)



第123图 前期中美土器17(Ⅱ・Ⅲ群)



第124図 前期中葉・後葉土器(Ⅲ・Ⅳ)

2. 石器・石製品（前期）

①概論

調査より得た資料は合計4,039点に及ぶ。この内3,683点が石器製作に伴い石屑として弾き出された資料で、356点が道具として認定できた石器である。石器の内訳は101点(28%)が狩猟を司る石鏃で、70点(20%)が調理・加工用の磨石類及び台石・石皿である。刃器類は146点(41%)あり、この内の35点が石匙である。打製石斧は僅かに2点(0.6%)である。器種組成など石器群の内容から設定できる文化的な位置付けは、狩猟・採集の段階にあり、とりわけ磨石類など採集に伴う調理具の増化が看取できる。限定された調査区⑧-3区の第Ⅷ層中の遺物であり、出土土器の90%が前期中葉の土器群であることから、ほぼ該期の所産であると推定できる。

	総数	母岩	石屑		狩猟具	魚撈具	採集具
名称 数量	4,039	原石 15	石核 69	剥片ほか・剥A 3,597・2	石鏃 101	石錐 2	打製石斧 2

調理具			加工具				玉類	
磨石類 51	石皿類 19	石匙 35	刃器 大17・小46・微48	磨製石斧 4	石錐 4	砥石 1		加工有石屑 17

第25表 石器の組成（前期中葉）

以下出土資料について報告するが、記述は7つの項目につき実施する。

1 材質、2 製作法、3 A分類(形態的類別)・3 B(機能的類別)、4 分量(大きさ)、5 遺存状態、6 出土状況・出土地区(遺構)、7 科学分析である。

1については益富壽之介『原色岩石図鑑』(保育社1984)に従って肉眼判定した。2は石材選定後、素材が形成・剥離加工されるまでの技術に関してふれ、3 Aで遺物の形態的視点からの観察・類別を、3 Bで機能的側面からの観察・類別を実施した。詳細は次頁のとおりである。4・5については、器種別に石器観察表(第39表~第52表)及び石器属性表(第26表~第37表)にまとめた。計測は実資料の値であり、石器が完全か欠損か等、遺跡に残されたことの真実を追究したものではなく、形態上、明らかに欠けていると判断できる資料のみを欠損と呼び、()値で表記した。実測法・計測法は町田1995・1996に基づく。6に関しては本文遺構の概要で記述し、器種別に出土分布図(S-1:400・1:800)を別途作成した(第127図~第165図)。分布図は4m×4m以下の調査区内で作成しており、これより大きな調査区内で収集された遺物あるいは表面採集例は、原則として分布図には表示していない。7は石器表面の使用・装飾の痕跡及び付着物について、分析機器を用いて観察した。詳細は次頁のとおりである。なお、本報告文は原則として本節(第1節)に報告のスタイル・凡例を提示したので、以下第3節・第4節の石器・石製品の表記は簡略化した。

3 A. 分類法

記述1. 原材から製作用素材の獲得までを、その方法により区分する。

(礫素材と剥片素材、加工と無加工)

2. 素材獲得時の諸属性について観察、表として掲載。

(礫と剥片、剥片の縦長・横長)

3. 形態的特徴により区分する。分類は全体形を基本とし、形の構成要素に準じて細別。

例) 打製石斧・全体形～、頭部～、刃部(平面形・断面形)～

4. 機能的観察を機器観察に基づき計測、表として掲載。

例) 打製石斧・機能部値(刃幅・刃角・刃部角etc)、使用痕跡(長さ・幅・痕跡型)。

但し、表中()は平均から除く。

5. 欠損状態について観察、表として掲載。欠損の部位は黒塗りを残存部とし、器種ごとにアルファベットで、状況(欠損断面)はカタカナで記載。

3 B. 観察法

機器1. ルーペ (Vixen×3.5、コクヨメタルホルダー×20、ほか)・・・全資料

2. 顕微鏡 (実体顕微鏡Nicon SMZ10 ×60まで)・・・打製石斧・磨製石斧

(金属顕微鏡OLYMPUS BX60M ×500まで)・・・全資料

※ (走査電子顕微鏡・SEM ×1000まで)・・・打製石斧・刃器類

※ (電解放射型電子顕微鏡・FE-SEM ×1000まで)・・・刃器類

図化1. 写真実測※ (長焦点撮影)・・・全資料

写真1. 顕微鏡撮影装置 (撮影倍率)

(Nicon SMZ10 ×3.3 ×10 ×20 ×40まで)・・・打製石斧・磨製石斧

(OLYMPUS BX60M ×12.5 ×25 ×50 ×125まで)・・・石鏃・石錐・刃器類・裝飾品

※ (SEM ×100 ×500 ×1000まで)・・・打製石斧・刃器類

※ (FE-SEM ×100 ×500 ×1000まで)・・・刃器類

7. 分析法

使用痕分析

a 痕跡のタイプ分析 (3 B観察法機器の2.顕微鏡に基づく)

b 痕跡部の元素解析 (電子顕微鏡SEM・FE-SEM)

付着物分析

a 付着物の元素解析 (FT-IR=フーリエ変換赤外分光分析・島津FT-IR4200型)

(電子顕微鏡SEM・EDX=エネルギー分散型分光器)

※は委託事業である。詳細は第1章第2節2 整理作業の方法に明記してある。また分析結果は、第5分冊「総論編」に掲載する予定である。

町田穂則1995「石器研究法—報告文作成に伴う観察・記録法②—」長野県埋蔵文化財センター 紀要4

町田穂則1996「石器研究法—報告文作成に伴う観察・記録法①—」長野県の考古学「長野県埋蔵文化財センター—研究論集I

②原石 (第167図No1~5、PL78No1~5)

剥片剥離に供される原材で、一度も剥離作業の実施されなかった資料。自然面(剥離面及び節理面の風化面)に覆われた転石で、総数15点を収集。黒曜石材14点・チャート材1点である。形状は主に石核状の例が主体で、黒曜石材の法量平均値は $2.5 \times 3.4 \times 1.4\text{cm}$ 、15.1g、チャート材で $3.2 \times 3.9 \times 3.0\text{cm}$ 、46.9gを計測する。

③石核 (第167図No6, 7・第168図No8~15、PL78No7~9, 11~15)

剥片の剥離生産を主目的とした個体群で、一回以上剥離作業が実施された資料。黒曜石材65点、チャート材4点の計69点を収集する。法量は平均値で黒曜石 $2.0 \times 2.7 \times 1.2\text{cm}$ 、6.3g、チャート $3.4 \times 4.4 \times 1.8\text{cm}$ 、35.0gを計測する。剥片剥離は自然面を打面とし、以下2種4類の方法に基づき実施されている。

第1種—原石から直接あるいは分割後に直接剥片剥離を行う例40点(第167図No6・7, 第168図No8~12)。

第2種—原石または石核から剥片を剥離し、これを石核として剥片剥離を行う例29点(第168図No13~15)。

各々で、

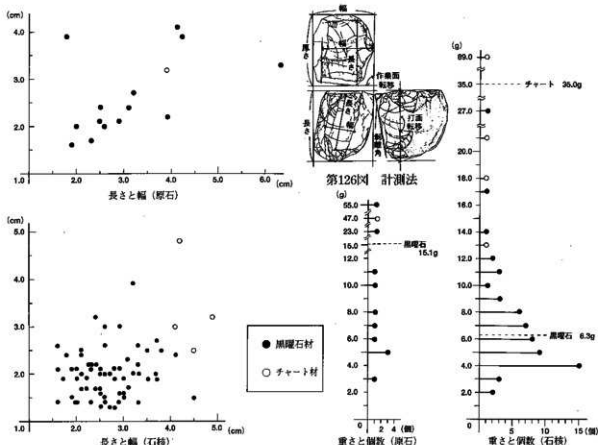
A類—打面転移のない例で、1打面1作業面36点(第167図No6・7, 第168図No8・9・13)。

B類—打面180度の転移を伴う例で、2打面1~2作業面4点。

C類—打面90度の転移を伴う例で、2打面1~2作業面18点(第168図No10~12・14)。

D類—打面転移はなく、打点の移動に伴う作業面の転移のある例、1打面2作業面11点(第168図No15)。

打面は転移率が30%(21点)、再生はなく、転移に伴う作業面の移動は同一面あるいは表裏2面が主体である。作業面に残された剥離痕の形状は、縦長と横長がほぼ1:4の割合である。



第125図 原石・石核法量相関

(個体数)

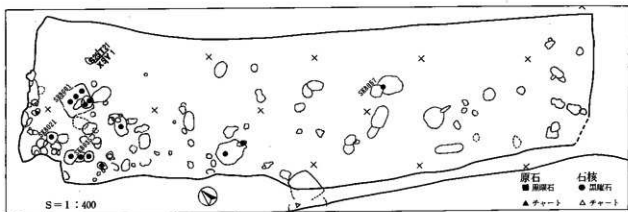
出 土 地 器 種 名	原 石	石						大 形 剥 片		
		石 核	剥 片 A	剥 片 B	剥 片 (1)	剥 片 (2)	碎 片	原 石	剥 片	碎 片
S B	—	4	—	3	1	3	86	—	38	2,607
S D	—	1	—	1	3	2	18	—	2	1
S F	1	3	—	3	2	1	19	—	2	—
S K	1	7	—	4	3	2	20	—	—	4
S Q	—	—	—	1	5	7	3	—	—	1
遺構外	13	54	2	69	81	63	470	1	56	16
合 計	15	69	2	81	95	78	616	1	98	2,629

(重量)

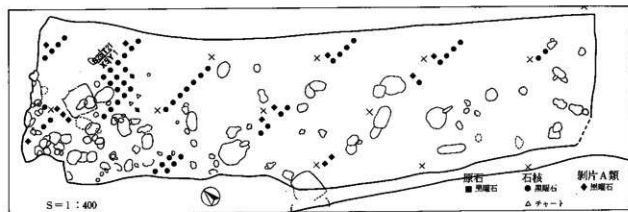
(単位:g)

出 土 地 器 種 名	原 石	石						大 形 剥 片		
		石 核	剥 片 A	剥 片 B	剥 片 (1)	剥 片 (2)	碎 片	原 石	剥 片	碎 片
S B	—	31.7	—	16.8	2.4	6.4	8.73	—	136.06	143.88
S D	—	16.2	—	1.0	8.6	7.6	11.44	—	56.29	0.45
S F	5.0	15.0	—	11.3	3.9	1.7	8.70	—	84.52	—
S K	46.9	53.0	—	18.9	17.1	4.9	7.89	—	—	6.53
S Q	—	—	—	1.9	15.0	13.0	2.18	—	—	0.78
遺構外	206.3	429.5	7.7	324.2	437.1	239.9	293.27	405.00	684.30	18.11
合 計	258.2	545.4	7.7	374.1	484.1	273.5	332.21	405.00	961.17	169.75

第26表 原石・剥片類遺構別出土数量



第127図 原石・石核・剥片A類出土分布(遺構内)



第128図 原石・石核・剥片A類出土分布(遺構内)

④剥片・碎片 (第168図No16, 17, PL79)

剥片剥離作業に於いて加工の施される属性を担った対象を剥片とし、これが剥離される過程に於いて産出された石器製作に不適な資料を碎片とする。具体的には石鏃を第一義的な製作物とする目的的な素材剥片から、刃器そして石錐にいたる道具類の生産に用いる剥片までを包括し、製作途上での出現段階と素材部位を考慮し、2種2類に区別する。すなわち原石の表皮が片面 $\frac{1}{2}$ 以上認められる剥片を1種、表皮が $\frac{1}{2}$ 以下の剥片を2種とし、各々で両種剥離痕を有する剥片をA類、石鏃製作などに関する素材用剥片をB類(PL79)として抽出した。剥片A類については石核ないしは楔としての位置付けが可能であり、他と区別しグラフを作成する。

A類は2点あり、石質はいずれも黒曜石である(第168図No16・17)。量は平均値で $2.3 \times 1.9 \times 1.1\text{cm}$ 、3.9gを計測する。打撃に基づく形状変異は上下両端部形の組み合わせにより類別するが、2点共に面状と面状の組み合わせである。

B類総数は81点(374g)、剥片1種95点(484g)、2種78点(274g)、碎片616点(332g)である。打製石斧や大形の刃器など、大形の剥片石器製作に関わる石屑にも同様な類別を与える。原石は頁岩1点、剥片は98点(961g)、碎片では2,629点(170g)がある。

()内は重量<g>を示す

出分類 地石材	剥片 B 類				剥片 1 種		剥片 2 種		碎 片					
	黒曜石	チャート	チャート赤	頁岩	頁岩・茶	黒曜石	チャート	黒曜石	頁岩・茶	黒曜石	チャート	チャート赤	頁岩	頁岩・茶
S B	—	3(16.8)	—	—	—	1(2.4)	—	3(6.4)	—	11(6.37)	73(2.33)	—	—	2(0.03)
S K	—	—	1(4.0)	—	1(14.9)	3(17.1)	—	2(4.9)	—	18(5.92)	2(1.97)	—	—	—
S F	1(1.2)	—	—	—	2(10.1)	2(3.9)	—	1(1.7)	—	17(5.57)	1(3.12)	—	—	1(0.01)
S Q	1(1.9)	—	—	—	—	5(15.0)	—	7(13.0)	—	3(2.18)	—	—	—	—
S D	1(1.0)	—	—	—	—	3(8.6)	—	2(7.6)	—	17(11.16)	—	—	1(0.28)	—
W-S	2(4.5)	1(37.9)	—	1(3.9)	2(17.8)	6(22.7)	—	4(18.3)	—	33(17.38)	2(2.73)	1(1.56)	—	2(6.28)
-T	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1(0.94)	—	—	—	—
-X	9(15.6)	3(9.2)	—	1(21.8)	8(35.0)	21(87.0)	2(132.0)	12(38.3)	1(5.5)	105(61.78)	1(1.59)	1(0.65)	2(4.16)	6(6.75)
-Y	27(51.5)	3(50.1)	1(7.1)	—	11(69.8)	52(195.4)	—	45(153.7)	1(24.1)	307(177.86)	2(1.30)	3(4.87)	1(2.34)	2(1.33)
①-1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1(1.75)	—
合 計	41(75.7)	16(114.0)	2(11.1)	2(25.7)	26(147.6)	93(352.1)	2(132.0)	76(243.9)	2(29.6)	512(289.16)	81(13.04)	7(9.11)	3(6.5)	13(14.4)

第27表 小形剥片遺構別出土数量(石材別)

()内は重量<g>を示す

出分類 地石材	剥 片						碎 片	
	粘板岩	頁岩	安山岩	凝灰岩	花崗岩	粘板岩	頁岩	安山岩
S B	3(25.6)	—	35(110.4)	—	—	—	—	2,607(143.9)
S K	—	—	—	—	—	—	—	4(6.5)
S F	1(2.2)	—	1(82.3)	—	—	—	—	—
S Q	—	—	—	—	—	—	—	1(0.8)
S D	1(24.8)	—	1(31.5)	—	—	—	—	1(0.5)
W-S	1(6.1)	—	1(6.5)	1(27.7)	—	—	—	—
-X	1(7.2)	2(65.7)	7(76.5)	—	—	—	—	1(1.9)
-Y	15(154.7)	3(19.3)	23(289.7)	—	1(29.9)	1(1.3)	1(1.1)	12(12.7)
①-1	—	—	1(2.1)	—	—	—	—	1(1.2)
合 計	22(220.6)	5(85.0)	69(599.0)	1(27.7)	1(29.9)	2(2.5)	2(3.0)	2,625(164.4)

第28表 大形剥片遺構別出土数量(石材別)



第129図 剥片計測法

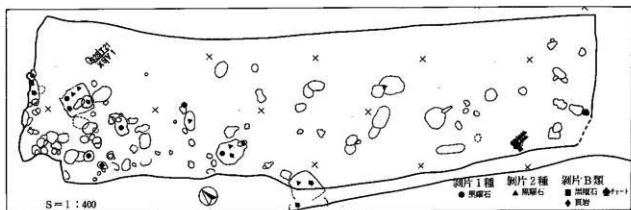
⑤石鏃 (第169図No1~19, PL80No1~19)

刺突・殺傷が想定できる資料。製品84点・失敗品17点、計101点を収集。火成岩を主体とし黒曜石80点・チャート5点・頁岩3点・安山岩12点・タンパク岩1点である。

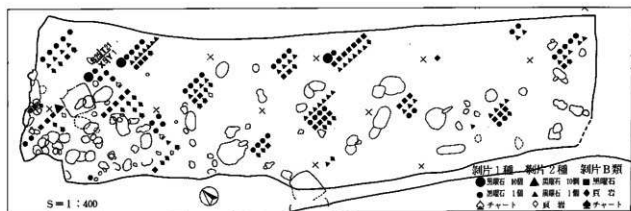
形態的には基部が無茎な例に限られ、2類に細別する。

〔形状〕

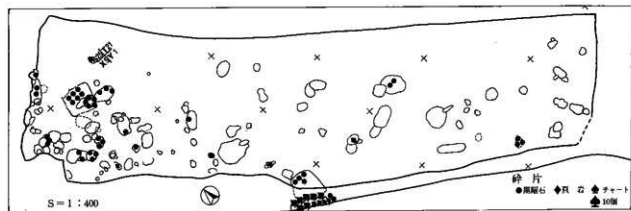
A類一平らで直線的な基部を呈するA1類5点と基部が突出したA2類3点がある。



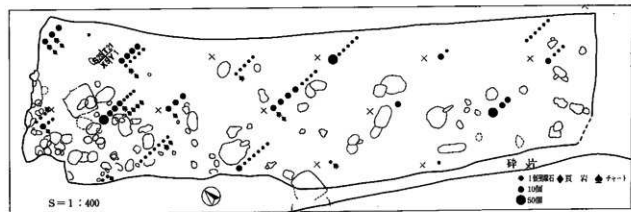
第130図 剥片類出土分布 (遺構内)



第131図 剥片類出土分布 (遺構外)



第132図 碎片出土分布 (遺構内)



第133図 碎片出土分布 (遺構外)